岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第391集

上水沢（かみみずさわ）Ⅱ遺跡発掘調査報告書

ふるさと農道緊急整備事業水沢地区関連遺跡発掘調査

岩手県久慈地方振興局久慈農村整備事務所
(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

上水沢（かみみずさわ）Ⅱ遺跡発掘調査報告書

ふるさと農道緊急整備事業水沢地区関連遺跡発掘調査

遺跡遠景（直上　手前が西）

1号埋設土器

カラー写真図版1

縄文時代早期中葉の土器

縄文時代早期中葉の土器

アスファルト入り土器

カラー写真図版 2

序

豊かな自然に恵まれた岩手県には、縄文時代をはじめとする数多くの遺跡や重要な文化財が残されております。これら多くの先人たちの創造してきた文化遺産を保存し、後世に伝えていくことは、県民一人一人に課せられた責務であります。

一方では、地域開発に伴う社会資本の充実も重要な施策であります。発掘により遺跡が消滅することはまことに惜しいことではありますが、反面、それまで闇につつまれていた先人の営みに光明があたるのも事実であります。

このような埋蔵文化財の保護・保存と開発との調和も今日的課題であり、財団法人岩手県文化振興事業団は埋蔵文化財センターの創設以来、岩手県教育委員会の指導と調整のもとに、開発によってやむを得ず消滅する遺跡の緊急発掘調査を行い、記録保存する処置をとって参りました。

本報告書は、岩手県久慈地方振興局久慈農村整備事務所による「ふるさと農道緊急整備事業水沢地区」に関連して、平成12年度に発掘調査を実施した九戸郡大野村大字水沢字日当に所在する上水沢Ⅱ遺跡の調査報告をまとめたものです。

上水沢Ⅱ遺跡は、北上山地の北縁部に所在する大野村の南を流れる高家川によって形成された谷底平野に立地しており、調査の結果縄文時代の竪穴住居跡をはじめとして、縄文時代早・前・中・後期の土器などが出土し、本遺跡が当時の集落跡であることが判明しました。今回の発掘調査が大野村における初めての埋蔵文化財調査であることも含め、当地方の歴史を解明する上での貴重な資料を提供することができたものと思われます。

この報告書が広く活用され、考古学の研究に寄与するのみならず、埋蔵文化財に対する関心と理解を深める一助となれば幸いです。

最後になりましたが、これまでの発掘調査及び本報告書の作成に御援助と御協力を賜りました岩手県久慈地方振興局農村整備事務所や大野村教育委員会をはじめとする多くの関係機関、関係各位に心から感謝申し上げます。

平成14年2月

財団法人　岩手県文化振興事業団
理事長　村　上　勝　治

例　　言

1．本報告書は、大野村大字水沢第７地割字日当12番地２ほかに所在する上水沢Ⅱ遺跡の発掘調査結果を収録したものである。

2．本遺跡の発掘調査は、「ふるさと農道緊急整備事業水沢地区」に伴い、岩手県教育委員会と岩手県久慈地方振興局久慈農村整備事務所との協議を経て、財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが記録保存を目的として実施した緊急発掘調査である。

3．本遺跡の調査成果の概略は、平成12年度岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第396集「岩手県埋蔵文化財調査略報」に公表したが、本書の内容を正式な報告とする。

4．岩手県遺跡台帳に登録されている遺跡番号及び調査略号は、以下の通りである。

　遺跡番号　　ＪＦ07－2188　　調査略号　　ＫＭＳⅡ－00

5．発掘調査期間、調査面積、調査担当者は、以下の通りである。

　調査期間　　平成12年５月25日～９月25日

　調査面積　　1,364㎡

　調査担当者　　北村　忠昭・小野寺正之

6．室内整理期間及び室内整担当者は、以下の通りである。

　整理期間　　平成12年11月１日～平成13年３月31日

　整理担当者　　北村　忠昭・小野寺正之

7．本報告書の執筆担当者は、以下の通りである。

　Ⅰ．調査に至る経過　　岩手県久慈地方振興局久慈農村整備事務所

　Ⅱ．遺跡の立地と環境～Ⅲ．調査と整理の方法　　小野寺正之

　Ⅳ．調査結果～Ⅵ．調査のまとめ　　北村　忠昭

8．遺物の分析・鑑定及び委託業務は、以下の方々・団体に依頼した。（敬称略）

　石材鑑定　　花崗岩研究会（代表　矢内桂三）　樹木同定　　木工舎「ゆい」

　アスファルト産地同定　　㈱古環境研究所　　動物遺存体鑑定　　小林和彦（八戸市縄文学習館）

　基準点測量　　㈱藤森測量設計　　空中写真撮影　　㈱東邦航空

9．発掘・整理・本報告書の作成にあたっては、以下の方々に御教示・御協力をいただいた。（敬称略）

　岩手県久慈地方振興局久慈農村整備事務所、大野村教育委員会生涯学習課

　青森県埋蔵文化財調査センター、八戸市教育委員会、八戸市博物館

　神原雄一郎（盛岡市教育委員会）、日下和寿（岩手県教育委員会　生涯学習文化課）

　大野村・種市町の野外作業員の方々と㈶岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター室内作業員の方々

10．本報告書に掲載した地図等には、図中に図幅名とスケールを付した。

11．本報告書内の実測図に使用した記号やトーン等の内容は、Ⅲ．調査と整理の方法に凡例を示した。

12．本遺跡から出土した遺物及び調査に関わる資料は、岩手県立埋蔵文化財センターが保管している。

目　　次

序
例言

[本文]

Ⅰ．調査に至る経過 …… 1
Ⅱ．遺跡の立地と環境 …… 1
　1．遺跡の位置 …… 1
　2．地理・歴史的環境 …… 1
　3．地形・地質 …… 3
　4．周辺の遺跡 …… 6
　　(1)　大野村の遺跡 …… 6
　　(2)　周辺の遺跡 …… 6
　5．遺跡の基本層序と状況 …… 17
Ⅲ．調査と整理の方法 …… 19
　1．野外調査 …… 19
　2．室内整理 …… 21
Ⅳ．検出された遺構 …… 25
　1．竪穴住居跡・住居状遺構 …… 25
　2．土坑 …… 52
　3．焼土遺構 …… 63
　4．埋設土器遺構 …… 65
　5．柱穴状土坑 …… 66
　6．遺物包含層 …… 66
Ⅴ．出土した遺物 …… 73
　1．縄文土器・弥生土器 …… 73
　2．石器 …… 78
　3．土製品 …… 83
　4．石製品 …… 84
　5．銭貨 …… 84
　6．自然遺物 …… 84
Ⅵ．まとめ …… 137
　1．遺構 …… 137
　2．遺物 …… 141
Ⅶ．分析・鑑定 …… 149
　1．大野村上水沢Ⅱ遺跡出土アスファルトの成分分析 …… 149
　2．大野村上水沢Ⅱ遺跡出土炭化材の樹種 …… 154
報告書抄録 …… 223

[表目次]

第１表　周辺の遺跡(1)　大野村 …… 8
第２表　周辺の遺跡(2)　縄文時代早期・前期……13
第３表　周辺の遺跡(3)　縄文時代後期・弥生時代 ……14
第４表　柱穴状土坑観察表 ……67
第５表　遺物観察表（土器） ……124
第６表　遺物観察表（石器） ……133
第７表　遺物観察表（土製品） ……136
第８表　遺物観察表（石製品） ……136
第９表　遺物観察表（銭貨） ……136

[図版目次]

第１図　岩手県全図と遺跡の位置 …… 2
第２図　遺跡位置図 …… 4
第３図　地形分類図 …… 4
第４図　遺跡周辺の地形 …… 5
第５図　周辺の遺跡(1)　大野村 …… 8
第６図　周辺の遺跡(2)　縄文時代早期・前期…… 9
第７図　周辺の遺跡(3)　縄文時代後期・弥生時代 ……11
第８図　トレンチ位置図 ……18
第９図　基本土層柱状図 ……18
第10図　グリッド配置図 ……19
第11図　遺構配置図 ……23
第12図　１号住居跡① ……26
第13図　１号住居跡② ……27
第14図　２号住居跡① ……30
第15図　２号住居跡② ……31
第16図　３号住居跡① ……32
第17図　３号住居跡② ……33
第18図　３号住居跡③ ……34
第19図　５号住居跡 ……37
第20図　９号住居跡 ……38
第21図　12号住居跡 ……39
第22図　13号住居跡ａ・ｂ・ｃ ……42
第23図　17号住居跡① ……44
第24図　17号住居跡② ……45
第25図　18号住居跡 ……46
第26図　19号住居跡 ……47
第27図　４号住居状遺構 ……48
第28図　６号住居状遺構 ……49
第29図　14号住居状遺構 ……50
第30図　16号住居状遺構 ……51
第31図　１号土坑～７号土坑 ……59
第32図　８号土坑～17号土坑 ……60
第33図　18号土坑～28号土坑 ……61
第34図　29号土坑～36号土坑 ……62
第35図　１号焼土遺構～９号焼土遺構 ……64
第36図　１号埋設土器遺構 ……65
第37図　柱穴状土坑① ……69
第38図　柱穴状土坑② ……70
第39図　遺物包含層 ……72
第40図　遺構内出土遺物１（住居跡①） ……85
第41図　遺構内出土遺物２（住居跡②） ……86
第42図　遺構内出土遺物３（住居跡③） ……87
第43図　遺構内出土遺物４（住居跡④） ……88
第44図　遺構内出土遺物５（住居跡⑤） ……89
第45図　遺構内出土遺物６（住居跡⑥） ……90
第46図　遺構内出土遺物７（住居跡⑦） ……91
第47図　遺構内出土遺物８（住居跡⑧） ……92
第48図　遺構内出土遺物９（住居跡⑨） ……93
第49図　遺構内出土遺物10（住居跡⑩） ……94
第50図　遺構内出土遺物11（住居跡⑪） ……95
第51図　遺構内出土遺物12（住居跡⑫） ……96
第52図　遺構内出土遺物13（住居跡⑬） ……97
第53図　遺構内出土遺物14（住居跡⑭） ……98
第54図　遺構内出土遺物15（住居跡⑮） ……99
第55図　遺構内出土遺物16（住居跡⑯・住居状遺構①） ……100
第56図　遺構内出土遺物17（住居状遺構②・土坑①） ……101
第57図　遺構内出土遺物18（土坑②） ……102

第58図　遺構内出土遺物19
（柱穴状土坑・埋設土器遺構）……103
第59図　遺物包含層出土遺物１……104
第60図　遺物包含層出土遺物２……105
第61図　遺物包含層出土遺物３……106
第62図　遺物包含層出土遺物４……107
第63図　遺物包含層出土遺物５……108
第64図　遺物包含層出土遺物６……109
第65図　遺物包含層出土遺物７……110
第66図　遺物包含層出土遺物８……111
第67図　遺構外出土遺物１（土器①）……112
第68図　遺構外出土遺物２（土器②）……113
第69図　遺構外出土遺物３（土器③）……114
第70図　遺構外出土遺物４（土器④）……115
第71図　遺構外出土遺物５（土器⑤）……116
第72図　遺構外出土遺物６（土器⑥）……117
第73図　遺構外出土遺物７（土器⑦）……118
第74図　遺構外出土遺物８（石器①）……119
第75図　遺構外出土遺物９（石器②）……120
第76図　遺構外出土遺物10（石器③）……121
第77図　遺構外出土遺物11（石器④）……122
第78図　遺構外出土遺物12
（土製品・石製品・銭貨）……123
第79図　土器集成図１……144
第80図　土器集成図２……145
第81図　土器集成図３……146

［写真図版目次］

カラー写真図版１　遺跡遠景・１号埋設土器
カラー写真図版２　縄文時代早期中葉の土器・アスファルト入り土器

写真図版１　空撮……161
写真図版２　調査区現況・土層断面①……162
写真図版３　土層断面②……163
写真図版４　１号住居跡ａ・ｂ……164
写真図版５　２号住居跡……165
写真図版６　３号住居跡①……166
写真図版７　３号住居跡②……167
写真図版８　５号住居跡……168
写真図版９　９号住居跡……169
写真図版10　12号住居跡……170
写真図版11　13号住居跡ａ・ｂ・ｃ・17号住居跡①
……171
写真図版12　17号住居跡②……172
写真図版13　17号住居跡③・18号住居跡……173
写真図版14　19号住居跡……174
写真図版15　４号住居状遺構……175
写真図版16　６号住居状遺構……176
写真図版17　14号住居状遺構・16号住居状遺構
……177
写真図版18　１号土坑・３号土坑～５号土坑
……178
写真図版19　６号土坑～９号土坑……179
写真図版20　10号土坑～13号土坑……180
写真図版21　14号土坑～17号土坑……181
写真図版22　18号土坑～20号土坑・22号土坑
……182
写真図版23　21号土坑・23号土坑・24号土坑
……183
写真図版24　25号土坑～28号土坑……184
写真図版25　29号土坑～32号土坑……185
写真図版26　33号土坑～36号土坑……186
写真図版27　１号焼土遺構～４号焼土遺構……187
写真図版28　５号焼土遺構～９号焼土遺構……188
写真図版29　９Ｈ柱穴群・17Ｌ柱穴群・
遺物包含層……189
写真図版30　１号埋設土器遺構・遺物出土状況
……190
写真図版31　調査風景・現地説明会……191
写真図版32　遺構内出土遺物１（住居跡①）…192

写真図版33　遺構内出土遺物２（住居跡②）　…193
写真図版34　遺構内出土遺物３（住居跡③）　…194
写真図版35　遺構内出土遺物４（住居跡④）　…195
写真図版36　遺構内出土遺物５（住居跡⑤）　…196
写真図版37　遺構内出土遺物６（住居跡⑥）　…197
写真図版38　遺構内出土遺物７（住居跡⑦）　…198
写真図版39　遺構内出土遺物８（住居跡⑧）　…199
写真図版40　遺構内出土遺物９（住居跡⑨）
……200
写真図版41　遺構内出土遺物10（住居跡⑩）
……201
写真図版42　遺構内出土遺物11（住居跡⑪）
……202
写真図版43　遺構内出土遺物12（住居跡⑫）
……203
写真図版44　遺構内出土遺物13（住居跡⑬）
……204
写真図版45　遺構内出土遺物14
（住居状遺構・土坑①）　……205
写真図版46　遺構内出土遺物15（土坑②・柱穴）
……206
写真図版47　遺構内出土遺物16（埋設土器遺構）
……207
写真図版48　遺物包含層出土遺物１　……208
写真図版49　遺物包含層出土遺物２　……209
写真図版50　遺物包含層出土遺物３　……210
写真図版51　遺物包含層出土遺物４　……211
写真図版52　遺物包含層出土遺物５　……212
写真図版53　遺物包含層出土遺物６　……213
写真図版54　遺構外出土遺物１（土器①）　……214
写真図版55　遺構外出土遺物２（土器②）　……215
写真図版56　遺構外出土遺物３（土器③）　……216
写真図版57　遺構外出土遺物４（土器④）　……217
写真図版58　遺構外出土遺物５（土器⑤）　……218
写真図版59　遺構外出土遺物６（土器⑥）　……219
写真図版60　遺構外出土遺物７（石器①）　……220
写真図版61　遺構外出土遺物８（石器②）　……221
写真図版62　遺構外出土遺物９（石器③・
土製品・石製品・銭貨）　……222

Ⅰ．調査に至る経過

上水沢Ⅱ遺跡は、「ふるさと農道緊急整備事業水沢地区」の施工に伴って、その事業区域に位置することから、発掘調査することとなったものである。

「ふるさと農道緊急整備」は、九戸郡大野村水沢地内の村道帯島水沢線を起点に大野高校東側の村道大渡線を終点とした延長約3.5kmの新設改良事業である。事業者である岩手県久慈地方振興局久慈農村整備事務所では、事業実施に先立ち岩手県教育委員会に対し、事業区域内における埋蔵文化財の分布調査を依頼した。依頼を受けた岩手県教育委員会では、現地踏査により埋蔵文化財の存在を確認し、平成11年９月２日、埋蔵文化財の内容把握のため試掘調査を実施した。試掘の結果、縄文時代に属する土器片のほか住居跡等の遺構が発見されたことから、工事着工に先立ち記録保存を目的とした発掘調査が必要である旨、平成11年９月28日付け教文第663号により岩手県久慈地方振興局久慈農村整備事務所に通知した。

通知を受けた岩手県久慈地方振興局久慈農村整備事務所では、岩手県教育委員会からの平成12年度埋蔵文化財発掘調査に係る事業集約の問い合わせに対し、調査を実施して欲しい旨の回答をした。

回答を受けた岩手県教育委員会は、岩手県久慈地方振興局に対し、平成12年３月６日付け教文第1220号「平成12年度埋蔵文化財発掘事業調査について」によって、平成12年度に発掘調査を実施、実際の調査は㈶岩手県文化振興事業団が担当する旨を通知した。

（岩手県久慈地方振興局久慈農村整備事務所）

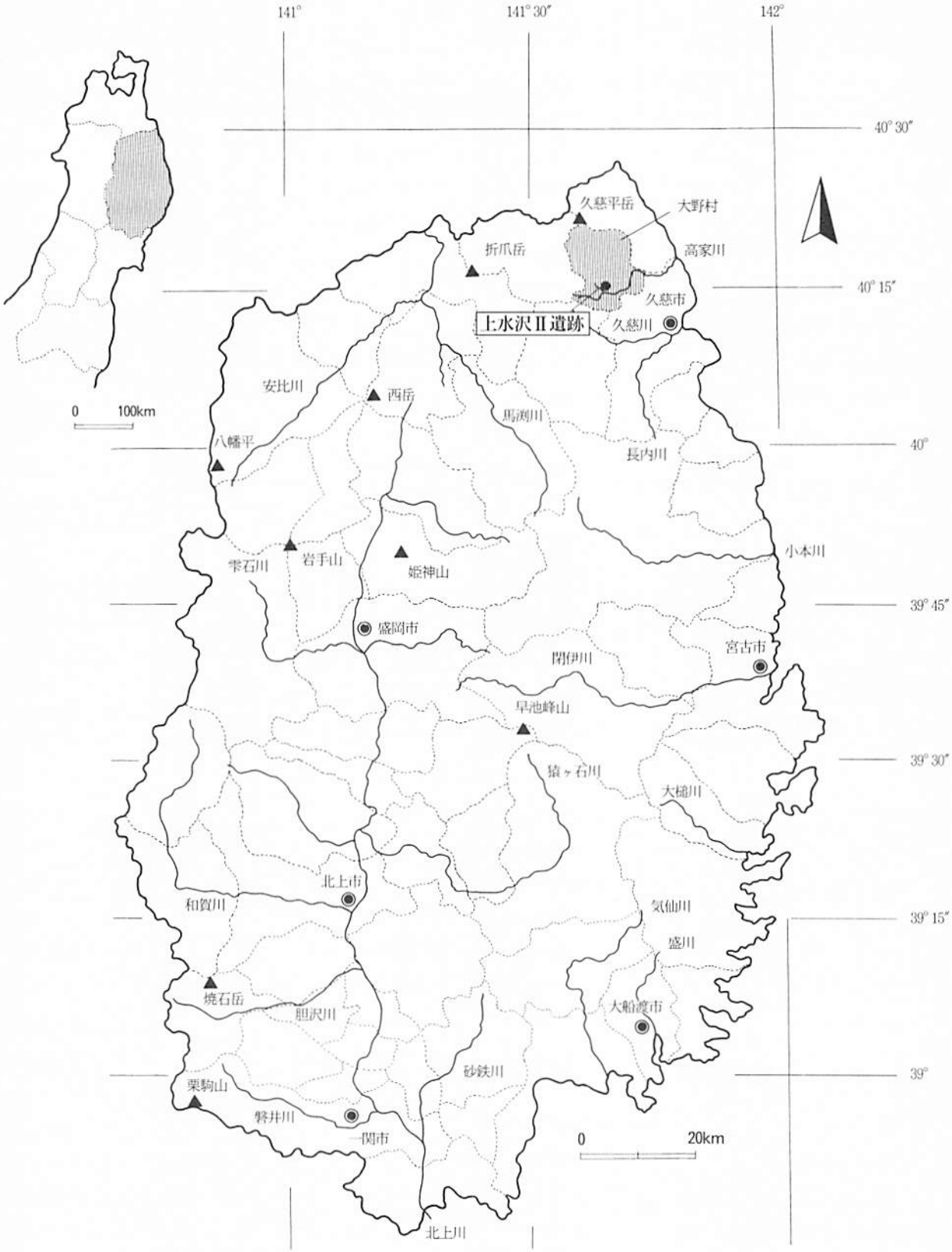
Ⅱ．遺跡の立地と環境

１．遺跡の位置

上水沢Ⅱ遺跡は、九戸郡大野村大字水沢第7地割字日当12番地２ ほかに所在し、大野村の南にあたる水沢地区の東、久慈市北部の境に近い位置にある。遺跡の中心は北緯40度14分49秒、東経141度42分14秒付近であり、三陸鉄道株式会社北リアス線久慈駅から北北西に約12km、北上山地の北端部にあたる山系を源とする高家川によって形成された谷底平野に立地し、遺跡の脇を流れる高家川の支流であるオリバ川と高家川が合流する地域の一角にある。周辺は高家川を水源とする水田・畑作地帯であり、オリバ川の上流域にあたる調査区北側では大野ダムが建設中である（平成14年度完成予定）。調査区の標高は約230mで、オリバ川までの距離が約20～40m、高家川までの距離が約100mと近く、オリバ川の水位とほぼ同じ位置にある。遺跡の西約2.5kmには標高439mの唐松山、その奥約6.5km西には標高567mの霧岳が聳えている。南には高家川・夏井川の２河川が東流し、夏井川の北側に連なる山系が久慈市との境をなしている。

２．地理・歴史的環境

上水沢Ⅱ遺跡のある大野村は岩手県の北端部に位置し、その範囲は東経141度34分28秒～141度44分18秒、北緯40度12分41秒～40度21分19秒にまたがり、総面積134.65㎢である。北部と東部は青森県階上町と階上（種市）岳を挟んで接する種市町と、西部は久慈平岳・黒間山・霧岳によって形成される山系を境にして軽米町と、南部は夏井川とその背後に連なる山系を境にして久慈市・山形村と接している。平均標高は海抜210mで全村ほぼなだらかな丘陵地帯であるが、村の南部にあたる山形村との境に至る地域は北上山地の北端にあたる山岳地帯であり、最北端には大野村の霊山とされる久慈平岳（標高706.3m）がある。気候は冷涼で



第１図　岩手県全図と遺跡の位置

年平均気温は10.6℃、太平洋が近いためその影響を受けやすく、特に夏季は海からの偏東風（山背風：やませ）によって冷たい海霧が襲来し、低音・日照不足による冷害が発生することがある。

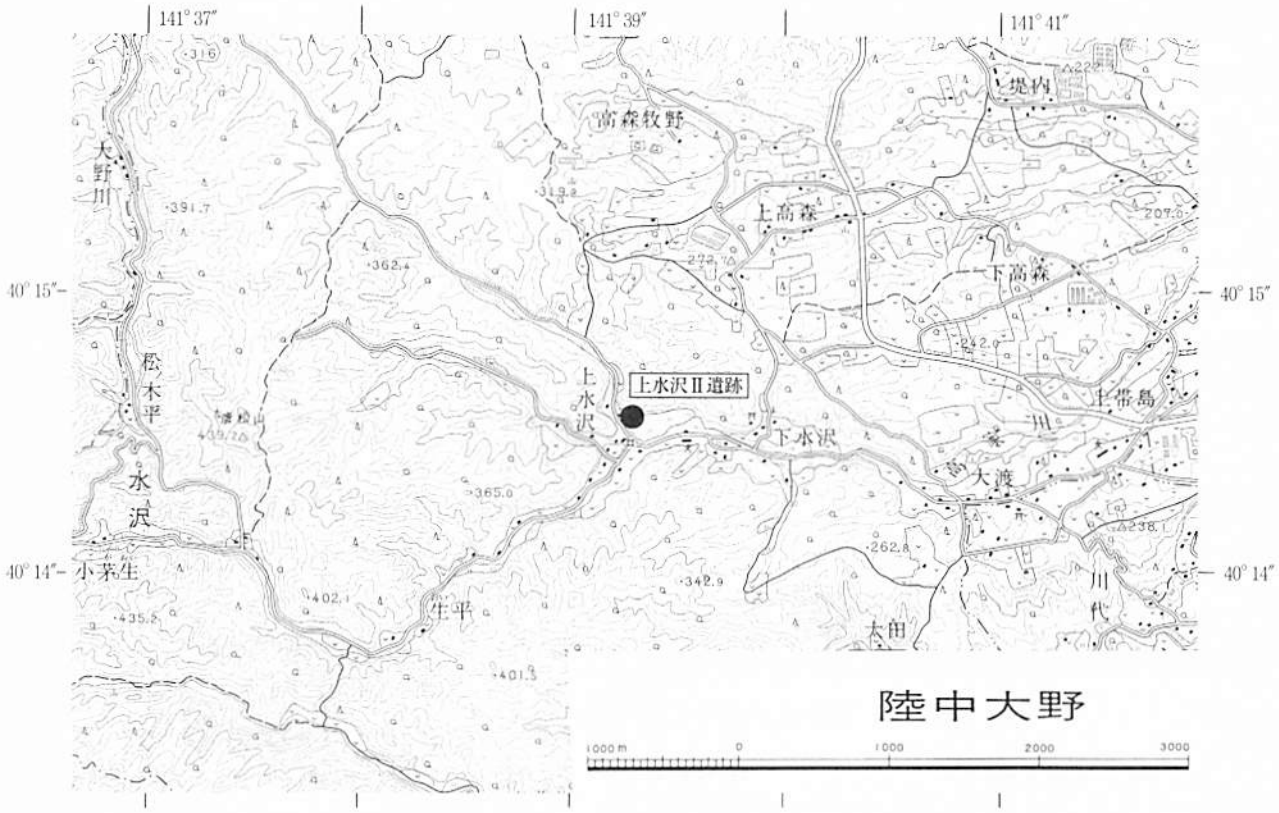
藩政時代の初期は、大野・帯島・水沢・阿子木が独立した4カ村であったが、寛文5（1665）年の八戸藩独立の際に同藩の一部となり、久慈通大野名主組に属した。明治元年には松前藩の支配下となったが、その後明治2年九戸県・三戸県・江刺県、明治3年盛岡県、明治4年八戸県・弘前県・青森県を経て盛岡県に統合され、明治5年に岩手県に編入、明治22年の町村制改正により4村が合併し大野村と称した。昭和30年に軽米町の一部を境界変更により編入し、総面積134.65㎢となり現在に至る。全体が北上山地の高原地帯であることから、その丘陵地形を生かして畜産日本一を目指し、村ぐるみでの酪農・肉牛・高原野菜の栽培を推進している。また「一人一芸の里」をテーマに乳製品・肉製品の加工を始めとして、周囲の山林（木材）資源を活用した木工製品の生産、ホームスパン（毛織物）の製作など活発な村おこしが続けられている。

上水沢Ⅱ遺跡のある水沢地区は大野村の南西部に所在し、地区の西部が北上山地の北端にあたる山岳地帯となっているため、大野村の中では比較的高い山襞に囲まれている。そこに源を発し、地区の裾を東流する高家川の上流から順に生平、上水沢、下水沢、大渡、上高森の5集落が帯状に形成されている。山が近いため農地にできる平地が少なく、古くから雑穀を中心とする畑作が中心であったが、藩政時代は土壌に含まれる砂鉄を原料に、山林を資源とする木炭を燃料にしての製鉄が各所で行われ、現在もタタラの炉跡が残っていると言われている。その中で上水沢地区は、水沢と大野を結ぶ村道が帯島と山形村を繋ぐ村道と交わる場所に位置し、かつ高家川とオリバ川とが合流する地点でもあるため、古くから水沢地区の中心を成しているところで、大野村の中でも古い慣習が色濃く残されている地域である。

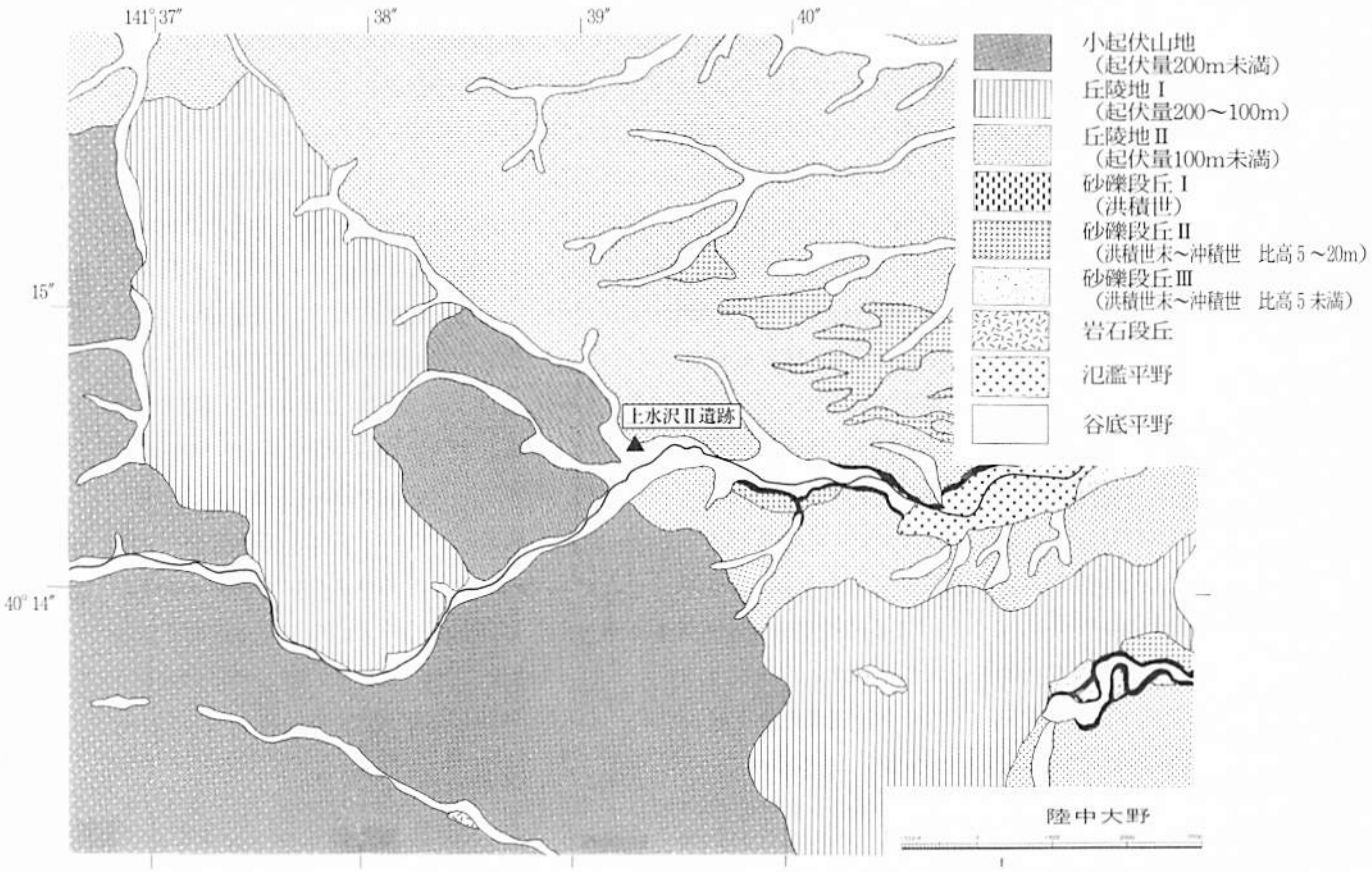
3．地形・地質

大野村を含む陸中大野地域は、東半部の海抜300m以下の平坦な台地地域と、西半部の海抜600－400mの山地とに区別される。両者の境は、大野村のほぼ中央部を走る海抜300mの等高線にほぼ一致する。西半部の山地は西隣の一戸まで延長し、折爪山地東斜面の南北に伸びる急崖で画される。この山地は北上山地の北端に近く低平化し、山頂・稜線にかなりの定高性をもった準平原となっており、遠望して高原の様相を呈している。南部では、久慈川・夏井川など太平洋側に注ぐ河川が、北上山地の隆起準平原を一部で深く刻み込み峡谷を作っている。東半部では、海抜300－180mの範囲に東西方向で幅10㎞にわたって平坦な段丘地形（九戸段丘）が発達しており、段丘面はさらに海抜300－240mの上位面（水無面）と230－180mの下位面（広野面）に区別される。下位面の段丘は海側を急斜面で切られ、典型的な台地地形を呈している。

大野村の地質分布は先述した地形分布にほぼ一致している。地域的には、南西部は北上山地北部型古生層に属し、粘板岩・チャート・輝緑凝灰岩・砂岩・石灰岩から成っている。中央部から東部にかけての丘陵地（九戸段丘面）は洪積層に属し、上位面は砂鉄を含む砂－砂礫から（水無層）、下位面は礫砂を含む砂から成っている（広野層）。後者の丘陵地については砂鉄層を含む海浜成層が堆積し、その後隆起して海岸段丘の形成が行われ、河川によって開析されて形成されたものである。そして地域全体を覆うようにローム、軽石を持つ火山砕屑物が分布している。この地域で確認される火山灰については、十和田火山の噴出を起源とする高館火山灰層より上層のもの、即ち十和田八戸テフラ（To－H）・十和田二の倉（群）テフラ（To－Nk）・十和田南部降下軽石（To－Nb）・十和田中掘降下軽石（To－Cu）・十和田b降下火山灰（To－b）・十和田a降下火山灰（To－a）があるが、本遺跡内では地山層面にTo－H、調査区中央部～南部にわたってTo－Nb、調査区中央部～北側の一部にやや集中した形でTo－Cuが分布していることが確認された。



第２図　遺跡位置図



第３図　地形分類図

第４図　遺跡周辺の地形

4．周辺の遺跡

(1) 大野村の遺跡

大野村の管内に所在する遺跡は、岩手県教育委員会文化課による「岩手県埋蔵文化財包蔵地一覧（以後、「遺跡台帳」）」（2000）において77か所が登録されている。時代はほとんどが縄文時代であり、中世、近世がわずかに分布する。種別は縄文時代の散布地が大半を占め、それ以外は城館・館・製鉄跡となっている。

大野村における埋蔵文化財の調査報告については、昭和59年度に岩手県教育委員会が実施した「第三次岩手県中世城館跡調査事業」による城館跡の分布状況についての報告があるだけであり、そのためそれぞれの遺跡の詳細な時代区分や種別などについては、未確認のままの遺跡がほとんどである。そこでここでは、遺跡台帳より縄文時代に該当する遺跡を抜粋・要約し、まとめたものを第５図及び第１表として掲載する。なお、構成の都合上から向田Ⅱ（第１表の１）、向田（同２）、向田Ⅰ（同３）については、第５図においては割愛し第１表のみでの報告としたことを付記しておく。

上水沢Ⅱ遺跡の周辺に分布する縄文時代の遺跡は、そのほとんどが高家川の周辺と弥栄地域に広がる丘陵地に集中している。これらの多くに共通してみられる地理的条件は、第１に高家川によって形成発達した谷底・氾濫平野にあり、河川水位面に近い低地もしくは氾濫河川の冠水面に近い位置にあるということ。第２に本流に流れ込む支流・沢などによって形成された緩やかな微高地、もしくは山際の緩やかな斜面に所在しているものが多いということ。第３に河川によって挟まれた丘陵状の平地に所在しているということである。弥栄地区については、開拓などによる区画整備が進行しており遺物の表採が可能である点も、この地域に遺跡が集中して見られる要因の１つになっていると思われる。

(2) 周辺の遺跡

上水沢Ⅱ遺跡では、縄文土器（主に早・前・後期）及び弥生土器が出土している。「遺跡台帳」からこの時期のものとして明記されている遺跡を抽出すると、「縄文時代早期・前期」の遺跡は久慈市で90か所、軽米町で22か所、山形村で７か所、種市町で４か所、「縄文時代後期・弥生時代」の遺跡は久慈市で191か所、軽米町で81か所、山形村で27か所、種市町で９か所である（それぞれに複合的な遺跡を含む）。ここでは上記の遺跡の中から久慈市教育委員会、もしくは㈶岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターによる発掘調査報告書がまとめられている、または久慈市教育委員会による市内遺跡詳細分布調査によって踏査・報告がなされており、本遺跡と時期的に関連すると思われる遺跡のうち、有家川～夏井川に至る地域の遺跡の分布傾向について概観する。なお、それぞれの遺跡の詳細については、各報告書などを参照されたい。

概観した遺跡は、縄文時代早期・前期が久慈市で70か所、種市町で４か所、計74か所。縄文時代後期・弥生時代が久慈市で148か所、種市町で４か所、計152か所である。なお、これらの遺跡については、本格的な調査がなされていない箇所が多く、詳細については今後調査が進展するにつれて変化するものと思われる。また、遺跡の時期に注目してみると縄文時代がほとんどであり、かつ時期が複合的なものが多くなっている。そのため、縄文時代早期・前期から縄文時代後期・弥生時代にかけて複合している遺跡については、それぞれの時期に計上して表に掲載しており、時期別の合計数は遺跡数とは一致していない。

全体を概観すると久慈市周辺、特に侍浜地域を中心に海岸沿いの地域に遺跡分布の度合いが高い。これは、この地域が海成段丘による丘陵平面部に位置しており、表採が比較的容易であることや、開発が進むことで発掘調査の割合も高くなり、確認される遺跡数が多くなっていることなどにもよると思われる。

［縄文時代早期・前期］

この時期の遺跡の分布状況を見ると、横沼・白前地区、本波地区、麦生地区、半崎地区に遺跡分布の密度

が高い。特に横沼地区に遺跡の集中度合いが高くなっている。

代表的な遺跡としては、縄文時代前期円筒式土器を主体とする遺跡であり、多量の遺物が散布する外里（山口）遺跡、昭和62年度に久慈市教育委員会が調査を行い、縄文時代の竪穴住居跡（前期）や陥し穴状遺構が検出された滝合遺跡（現在は「滝合Ⅰ」遺跡として、遺跡台帳に登録されている）、昭和62・63年度に当センターが調査を行い、縄文時代早期の貝殻文土器を始めとして、陥し穴状遺構や多数の石器が検出された源道遺跡、縄文時代前期初頭の竪穴住居跡や前期前半の土器が検出された麦生Ⅰ遺跡、平成８年度に当センターが調査を行い、縄文時代前期の遺物が採集された麦生Ⅲ遺跡、旧石器時代の石器や縄文時代早期・前期の土器が検出された麦生Ⅸ遺跡、その他西久保遺跡、横沼XⅢ遺跡、外屋敷Ⅰ遺跡、桑畑XⅥ遺跡、向町Ⅱ遺跡などが縄文時代早期の遺跡として報告がある。種市町については、当センターによる『ゴッソー遺跡発掘調査報告書』（1996、千葉）、及び「種市町内諸遺跡の調査報告」（1963、草間）からの抜粋となるが、この時期の遺跡としては上のマッカ・大宮Ⅰ・大宮Ⅱ・藤好沢の４遺跡が報告されている。大宮Ⅰ・Ⅱ遺跡は有家川の河口付近に所在、藤好沢遺跡は高家川、上のマッカ遺跡は有家川を臨む丘陵状の微高地に位置しており、先に述べた久慈市を主体とするこの地域の遺跡の分布傾向と相似している。上のマッカ遺跡からは器体に繊維を含み、円筒下層ａ式に属すると思われる縄文時代前期の土器片が採集されている。大宮Ⅰ・Ⅱ遺跡からは、縄文時代早期に属すると思われる貝殻文土器片が採集されている。

［縄文時代後期・弥生時代］

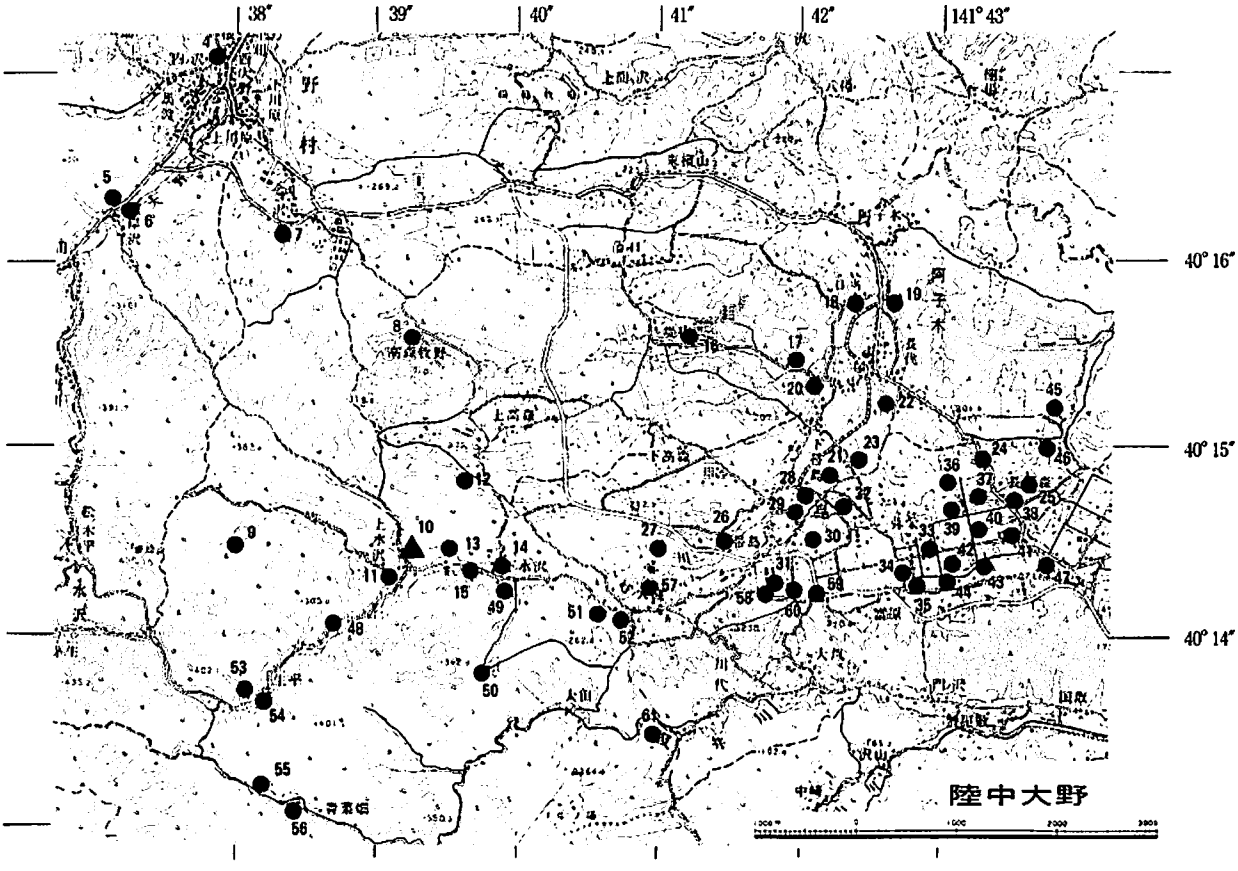
この時期の遺跡の分布状況を見ると、早期・前期に増して先に述べた地区の遺跡分布密度が高くなっている。更に夏井川の上流地域や久慈川沿いでは、山裾丘陵部に連続して遺跡が分布している様子が見られるようになっている。

代表的な遺跡としては上水沢Ⅱ遺跡の東に所在し、昭和59年度に久慈市、平成９年度に当センターが調査を行い、縄文時代後期から晩期にかけての土器、石鏃、石錘、石匙、削器、打製石斧、敲石、磨石などの石器、土偶、円環状土製品、土板、円盤状土製品などの土製品、石刀、石棒、岩板などの石製品などが検出された大芦Ⅰ遺跡がある。なお周辺の大芦Ⅱ～Ⅲ遺跡も、縄文時代後期に属する遺跡として遺跡台帳に登録されている。他に昭和41・42年度に久慈市が調査を行って市の指定遺跡となった寺里遺跡、平成２年度に当センターが調査を行った鼻館跡、平成８年度に当センターが調査を行った麦生Ⅲ・Ⅸ遺跡、縄文時代後期に属する土偶が出土している麦生Ⅳ遺跡、遺物の散布量が非常に濃く縄文時代中期・後期に属する遺物が散布し、土器、石鏃、石匙、石斧、凹石、多量の剥片が採集された国坂Ⅰ遺跡、遺跡散布の密度が濃く縄文土器、石斧、敲石、磨石、剥片などが採集された北野Ｘ遺跡、多量の縄文土器、石鏃、石匙、磨石などの石器が採集されたほか、剥片の散布量も多い桑畑XⅦ遺跡、富原Ⅰ～Ⅱ遺跡などがある。種市町については、こちらも先の文献からとなるが、上のマッカ遺跡・大宮Ⅰ遺跡・大宮Ⅱ遺跡に、黒マッカ貝塚が加わる。黒マッカ貝塚も北側に原子内川を臨む丘陵地の上面に位置しており、先に述べた分布傾向と相似する。大宮Ⅱ遺跡からは縄文時代晩期大洞Ａ'式や、それから若干変化した文様を持つ弥生土器と思われる土器片が多数採集されている。

なお、「久慈市内遺跡詳細分布調査報告書」に記載されているが、「遺跡台帳」に登録されていないものは次の９か所である。未登録もしくは登録抹消がなされたか、あるいは同一遺跡異名称の可能性がある。

①縄文時代早期・前期　→　国丹

②縄文時代後期・弥生時代　→　大芦Ⅳ、国坂Ⅳ、中崎Ⅱ、小田、葡萄峰、夏井Ⅰ、夏井Ⅱ

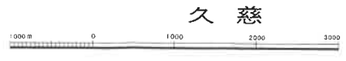


第5図　周辺の遺跡(1)　大野村

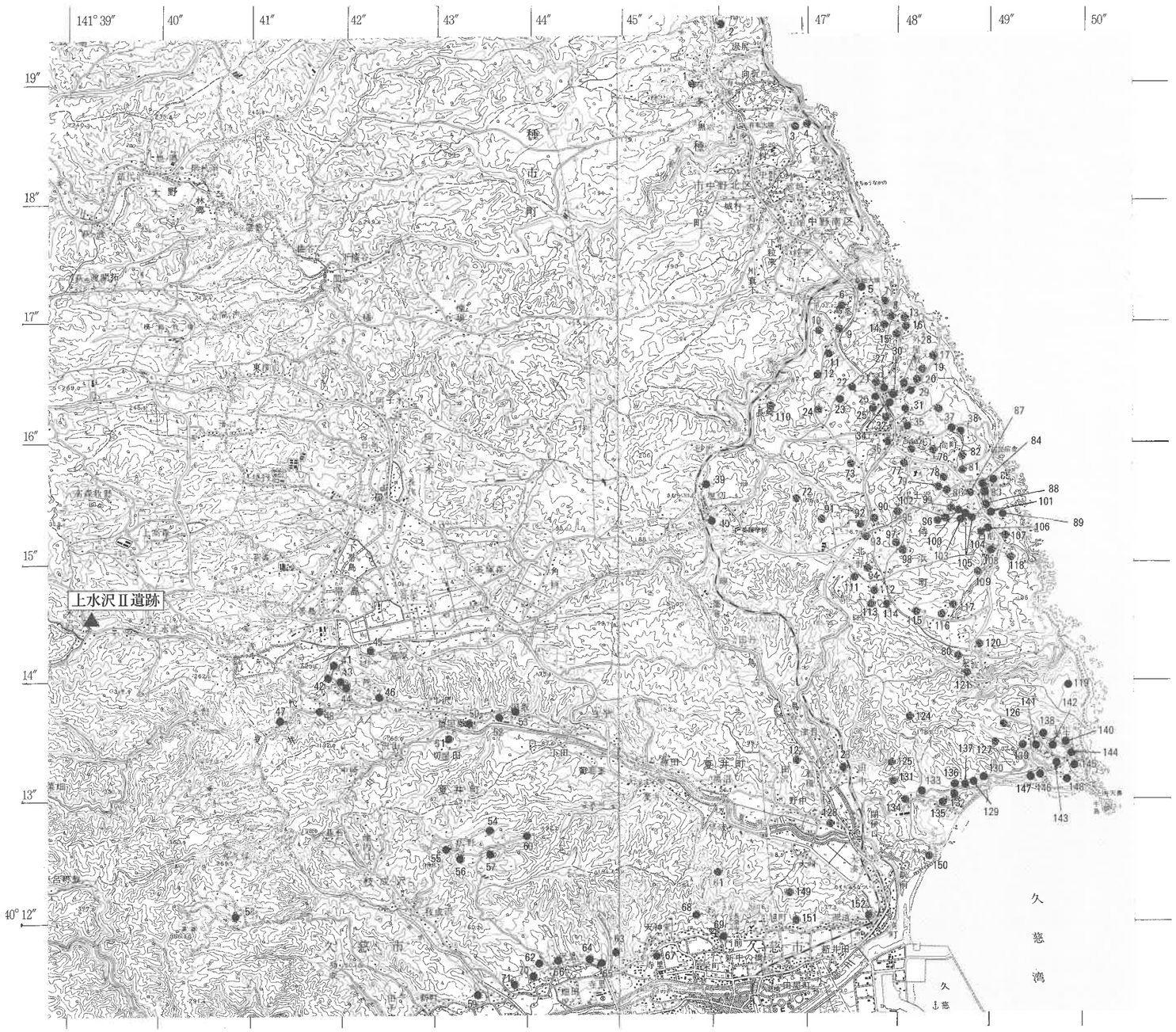
第1表　周辺の遺跡(1)　大野村

No.	遺跡名	種別	遺構・遺物	所在地住所
1	向田II	散布地	縄文土器	大字大野字向田
2	向田	散布地	縄文土器(後期) 石器	大字大野(向田)字熊の沢
3	向田I	散布地	縄文土器(後期) 石器	大字大野字向田(熊の沢)
4	長根	散布地	縄文土器(後・晩期) 石器	大字大野字長根
5	横岸沢II	散布地	石器、壺	大字帯島字横岸沢
6	横岸沢I	散布地	石器、壺	大字帯島字横岸沢
7	金ヶ沢	散布地	縄文土器(前期)	大字大野字金ヶ沢
8	高森II	散布地	縄文土器	大字帯島字高森
9	上水沢I	散布地	縄文土器	大字水沢第5地割字上水沢
10	上水沢II	集落跡	竪穴住居跡 縄文土器(早、前、後期) 石器	大字水沢第7地割字日当
11	上水沢III	散布地	縄文土器	大字水沢第7地割字上水沢
12	高森I	散布地	縄文土器	大字大野第59地割
13	上水沢IV	散布地	縄文土器	大字水沢第7地割字上水沢
14	下水沢I	散布地	縄文土器	大字水沢第8地割字上水沢
15	上水沢VI	散布地	縄文土器	大字水沢第9地割字上水沢
16	堤内	散布地	縄文土器	大字帯島第11地割
17	下帯島I	散布地	縄文土器	大字帯島第10地割
18	日当II	散布地	縄文土器	大字大野第57地割
19	阿子木	散布地	縄文土器	大字阿子木第12地割
20	下帯島II	散布地	縄文土器	大字帯島第16地割
21	上帯島I	散布地	縄文土器	大字帯島第7地割字上帯島
22	二ッ屋	散布地	縄文土器	大字帯島第18地割
23	下帯島IV	散布地	縄文土器	大字帯島第7地割
24	二ッ屋向	散布地	縄文土器	大字阿子木第12地割
25	長塚森I	散布地	縄文土器	大字阿子木第12地割字永塚森
26	高森III	散布地	縄文土器	大字帯島第1地割
27	大渡IV	散布地	縄文土器	大字帯島第2地割
28	関口I	散布地	縄文土器	大字帯島第7地割字関口
29	関口II	散布地	縄文土器	大字帯島字関口
30	上帯島II	散布地	縄文土器	大字帯島第7地割
31	上帯島III	散布地	縄文土器	大字帯島第7地割
32	上帯島IV	散布地	縄文土器	大字帯島第7地割字上帯島
33	弥栄I	散布地	縄文土器	大字帯島字弥栄
34	弥栄II	散布地	縄文土器	大字帯島字弥栄
35	弥栄IV	散布地	縄文土器	大字帯島字弥栄
36	弥栄V	散布地	縄文土器	大字帯島字弥栄
37	弥栄VI	散布地	縄文土器	大字帯島字弥栄
38	長塚森II	散布地	縄文土器(後期) 壺	大字阿子木第12地割字永塚森
39	弥栄VII	散布地	縄文土器	大字帯島字弥栄
40	弥栄VIII	散布地	縄文土器	大字帯島字弥栄
41	弥栄IX	散布地	縄文土器	大字帯島字弥栄
42	弥栄X	散布地	縄文土器	大字帯島字弥栄
43	弥栄XI	散布地	縄文土器	大字帯島字弥栄
44	弥栄XII	散布地	縄文土器	大字帯島字弥栄
45	永塚森III	散布地	石鏃	大字阿子木第12地割字永塚森
46	永塚森IV	散布地	縄文土器	大字阿子木第12地割字永塚森
47	弥栄II	散布地	縄文土器	大字帯島字弥栄
48	上水沢VII	散布地	縄文土器(後期)	大字水沢第3地割字上水沢
49	下水沢II	散布地	縄文土器	大字水沢第9地割字下水沢
50	金間部II	散布地	縄文土器 土師器(平安) 寛永通寶	大字水沢第10地割字金間部
51	大渡I	散布地	縄文土器	大字水沢第10地割
52	大渡II	散布地	縄文土器	大字水沢第10地割
53	生平I	散布地	縄文土器	大字水沢第2地割字生平
54	生平II	散布地	縄文土器	大字水沢第2地割字生平
55	青葉畑II	散布地	縄文土器(後期)	大字水沢第14地割
56	青葉畑	散布地	縄文土器 石器	大字水沢第13地割字青葉畑
57	大渡III	散布地	縄文土器	大字帯島第2地割
58	帯島開拓地I	散布地	縄文土器	大字帯島第7地割
59	帯島開拓地II	散布地	縄文土器	大字帯島第7地割
60	帯島開拓地III	散布地	縄文土器	大字帯島第7地割
61	太田	散布地	縄文土器	大字水沢字太田

No.	市町村	遺跡名	種別
1	種市町	上のマッカ	集落跡
2	種市町	大宮Ⅱ	散布地
3	種市町	大宮Ⅰ	集落跡
4	種市町	藤好沢	集落跡
5	久慈市	桑畑Ⅲ	散布地
6	久慈市	桑畑XVI	散布地
7	久慈市	桑畑XI	集落跡
8	久慈市	桑畑XVII	集落跡
9	久慈市	桑畑V	散布地
10	久慈市	桑畑XII	集落跡
11	久慈市	桑畑XIII	集落跡
12	久慈市	桑畑VII	散布地
13	久慈市	外屋敷XV	散布地
14	久慈市	桑畑X	散布地
15	久慈市	外屋敷I	集落跡
16	久慈市	外屋敷VI	散布地
17	久慈市	外屋敷XVI	散布地
18	久慈市	外屋敷VIII	集落跡
19	久慈市	外屋敷IX	散布地
20	久慈市	向町II	散布地
21	久慈市	本町IV	散布地
22	久慈市	広野VI	集落跡
23	久慈市	沢里II	散布地
24	久慈市	寺里II	散布地
25	久慈市	畑田III	集落跡
26	久慈市	本町V	散布地
27	久慈市	木戸場	集落跡
28	久慈市	横沼XVI	散布地
29	久慈市	横沼XVII	散布地
30	久慈市	横沼XVIII	散布地
31	久慈市	横沼VI	集落跡
32	久慈市	横沼XIX	散布地
33	久慈市	横沼VII	散布地
34	久慈市	横沼XXIV	散布地
35	久慈市	北野VI	散布地
36	久慈市	保土沢II	散布地
37	久慈市	横沼VIII	散布地
38	久慈市	横沼XXII	散布地
39	久慈市	横沼XIII	散布地
40	久慈市	横沼XIV	散布地
41	久慈市	横沼XXI	散布地
42	久慈市	横沼XII	散布地
43	久慈市	横沼XXIII	散布地
44	久慈市	白前I	散布地
45	久慈市	白前III	散布地
46	久慈市	白前II	散布地
47	久慈市	白前IV	散布地
48	久慈市	西久保	散布地
49	久慈市	本波X	散布地
50	久慈市	滝合I	集落跡
51	久慈市	本波VII	散布地
52	久慈市	本波VIII	散布地
53	久慈市	本波IX	散布地
54	久慈市	本波VI	散布地
55	久慈市	滝合III	散布地
56	久慈市	滝合II	散布地
57	久慈市	半崎VII	散布地
58	久慈市	麦生XIX	散布地
59	久慈市	麦生XVIII	散布地
60	久慈市	田中V	散布地
61	久慈市	半崎VII	散布地
62	久慈市	半崎II	散布地
63	久慈市	半崎I	散布地
64	久慈市	半崎IV	散布地
65	久慈市	麦生I	散布地
66	久慈市	麦生II	散布地
67	久慈市	麦生III	散布地
68	久慈市	麦生XVI	散布地
69	久慈市	麦生IV	散布地
70	久慈市	麦生VII	散布地
71	久慈市	麦生X	散布地
72	久慈市	麦生VI	散布地
73	久慈市	新城館(大崎館)	城館跡
74	久慈市	半崎南III	散布地
75	久慈市	金毘羅	集落跡

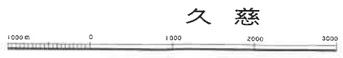


第6図　周辺の遺跡(2)　縄文時代早期・前期



No.	市町村	遺跡名	種別
1	種市町	黒マッカ貝塚	貝塚
2	種市町	上のマッカ	集落跡
3	種市町	大宮Ⅱ	散布地
4	種市町	大宮Ⅰ	集落跡
5	久慈市	桑畑XV	散布地
6	久慈市	桑畑Ⅱ	散布地
7	久慈市	桑畑XI	集落跡
8	久慈市	桑畑XVII	集落跡
9	久慈市	桑畑V	散布地
10	久慈市	桑畑XⅡ	集落跡
11	久慈市	桑畑VII	散布地
12	久慈市	桑畑XIV	散布地
13	久慈市	桑畑XVIII	散布地
14	久慈市	桑畑VIII	散布地
15	久慈市	桑畑XIX	散布地
16	久慈市	桑畑IX	散布地
17	久慈市	外屋敷Ⅱ	散布地
18	久慈市	外屋敷XⅢ	散布地
19	久慈市	外屋敷XIV	散布地
20	久慈市	外屋敷Ⅰ	集落跡
21	久慈市	外屋敷VII	散布地
22	久慈市	外屋敷VI	散布地
23	久慈市	外屋敷V	散布地
24	久慈市	外屋敷IV	散布地
25	久慈市	本町Ⅰ	散布地
26	久慈市	外屋敷XVI	散布地
27	久慈市	外屋敷XⅠ	散布地
28	久慈市	外屋敷VIII	集落跡
29	久慈市	外屋敷X	集落跡
30	久慈市	外屋敷IX	散布地
31	久慈市	外屋敷XVIII	散布地
32	久慈市	外屋敷XVII	散布地
33	久慈市	向町Ⅱ	散布地
34	久慈市	本町Ⅲ	散布地
35	久慈市	本町IV	散布地
36	久慈市	向町VIII	散布地
37	久慈市	向町Ⅲ	散布地
38	久慈市	向町IV	散布地
39	久慈市	堀切Ⅰ	散布地
40	久慈市	堀切Ⅱ	散布地
41	久慈市	大芦Ⅰ	集落跡
42	久慈市	大芦Ⅱ	集落跡
43	久慈市	大芦Ⅲ	集落跡
44	久慈市	大芦IV	集落跡
45	久慈市	富原Ⅰ	集落跡
46	久慈市	大芦（V）	散布地
47	久慈市	川代Ⅰ	集落跡
48	久慈市	川代Ⅱ	散布地
49	久慈市	門ノ沢	散布地
50	久慈市	国坂Ⅱ	散布地
51	久慈市	切屋田	集落跡
52	久慈市	国坂（Ⅰ）	集落跡
53	久慈市	国坂Ⅲ	散布地
54	久慈市	広野VI	集落跡
55	久慈市	広野Ⅲ	散布地
56	久慈市	広野V	散布地
57	久慈市	広野VII	散布地
58	久慈市	長久保	散布地
59	久慈市	枝成沢Ⅱ	散布地
60	久慈市	広野	散布地
61	久慈市	門前Ⅲ	散布地
62	久慈市	畑田V	散布地
63	久慈市	寺里Ⅰ	集落跡
64	久慈市	沢里Ⅱ	散布地
65	久慈市	沢里Ⅲ	散布地
66	久慈市	沢里	集落跡
67	久慈市	寺里Ⅱ	散布地
68	久慈市	門前Ⅱ	散布地
69	久慈市	門前Ⅰ	散布地
70	久慈市	畑田Ⅲ	集落跡
71	久慈市	畑田Ⅱ	集落跡
72	久慈市	北野Ⅲ	散布地
73	久慈市	木戸場	集落跡
74	久慈市	北野V	散布地
75	久慈市	向町IX	散布地
76	久慈市	向町X	散布地

No.	市町村	遺跡名	種別
77	久慈市	向町VII	散布地
78	久慈市	保土沢Ⅲ	散布地
79	久慈市	保土沢IV	散布地
80	久慈市	本波XⅡ	散布地
81	久慈市	向町XI	散布地
82	久慈市	向町V	散布地
83	久慈市	横沼XV	散布地
84	久慈市	横沼Ⅲ	散布地
85	久慈市	横沼IV	散布地
86	久慈市	横沼Ⅰ	散布地
87	久慈市	横沼VI	集落跡
88	久慈市	横沼XIX	散布地
89	久慈市	横沼XXIV	散布地
90	久慈市	保土沢北	散布地
91	久慈市	北野Ⅰ	集落跡
92	久慈市	北野VII	散布地
93	久慈市	保土沢南	集落跡
94	久慈市	保土沢	散布地
95	久慈市	保土沢Ⅱ	散布地
96	久慈市	横沼XX	散布地
97	久慈市	保土沢V	散布地
98	久慈市	北野Ⅱ	散布地
99	久慈市	横沼VIII	散布地
100	久慈市	横沼X	散布地
101	久慈市	横沼XIIV	散布地
102	久慈市	横沼IX	散布地
103	久慈市	横沼XXI	散布地
104	久慈市	横沼XⅡ	散布地
105	久慈市	横沼XI	散布地
106	久慈市	横沼XXⅢ	散布地
107	久慈市	白前Ⅰ	散布地
108	久慈市	白前Ⅱ	散布地
109	久慈市	白前IV	散布地
110	久慈市	長崎	散布地
111	久慈市	北野IV	散布地
112	久慈市	北野VIII	散布地
113	久慈市	北野IX	散布地
114	久慈市	北野X	散布地
115	久慈市	北野XI	散布地
116	久慈市	白前VI	散布地
117	久慈市	白前V	散布地
118	久慈市	西久保	散布地
119	久慈市	本波XI	集落跡？
120	久慈市	本波VII	散布地
121	久慈市	本波Ⅲ	散布地
122	久慈市	宇津目Ⅰ	散布地
123	久慈市	田中Ⅰ	散布地
124	久慈市	滝合IV	散布地
125	久慈市	半崎VII	散布地
126	久慈市	麦生XXI	集落跡
127	久慈市	麦生XVIII	散布地
128	久慈市	鼻館跡	城館、墓
129	久慈市	麦生XⅡ	散布地
130	久慈市	麦生XⅢ	散布地
131	久慈市	半崎VI	散布地
132	久慈市	麦生XI	散布地
133	久慈市	半崎Ⅲ	散布地
134	久慈市	半崎Ⅰ	散布地
135	久慈市	半崎IV	散布地
136	久慈市	麦生XIV	散布地
137	久慈市	麦生XX	散布地
138	久慈市	麦生VIII	散布地
139	久慈市	麦生Ⅰ	散布地
140	久慈市	麦生V	散布地
141	久慈市	麦生XV	散布地
142	久慈市	麦生Ⅲ	散布地
143	久慈市	麦生IX	散布地
144	久慈市	麦生XVI	散布地
145	久慈市	麦生IV	散布地
146	久慈市	麦生XVII	散布地
147	久慈市	麦生X	散布地
148	久慈市	麦生VI	散布地
149	久慈市	新城館(大崎館)	城館跡
150	久慈市	半崎南IV（V？）	散布地
151	久慈市	昼場沢	散布地
152	久慈市	金毘羅	集落跡



第７図　周辺の遺跡(3)　縄文時代後期・弥生時代

第２表　周辺の遺跡(2)　縄文時代早期・前期

番号	市町村	遺跡名	種別	時代	遺構・遺物	備考
1	種市町	上のマッカ	集	縄	縄文土器（前・中・後期）、剥片	
2	種市町	大宮Ⅱ	散	縄	縄文土器（早期）、弥生土器	
3	種市町	大宮Ⅰ	集	縄	縄文土器（早・前・晩期）、弥生土器	
4	種市町	藤好沢	集	縄	縄文土器（前・晩期）	
5	久慈市	桑畑Ⅲ	散	縄・弥	縄文土器（早・前）、弥生土器	久慈市教育委員会（1995）
6	久慈市	桑畑XVI	散	縄	縄文土器（早・前）、石鏃、剥片	久慈市教育委員会（1995）
7	久慈市	桑畑XI	集	縄・古	縄文土器（早～晩期）、石匙、土師器	旧桑畑 久慈市教育委員会（1995）
8	久慈市	桑畑XVII	集	縄	縄文土器（前・後・晩期）、石匙、石鏃、磨石、剥片	久慈市教育委員会（1995）
9	久慈市	桑畑V	散	縄	縄文土器（前・後期）、剥片	久慈市教育委員会（1995）
10	久慈市	桑畑XII	集	縄	縄文土器（前・後期）、土師器	旧外屋敷西 久慈市教育委員会（1995）
11	久慈市	桑畑XIII	集	縄	縄文土器（前・中期）、石鏃、剥片	旧桑畑Ⅱ 久慈市教育委員会（1995）
12	久慈市	桑畑VII	散	縄	縄文土器（前・後期）、弥生土器	範囲拡大 久慈市教育委員会（1995）
13	久慈市	外屋敷XV	散	縄	縄文土器（早・前期）、石鏃、剥片、石錐	久慈市教育委員会（1995）
14	久慈市	桑畑X	散	縄	縄文土器（前期）	
15	久慈市	外屋敷Ⅰ	集	縄・古	縄文土器（早・前・後期）、土師器	久慈市教育委員会（1995）
16	久慈市	外屋敷VI	散	縄・古	縄文土器（前・後期）、土師器	久慈市教育委員会（1995）
17	久慈市	外屋敷XVI	散	縄	縄文土器（早・後期）、石錐、磨石	久慈市教育委員会（1995）
18	久慈市	外屋敷VII	集	縄	縄文土器（前・後期）	久慈市教育委員会（1995）
19	久慈市	外屋敷IX	散	縄	縄文土器（早・後・晩期）	旧本町 久慈市教育委員会（1995）
20	久慈市	向町Ⅱ	散	縄	縄文土器（早・後期）、石斧、剥片	久慈市教育委員会（1995）
21	久慈市	本町IV	散	縄	縄文土器（早・前・後期）	久慈市教育委員会（1995）
22	久慈市	広野VI	集	縄	縄文土器（前・中・後期）	久慈市教育委員会（1992）
23	久慈市	沢里Ⅱ	散	縄	縄文土器（早？・後・晩期）、土師器	久慈市教育委員会（1992）
24	久慈市	寺里Ⅱ	散	縄・古	縄文土器（前・後期）、土師器、須恵器	久慈市教育委員会（1992）
25	久慈市	畑田Ⅲ	集	縄	縄文土器（前・後期）、土師器	久慈市教育委員会（1991）
26	久慈市	本町V	散	縄・古	縄文土器（前期）、土師器	久慈市教育委員会（1995）
27	久慈市	木戸場	集	縄・古	縄文土器（前・後・晩期）、土師器	久慈市教育委員会（1995）
28	久慈市	横沼XVI	散	縄	縄文土器（前期）	久慈市教育委員会（1995）
29	久慈市	横沼XVII	散	縄	縄文土器（前期）	久慈市教育委員会（1995）
30	久慈市	横沼XVII	散	縄	縄文土器（前期）	久慈市教育委員会（1995）
31	久慈市	横沼VI	集	縄	縄文土器（前・後期）、石器	久慈市教育委員会（1995）
32	久慈市	横沼XIX	散	縄	縄文土器（前・後期）	久慈市教育委員会（1995）
33	久慈市	横沼VII	散	縄	縄文土器（前期）	久慈市教育委員会（1995）
34	久慈市	横沼XXIV	散	縄	縄文土器（前・後期）	久慈市教育委員会（1995）
35	久慈市	北野VI	散	縄	縄文土器（前期）	久慈市教育委員会（1995）
36	久慈市	保土沢Ⅱ	散	縄・弥	縄文土器（前期）、弥生土器、土師器、アメリカ式石鏃	久慈市教育委員会（1995）
37	久慈市	横沼VII	散	縄・弥	縄文土器（前期）、弥生土器	久慈市教育委員会（1995）
38	久慈市	横沼XXII	散	縄	縄文土器（前期）	久慈市教育委員会（1995）
39	久慈市	横沼XIII	散	縄	縄文土器（早期）	久慈市教育委員会（1995）
40	久慈市	横沼XIV	散	縄	縄文土器（前・後期）	久慈市教育委員会（1995）
41	久慈市	横沼XXI	散	縄・弥	縄文土器（早期）、弥生土器	久慈市教育委員会（1995）
42	久慈市	横沼XII	散	縄	縄文土器（前・中・後期）	久慈市教育委員会（1995）
43	久慈市	横沼XXIII	散	縄	縄文土器（前・後期）	久慈市教育委員会（1995）
44	久慈市	白前Ⅰ	散	縄	縄文土器（前・中・後期）	久慈市教育委員会（1995）
45	久慈市	白前Ⅲ	散	縄	縄文土器（前期）、石鏃	久慈市教育委員会（1995）
46	久慈市	白前Ⅱ	散	縄	縄文土器（前・中・後期）	久慈市教育委員会（1995）
47	久慈市	白前IV	散	縄	縄文土器（前・後期）、石匙	久慈市教育委員会（1995）
48	久慈市	西久保	散	縄	縄文土器（早・前・後期）、石鏃、石斧	久慈市教育委員会（1995）
49	久慈市	本波X	散	縄	縄文土器（前期）	久慈市教育委員会（1990）
50	久慈市	滝合Ⅰ	集	縄	竪穴住居跡（前期）、陥し穴状遺構	昭和62年度調査 久慈市発掘調査報告書第９集
51	久慈市	本波VII	散	縄	縄文土器（前・中・後期）、石鏃、剥片	
52	久慈市	本波VIII	散	縄	縄文土器（前期）	久慈市教育委員会（1990） 範囲拡大（1995）
53	久慈市	本波IX	散	縄	縄文土器（前期）、石匙	
54	久慈市	本波VI	散	縄	縄文土器（前期）、石鏃	久慈市教育委員会（1990）
55	久慈市	滝合Ⅲ	散	縄	縄文土器（前期）	久慈市教育委員会（1990）
56	久慈市	滝合Ⅱ	散	縄	縄文土器（前期）	久慈市教育委員会（1990）
57	久慈市	半崎VII	散	縄	縄文土器（早・前・後期）	久慈市教育委員会（1990）
58	久慈市	麦生XIX	散	縄	縄文土器（前・中期）、黒曜石	久慈市教育委員会（1990）
59	久慈市	麦生XVII	散	縄	縄文土器（前・中・後期）	久慈市教育委員会（1990）
60	久慈市	田中V	散	縄	縄文土器（前期）	久慈市教育委員会（1990）
61	久慈市	半崎VII	散	縄	縄文土器（前・中・後期）、弥生土器	久慈市教育委員会（1990）
62	久慈市	半崎Ⅱ	散	縄	縄文土器（前期）、石鏃	範囲拡大
63	久慈市	半崎Ⅰ	散	縄	縄文土器（前・後期）	久慈市教育委員会（1990）
64	久慈市	半崎IV	散	縄	縄文土器（前・後期）、剥片	久慈市教育委員会（1990）
65	久慈市	麦生Ⅰ	散	縄	縄文土器（前・後期）	平成元年度試掘調査竪穴住居跡 久慈市教育委員会（1990）
66	久慈市	麦生Ⅱ	散	縄	縄文土器（前期）	久慈市教育委員会（1990）
67	久慈市	麦生Ⅲ	散	縄	縄文土器（前・中・後期）	平成８年度埋蔵文調査報告書第274集 久慈市教育委員会（1990）
68	久慈市	麦生XVI	散	縄	縄文土器（前・後期）、弥生土器、鉄滓	久慈市教育委員会（1990）
69	久慈市	麦生IV	散	縄	縄文土器（前・後期）、	久慈市教育委員会（1990）
70	久慈市	麦生VII	散	縄	縄文土器（前期）	久慈市教育委員会（1990）
71	久慈市	麦生X	散	縄	縄文土器（前・後期）	自然崩壊進行中 久慈市教育委員会（1990）
72	久慈市	麦生VI	散	縄	縄文土器（前・後期）	久慈市教育委員会（1990）
73	久慈市	新城館（大崎館）	城	縄・中	縄文土器（前・中・後期）、空堀、郭、帯郭	久慈市教育委員会（1990）
74	久慈市	半崎南Ⅲ	散	縄	縄文土器（前期）、剥片	久慈市教育委員会（1990）

第３表　周辺の遺跡(3)　縄文時代後期・弥生時代

番号	市町村	遺跡名	種別	時代	遺構・遺物	備考
1	種市町	黒マッカ貝塚	貝	縄	縄文土器（後期）、土師器、石器	
2	種市町	上のマッカ	集	縄	縄文土器（前・中・後期）、剥片	
3	種市町	大宮Ⅱ	散	縄	縄文土器（早期）、弥生土器	
4	種市町	大宮Ⅰ	集	縄	縄文土器（早・前・晩期）、弥生土器	
5	久慈市	桑畑XV	散	縄	縄文土器（後期）	久慈市教育委員会（1995）
6	久慈市	桑畑Ⅱ	散	縄	縄文土器（後期）、石鏃、剥片	久慈市教育委員会（1995）
7	久慈市	桑畑XI	集	縄・古	縄文土器（早～晩期）、石匙、土師器	旧桑畑Ⅰ 久慈市教育委員会（1995）
8	久慈市	桑畑XVII	集	縄	縄文土器（前・後・晩期）、石匙、石鏃、磨石、剥片	久慈市教育委員会（1995）
9	久慈市	桑畑V	散	縄	縄文土器（前・後期）、剥片	久慈市教育委員会（1995）
10	久慈市	桑畑XII	集	縄	縄文土器（前・後期）、土師器	旧外屋敷西 久慈市教育委員会（1995）
11	久慈市	桑畑VII	散	縄	縄文土器（前・後期）、弥生土器	範囲拡大 久慈市教育委員会（1995）
12	久慈市	桑畑XIV	散	縄・弥	縄文土器（晩期）、弥生土器（後期）	旧七小出Ⅲ 久慈市教育委員会（1995）
13	久慈市	桑畑XVII	散	縄・古	縄文土器（後期）、石斧、土師器、剥片	久慈市教育委員会（1995）
14	久慈市	桑畑VIII	散	縄	縄文土器（後期）	久慈市教育委員会（1995）
15	久慈市	桑畑XIX	散	縄	縄文土器（後期）	久慈市教育委員会（1995）
16	久慈市	桑畑IX	散	縄・弥・古	縄文土器、弥生土器（後期）、土師器	範囲拡大 久慈市教育委員会（1995）
17	久慈市	外屋敷Ⅱ	散	縄・古	縄文土器（後期）、石鏃、土師器	久慈市教育委員会（1995）
18	久慈市	外屋敷XIII	散	縄・弥・古	縄文土器（後期）、弥生土器、土師器	久慈市教育委員会（1995）
19	久慈市	外屋敷XIV	散	縄	縄文土器（後期）	久慈市教育委員会（1995）
20	久慈市	外屋敷Ⅰ	集	縄・古	縄文土器（早・前・後期）、土師器	久慈市教育委員会（1995）
21	久慈市	外屋敷VII	散	縄	縄文土器（後期）	久慈市教育委員会（1995）
22	久慈市	外屋敷VI	散	縄・古	縄文土器（前・後期）、土師器	久慈市教育委員会（1995）
23	久慈市	外屋敷V	散	縄・弥	縄文土器（後期）、弥生土器	久慈市教育委員会（1995）
24	久慈市	外屋敷IV	散	縄・古	縄文土器（中～晩期）、土師器	久慈市教育委員会（1995）
25	久慈市	本町Ⅰ	散	縄	縄文土器（後期）	久慈市教育委員会（1995）
26	久慈市	外屋敷XVI	散	縄	縄文土器（早・後期）、石鏃、磨石	久慈市教育委員会（1995）
27	久慈市	外屋敷XI	散	縄	縄文土器（後期）	旧外屋敷東 久慈市教育委員会（1995）
28	久慈市	外屋敷VIII	集	縄	縄文土器（前・後期）	久慈市教育委員会（1995）
29	久慈市	外屋敷X	集	縄	縄文土器（中・後期）、石斧、剥片	久慈市教育委員会（1995）
30	久慈市	外屋敷IX	散	縄	縄文土器（早・後・晩期）	旧本町 久慈市教育委員会（1995）
31	久慈市	外屋敷XVIII	散	縄	縄文土器（後期）	久慈市教育委員会（1995）
32	久慈市	外屋敷XVII	散	縄	縄文土器（後期）	久慈市教育委員会（1995）
33	久慈市	向町Ⅱ	散	縄	縄文土器（早・後期）、石斧、剥片	久慈市教育委員会（1995）
34	久慈市	本町Ⅲ	散	縄	縄文土器（後期）	久慈市教育委員会（1995）
35	久慈市	本町Ⅳ	散	縄	縄文土器（早・前・後期）	久慈市教育委員会（1995）
36	久慈市	向町VII	散	縄	縄文土器（後期）	久慈市教育委員会（1995）
37	久慈市	向町Ⅲ	散	縄・古	縄文土器（後期）、土師器	範囲拡大 久慈市教育委員会（1995）
38	久慈市	向町IV	散	縄	縄文土器（後期）、石斧	久慈市教育委員会（1995）
39	久慈市	堀切Ⅰ	散	縄	縄文土器（後期）	久慈市教育委員会（1995）
40	久慈市	堀切Ⅱ	散	縄	縄文土器（後期）	久慈市教育委員会（1995）
41	久慈市	大芦Ⅰ	集	縄	縄文土器（中・後・晩期）、剥片	昭和59年度調査、範囲拡大 平成９年度埋文第306集
42	久慈市	大芦Ⅱ	集・石	縄・近	縄文土器（後期）、庚申塔、ピット、石器	久慈市教育委員会（1996）
43	久慈市	大芦Ⅲ	集	縄	縄文土器（後期）	久慈市教育委員会（1996）
44	久慈市	大芦IV	集	縄	縄文土器（後期）	範囲拡大 久慈市教育委員会（1996）
45	久慈市	富原Ⅰ	集	縄	縄文土器（後・晩期）	久慈市教育委員会（1996）
46	久慈市	大芦（V）	散	縄	縄文土器（後・晩期）	久慈市教育委員会（1985）
47	久慈市	川代Ⅰ	集	縄	縄文土器（後期）、剥片	久慈市教育委員会（1996）
48	久慈市	川代Ⅱ	散	縄	縄文土器（後期）	H６新規 久慈市教育委員会（1996）
49	久慈市	門ノ沢	散	縄	縄文土器	H６新規
50	久慈市	国坂Ⅱ	散	縄	縄文土器（後期）	H６新規 久慈市教育委員会（1996）
51	久慈市	切屋田	集	縄	縄文土器（後・晩期）、石族、石匙	久慈市教育委員会（1996）
52	久慈市	国坂（Ⅰ）	集	縄	縄文土器（中・後期）、多量の石器	久慈市教育委員会（1996）
53	久慈市	国坂Ⅲ	散	縄	縄文土器（後期）	H６新規 久慈市教育委員会（1996）
54	久慈市	広野VI	集	縄	縄文土器（前・中・後期）	久慈市教育委員会（1992）
55	久慈市	広野Ⅲ	散	縄	縄文土器（後期）	久慈市教育委員会（1992）
56	久慈市	広野V	散	縄	縄文土器（後・晩期）、土版、土師器、石鏃	久慈市教育委員会（1992）
57	久慈市	広野VII	散	縄	縄文土器（後期）	久慈市教育委員会（1992）
58	久慈市	長久保	散	縄	縄文土器（後期）	久慈市教育委員会（1992）
59	久慈市	枝成沢Ⅱ	散	縄	縄文土器（後期）	久慈市教育委員会（1992）
60	久慈市	広野	散	縄・弥	縄文土器、弥生土器（後期）	久慈市教育委員会（1992）
61	久慈市	門前Ⅲ	散	縄	縄文土器（後期）	久慈市教育委員会（1992）
62	久慈市	畑田V	散	縄	縄文土器（後期）	久慈市教育委員会（1991）
63	久慈市	寺里Ⅰ	集	古	竪穴住居跡、土師器、須恵器、弥生土器	昭和41・42年度調査、市指定史跡 久慈市教育委員会（1992）
64	久慈市	沢里Ⅱ	散	縄	縄文土器（早？・後・晩期）、土師器	久慈市教育委員会（1992）
65	久慈市	沢里Ⅲ	散	弥	弥生土器、土師器	久慈市教育委員会（1992）
66	久慈市	沢里	集	縄・弥	縄文土器（後期）、弥生土器	久慈市教育委員会（1992）
67	久慈市	寺里Ⅱ	散	縄・古	縄文土器（前・後期）、土師器、須恵器	久慈市教育委員会（1992）
68	久慈市	門前Ⅱ	散	縄	縄文土器（後期）	久慈市教育委員会（1992）

番号	市町村	遺跡名	種別	時代	遺構・遺物	備考
69	久慈市	門前Ⅰ	散	縄・奈	縄文土器（後期）、土師器（奈良）	久慈市教育委員会（1992）
70	久慈市	畑田Ⅲ	集	縄	縄文土器（前・後期）、土師器	久慈市教育委員会（1991）
71	久慈市	畑田Ⅱ	集	縄・奈・平	縄文土器（後期）、土師器	久慈市教育委員会（1992）
72	久慈市	北野Ⅲ	散	縄	縄文土器（後期）	久慈市教育委員会（1995）
73	久慈市	本戸場	集	縄・古	縄文土器（前・後・晩期）、土師器	久慈市教育委員会（1995）
74	久慈市	北野Ⅴ	散	縄	縄文土器（後期）	久慈市教育委員会（1995）
75	久慈市	向町Ⅸ	散	縄	縄文土器（後期）	久慈市教育委員会（1995）
76	久慈市	向町Ⅹ	散	縄	縄文土器（後期）	久慈市教育委員会（1995）
77	久慈市	向町Ⅶ	散	縄・古	縄文土器（後期）、土師器	旧向町Ⅰ～Ⅳ 久慈市教育委員会（1995）
78	久慈市	保土沢Ⅲ	散	縄	縄文土器（後期）	久慈市教育委員会（1995）
79	久慈市	保土沢Ⅳ	散	縄	縄文土器（後期）	久慈市教育委員会（1995）
80	久慈市	本波XⅡ	散	縄	縄文土器（後期）	久慈市教育委員会（1995）
81	久慈市	向町XⅠ	散	縄	縄文土器（後期）	久慈市教育委員会（1995）
82	久慈市	向町Ⅴ	散	縄	縄文土器（後期）	久慈市教育委員会（1995）
83	久慈市	横沼XⅤ	散	縄	縄文土器（後期）	久慈市教育委員会（1995）
84	久慈市	横沼Ⅲ	散	縄	縄文土器（後期）	久慈市教育委員会（1995）
85	久慈市	横沼Ⅳ	散	縄	縄文土器（後期）	久慈市教育委員会（1995）
86	久慈市	横沼Ⅰ	散	縄	縄文土器（後期）	久慈市教育委員会（1995）
87	久慈市	横沼Ⅵ	集	縄	縄文土器（前・後期）、石器	久慈市教育委員会（1995）
88	久慈市	横沼Ⅸ	散	縄	縄文土器（前・後期）	久慈市教育委員会（1995）
89	久慈市	横沼XXⅣ	散	縄	縄文土器（前・後期）	久慈市教育委員会（1995）
90	久慈市	保土沢北	散	縄	縄文土器（後期）	久慈市教育委員会（1995）
91	久慈市	北野Ⅰ	集	縄	縄文土器（後期）	久慈市教育委員会（1995）
92	久慈市	北野Ⅶ	散	縄・古	縄文土器（後期）・土師器	久慈市教育委員会（1995）
93	久慈市	保土沢南	集	弥	弥生土器	久慈市教育委員会（1995）
94	久慈市	保土沢	散	弥	弥生土器	久慈市教育委員会（1995）
95	久慈市	保土沢Ⅱ	散	縄・弥	縄文土器（前期）、弥生土器、土師器、アメリカ式石鏃	久慈市教育委員会（1995）
96	久慈市	横沼XX	散	縄	縄文土器（後期）	久慈市教育委員会（1995）
97	久慈市	保土沢Ⅴ	散	縄	縄文土器（後期）	久慈市教育委員会（1995）
98	久慈市	北野Ⅱ	散	縄	縄文土器（後期）、石器	久慈市教育委員会（1995）
99	久慈市	横沼Ⅶ	散	縄・弥	縄文土器（前期）、弥生土器	久慈市教育委員会（1995）
100	久慈市	横沼Ⅹ	散	縄	縄文土器（後・晩期）	久慈市教育委員会（1995）
101	久慈市	横沼XIIV	散	縄	縄文土器（前・後期）	久慈市教育委員会（1995）
102	久慈市	横沼Ⅸ	散	弥	弥生土器	久慈市教育委員会（1995）
103	久慈市	横沼XXI	散	縄・弥	縄文土器（早期）、弥生土器	久慈市教育委員会（1995）
104	久慈市	横沼XⅡ	散	縄	縄文土器（前・中・後期）	久慈市教育委員会（1995）
105	久慈市	横沼XI	散	縄	縄文土器（後期）	久慈市教育委員会（1995）
106	久慈市	横沼XXⅢ	散	縄	縄文土器（前・後期）	久慈市教育委員会（1995）
107	久慈市	白前Ⅰ	散	縄	縄文土器（前・中・後期）	久慈市教育委員会（1995）
108	久慈市	白前Ⅱ	散	縄	縄文土器（前・中・後期）	久慈市教育委員会（1995）
109	久慈市	白前Ⅳ	散	縄	縄文土器（前・後期）、石匙	久慈市教育委員会（1995）
110	久慈市	長崎	散	縄	縄文土器（後期）	久慈市教育委員会（1995）
111	久慈市	北野Ⅳ	散	縄	縄文土器、弥生土器	久慈市教育委員会（1995）
112	久慈市	北野Ⅷ	散	縄・古	縄文土器（後期）、土師器	久慈市教育委員会（1995）
113	久慈市	北野Ⅸ	散	縄	縄文土器（後期）	久慈市教育委員会（1995）
114	久慈市	北野Ⅹ	散	縄	縄文土器（後期）、石斧、磨石	久慈市教育委員会（1995）
115	久慈市	北野XI	散	縄	縄文土器（後期？）	久慈市教育委員会（1995）
116	久慈市	白前Ⅵ	散	縄	縄文土器（後期）	久慈市教育委員会（1995）
117	久慈市	白前Ⅴ	散	縄	縄文土器（後期）	久慈市教育委員会（1995）
118	久慈市	西久保	散	縄	縄文土器（早・前・後期）、石鏃、石斧	久慈市教育委員会（1995）
119	久慈市	本波XI	集？	縄	縄文土器（後期）	久慈市教育委員会（1990）
120	久慈市	本波Ⅶ	散	縄	縄文土器（前・中・後期）、石鏃、剥片	
121	久慈市	本波Ⅲ	散	縄	縄文土器（後期）	
122	久慈市	宇津田Ⅰ	散	縄	縄文土器（後期）、土師器	久慈市教育委員会（1990・1996）
123	久慈市	田中Ⅰ	散	縄	縄文土器（後期）	久慈市教育委員会（1990）
124	久慈市	遠合Ⅳ	散	縄	縄文土器（後期）	久慈市教育委員会（1990）
125	久慈市	平崎Ⅶ	散	縄	縄文土器（早・前・後期）	久慈市教育委員会（1990）
126	久慈市	麦生XXI	集	縄	縄文土器（後・晩期）	平成元年度試掘調査竪穴住居跡 久慈市教育委員会（1990）
127	久慈市	麦生XⅦ	散	縄	縄文土器（前・中・後期）	久慈市教育委員会（1990）
128	久慈市	桑館跡	城館 集	縄・古・中	縄文土器（後期）、土師器、陶器、塚、単郭	平成2年度埋文第171集 久慈市教育委員会（1990）
129	久慈市	麦生XⅡ	散	縄	縄文土器（後期）	久慈市教育委員会（1990）
130	久慈市	麦生XⅢ	散	縄	縄文土器（後期）	久慈市教育委員会（1990）
131	久慈市	平崎Ⅵ	散	縄	縄文土器（前・中・後期）、弥生土器	久慈市教育委員会（1990）
132	久慈市	麦生XI	散	縄	縄文土器、弥生土器	久慈市教育委員会（1990）
133	久慈市	平崎Ⅲ	散	縄	縄文土器（後期）	久慈市教育委員会（1990）
134	久慈市	平崎Ⅰ	散	縄	縄文土器（前・後期）	久慈市教育委員会（1990）
135	久慈市	平崎Ⅳ	散	縄	縄文土器（前・後期）、剥片	久慈市教育委員会（1990）
136	久慈市	麦生XⅣ	散	縄	縄文土器（中期末～後期）	久慈市教育委員会（1990）
137	久慈市	麦生XX	散	縄	縄文土器（後期）	久慈市教育委員会（1990）
138	久慈市	麦生Ⅶ	散	縄	縄文土器（後期）	久慈市教育委員会（1990）
139	久慈市	麦生Ⅰ	散	縄	縄文土器（前・後期）	平成元年度試掘調査竪穴住居跡 久慈市教育委員会（1990）
140	久慈市	麦生Ⅴ	散	縄	縄文土器（後期）	久慈市教育委員会（1990）
141	久慈市	麦生XV	散	縄	縄文土器（後期）	久慈市教育委員会（1990）
142	久慈市	麦生Ⅲ	散	縄	縄文土器（前・中・後期）	平成8年度埋文第274集 久慈市教育委員会（1990）
143	久慈市	麦生Ⅸ	散	縄	縄文土器（後期）、弥生土器	平成8年度埋文第274集 久慈市教育委員会（1990）
144	久慈市	麦生XVI	散	縄	縄文土器（前・後期）、弥生土器、鉄滓	久慈市教育委員会（1990）
145	久慈市	麦生Ⅳ	散	縄	縄文土器（前・後期）	久慈市教育委員会（1990）
146	久慈市	麦生XⅦ	散	縄	縄文土器（後期）、鉄滓	久慈市教育委員会（1990）

番号	市町村	遺跡名	種別	時代	遺構・遺物	備考
147	久慈市	麦生X	散	縄	縄文土器（前・後期）	自然崩壊進行中 久慈市教育委員会（1990）
148	久慈市	麦生VI	散	縄	縄文土器（前・後期）	久慈市教育委員会（1990）
149	久慈市	新城館 （大崎館）	城	縄・中	縄文土器（前・中・後期）、空堀、郭、帯郭	久慈市教育委員会（1990）
150	久慈市	平崎南IV（V？）	散	縄・弥	縄文土器・弥生土器	久慈市教育委員会（1990）
151	久慈市	屋場沢	散	縄・古	縄文土器（後期）、土師器	久慈市教育委員会（1990）
152	久慈市	金比羅	集	縄	縄文土器（早・前・後期）	久慈市教育委員会（1990）

【凡例】

1．種別　集：集落跡、散：散布地、城：城館跡、貝：貝塚、石：石碑

2．時代　縄：縄文時代、弥：弥生時代、奈：奈良時代、平：平安時代、中：中世、近：近代

3．備考　(1)　久慈市教育委員会（1990）

『久慈市内遺跡詳細分布調査報告書Ⅰ』久慈市埋蔵文化財調査報告書第12集

(2)　久慈市教育委員会（1991）

『久慈市内遺跡詳細分布調査報告書Ⅱ』久慈市埋蔵文化財調査報告書第13集

(3)　久慈市教育委員会（1992）

『久慈市内遺跡詳細分布調査報告書Ⅲ』久慈市埋蔵文化財調査報告書第14集

(4)　久慈市教育委員会（1993）

『久慈市内遺跡詳細分布調査報告書Ⅳ』久慈市埋蔵文化財調査報告書第15集

(5)　久慈市教育委員会（1994）

『久慈市内遺跡詳細分布調査報告書Ⅴ』久慈市埋蔵文化財調査報告書第17集

(6)　久慈市教育委員会（1995）

『久慈市内遺跡詳細分布調査報告書Ⅵ』久慈市埋蔵文化財調査報告書第19集

(7)　久慈市教育委員会（1996）

『久慈市内遺跡詳細分布調査報告書Ⅶ』久慈市埋蔵文化財調査報告書第20集

他、各報告書については、「引用・参考文献」を参照されたい。

5．遺跡の基本層序と状況

層序の確認は先の試掘調査の際に確認された第１トレンチ北東壁６Ｇグリッド部分（④）と第２トレンチ南壁12Ｋグリッド部分（①）の確認から行い、各地点との比較をしながら行った。層序の記録はこの他に13Ｌグリッド東壁（②）、19Ｍグリッド北壁（③）の２地点でも行った。層序の名称は上位からⅠ・Ⅱ・Ⅲ…のローマ数字で表わし、細別層のある場合はａ・ｂ・ｃ…のアルファベットの小文字を付して表わしている（第８・９図）。各層の特徴は以下のとおりである。

Ⅰ層　黒褐色土（10YR2/2.5）　層厚5.0～25.0cm。現表土。耕作等により攪乱を受けている。近・現代の陶磁器片や縄文土器・弥生土器の細片が出土する。調査区の南側では非常に薄い。

Ⅱ層　黒色土（10YR2/1）　層厚０～40.0cm。粘性・しまり弱。植物根の混入が見られ、上位ほど顕著である。

Ⅲａ層　暗褐色土（10YR3/3）　層厚０～10.0cm。粘性弱、しまり強。十和田中掫降下軽石（いわゆる中掫浮石・アワズナ、以下To-Cuと表記）を含む層である。調査区の中央部で確認される。

Ⅲｂ層　黒褐色土（10YR3/2）　層厚０～30.0cm。粘性弱、しまり強。13L・14Lグリッド周辺のみで確認される。

Ⅲｃ層　暗褐色土（10YR3/3）　層厚０～30.0cm。粘性やや強、しまり強。

Ⅳ層　黒褐色土（10YR2/2）　層厚０～30.0cm。粘性弱、しまり強。十和田南部降下軽石（いわゆる南部浮石・ゴロタ、以下To-Nbと表記）を含む層。

Ⅴ層　明褐色軽石（7.5YR5/8）　層厚０～10.0cm。To-Nb層。

Ⅵ層　暗褐色土（10YR3/4）　層厚０～15cm。粘性やや強、しまり強。To-Nbを含む層。

Ⅶ層　黄褐色ローム（10YR5/6）　層厚不明。十和田八戸テフラ（以下To-Hと表記）が土壌化した層。

各地点で共通して確認されるのはⅠ層のみで、Ⅱ層以下は地点によって堆積状況に相違が見られた。

調査区の南側では各層とも層厚が薄い。特に18L～21ＮグリッドではⅠ層を除去するとすぐにⅣ層が確認される状況であった。このⅣ層をはじめ、Ⅴ層、Ⅵ層の各層で縄文時代早期～後期の遺構が検出されている。大半の遺構はⅣ層で検出されているが、上記のような堆積状況であるため、本来Ⅱ層からⅢｃ層の各層から掘り込まれている遺構が含まれている可能性がある。

中央部の堆積状況は次のとおりである。７Ｉ～９Ｊグリッド周辺ではⅡ層を除去するとⅦ層が確認され、10Ｋ・11Ｋグリッド周辺ではⅡ層を除去するとⅣ層が確認された。それ以外の部分ではⅢａ層、Ⅲｂ層の有無が見られるものの各層の堆積状況が比較的良好であった。遺構の検出はⅡ層からⅣ層までで行われたが、大半の遺構はⅡ層とⅢａ層で検出された。

北側の堆積状況は次のとおりである。３Ｂ～４Ｅグリッドではほとんどの地点で表土を除去すると礫層が確認され、遺構は検出されなかった。若干ではあるがⅡ層が見られる部分もあるが層厚は非常に薄い。７Ｉ～８ＫグリッドではⅠ層を除去するとⅦ層が確認される状況であった。それ以外の地点ではⅡ層の堆積状況は非常に良好であった。この地点で検出した遺構及び出土した遺物の大半はこのⅡ層で確認された。ただし、Ⅱ層から出土した遺物の時期幅は広いので、Ⅱ層は細別が可能であったかもしれない。

この他に、６Ｇ～15Ｋグリッドにかけてはto－Cu層（Ⅲａ層部分を含む）が確認された（第８図スクリーントーン部分）。特に６Ｇ～７Ｈグリッドの部分と13Ｊ・13Ｋグリッド南側から14Ｊ・14Ｋグリッド北側、15Ｋグリッド北側の部分では上記の基本層序と異なる堆積状況を呈していたため、６Ｇグリッドで層序の再

確認を行うとともに、7Gグリッド（⑤）と13J・13Kグリッド（⑥）の2地点でも層序の再確認を行った。その結果、Ⅱ層までは基本層序と同様の堆積状況であったが、Ⅲ層以下に相違が見られた。基本層序との混同を避けるためⅢ層以下の名称はⅢ①層、Ⅲ②層…と表わした。各層の特徴は以下のとおりである。

Ⅲ①層　暗褐色土（10YR3/3）　層厚は20.0cm前後。粘性弱、しまり強。

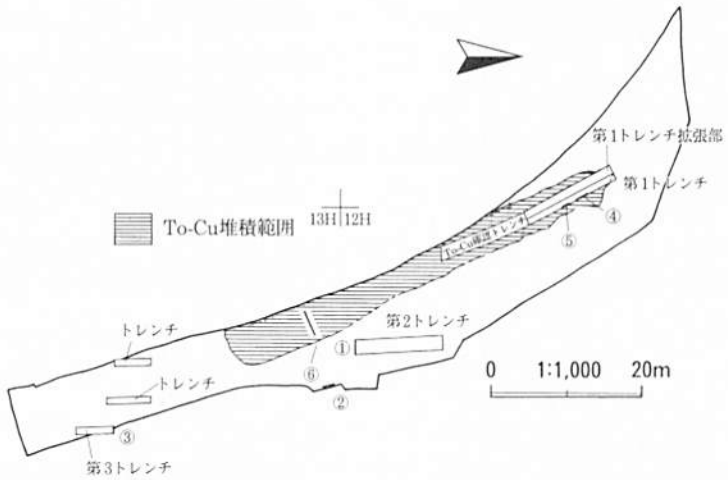
Ⅲ②層　明黄褐色軽石（10YR6/6）　層厚35.0～40.0cm。To-Cuの水成堆積層。オリーブ褐色軽石（2.5YR4/6）、褐色軽石（10YR4/4）と互層になっている。非常にかたくしまっている。

Ⅲ③層　明黄褐色軽石（2.5YR7/6）　層厚5.0cm前後。

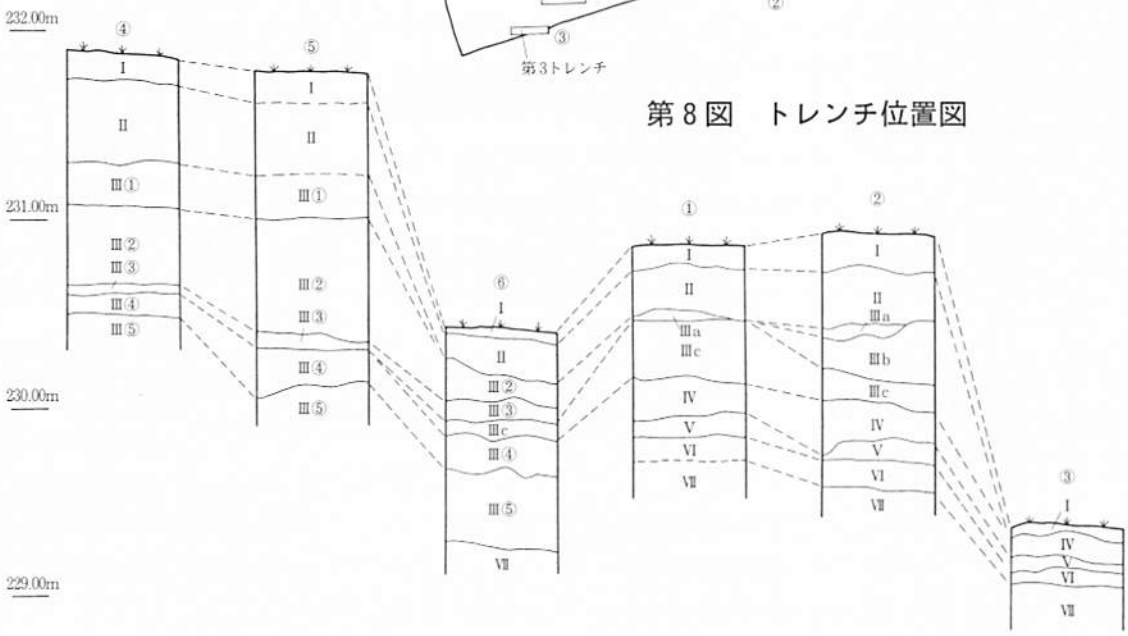
Ⅲ④層　黒褐色土（10YR2/3）　層厚15.0cm前後。径1.0～3.0cmの亜角礫多量混入。

Ⅲ⑤層　礫層　層厚不明。

13J・13Kグリッドの堆積状況からⅢ①層・Ⅲ②層・Ⅲ③層はⅡ層とⅢc層の間に位置し、Ⅲ④層・Ⅲ⑤層はⅢc層とⅦ層の間に位置することが確認された。Ⅲ④層以下では遺構・遺物ともに確認されなかった。



第8図　トレンチ位置図



第9図　基本土層柱状図

Ⅲ．調査と整理の方法

1．野外調査

(1) グリッドの設定

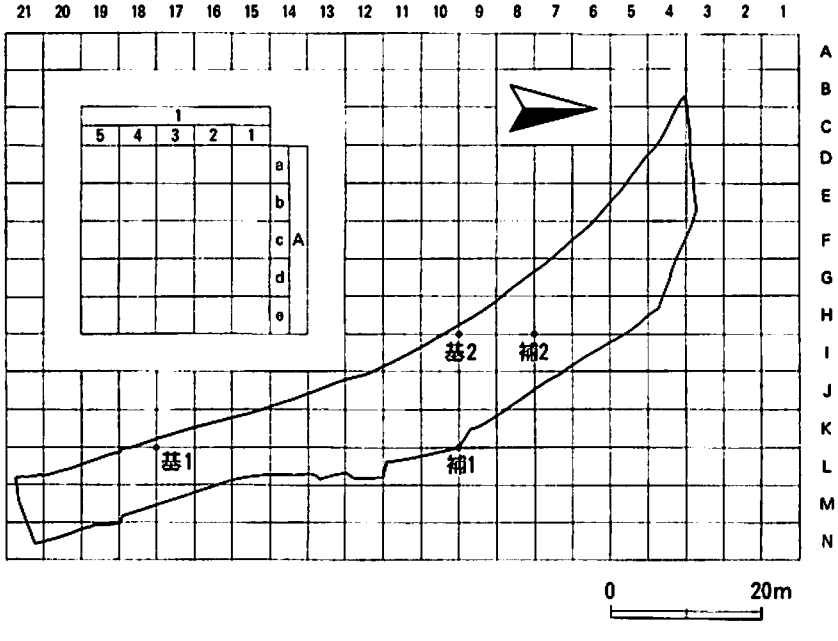
調査区がほぼ南北方向に延びているため、平面直角座標第Ｘ系に合わせた基準点を用いて、区割りを行った。グリッドの配置に際して３級基準点の２点を打設し、それを基準として第Ｘ系の座標に重なるように主要な点を定めた。基準点１・２の成果値は以下のとおりである。

基準点１　Ｘ＝27,210.000、Ｙ＝69,840.000、Ｈ＝230.000

基準点２　Ｘ＝27,250.000、Ｙ＝69,825.000、Ｈ＝231.160

調査区内には上記の３級基準点２点のほか、補点１・２を打設しているが、その成果値は省略する。

その後、遺構検出・遺物取り上げの基本とするために、グリッドの設定を行った。まず基点１と補点１、基点２と補点２を結ぶ線を基準線とし、それを用いてグリッドの基点を調査区外側北西に置き、５×５ｍを１区画とした大グリッドを設定した。基点から南北方向へは算用数字の１から21まで、東西方向へはアルファベットのＡからＮまでを付して、その組み合わせによってグリッド名を呼称することとした（例…１Ａ・２Ａ）。さらに大グリッド内に１×１ｍの小グリッドを設定し、南北方向へは算用数字の１から５まで、東西方向へはアルファベットのａからｅまでを付して、その組み合わせによって小グリッド名を呼称することとした（例…１Ａ１ａ・１Ａ２ａ）。



第10図　グリッド配置図

(2) 遺構の呼称

野外調査で検出した遺構については、それが検出された順番に呼称を付した（例…1号住居跡、2号住居跡）。住居跡と住居状遺構は遺物の混乱を避けるため、そのまま使用しているが、他の遺構は室内整理の段階で遺構ごとに再検討し、番号の付け直しや遺構名の変更を行っている。

(3) 粗掘・遺構検出

調査はまず雑物を撤去し、調査範囲を確認・再設定することから始めた。次に文化課（現生涯学習文化課）が実施した試掘トレンチの位置を確認、その2本を再掘・クリーニングし、調査区の基本層序・検出面の把握を行ったところ、2本のトレンチの層序に相違が見られたため、調査区北側と南側に新たに数本のトレンチを設定・試掘し、同様に土層の確認を行った。この段階から調査区北側において、表土直下より遺物の出土が多くなるとともに、部分的に遺構らしいプランの検出も見られるようになったことと試掘結果から、調査区全体で表土の厚さがあまり厚くないため、重機を使用すると検出面及び遺構・遺物を傷つける可能性が大きいことが分かった。そのため、当初は人力によって調査区全体の表土を剥ぎ、遺構の有無・遺物の出土などに注意しつつ、最初の検出面（Ⅱ層）の直上まで掘り下げを行った。なお、調査区中央近くに設定したトレンチにおいては、遺構・遺物の検出が見られなかったため、基本層序確認のためⅤ層（南部浮石）まで掘り下げを行った。その後、重機を稼動し残土処理を行うとともに、人力による検出を続けた。

遺構の検出は、まず調査区を北側・中央・南側の3つに分け、先述した1辺5mのグリッドを単位として層序に基づいて掘り下げ、最終的にはⅡ（黒色土）～Ⅶ層（To-H：地山）上面の6面で行った。調査区中央～北側では、場所によってⅢc層（暗褐色土）上位にTo-Cuの堆積が見られる箇所があるが、その下には礫層が広がっており遺構・遺物は確認されなかった。調査区南側ではⅠ層の下からすぐにⅣ層が、南端ではすぐにⅦ層が確認された。

(4) 精査・実測・遺物の取り上げ

検出された遺構は竪穴住居跡は4分法、土坑・柱穴類は2分法を原則として精査を行ったが、検出状況に応じて適宜方法を変えている。遺構の平面実測は簡易遣り方測量を中心とした。実測図の縮尺は、平面図・断面図とも1/20を原則としたが、状況によって縮尺率を変更した場合、それを実測図に記録した。遺構のレベルは1m間隔を原則としながら、必要に応じた場所で計測している。

遺構内出土遺物については、必要に応じて出土状況写真を撮影し、出土した地点を光波トランシットで記録した後レベルを測定した。その後、出土した地点やグリッド名・層位などを明記した袋に、個別に取り上げた。遺物の出土が部分的に集中した箇所においては、その作業を繰り返し行って遺物を取り上げた。遺構外出土遺物については、必要に応じて出土状況写真の撮影を行った後、出土したグリッド名・層位を記録し、小グリッドごとに一括して取り上げた。なお袋に表記する際、基本層序の層位はローマ数字、グリッドナンバーや細分した検出面の層位は算用数字で表した。

(5) 写真撮影

野外での写真撮影は、35㎜判カメラ2台（モノクローム・カラーリバーサルフィルム）を主記録に、6×7㎝判カメラ（モノクローム）を補助として使用した。また、メモ用にポラロイドカメラも使用している。

撮影時には状況を記した「撮影カード」を事前に写し、その後対象遺構・遺物を撮影することにより、整理時の繁雑化を避けた。撮影は、遺構の平面・断面と遺物の出土状況を中心に行った。調査終了前にはセスナ機によって、調査区全体の空中写真撮影を行った。

2．室内整理

(1) 作業内容

遺物の処理は、野外調査と並行して雨天時などに水洗、一部は接合・注記まで行っていたため、室内ではまず残っていた遺物の注記・接合・復原を行い、次に仕分け・登録を済ませた後写真撮影を行い、その後実測・拓本作成を並行して進めた。遺物実測図は点検の後にトレースを行い、図版・写真図版の作成を行った。

野外調査で作成した図面類は、点検・修正と第2原図の作成を並行して進めた。その後トレース・図版作成の順に進めた。

野外調査で撮影したモノクロームフィルムは、遺構・遺物ともネガアルバムにベタ焼き写真と共に整理し、カラースライドは、スライドファイルに撮影順に収納した。

(2) 遺構

遺構配置図は、野外調査時に作成した縮尺1/20の各遺構平面図を基に1/200の縮尺図を作成し、仕上がり1/400で掲載した。各遺構図版は以下の縮尺を原則としているが、表現する図版によって若干の差異があるため、図版にはそれぞれスケール・縮尺率を付した。竪穴住居跡・住居状遺構の平面・断面図…1/50、炉等細部の平面・断面図…1/25、土坑の平面・断面図…1/50、焼土遺構の平面・断面図…1/25、埋設土器遺構の平面・断面図…1/20、柱穴状土坑の分布図…1/200、遺物包含層の平面図…1/150・断面図…1/60。また、方位は平面直角座標第X系の北方向を標している。

(3) 遺物

遺物の分類・掲載方法については、第1に遺構内・遺構外出土によって選別した。第2に縄文土器・弥生土器・石器と種類別に大別し、第3に編年・器種・部位別、最後にそれに見られる特徴によって分類した。土器の接合・復原については、最低限度の掲載遺物のみにとどめており、掲載遺物以外にも復原可能な土器は残されているものと思われる。遺構内の遺物は極力掲載するように努めたが、原寸でもつぶれてしまうような破片は文章表現にとどめた。遺構外に関しては一定量出土量があるものは掲載に堪えうる遺物を選択して掲載している。全体の様子が窺える資料はできるだけ実測図を作成したが、時間の都合上拓本で済ましているものも多い。破片資料は基本的に拓本で掲載した。縮尺率は、縄文時代早期・弥生時代後期の土器については1/2、縄文時代の大形の土器（特に深鉢等）は1/4、それ以外の土器は基本的に1/3で掲載している。ただし、小破片でも掲載しているためこの基準に当てはまらない土器もある。剥片石器・小形の礫は1/2、礫石器・石製品は1/3、大形の礫石器は1/4を原則として掲載している。また、図版にはそれぞれスケールを付した。土製品については、いずれも1/2を原則として掲載している。土製品・石製品は全出土品を掲載した。掲載の順序は遺構内→遺物包含層→遺構外の順で、それぞれ出土層位毎に行っているが、紙面の都合上、一部前後してしまっているものもある。

遺物の出土量を記述する際に使用しているコンテナ（箱）の大きさは大コンテナが40.0×30.0×30.0cm、小コンテナが40.0×30.0×10.0cmである。

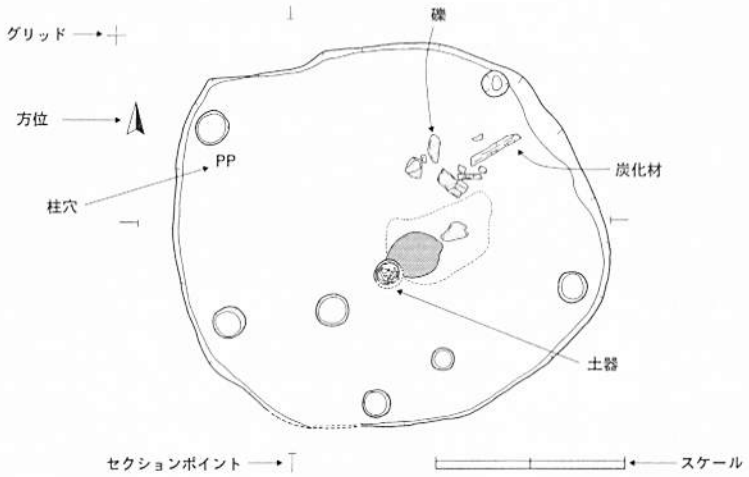
(4) 写真図版

野外調査時に撮影した遺構などの写真と室内整理で撮影した遺物写真で作成した。写真図版の個々の遺物番号は、図版の番号と一致している。遺物写真の縮尺率は、基本的には実測図と同じ縮尺になるように掲載している。ただし、この基準に当てはまらない遺物もあるので、図版に付した縮尺率を参考にしていただきたい。遺物写真の角度は実測図に準じているが、必ずしも正確・同一ではない。

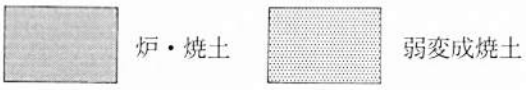
(5) 遺構・遺物図版凡例

本報告書の遺構・遺物図版の表示、及び使用したスクリーントーンの用例は、下記のとおりである。

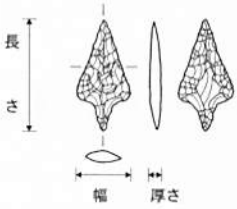
〈遺　構〉



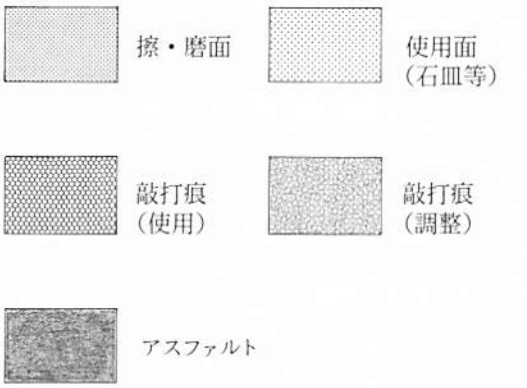
〈遺構図版　スクリーントーン用例〉

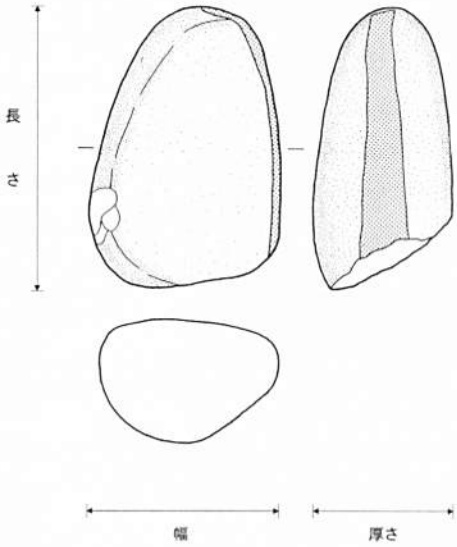


〈遺　物〉

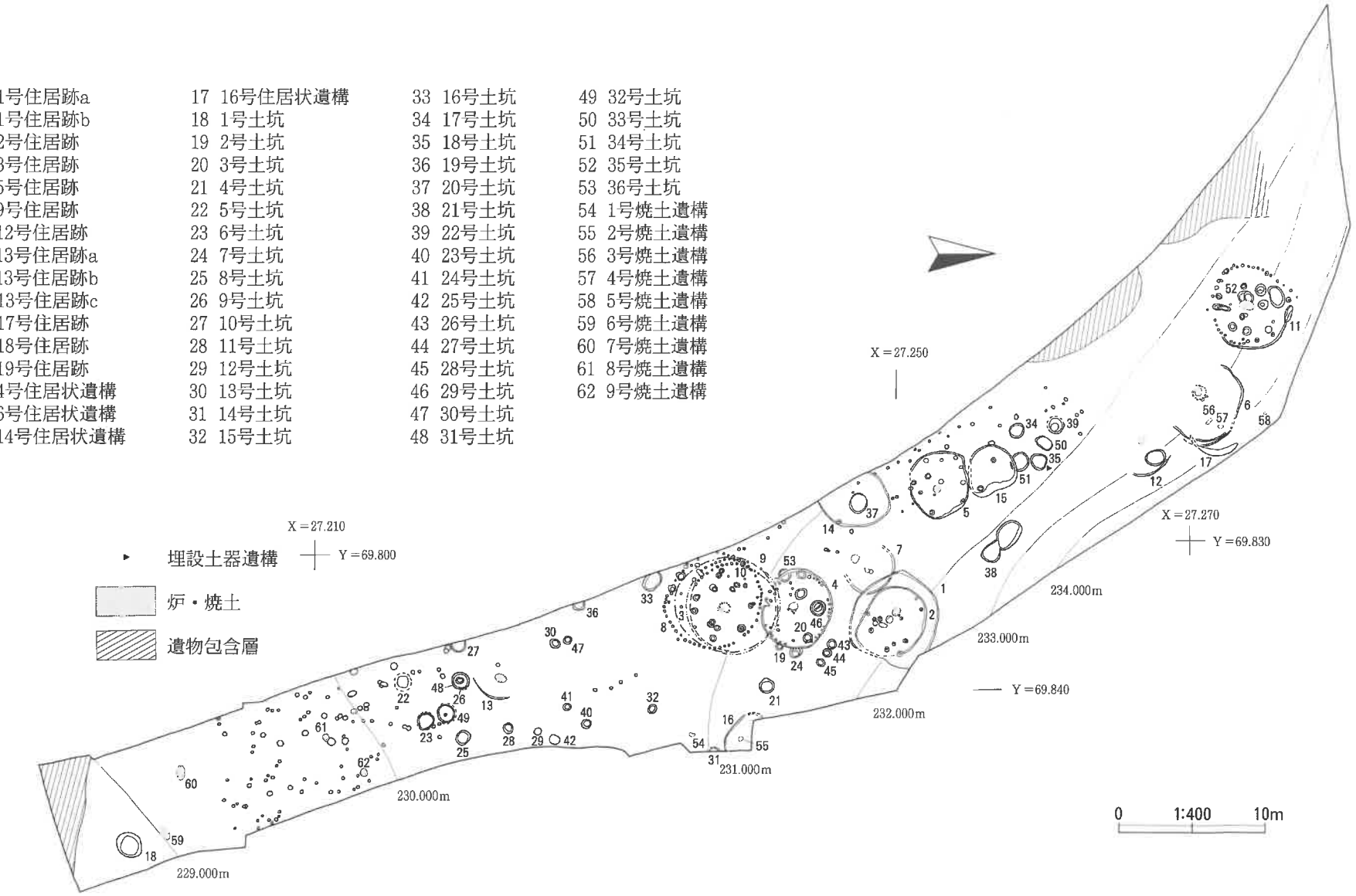


〈遺物図版　スクリーントーン用例〉





1　1号住居跡a
2　1号住居跡b
3　2号住居跡
4　3号住居跡
5　5号住居跡
6　9号住居跡
7　12号住居跡
8　13号住居跡a
9　13号住居跡b
10　13号住居跡c
11　17号住居跡
12　18号住居跡
13　19号住居跡
14　4号住居状遺構
15　6号住居状遺構
16　14号住居状遺構
17　16号住居状遺構
18　1号土坑
19　2号土坑
20　3号土坑
21　4号土坑
22　5号土坑
23　6号土坑
24　7号土坑
25　8号土坑
26　9号土坑
27　10号土坑
28　11号土坑
29　12号土坑
30　13号土坑
31　14号土坑
32　15号土坑
33　16号土坑
34　17号土坑
35　18号土坑
36　19号土坑
37　20号土坑
38　21号土坑
39　22号土坑
40　23号土坑
41　24号土坑
42　25号土坑
43　26号土坑
44　27号土坑
45　28号土坑
46　29号土坑
47　30号土坑
48　31号土坑
49　32号土坑
50　33号土坑
51　34号土坑
52　35号土坑
53　36号土坑
54　1号焼土遺構
55　2号焼土遺構
56　3号焼土遺構
57　4号焼土遺構
58　5号焼土遺構
59　6号焼土遺構
60　7号焼土遺構
61　8号焼土遺構
62　9号焼土遺構



第11図　遺構配置図

Ⅳ．検出された遺構

当遺跡で検出された遺構は竪穴住居跡13棟、住居状遺構４棟、土坑36基、焼土遺構９基、埋設土器遺構１基、柱穴状土坑158基、遺物包含層２箇所である。以下では遺構毎に概要を述べていくが、出土遺物については時間と紙面の都合上、個々の記載を割愛しているので、実測図と観察表を参照して頂きたい。

１．竪穴住居跡・住居状遺構

竪穴住居跡（以下本文では住居跡、遺物観察表では○号住と表記）として13棟、住居状遺構（遺物観察表では○号住居状と表記）として４棟登録している。（検出状況からでは住居跡か住居状遺構かの判別ができなかったため検出した順の通し番号で１号住から19号住まで登録している。これらのうち４号住・６号住・14号住・16号住は炉・柱穴が伴わないもしくは柱穴が伴っても不規則な配置になるなど他の住居跡と比較して居住施設として使用された痕跡が弱いことから住居状遺構とした。また、７号住・８号住・10号住・11号住・15号住は遺構にならず登録抹消したため欠番となっているが、出土遺物の混乱を避けるためにそのままにしている。）

住居跡は調査区の北側に３棟、中央部に９棟、南側に１棟検出された。時期は縄文時代前期中葉以前が１棟、後期前葉３棟、後期前葉～中葉２棟、後期中葉４棟、後期中葉～後葉１棟、後期後葉１棟、弥生時代後期１棟である。

住居状遺構は調査区の北側に１棟、中央部に３棟検出された。時期は縄文時代前期以前１棟、後期３棟である。

１号住居跡

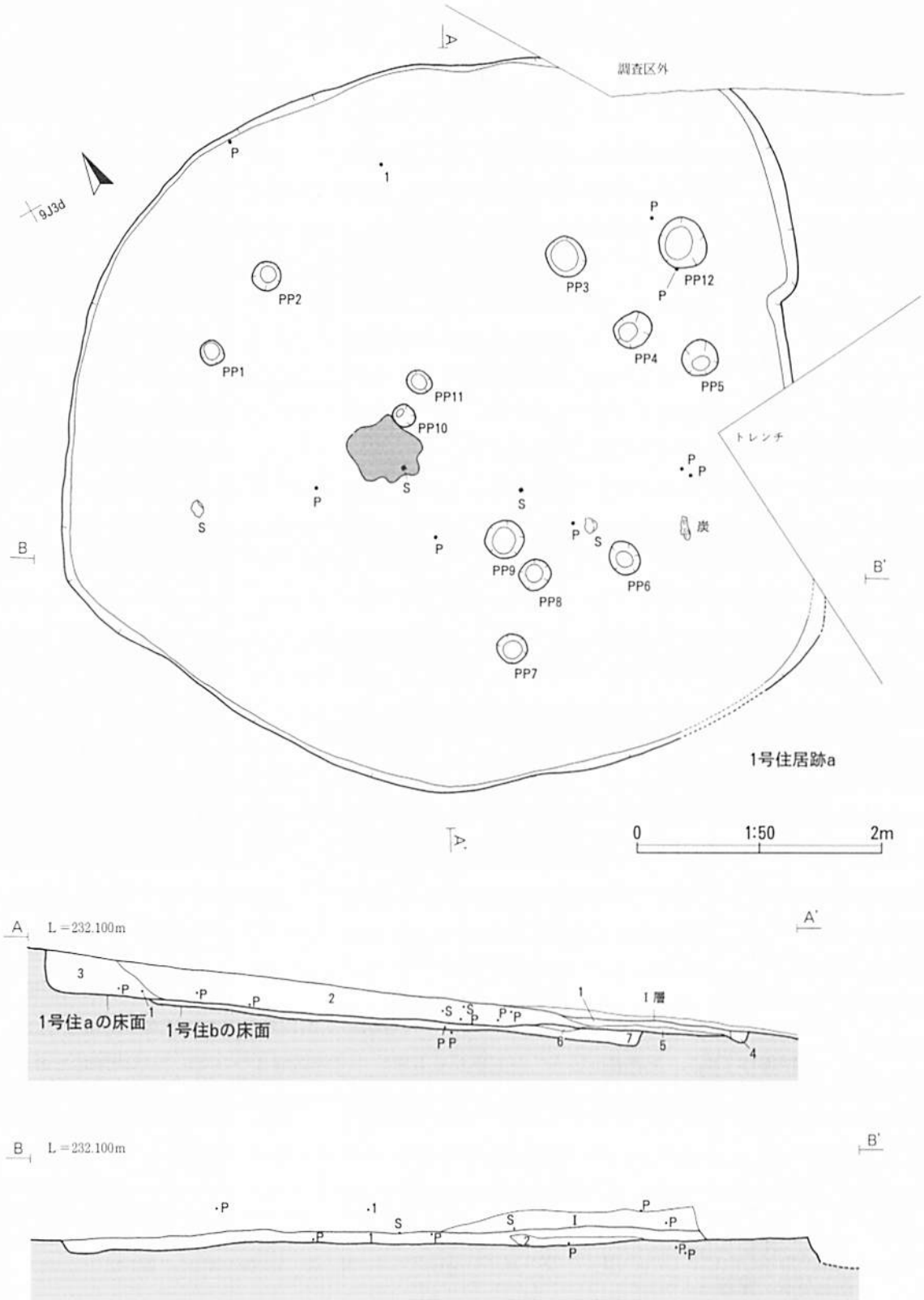
遺構（第12・13図、写真図版４）

調査区中央東側境の９Ｊ～10Ｋグリッドに位置する。９Ｊ・９Ｋグリッドでは北東方向から南西方向に向かって傾斜しており、表土除去後Ⅱ層をわずかに挟んでⅦ層が確認された。この部分で半円状の黒色土の広がりとして検出された。ベルトを設定し、掘り下げたところ地床炉が２基確認されるとともに、９Ｋグリッド部分で内側に一段低い床面が確認されたことから２棟の住居跡が重複しているものと捉え、外側の新しい住居跡をａ、内側の古い住居跡をｂとした。南西側で、１号住居跡ａが12号住居跡と重複しており（１号住居跡ｂとの新旧関係は不明）、当遺構が切っている事から（新）１号住居跡ａ→（旧）12号住居跡である。

１号住居跡ａ

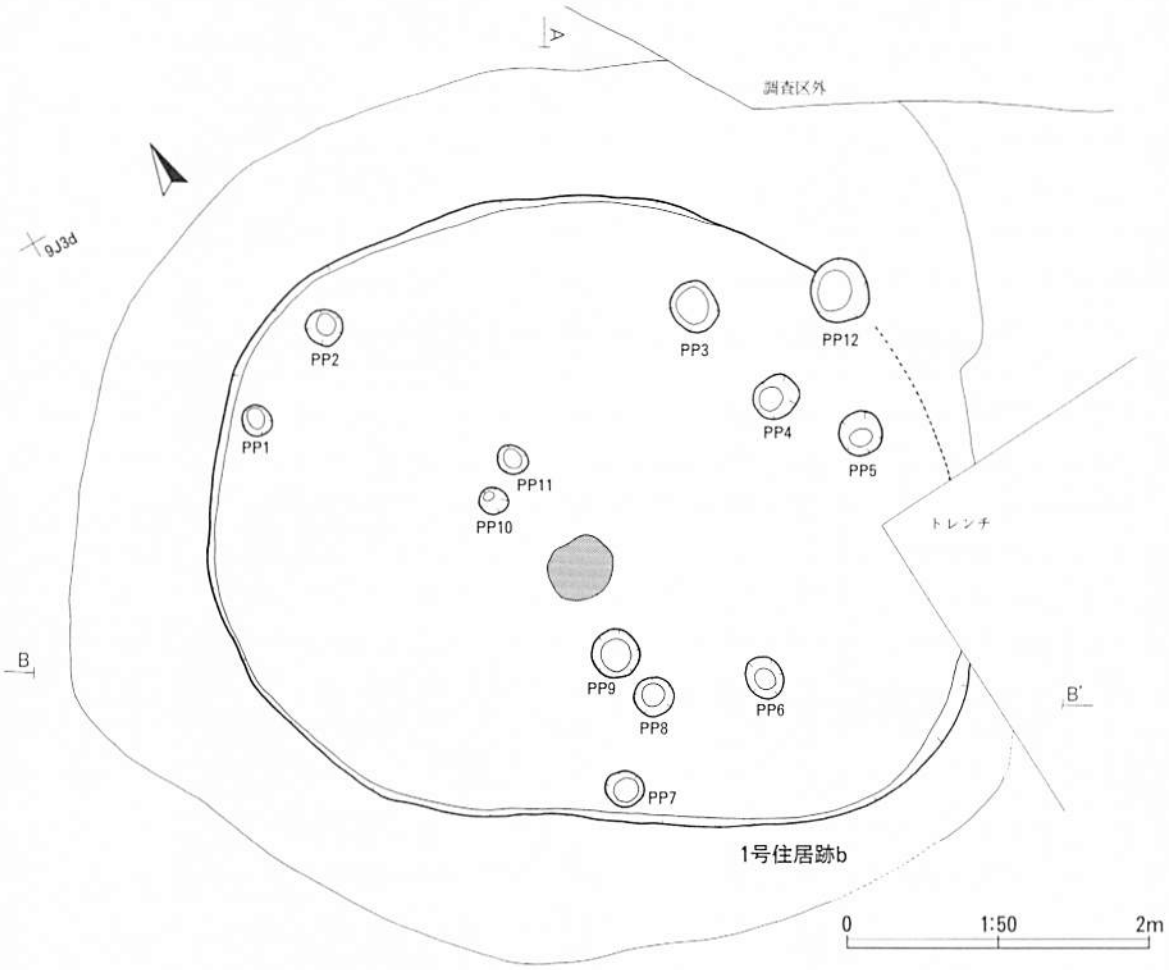
規模は北西―南東方向約6.3m、北東―南西方向約5.9mである。**平面形**は楕円形状を呈し、北東隅が僅かに張り出している。**壁**は試掘時に削ってしまった南東隅以外が確認された。北側の壁は残存状態が他の壁と比べると、比較的良好で最大32cmの高さを持ち、床面からほぼ垂直に立ち上がる。**床面**はⅢ～Ⅳ層中で北東から南西に向かってやや傾斜している。南西側の壁際は明瞭ではないが床面より幾分低くなっており、周溝が存

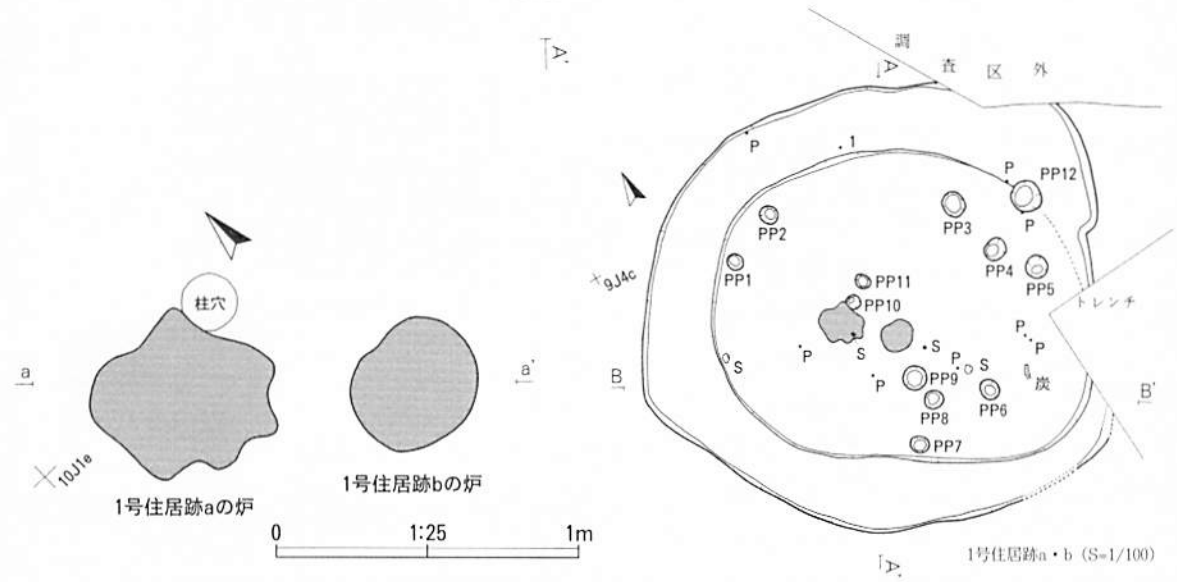
No.	PP１	PP２	PP３	PP４	PP５	PP６
径	20×18	24×23	33×29	30×26	29×29	28×23
深さ	4	29	10	29	14	26
No.	PP７	PP８	PP９	PP10	PP11	PP12
径	26×23	26×23	31×31	18×17	21×18	41×40
深さ	11	18	16	25	9	14

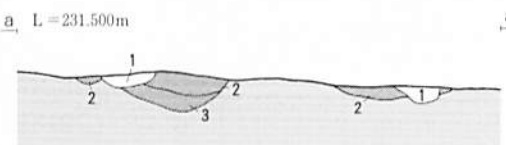


1号住居跡
1 10YR2/1黒　シルト　粘性弱　しまり弱　炭化物粒多量混入
2 10YR2/1黒　シルト　粘性弱　しまり弱　黄褐色パミス部分的に混入、径10～20㎜の亜角礫、木根少量混入
3 10YR2/2黒褐　シルト　粘性弱　しまり弱　黄橙色シルト小粒微量、径30～50㎜の亜角礫、木根混入
4 10YR2/2黒褐　シルト　粘性弱　しまり弱　暗褐色シルト、径10～30㎜の亜角礫少量混入
5 10YR2/2黒褐　シルト　粘性弱　しまり弱　暗褐色シルトとの混合土、To-Nb極微量混入
6 10YR2/2黒褐　シルト　粘性弱　しまり強　To-Nb少量混入
7 10YR2/3黒褐　シルト　粘性中　しまり中　黄色（2.5Y7/8）シルトとの混合土、To-Nb少量混入

第12図　1号住居跡①







1号住居跡a 炉

1 7.5YR4/4褐 シルト 粘性弱 しまり弱 炭化物粒少量混入 黒色土でよごれている
2 7.5YR5/8明褐 シルト 粘性弱 しまり強 焼土、最上面に炭化物粒混入
3 7.5YR4/4褐 シルト 粘性弱 しまり強 焼土

1号住居跡b 炉

1 7.5YR4/6褐 シルト 粘性弱 しまり中 炭化物粒少量混入 黒色土でよごれている
2 7.5YR5/8明褐 シルト 粘性弱 しまり強 焼土、最上面には炭化物粒混入

第13図　1号住居跡②

在した可能性も考えられる。貼り床の痕跡は確認されなかった。**覆土**は５層に分層された。主に黒色土で構成されており、北西壁際と南側の床面近くでは黒褐色土の堆積が確認された。

柱穴は炉の検出面での把握・確認はできなかったが、１号住居跡に伴うものとして12基を登録した。完掘時の位置から推定して、PP２－PP12－PP７等の三角形を構成する主柱穴の配置が考えられる。

住居の中央やや北西寄りの位置で、北西－南東方向約60cm、北東－南西方向約50cmの不整円状の**地床炉**を検出した。焼土の厚さは最大で13cmである。掘り込みは確認されなかった。

１号住居跡ｂ

確認された**規模**は北西－南東方向約5.1m、北東－南西方向約4.0mであり、**平面形**は楕円形状を呈す。**床面**は一部凹凸が見られ、１号住居跡ａと同様やや南西側に傾斜している。貼り床の痕跡は確認されなかった。**覆土**は２層に分層され、黒褐色土を主体とする。全体的にＴｏ－Ｎｂを少量含む。**壁**は僅かではあるが、南東側を除き確認され、床面から直線的に立ち上がる。

柱穴は完掘時の位置から推定してPP１－PP３－PP８の三角形を構成する主柱穴の配置が考えられる。

住居の中央やや南西寄りの位置で、東西方向約44cm、南北方向約37cmの楕円形を呈する**地床炉**を検出した。焼土の厚さは最大５cmである。掘り込みは確認されなかった。なお、１号住居跡ａの炉とのレベル差は５cm程である。

遺物（第40図１～20、写真図版32－１～20）

遺物の出土量は土器が小コンテナで約１/２箱、石器は掲載したもの以外に剥片が１点出土している。遺物のほとんどが１号住居跡ａの覆土中から出土しており、床面及び床面直上から出土した遺物はなかった。１号住居跡ｂの覆土中からも土器片は出土しているが、小破片であるため割愛している。出土遺物のうち土器は全て破片資料であった。

１～15の土器、16～20の石器を掲載した。

時期　覆土中から出土した遺物しかないため断定はできないが、１号住居跡ａは縄文時代後期中葉から後葉、１号住居跡ｂは縄文時代後期中葉に属すると思われる。

２号住居跡

遺構（第14・15図、写真図版５）

調査区中央の11Ｊ～12Ｋグリッドに位置する。表土除去後、Ⅱ層上面で環状に配されている10～40cm前後の礫が検出された。さらに精査を進めると環状に配された礫の内側から石囲炉と当遺構に伴うと思われる柱穴が検出されたことから住居跡と認定した。ただし、住居跡と認定する前に床面に相当する部分を掘り下げてしまっていたため、一部の床面は確認できなかった。また、壁に関しても床面と同様の理由から確認することはできなかった。11Ｊ・11Ｋグリッド部分で３号住居跡と重複しており、当遺構が切っている事から（新）２号住居跡→（旧）３号住居跡である。

規模は環状に配された礫の部分から推定すると径６～７m前後、**平面形**は円形状もしくは楕円形状を呈すと思われる。**壁**は確認できなかった。**床面**はⅡ層である。住居跡としての認識が遅れ、床面を若干掘り過ぎてしまったため、全体の様相は不明であるが、確認された部分は概ね平坦であった。炉が検出された時点で設定したベルトから判断すると**覆土**は３層に分層され、黒色土主体で構成される。

No.	PP１	PP２	PP３	PP４
径	37×34	42×42	44×38	32×29
深さ	8	8	11	6

環状に配された礫の内側で４基の**柱穴**を検出した。どの柱穴も浅いが、配置からPP１・PP２・PP４が主柱穴となる可能性がある。

住居の中央と思われる部分で**石囲炉**を検出した（ただし、床面同様、炉も幾分掘り過ぎてしまったため礫が浮いた状態になってしまっている）。炉は10cm前後の礫をやや楕円形に配して構築されている。焼土の発達は非常に悪く、焼土の厚さは断面図にすると表現できないほど薄い。規模は南西－北東方向85cm、北西－南東方向70cm前後である。個々の礫の掘り方は確認されなかった。

この他に径６～７m前後の円形もしくは楕円形に配される礫が確認された。礫はすべて使用痕跡の見られない亜角礫であった。用途等、詳細は不明である。

遺物（第41図21～第42図39、写真図版32－21～写真図版33－39）

土器は小コンテナで約１箱分出土しており、全て破片資料である。石器は掲載した４点の他に剥片が１点出土している。炉検出以前から多くの遺物が出土しているが、これらは住居跡登録以前の遺物であるため観察表中では出土地点の欄に括弧書きでグリッドと出土層を記載している。

21～35の土器、36～39の石器を掲載した。

時期　床面近くから出土した遺物が少ないため断定はできないが、弥生時代後期に属すると思われる。

３号住居跡

遺構（第16～18図、写真図版６・７）

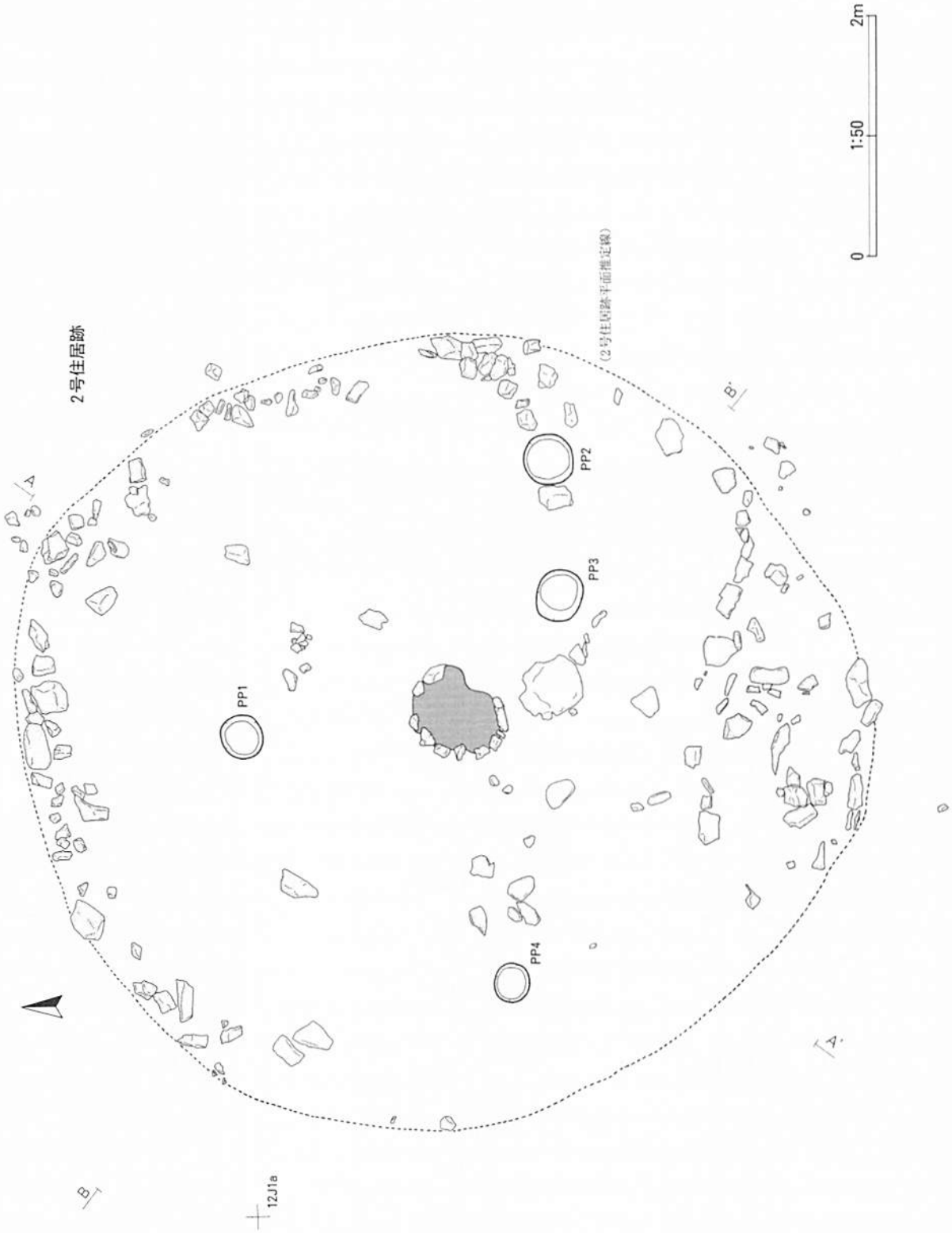
調査区中央の11Ｊ・11Ｋグリッドに位置する。Ⅱ層中で楕円状に遺物の集中が見られたことから、遺構が存在すると想定してベルトを設定、掘り下げを行った。途中炭化物粒が多量に確認された面（２層）、硬く締まっている面（５層）があり、住居の床面に相当すると考えて断面及び平面の記録を行った。この２面では炉が確認されず、遺物の出土がさらに下層にも続くことから掘り下げを進めたところ、遺物の集中を確認した面から約35cm掘り下げたところで石囲炉が検出されたため、住居跡と認定した。２号住居跡・２号土坑・７号土坑・36号土坑と重複しており、当遺構が２号住居跡に切られ、他の３基の土坑を切っている事から新旧関係は（新）２号住居跡→３号住居跡→（旧）２号土坑・７号土坑・36号土坑である。なお、住居跡の断面は上記のように３度に分けて記録を取っているため、写真は最後の段階のものになっている。

規模は東西方向約5.4m、南北方向約4.7mである。**平面形**は楕円形を呈す。明瞭ではないが、南西隅にやや張り出す部分があり、南西側に傾斜している。**壁**は南西隅以外の部分で確認され、壁高は東壁40cm、西壁25cm、南壁13cm、北壁20cm前後である。東壁は床面からやや緩やかに立ち上がっていくが、東壁と北壁は床面からわずかに外傾しながら立ち上がっていく。**床面**はⅣ層で、概ね平坦である。貼り床の痕跡は確認されなかった。**覆土**は９層に分層され、黒褐色土主体で構成されている。６層以下は自然堆積の様相を呈すが、１層～５層は多量の土器片や炭化物粒を包含し、６層以下と比べるとしまりのない黒褐色土主体で構成され、埋没過程で投げ込まれた人為的な堆積土と思われる。出土遺物の大半はこの１層～５層で出土している。

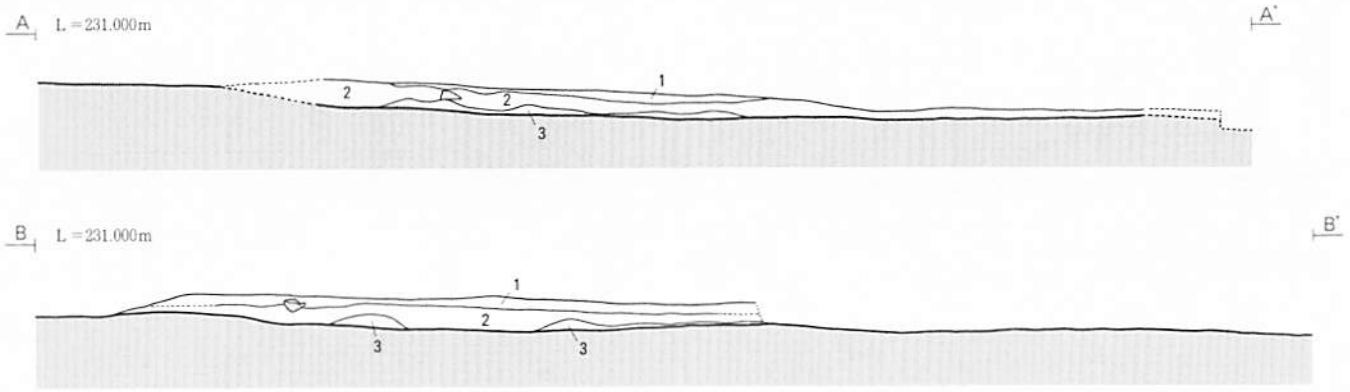
壁際を中心に36基の**柱穴**を検出した。覆土は黒褐色土の単層で、指で押すと床面との違いが明瞭なほどやわらかいものであった。これらの多くは壁柱穴で、明瞭な主柱穴と考えられるものは確認できなかった。PP25～PP28は柱穴間が約50cmと他の柱穴間と比べるとやや広く、柱穴の配置や南西に向かって緩やかに傾斜していることなどから出入り口の可能性が考えられる。

住居内に３基の**土坑**（PP37～PP39）を検出した。覆土は黒褐色土の単層で構成されている。

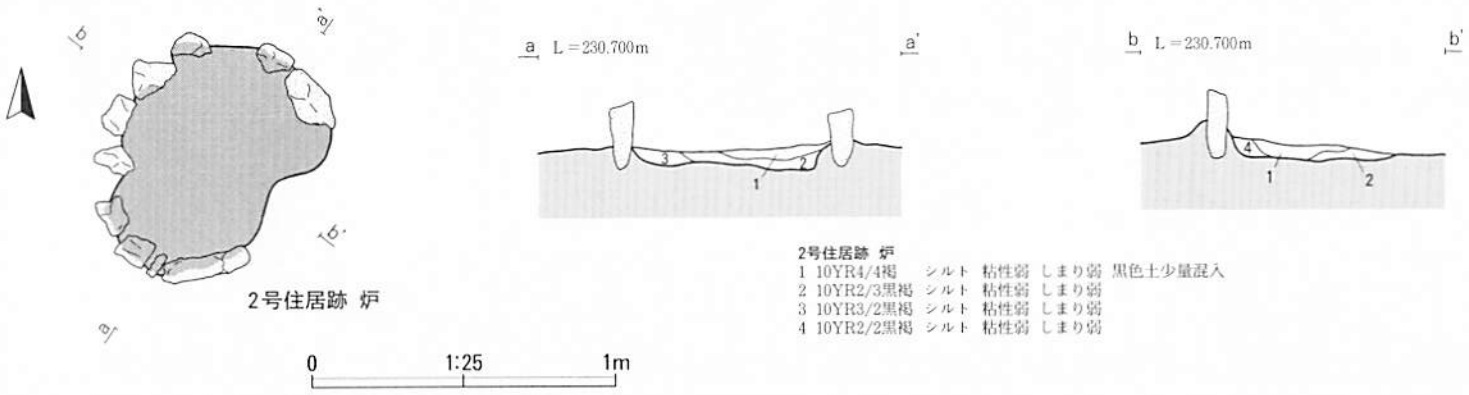
住居のほぼ中央で東西方向約50cm、南北方向約60cmの楕円形状を呈する**石囲炉**を検出した。扁平で細長い



第14図　2号住居跡①



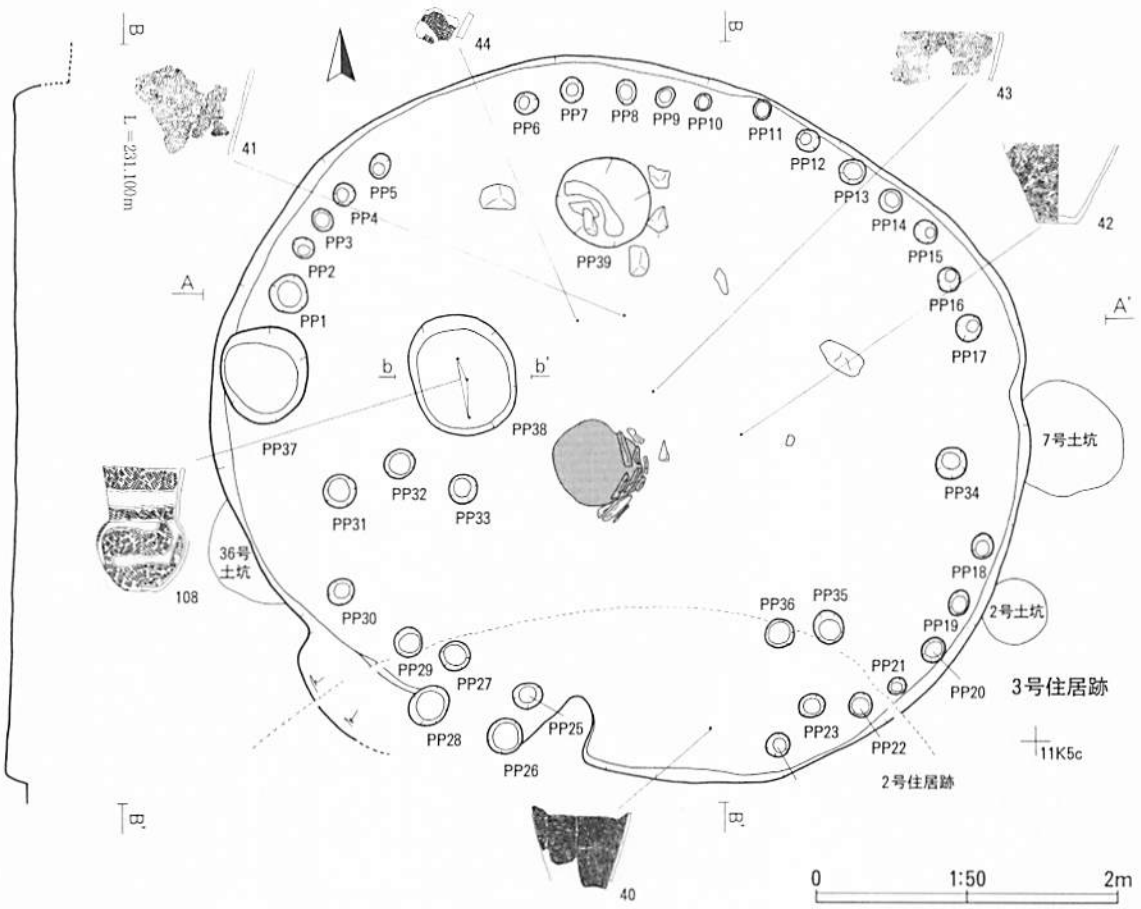
2号住居跡
1 10YR2/1黒　シルト　粘性弱　しまり弱　木根混入、ボソボソしている（Ⅱ層相当）
2 10YR2/1黒　シルト　粘性弱　しまり中　木根混入
3 10YR2/2黒褐　シルト　粘性弱　しまり中　暗褐色シルトブロック少量混入

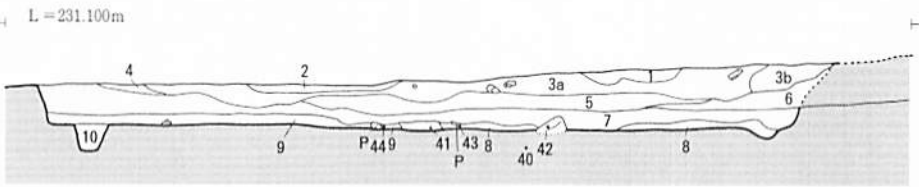


2号住居跡　炉

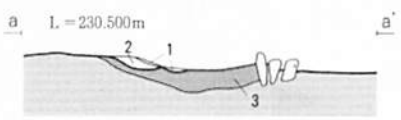
2号住居跡　炉
1 10YR4/4褐　シルト　粘性弱　しまり弱　黒色土少量混入
2 10YR2/3黒褐　シルト　粘性弱　しまり弱
3 10YR3/2黒褐　シルト　粘性弱　しまり弱
4 10YR2/2黒褐　シルト　粘性弱　しまり弱

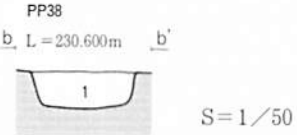
第15図　2号住居跡②





3号住居跡
1 10YR2/3黒褐 シルト 粘性弱 しまり強 明黄褐色シルトブロック少量混入
2 10YR2/1黒 シルト 粘性弱 しまり弱 炭化物粒多量混入、土器片包含
3a 10YR2/2黒褐 シルト 粘性弱 しまり中 To-Nb少量、炭化物粒微量混入、土器片包含
3b 10YR2/2黒褐 シルト 粘性弱 しまり弱 3a層に比べてボソボソしている、木根混入
4 10YR3/4暗褐 シルト 粘性弱 しまり中 To-Cu極微量混入
5 10YR2/3黒褐 シルト 粘性弱 しまり強 炭化物粒微量、To-Nb中量混入
6 10YR2/1黒 シルト 粘性弱 しまり中 To-Nb微量混入
7 10YR2/3黒褐 シルト 粘性弱 しまり強 To-Nb少量混入
8 10YR2/2黒褐 シルト 粘性弱 しまり強 To-Nb微量混入
9 10YR2/3黒褐 シルト 粘性弱 しまり強
10 10YR2/3黒褐 シルト 粘性弱 しまり強 柱穴覆土

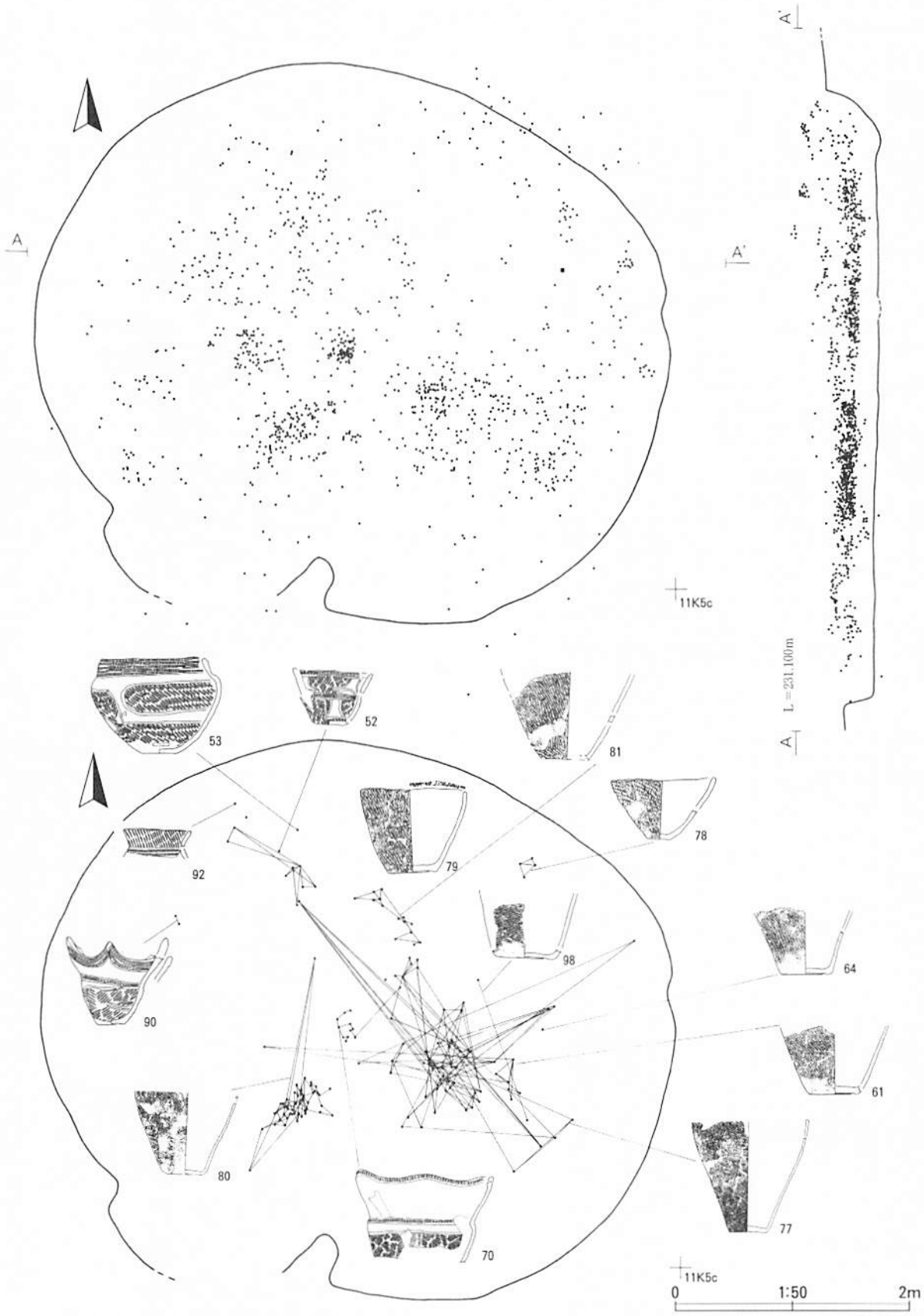




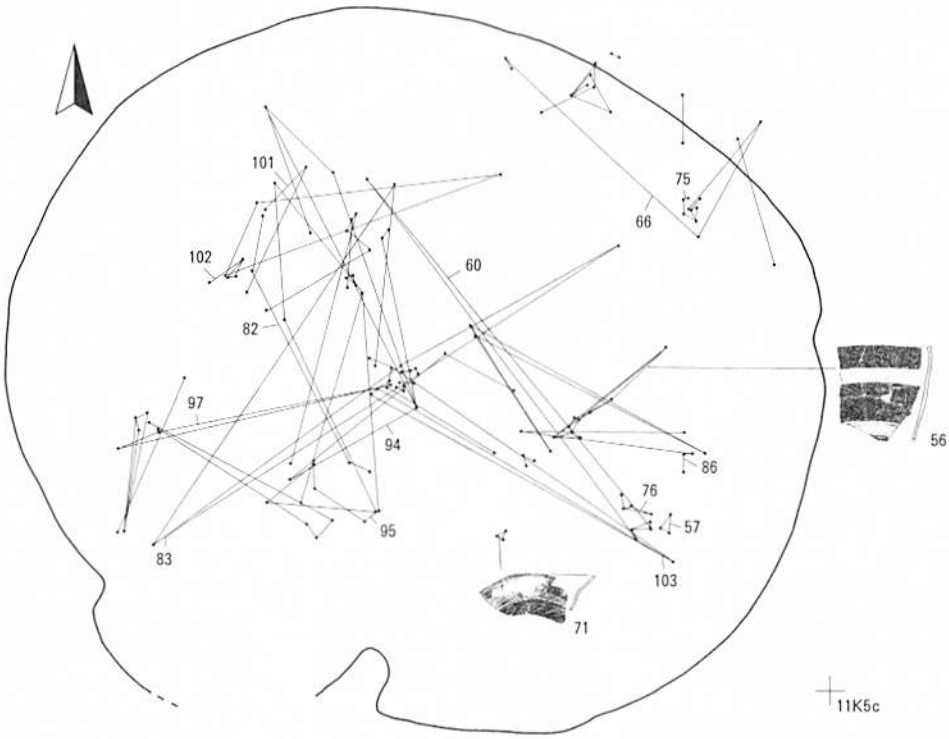
3号住居跡 炉
1 10YR2/2黒褐 シルト 粘性中 しまり強 径10mm程の礫少量混入
2 10YR3/3暗褐 シルト 粘性中 しまり強 径10mm程の礫多量混入、被熱層
3 7.5YR4/4褐 シルト 粘性中 しまり強 焼土、径10mm程の礫微量混入

3号住居跡 PP38
1 10YR2/2黒褐 シルト 粘性弱 しまり中 To-Nb、炭化物粒極微量混入
土器片包含

第16図　3号住居跡①



第17図　3号住居跡②



第18図　3号住居跡③

No.	PP 1	PP 2	PP 3	PP 4	PP 5	PP 6	PP 7	PP 8
径	26×25	14×14	14×14	17×13	16×15	16×15	16×15	16×14
深さ	17	10	11	14	10	12	14	14
No.	PP 9	PP10	PP11	PP12	PP13	PP14	PP15	PP16
径	14×12	11×10	13×12	16×14	18×17	15×14	16×16	16×15
深さ	14	15	15	15	17	19	18	19
No.	PP17	PP18	PP19	PP20	PP21	PP22	PP23	PP24
径	17×17	17×14	17×13	18×14	12×11	16×16	17×15	16×15
深さ	23	14	9	11	5	16	13	7
No.	PP25	PP26	PP27	PP28	PP29	PP30	PP31	PP32
径	19×17	23×23	20×20	29×24	20×20	19×16	22×21	20×18
深さ	10	15	14	17	17	20	13	12
No.	PP33	PP34	PP35	PP36	PP37	PP38	PP39	
径	19×18	21×20	22×19	20×18	64×58	82×68	63×60	
深さ	28	25	19	19	21	24	31	

礫を素材に構築されている。南東側の約1/4以外では礫は確認されなかったが、礫の抜き取り痕などは確認されなかったので、はじめからこのような状況であったと思われる。焼土の厚さは最大で7cm程である。炉を構成する礫の焼土側が赤く変色しているものも確認された。個々の礫の掘り方は確認されなかった。

遺物（第42図40～第51図124、写真図版33－40～写真図版41－127）

土器は今回の調査での約半数の遺物が出土しており、大コンテナで約6箱分になる。その出土の多くは覆土上～中位の1～5層中である。平面的には第17・18図に示したとおり住居全体から出土している。覆土の堆積状況から考えて、当遺構がある程度埋没した状況で黒褐色土とともに土器や石器などの遺物を廃棄したものと考えられる。覆土上～中位出土の遺物は床面及び床面直上から出土した遺物と時期差が見られないことから住居の埋没と遺物の廃棄は短期間に行われたと思われる。

土器は40～109、石器は110～121を掲載した。この他に、U.F.1点、剥片6点、砕片4点、磨石2点、円礫9点が出土している。土器や石器以外では122のミニチュア土器、123の土偶、124のスタンプ形土製品、自然遺物（125・126のアスファルト塊、127の木の実）が出土している。

時期　出土遺物から縄文時代後期中葉と思われる。

5号住居跡

遺構（第19図、写真図版8）

調査区中央の9H～9Iグリッドに位置する。Ⅱ層中で約130×70cmの楕円形状の焼土ブロックが確認され、掘り進めていったところ地床炉と柱穴が確認されたことにより住居跡と認定した。

規模は東西方向約4.6m、南北方向約4.0mである。**平面形**は北西隅がやや突出するが楕円形状を呈す。**壁**は床面からわずかに外傾しながら立ち上がる。壁高は東壁15cm、西壁8cm、南壁5cm、北壁7cm前後である。**床面**はⅢa層で、中央部がややくぼんでいる。貼り床の痕跡は確認されなかった。**覆土**は4層に分層され、上位の黒色土層と下位の黒褐色土層に大別される。上位の黒色土層はⅡ層に相当するもので、Ⅱ層との違いは判然としない。住居の中央に堆積する4層は焼土粒や炭化物粒を含む黒褐色土層で人為的な様相を呈す。

No.	PP 1	PP 2	PP 3	PP 4	PP 5	PP 6	PP 7
径	28×28	32×30	24×23	29×28	34×33	37×34	35×35
深さ	29	10	9	11	43	13	9

壁際を中心に7基の**柱穴**を検出した。配置については充分な検討を行っていないが、規模や深さからPP1・PP5等が主柱穴を構成すると思われる。

住居のほぼ中央で東西方向約60cm、南北方向約45cmの楕円状を呈す**地床炉**を検出した。焼土層はかたくしまっており、厚さは最大で8cmである。

遺物（第51図128～133、写真図版41－128～133）

128・129の土器、130～132の石器、133のミニチュア土器を掲載した。128の土器は地床炉の南西側で口縁を下にして置かれた状態で出土し、胴部下半～底部直上部にかけては内側に積み重なるようになっていた。底部は出土していない。この他に磨滅した土器片が数点と円礫が1点出土している。

時期　出土遺物から縄文時代後期前葉と思われる。

9号住居跡

遺構（第20図、写真図版９）

調査区北側の５Ｇ～６Ｈグリッドに位置する。当初はⅡ層中で石囲炉が検出されただけであったが、炉が検出された面で周囲を広げたところ北東側約半分に壁が確認されたため住居跡と認定した。当遺構は16号住居状遺構と重複しており、覆土の堆積状況から新旧関係は（新）16号住居状遺構→（旧）９号住居跡である。しかし、プランの確認に先立って炉が検出されたため、炉に伴う住居の有無を確認することを優先して精査を進めてしまった。そのため、新旧関係が逆転した状態になってしまった。

削平を受けているため断定はできないが、確認された部分から推定すると**規模**は径5.5～６m前後、**平面形**は円形もしくは楕円形を呈すと思われる。確認された**壁**は北東側約半分で、床面からほぼ直線的に立ち上がり、最大で25cmの高さを持つ。**床面**は南西側にやや傾斜しているが明瞭な凹凸は見られない。東側５Ｈグリッド部分では外側に一段高い面があり、もう１棟重複している可能性や住居のテラス等の施設の可能性が考えられる。しかし、南東側の壁面が確認されなかったことや住居跡の断面にかからなかったことなどから詳細については不明である。貼り床の痕跡は確認されなかった。覆土はⅡ層起源と思われる黒色土主体で構成され、床面近くではブロック状の黒褐色土が確認される。平面からはⅡ層との区別は困難であった。

柱穴は検出されなかった。

５Ｇ５ｅグリッドで径約１mの円形状の**石囲炉**を検出した。扁平で細長い亜角礫や亜円礫を素材に構築されている。南西隅には礫が確認されず、対向する北東隅には棒状の礫が立った状態で確認された。その両脇には扁平な礫が配されている。焼土の発達は良好で、径65cmほどの範囲にわたる。焼土の厚さは最大で13cmである。礫の内側が赤く変色しているものも確認された。個々の礫の掘り方は確認されなかった。

遺物（第52図134～第53図144、写真図版42－134～142・144）

134～141の土器、142・143の石器、144のミニチュア土器を掲載した。この他には磨滅した土器片が数点と不定形石器１点、砕片１点が出土している。

時期　出土遺物から縄文時代後期前葉と思われる。

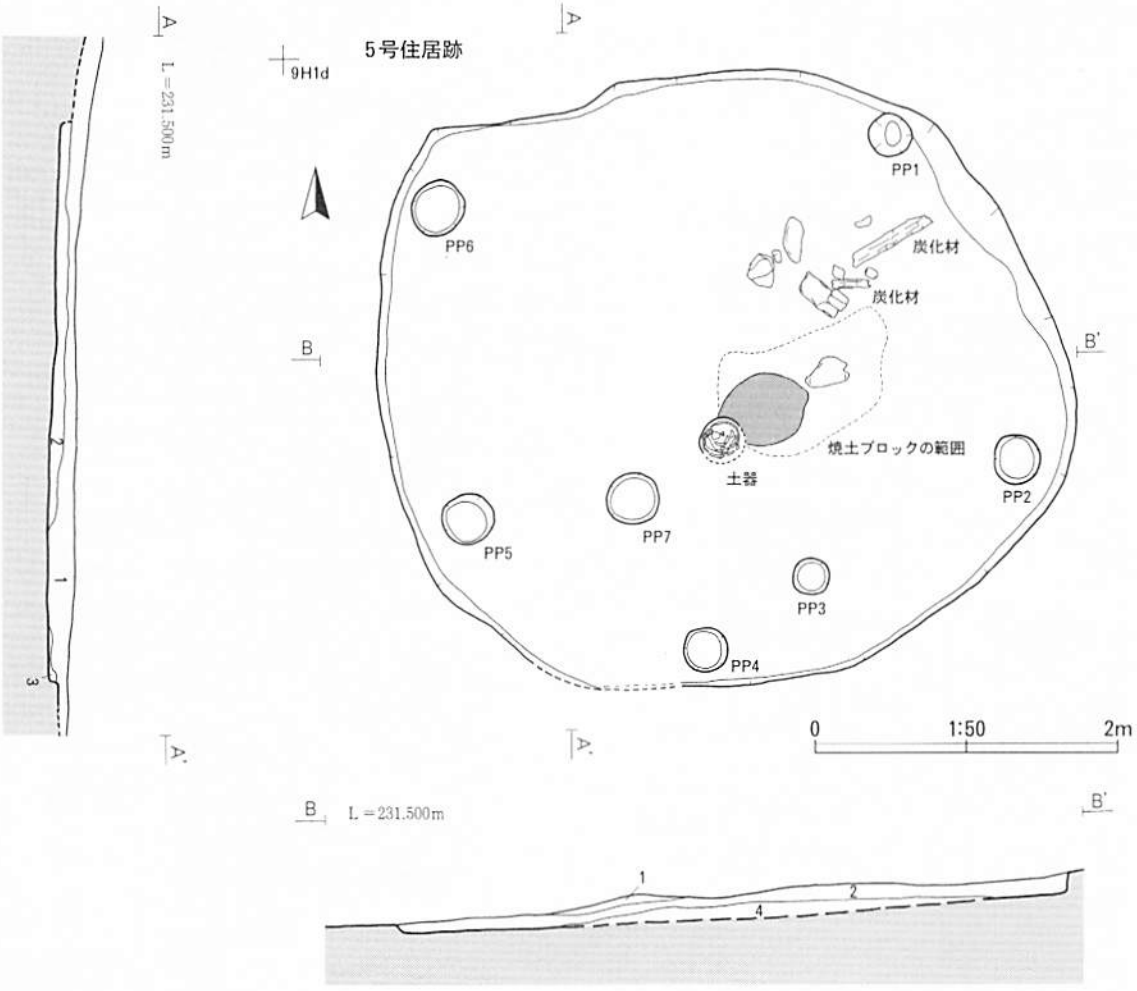
12号住居跡

遺構（第21図、写真図版10）

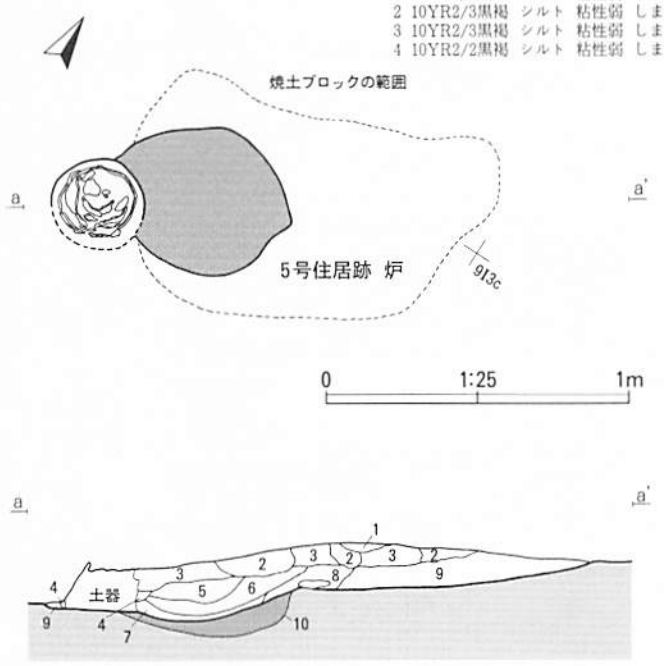
調査区中央の10Ｊグリッドに位置する。Ⅱ層中で炭化物粒を含む黒褐色土層の広がりが確認されたことにより、住居跡の存在を想定して、ベルトを設定し掘り下げを行った。炭化物粒を含む黒褐色土層の確認面から約15cm掘り下げたところで円形に広がる焼土（地床炉）を検出したため住居跡と認定した。当遺構は１号住居跡ａと重複しており、当遺構が切られる事から（新）１号住居跡ａ→（旧）12号住居跡である。なお、１号住居跡ｂとは重複しておらず、新旧関係は不明である。

住居跡の西壁側と南壁側はすでに掘り下げてしまっていたため、規模・平面形ともに推定である。**規模**は径3.5～4.0m前後、**平面形**は円形状もしくは楕円形状を呈すと思われる。**壁**は東壁と北壁が確認され、壁高は東壁５cm、北壁25cm前後である。壁が確認される北壁から判断すると床面からほぼ垂直に立ち上がると思われる。床面はⅡ層中で概ね平坦である。貼り床の痕跡は確認されなかった。**覆土**は５層に分層され、炭化物粒を僅かに含む黒褐色土が主体をなしている。検出面直下では僅かであるが明黄褐色土ブロックが確認される。炭化物粒が含まれていなければⅡ層との区別は困難であった。

柱穴は検出されなかった。

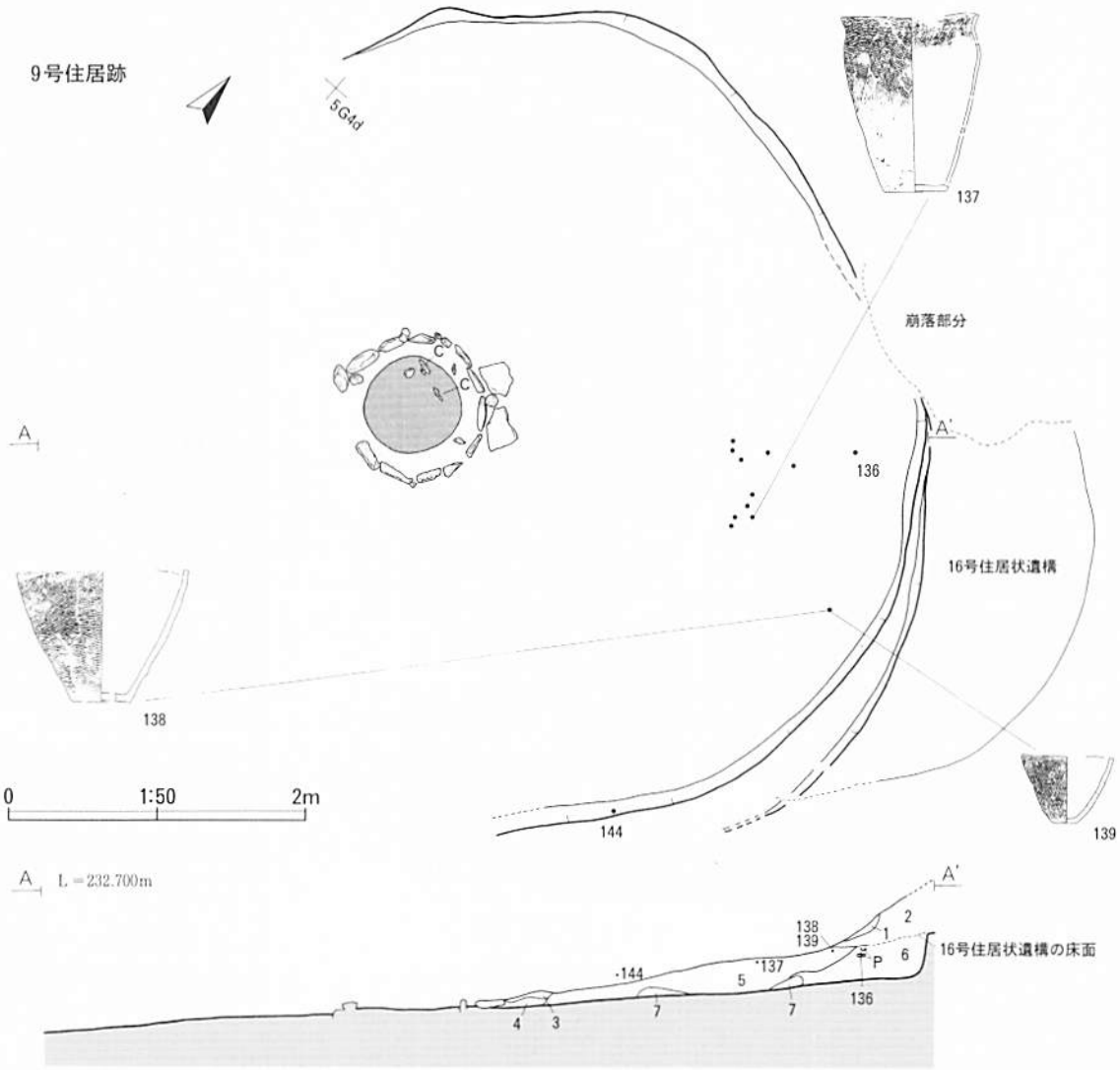


5号住居跡
1 10YR2/1黒　シルト　粘性弱　しまり弱（Ⅱ層相当）
2 10YR2/3黒褐　シルト　粘性弱　しまり中　褐色シルト小粒少量混入、1層に比べてシャリシャリしている
3 10YR2/3黒褐　シルト　粘性弱　しまり弱　明黄褐色砂質シルト中量混入
4 10YR2/2黒褐　シルト　粘性弱　しまり弱　黄褐色焼土しみ状にみられる、炭化物粒中量混入



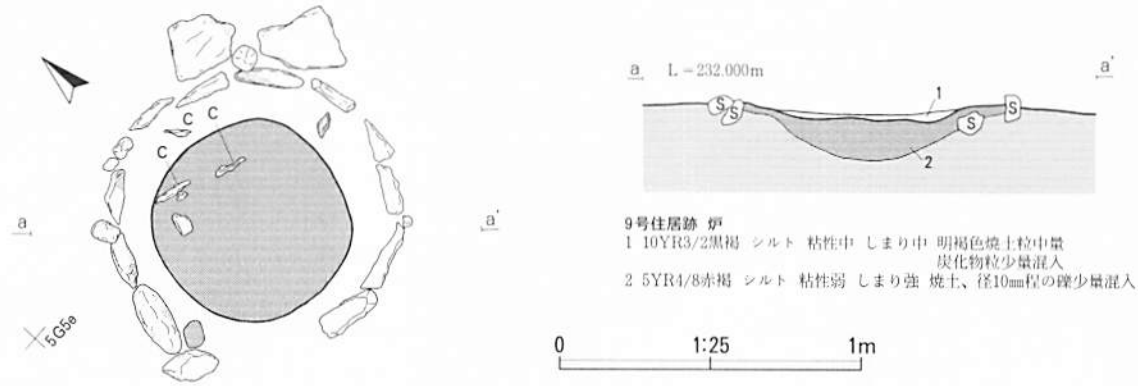
5号住居跡　炉
1 10YR3/3暗褐　シルト　粘性中　しまり弱　焼土粒混入
2 10YR5/8黄褐　シルト　粘性弱　しまり中　ブロック状の焼土
3 10YR2/2黒褐　シルト　粘性弱　しまり中　炭化物粒中量混入
4 10YR2/1黒　シルト　粘性弱　しまり中
5 10YR2/3黒褐　シルト　粘性弱　しまり弱　黄褐色焼土粒中量　炭化物粒極微量混入
6 10YR2/2黒褐　シルト　粘性弱　しまり弱　黄褐色焼土粒微量　炭化物粒多量混入
7 10YR2/3黒褐　シルト　粘性弱　しまり弱
8 10YR2/2黒褐　シルト　粘性弱　しまり弱　黄褐色焼土粒　炭化物粒極微量混入
9 10YR2/2黒褐　シルト　粘性弱　しまり中　To-Nb微量混入　径10mm程の亜角礫混入
10 10YR6/8明黄褐　シルト　粘性弱　しまり強　焼土

第19図　5号住居跡



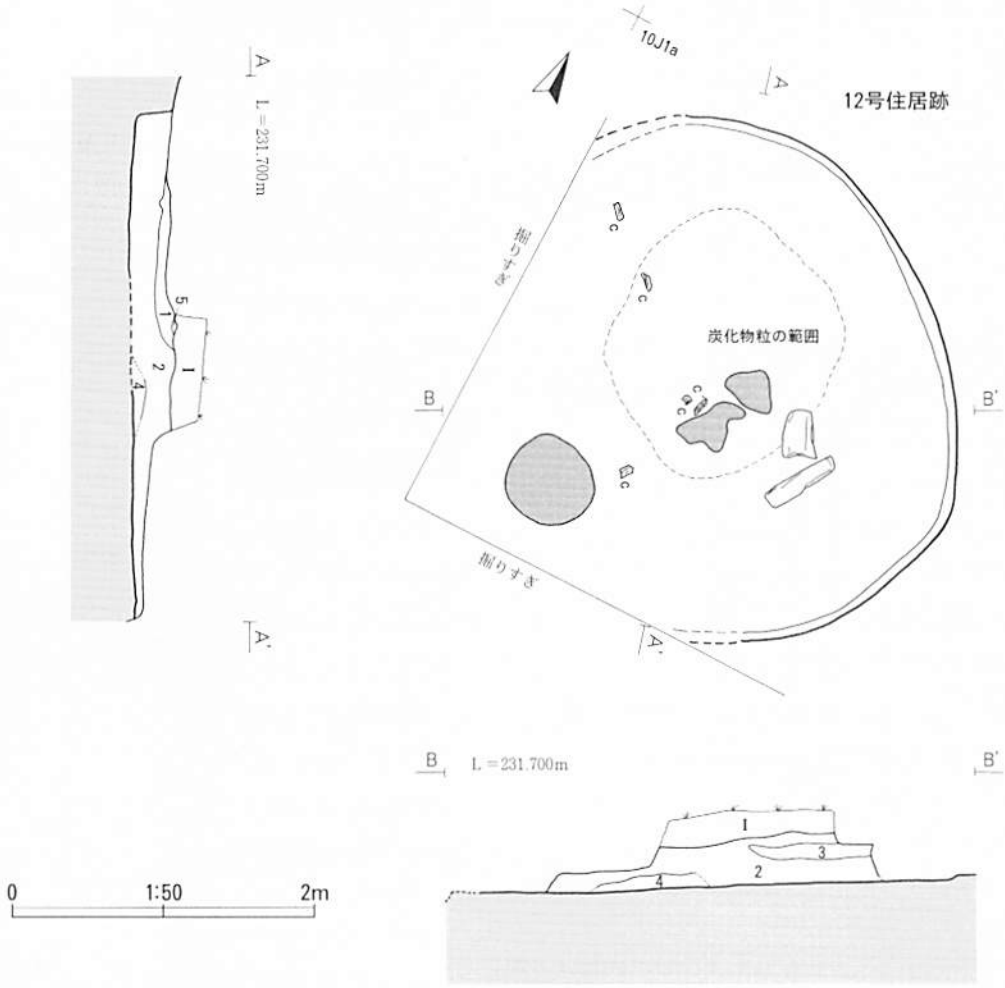
9号住居跡
1 10YR3/1黒褐 シルト 粘性中 しまり強 To-Nb微量混入
2 10YR2.5/1黒～黒褐 シルト 粘性中 しまり中 にぶい黄褐色粘土ブロック少量、炭化物粒微量、To-Nb微量混入
3 10YR2.5/2黒褐 シルト 粘性中 しまり中 にぶい黄褐色粘土中量混入、焼土粒・炭化物粒少量混入
4 10YR1.7/1黒 シルト 粘性中 しまり強 焼土粒微量混入
5 10YR1.7/1黒 シルト 粘性中 しまり中 にぶい黄褐色粘土ブロック少量、炭化物粒微量、To-Nb微量、径10mm程の礫少量混入
6 10YR2/1黒 シルト 粘性中 しまり中 にぶい黄褐色粘土ブロック少量、To-Nb微量、径10mm程の礫少量混入
7 10YR2.5/2黒褐 シルト 粘性中 しまり強 にぶい黄褐色粘土混入、To-Nb混入、径5mm程の礫少量混入

9号住居跡 炉

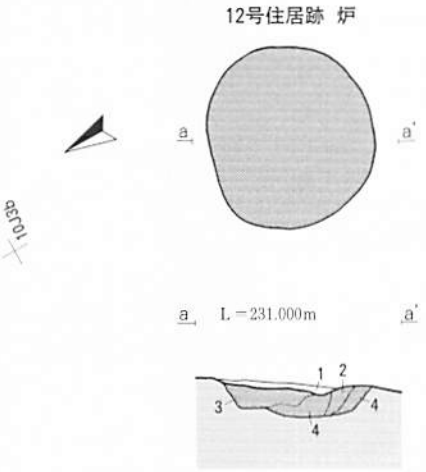


9号住居跡 炉
1 10YR3/2黒褐 シルト 粘性中 しまり中 明褐色焼土粒中量
炭化物粒少量混入
2 5YR4/8赤褐 シルト 粘性弱 しまり強 焼土、径10mm程の礫少量混入

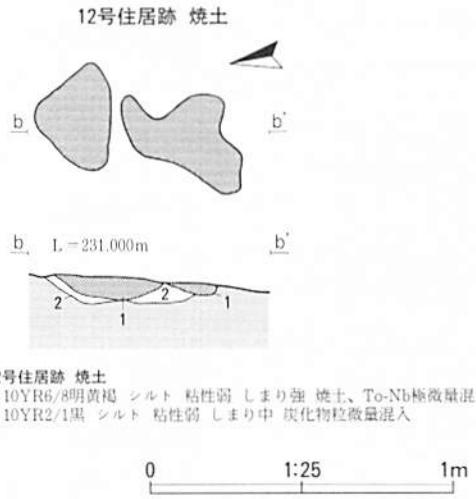
第20図　9号住居跡



12号住居跡
1 10YR2/2黒褐 シルト 粘性弱 しまり弱 To-Nb微量混入
2 10YR2/3黒褐 シルト 粘性弱 しまり中 To-Nb微量、炭化物粒極微量混入
3 10YR2/2黒褐 シルト 粘性弱 しまり弱 To-Nb微量混入
4 10YR2/3黒褐 シルト 粘性弱 しまり弱 To-Nb微量、炭化物粒少量混入
5 2.5Y6/8明黄褐 シルト 粘性弱 しまり弱 径10mm程の亜角礫中量混入



12号住居跡 炉
1 10YR2/3黒褐 シルト 粘性弱 しまり中 炭化物粒中量混入
2 10YR2/3黒褐 シルト 粘性弱 しまり弱 焼土粒少量混入
3 10YR5/6黄褐 シルト 粘性弱 しまり強 焼土、かたく締まっている
4 7.5YR5/6明褐 シルト 粘性弱 しまり強 焼土、かたく締まっている



12号住居跡 焼土
1 10YR6/8明黄褐 シルト 粘性弱 しまり強 焼土、To-Nb極微量混入
2 10YR2/1黒 シルト 粘性弱 しまり中 炭化物粒微量混入

第21図　12号住居跡

住居跡の南西側で東西方向約60cm、南北方向約55cmの円形状を呈す**地床炉**を検出した。焼土の発達は良好で、焼土の厚さは最大で9cmである。掘り込みは確認されなかった。

住居跡のほぼ中央で炭化物粒・炭化材とともに東西50cm、南北65cmの範囲にわたって不整形の**焼土**を検出した。焼土の厚さは最大で7cmである。

遺物（第53図145～147、写真図版43－145～147）

145・146の土器、147の石製品を掲載した。この他には磨滅した土器片が数点出土している。

時期　出土遺物や1号住居跡aとの重複関係から縄文時代後期中葉と思われる。

13号住居跡

遺構（第22図、写真図版11）

調査区中央の11J～13Kグリッドに位置する。To-Cuの水成堆積層上面及びⅢa層上面で柱穴のみが検出された。柱穴がほぼ全周巡る事と、出入り口と考えられる柱穴が確認できたことから住居跡と認定した。その後、当遺構周辺をクリーニングしたところ、弧状であるが更に2棟分の柱穴の配列が確認された。先に確認された住居跡を13号住居跡a、後に確認された住居跡で外側のものを13号住居跡b、内側のものを13号住居跡cとした。新旧関係は柱穴の重複関係から（新）13号住居跡a→13号住居跡b→（旧）13号住居跡cである。13号住居跡b・cは3号住居跡と重複しており、当遺構が切られることから（新）3号住居跡→（旧）13号住居跡b・cである。また、13号住居跡aは2号住居跡の掘り過ぎた床面から約18cm下位に位置し、3号住居跡とはほぼ同一面上に位置する。これらの新旧関係をまとめると（新）2号住居跡→3号住居跡・13号住居跡a→13号住居跡b→（旧）13号住居跡cとなる。

13号住居跡a

壁は確認されなかったため断定はできないが、柱穴の配置から推定すると、**規模**は径6.5m前後、**平面形**は円形もしくは楕円形を呈すと思われる。**床面**も確認されなかった。

柱穴は検出時点で、壁柱穴のみは把握できたが、それ以外の柱穴の把握・確認はできなかった。13号住居跡に伴うものとして104基登録した。完掘時の配置や重複関係から、PP54－PP103－PP91－PP86の四角形を構成する主柱穴とPP1～PP21・PP25～PP47の壁柱穴の配置が想定される。PP22とPP24は他の壁柱穴と比べて非常に大きい上に間隔も約1mと広いことから、出入り口を構成するものと思われる。

炉は検出されなかった。

13号住居跡b

規模や平面形は13号住居跡aと同様、推定の域をでないが、**規模**は径6.4m前後、**平面形**は円形もしくは楕円形を呈すと思われる。**壁・床面**は確認されなかった。

柱穴は完掘時の配置や重複関係から、PP84、PP90、PP92、PP98等が主柱穴を、PP55～PP68が壁柱穴を構成していたものと考えられる。PP52とPP53は他の壁柱穴と比べると、規模が大きい上に柱穴同士の間隔が約70cmと広いことなどから出入り口を構成する柱穴である可能性が高い。

炉は検出されなかった。

13号住居跡c

規模や平面形は13号住居跡a・bと同様、推定の域をでないが、**規模**は径6m前後、**平面形**は円形もしくは楕円形を呈すと思われる。**壁・床面**は確認されなかった。

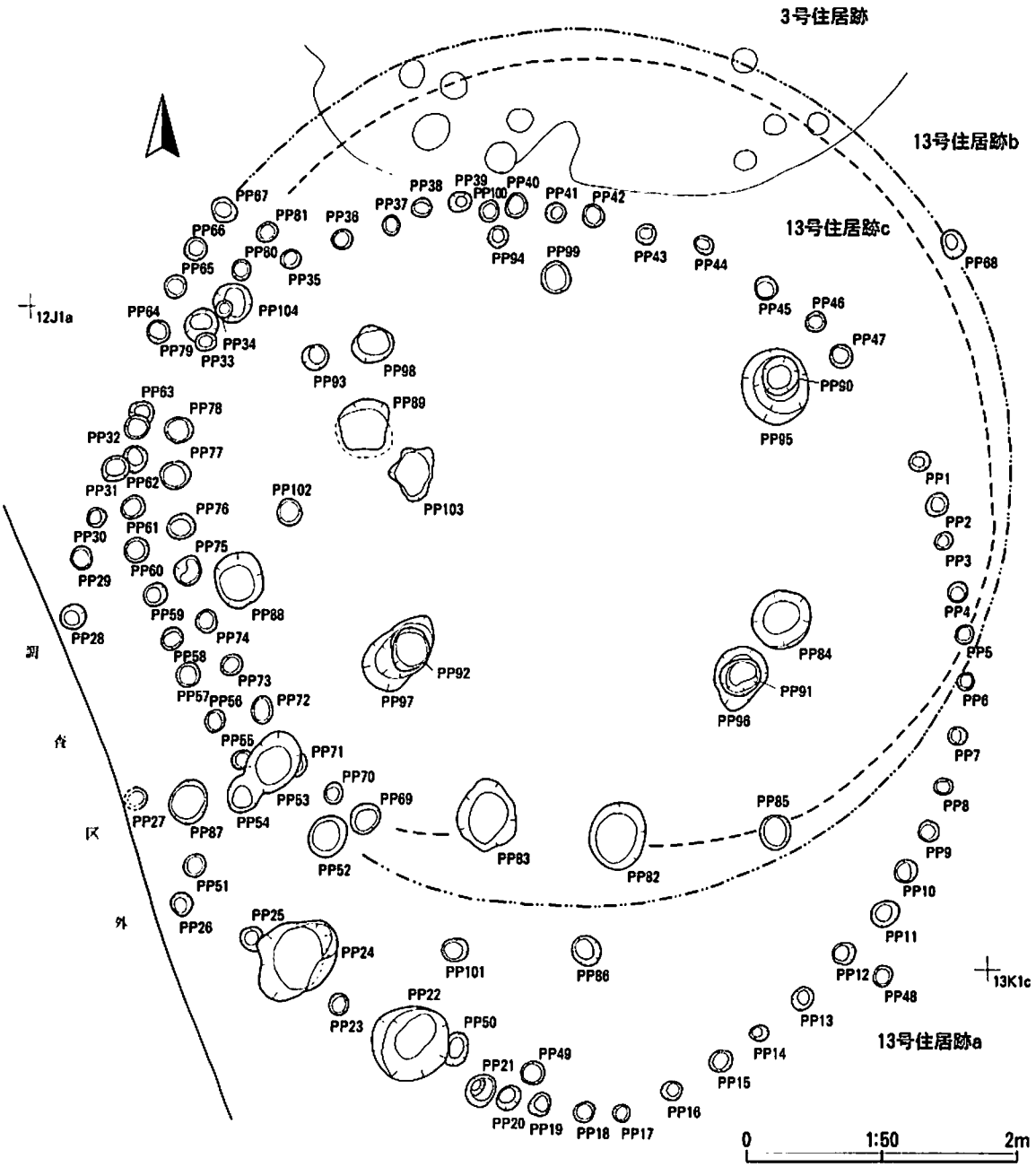
柱穴は完掘時の配置や重複関係から、PP97－PP89－PP95－PP96の四角形を構成する主柱穴とPP69～

No.	PP 1	PP 2	PP 3	PP 4	PP 5	PP 6	PP 7	PP 8	PP 9
径	16×15	18×15	15×12	14×14	14×14	13×12	14×13	14×12	15×15
深さ	24	16	15	18	19	21	23	18	10
No.	PP10	PP11	PP12	PP13	PP14	PP15	PP16	PP17	PP18
径	18×16	22×18	17×16	18×15	14×12	17×16	14×14	13×13	15×14
深さ	22	22	26	22	4	19	21	24	19
No.	PP19	PP20	PP21	PP22	PP23	PP24	PP25	PP26	PP27
径	18×14	20×16	26×20	58×57	16×14	66×57	18×17	17×16	(17)×15
深さ	23	16	25	65	8	82	17	11	5
No.	PP28	PP29	PP30	PP31	PP32	PP33	PP34	PP35	PP36
径	18×18	17×15	15×13	21×19	19×16	16×12	14×12	15×14	15×15
深さ	25	21	27	19	15	17	9	14	20
No.	PP37	PP38	PP39	PP40	PP41	PP42	PP43	PP44	PP45
径	15×13	15×13	18×15	18×15	15×14	17×16	15×15	15×13	18×17
深さ	12	16	13	23	22	12	18	9	16
No.	PP46	PP47	PP48	PP49	PP50	PP51	PP52	PP53	PP54
径	15×15	17×17	16×14	17×17	24×(15)	17×15	32×27	(45)×34	(25)×23
深さ	20	26	16	7	22	12	22	34	35
No.	PP55	PP56	PP57	PP58	PP59	PP60	PP61	PP62	PP63
径	(15)×13	16×14	18×17	17×15	18×15	18×17	18×16	20×18	18×(16)
深さ	15	16	19	26	33	28	19	15	18
No.	PP64	PP65	PP66	PP67	PP68	PP69	PP70	PP71	PP72
径	17×17	17×15	17×16	19×17	20×15	24×20	16×14	(17)×(6)	21×15
深さ	13	13	17	17	12	11	5	10	11
No.	PP73	PP74	PP75	PP76	PP77	PP78	PP79	PP80	PP81
径	16×15	16×16	21×19	20×20	22×21	20×20	(25)×24	15×13	17×14
深さ	8	11	16	16	23	9	17	13	10
No.	PP82	PP83	PP84	PP85	PP86	PP87	PP88	PP89	PP90
径	49×40	52×44	45×41	25×23	22×20	33×27	38×36	37×33	30×27
深さ	59	65	45	24	24	11	44	47	41
No.	PP91	PP92	PP93	PP94	PP95	PP96	PP97	PP98	PP99
径	30×26	33×27	19×18	15×14	54×50	49×38	64×37	31×27	23×22
深さ	25	69	24	18	49	53	54	47	9

No.	PP100	PP101	PP102	PP103	PP104
径	15×14	19×16	19×18	40×32	29×28
深さ	18	12	8	39	15

（註）表中の括弧書きのものは残存値である。

PP81の壁柱穴の配置が想定される。PP82とPP83は他の壁柱穴と比べて非常に大きい上に間隔も約1mと広



第22図　13号住居跡a・b・c

いことから、出入り口を構成するものと思われる。

炉は検出されなかった。

遺物（第53図148～155、写真図版43－148～155）

当遺構に伴うと考えられる遺物148～154の土器、155の石器を掲載した。153、154はPP７の覆土下位から、155はPP89の底面からの出土である。150の土器には容量一杯にアスファルトが入って出土した。

時期　出土遺物が少ない（特に13号住居跡ｂ・ｃはない）ため断定はできないが、数少ない出土遺物と重複関係から13号住居跡ａは縄文時代後期中葉、13号住居跡ｂ・ｃは縄文時代後期前葉～中葉と思われる。

17号住居跡

遺構（第23・24図、写真図版11～13）

調査区北側の４Ｆ～５Ｇグリッドに位置する。Ⅱ層中で159の土器が逆さまの状態で出土したことと当遺構該当部分の土が周囲の土に比べてしまりが無かったことから、住居跡の存在を想定して、ベルトを設定し、掘り下げを行った。すると、５Ｆ１ｄグリッドで焼土（地床炉）が検出されたので住居跡と認定した。当遺構は35号土坑と重複しており、当遺構が切っていることから（新）17号住居跡→（旧）35号土坑である。

住居跡の西側が削平を受けているため、推定となってしまうが、**規模**は西東方向約5.8m、南北方向約5.6mである。**平面形**は円形状を呈すると思われる。**壁**は西側～南側にかけての約１/２は削平を受けているため残存していない。北側～東側は床面からなだらかに立ち上がっていき、検出面近くで垂直気味に立ち上がる。**床面**は断面図等には明瞭にはあらわれないが、中央部がくぼんでおり、幾分皿状になっている。掘り込みは一部ではTo－Cuの水成堆積層上面まで行われている。貼り床の痕跡は確認されなかった。**覆土**は９層に分層される。部分的に黒褐色土の堆積層がみられるが、黒色土主体で構成される。１～３層は炭化物粒や砂の混入がみられ、人為的な堆積の様相を呈す。覆土の大部分を占める４層にも僅かであるが炭化物粒の混入がみられ、人為的な堆積かと思われる。

壁際を中心に44基の**柱穴**を検出した。覆土は黒～黒褐色土の単層である。調査時に明瞭な柱配置は認識できなかったが、完掘時の配置等からPP36・PP41・PP45・PP46等は主柱穴、PP１～PP35は壁柱穴を構成していたものと考えられる。

当遺構に伴うと思われる大小４基の**土坑**（PP43・PP44・PP47・PP48）を検出した。PP47の底面近くからは灰白色の粘土がまとまって出土しており、粘土を一時的に貯蔵するための土坑の可能性が考えられる。覆土や規模は第23図を参照していただきたい。

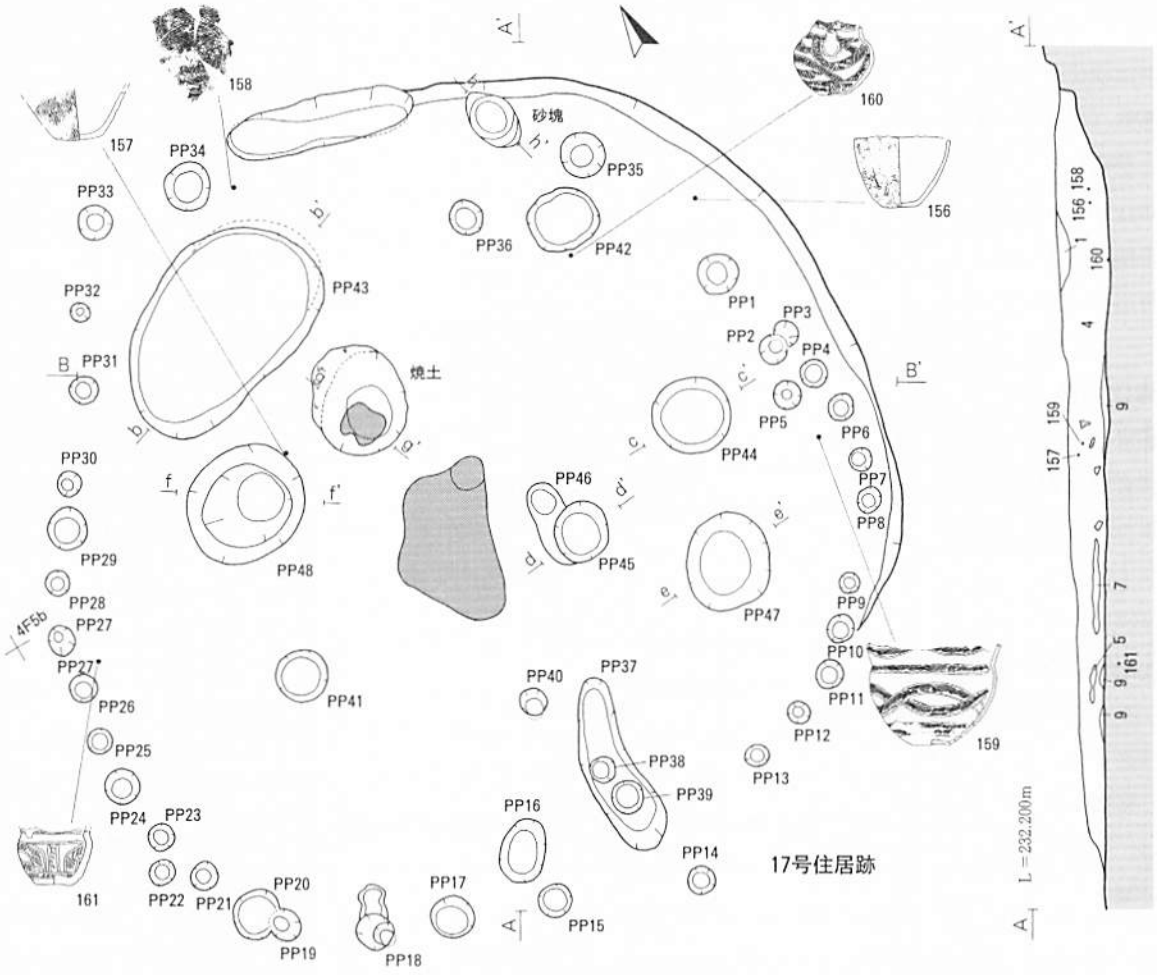
住居跡のほぼ中央部分で東西方向約70cm、南北方向約105cmの不整に広がる**地床炉**を検出した。焼土は他の住居跡と比較すると比較的発達しており、厚さは最大６cmである。掘り込みは確認されなかった。

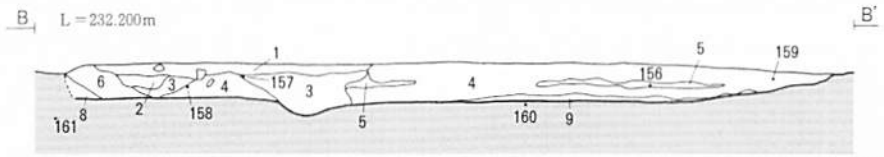
これらの他に北東隅の壁付近で**砂塊**が検出された。長軸が45cm、短軸が30cmの楕円形状を呈す。層厚は最大９cmである。４層から構成されており、非常にかたくしまっている。用途等は不明である。

遺物（第54図156～第55図166、写真図版43－156～写真図版44－166）

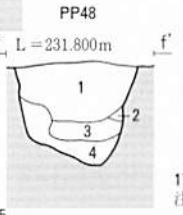
156～166の土器を掲載した。160は床面から出土した注口土器である。159は床面直上で口縁部側を下にして置かれたように出土した。確認時点では底部は欠けていた。この他には磨滅した土器片数点と瑪瑙の原石が１点出土している。

時期　出土遺物から縄文時代後期後葉と思われる。

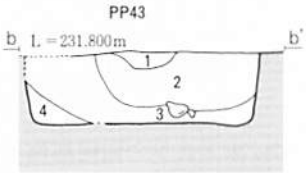


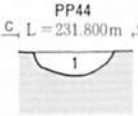


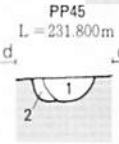
17号住居跡
1 10YR2/1黒 シルト 粘性中 しまり弱 径10～30㎜の亜角礫中量混入、木根多く混入
2 10YR2/2黒褐 砂質シルト 粘性弱 しまり弱 黄色砂多量混入
3 10YR2/1黒 シルト 粘性中 しまり弱 炭化物粒多量混入、木根多量混入、ボソボソしている
4 10YR2/1黒 シルト 粘性中 しまり中 炭化物粒微量、径10～30㎜の亜角礫多量混入
5 10YR2/2黒褐 シルト 粘性中 しまり中 オレンジ色パミス少量混入
6 10YR2/1黒 シルト 粘性中 しまり弱
7 10YR3/2黒褐 シルト 粘性中 しまり弱 オレンジ色パミス多量混入
8 10YR3/4暗褐 シルト 粘性中 しまり中
9 10YR3/4暗褐 シルト 粘性中 しまり強

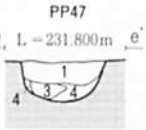


17号住居跡 PP48
注記なし







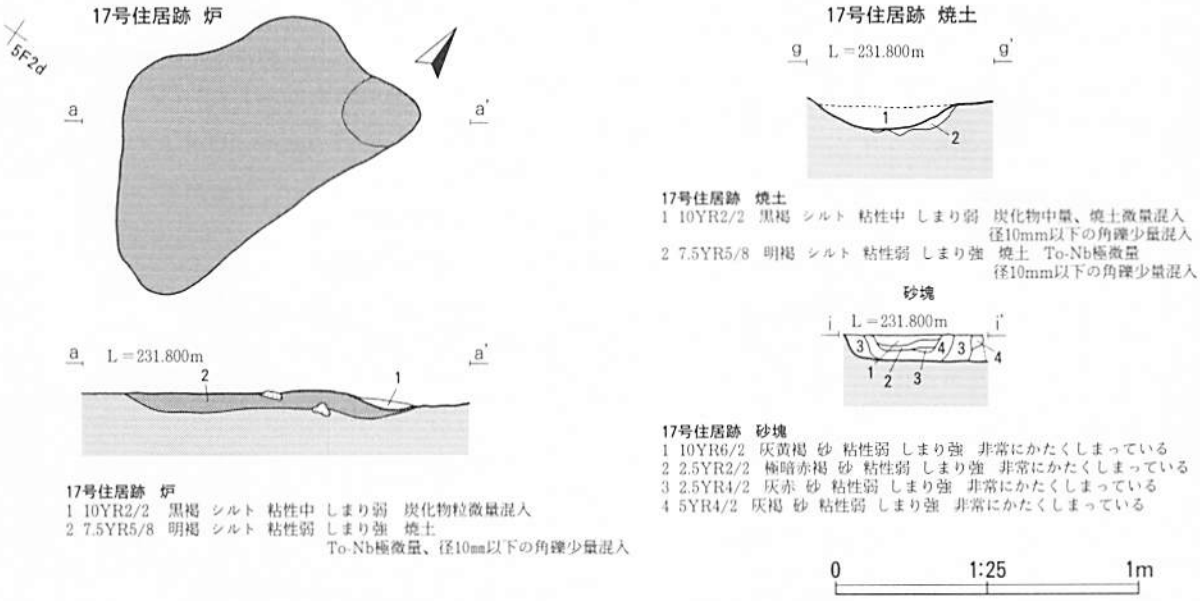


17号住居跡 PP44・45・47
1 10YR2/2黒褐 シルト 粘性中 しまり中 炭化物粒微量混入、径10㎜以下の角礫中量混入
2 10YR2/3黒褐 シルト 粘性中 しまり中 To-Cu微量混入、径50㎜までの角礫少量混入
3 10YR8/1灰白 粘土 粘性強 しまり強
4 10YR2/2.5黒褐 シルト 粘性中 しまり強 炭化物粒微量混入、径10㎜以下の角礫中量混入

17号住居跡 PP43
1 10YR2/1.5黒～黒褐 シルト 粘性中 しまり中 炭化物粒少量、To-Nb少量、径10㎜以下の礫少量混入
2 10YR2/2黒褐 シルト 粘性中 しまり中 炭化物粒微量、To-Nb少量、径150㎜までの角礫少量混入
3 10YR2.5/2黒褐 シルト 粘性強 しまり中 黄褐色シルトブロック少量、To-Nb少量混入
径10㎜以下の角礫少量混入
4 10YR3/3暗褐 シルト 粘性中 しまり中

0 1:50 2m

第23図 17号住居跡①



第24図　17号住居跡②

No.	PP 1	PP 2	PP 3	PP 4	PP 5	PP 6	PP 7	PP 8	PP 9
径	27×27	20×18	17×(11)	18×18	18×18	18×17	15×15	19×15	14×13
深さ	25	29	—	—	—	25	—	—	—
No.	PP10	PP11	PP12	PP13	PP14	PP15	PP16	PP17	PP18
径	19×18	19×18	15×14	16×15	18×18	23×22	41×29	29×27	25×24
深さ	—	11	19	19	12	10	24	34	35
No.	PP19	PP20	PP21	PP22	PP23	PP24	PP25	PP26	PP27
径	(22)×20	34×(30)	19×18	18×16	18×18	24×23	17×16	18×18	19×17
深さ	12	12	12	14	17	12	22	23	29
No.	PP28	PP29	PP30	PP31	PP32	PP33	PP34	PP35	PP36
径	17×16	28×26	16×16	19×18	13×12	23×22	31×31	30×29	23×21
深さ	20	21	24	22	20	19	15	35	—
No.	PP37	PP38	PP39	PP40	PP41	PP42	PP43	PP44	PP45
径	121×33	18×17	22×21	18×18	35×34	44×40	153×99	52×51	41×35
深さ	10	29	—	27	22	17	47	16	16
No.	PP46	PP47	PP48						
径	(58)×22	64×55	82×72						
深さ	26	26	69						

18号住居跡

遺構（第25図、写真図版13）

調査区北側の６Ｈ・６Ｉグリッドに位置する。当初はⅡ層中で焼土が検出されただけで住居跡との認識はなかったが、焼土の周囲を広げたところ、北東側で壁が確認されたため住居跡と認定した。

住居跡の約３/４が確認されなかったため断定はできないが、炉と確認された壁から推定すると、**規模**は径５ｍ前後、**平面形**は円形もしくは楕円形を呈すと思われる。**壁**が確認された部分は北東側約１/４のみで、床面からほぼ垂直に立ち上がる。**床面**は壁際で確認され、概ね平坦であったが、全体の様相は不明である。床面の掘り込みはⅡ層中である。**覆土**は北東側の壁際のみで確認されている。４層に分層され、黒色土主体で構成される。

柱穴は検出されなかった。

北東隅で当遺構に伴うと思われる**土坑**を１基検出した。規模は右のとおりである。覆土は暗褐色土の単層である。

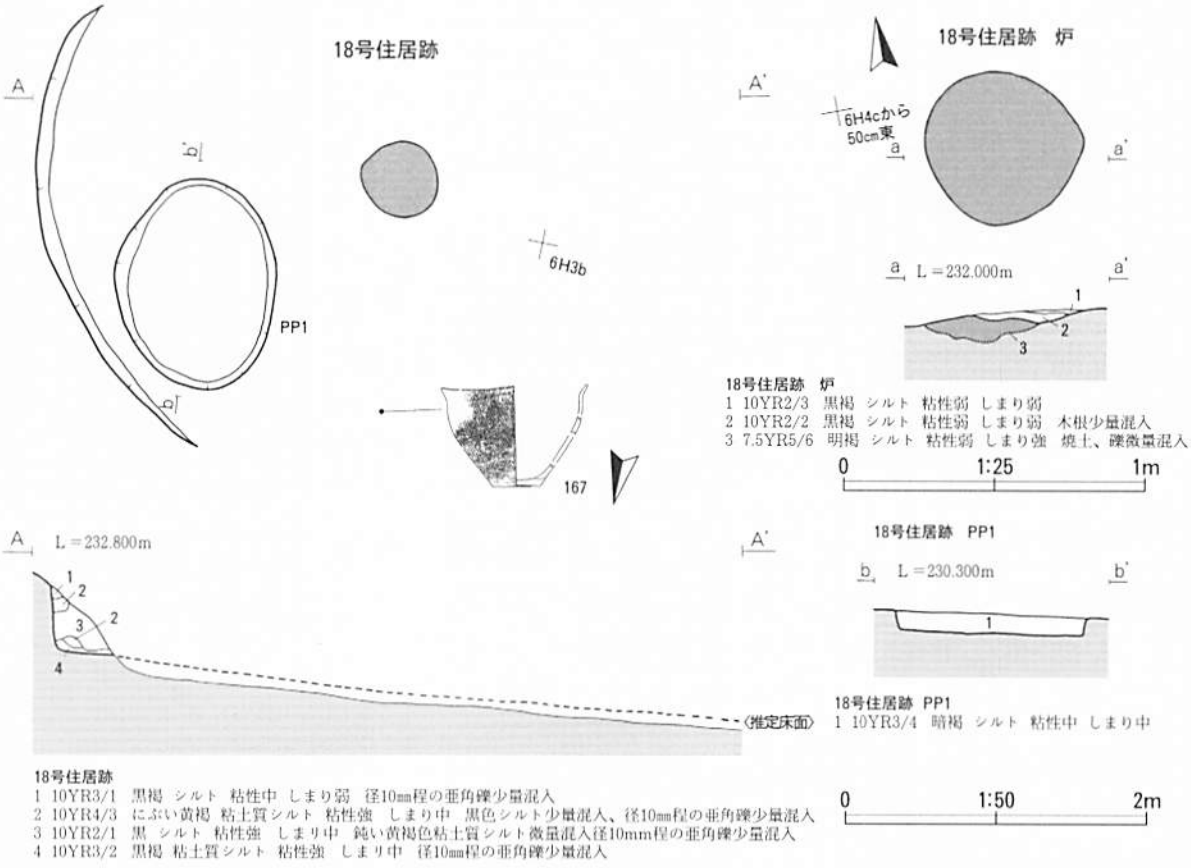
No.	PP 1
径	149×56
深さ	13

住居の中央と思われる部分で東西方向約55㎝、南北方向約50㎝の円形状の**地床炉**を検出した。焼土の厚さは最大で７㎝である。掘り込みは確認されなかった。

遺物（第55図167、写真図版44－167）

住居跡と認定した時点で当遺構に伴うと判断できた遺物は167の土器のみである。検出時の状況を考えると６Ｈグリッド・Ⅱ層で出土した遺物は当遺構に伴う可能性が考えられる。

時期　出土遺物から縄文時代後期前葉と思われる。



第25図　18号住居跡

19号住居跡

遺構（第26図、写真図版14）

調査区南側の15K・15Lグリッドに位置する。当初はTo－Cuの水成堆積層及び一次堆積層除去後Ⅲc層中で焼土が検出されただけで住居跡との認識はなかったが、周囲を広げたところ南西側で僅かであるが壁が確認されたため住居跡と認定した。

地床炉と壁の極一部が確認されただけであるため、**規模・平面形**は不明である。南東側の**壁**の極一部が確認されたが詳細は不明である。**床面**は中央部が一番低く外に向かって緩やかに高くなっている。床面の掘り込みはⅢc層～Ⅳ層である。**覆土**は確認されなかった。

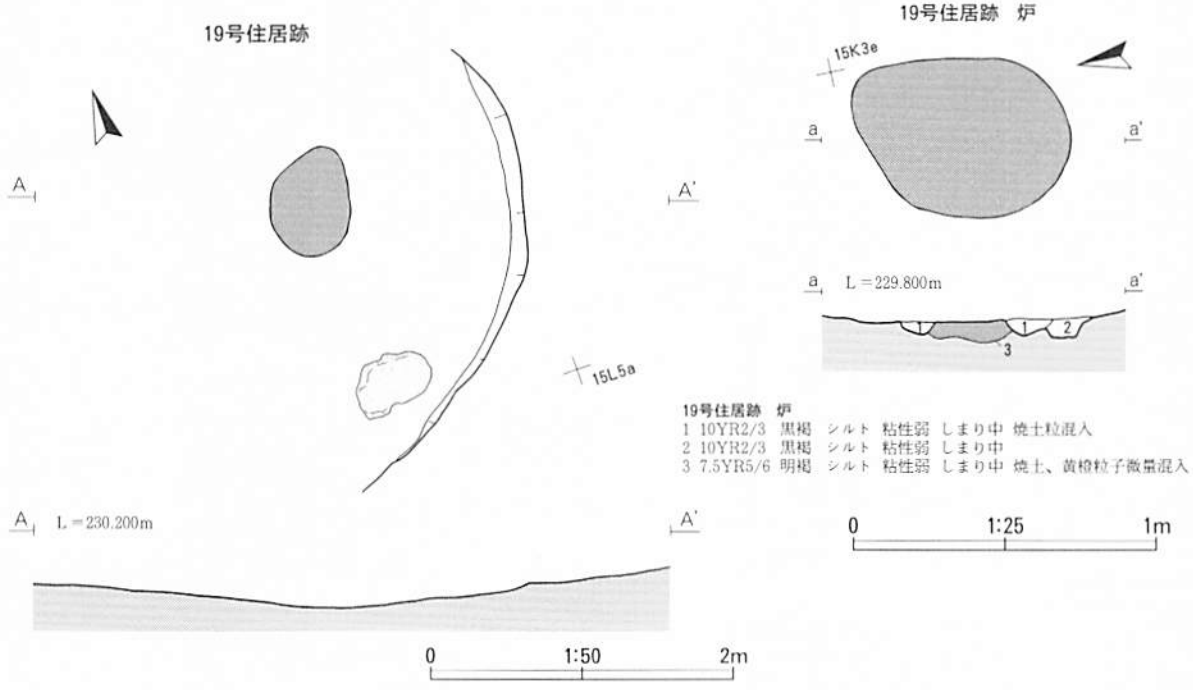
柱穴は検出されなかった。

15K3dグリッドで南西－北東方向約73cm、北西－南東方向約56cmの楕円形状の地床炉を検出した。焼土の発達は悪い。焼土の厚さは最大で約6cmである。掘り込みは確認されなかった。

遺物

出土していない。

時期　遺物は出土していないが、検出状況から縄文時代前期中葉以前と思われる。



第26図　19号住居跡

4号住居状遺構

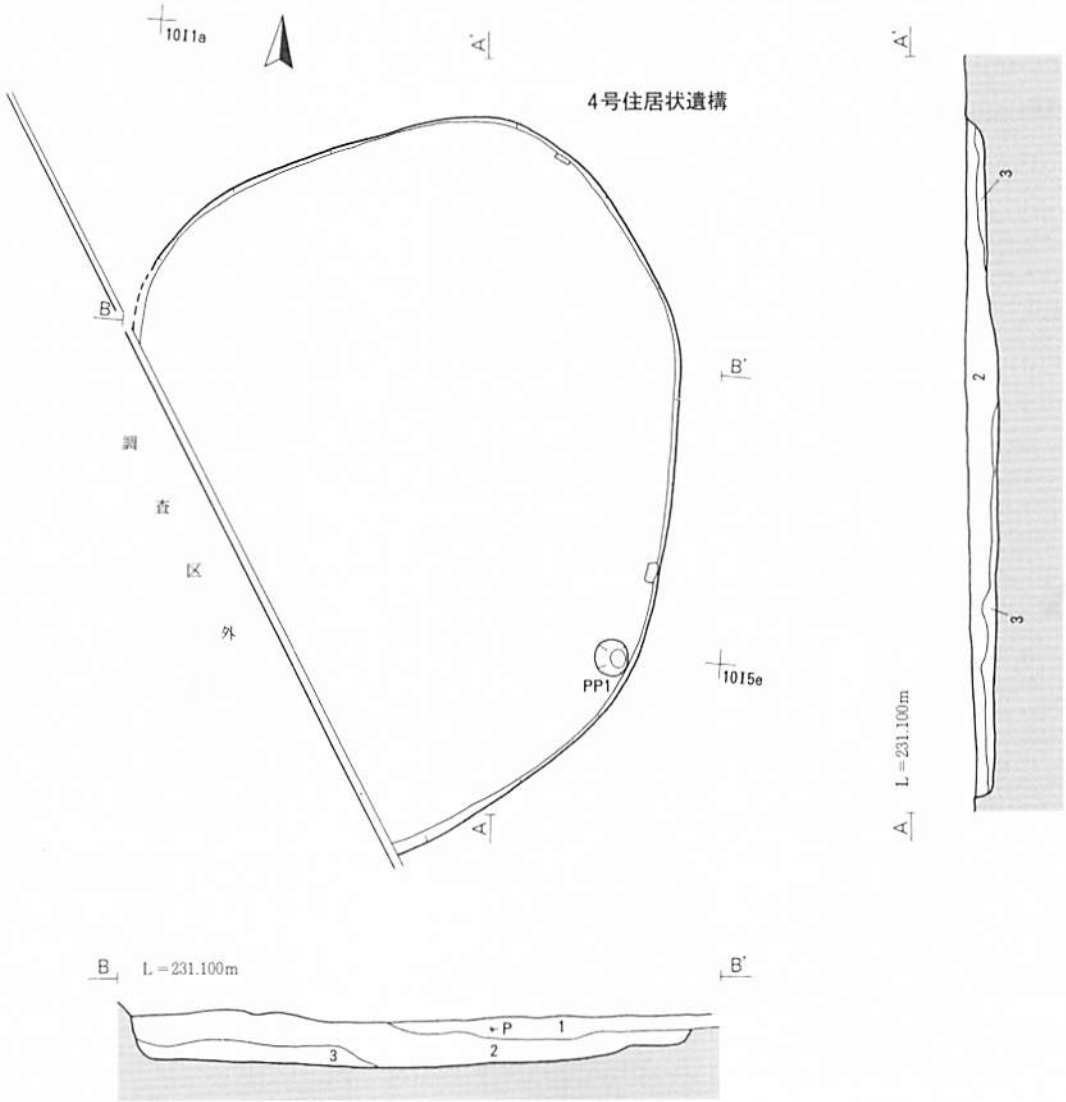
遺構（第27図、写真図版15）

調査区中央の9H～10Iグリッドに位置し、南西側は調査区外に広がっている。Ⅲa層で円形状の黒色土の広がりによって確認された。柱穴が1基確認されたものの炉は確認されなかったため、住居状遺構とした。

南西側は調査区外に広がっているが、確認される部分での**規模**は東西方向約3.7m、南北方向約5mである。**平面形**は南北方向に長い楕円形を呈すと思われる。**壁**は北壁から南壁が確認されており、底面から外傾しながら立ち上がっている。壁高は東壁で9.0cm、南壁で12.0cm、北壁で13.0cmである。**床面**は概ね平坦であるが、北東側がやや高くなっている。**覆土**は3層に分層され、黒色土主体で構成される。床面際や壁際では炭化物粒の混入する黒褐色土が確認される。

南東壁際で1基の**柱穴**を検出した。規模は右のとおりである。覆土は黒色土主体で構成される。

No.	PP1
径	23×22
深さ	23



4号住居状遺構
1 10YR2/1黒 シルト 粘性弱 しまり中 径10～30mmの亜角礫少量混入、土器片含、木根混入
2 10YR2/1黒 シルト 粘性中 しまり中 径10～30mmの亜角礫少量混入、黒褐色シルトしみ状にみられる、木根混入
3 10YR2/2黒褐 シルト 粘性弱 しまり中 炭化物粒微量混入、黒色シルトしみ状にみられる

0 1:50 2m

第27図　4号住居状遺構

遺物（第55図168～170、写真図版45－168～170）

出土した遺物は土器片のみであり、168と169が覆土中から、170が柱穴の覆土中から出土している。

時期　出土遺物が数点の土器片だけであるため断定はできないが、縄文時代後期と思われる。

6号住居状遺構

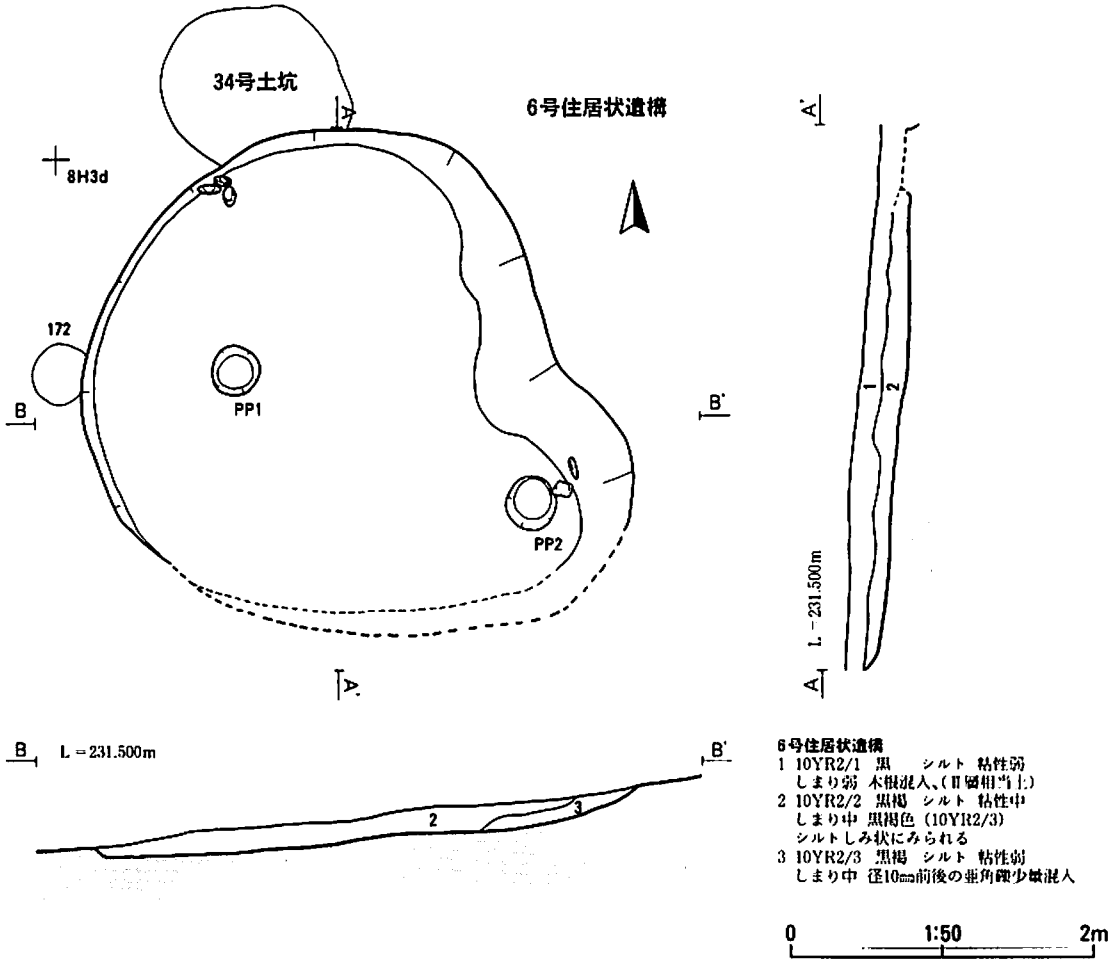
遺構（第28図、写真図版16）

調査区中央の8H～8Iグリッドに位置する。Ⅱ層で円形状の黒褐色土の広がりによって確認された。当遺構は34号土坑と172号柱穴状土坑と重複しており、34号土坑と172号柱穴状土坑を切っている事から新旧関係は（新）6号住居状遺構→（旧）34号土坑・172号柱穴状土坑である。

平面形は南東隅が突出する洋梨状を呈しており、**規模**は長軸で約3.72m、短軸で約3.32mである。壁は南壁を除いて確認されている。南壁は平面では確認できなかったが、断面観察で確認されたので破線で表現している。確認された壁のうち西壁から北壁にかけてはほぼ垂直に立ち上がり、東壁はなだらかに内傾しながら立ち上がっている。**床面**は東から西かけて傾斜しているが目立った凹凸は見られない。**覆土**は黒褐色土主体で構成される。

当遺構に伴うと考えられる**柱穴**が2基検出された。規模は右のとおりである。覆土は黒～黒褐色土主体で構成される。

No.	PP 1	PP 2
径	33×32	36×33
深さ	－	－



第28図　6号住居状遺構

遺物（第56図171～173、写真図版45－171～173）

覆土から171の土器と172・173の石器が出土している。

時期　出土遺物が少ないため断定はできないが、縄文時代後期と思われる。

14号住居状遺構

遺構（第29図、写真図版17）

調査区中央の11L～12Lグリッドに位置し、北側から東側にかけての部分は調査区外に広がっている。Ⅳ層中で黒色土の広がりとして確認されたが、12L東壁を観察すると実際にはⅢａ層直下から掘り込まれているのが確認された。

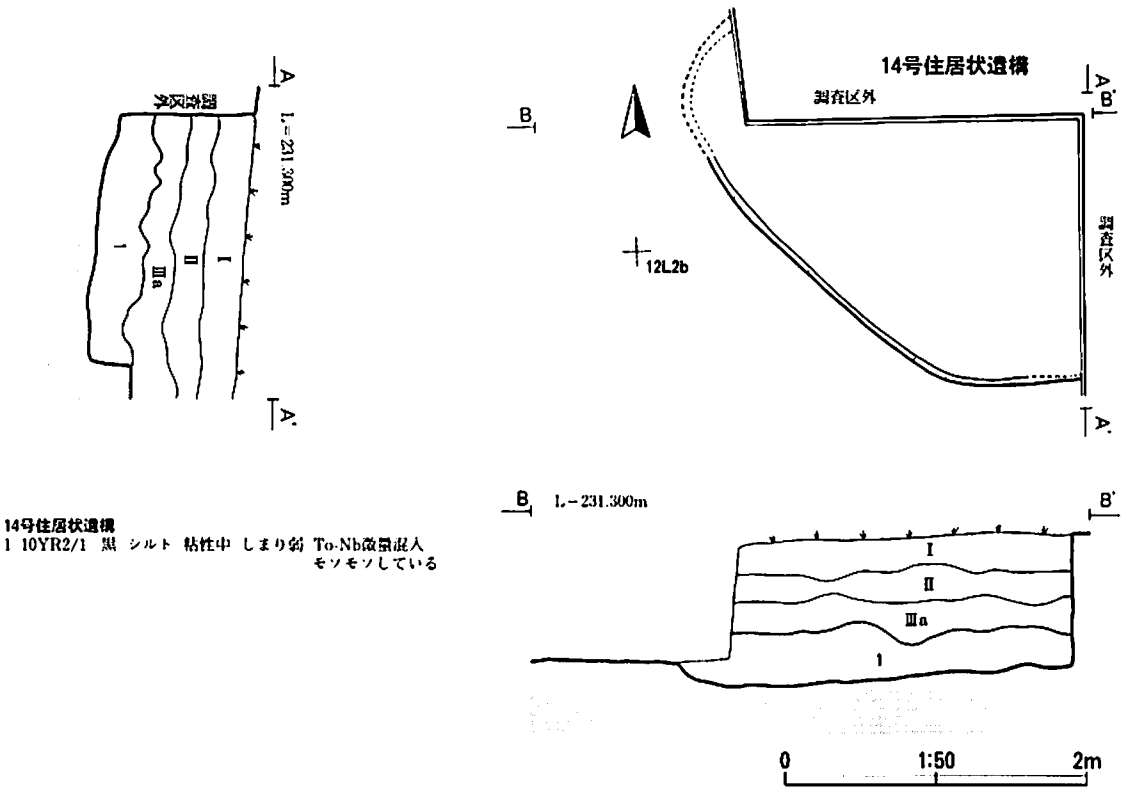
大部分が調査区外に広がっているため、全体の**平面形**は不明であるが、少なくとも２つの隅があることは確認された。部分であるが確認された**規模**は東西方向2.62m、南北方向2.40mである。壁は床面からほぼ垂直に立ち上がり、**床面**は概ね平坦である。**覆土**は黒色土の単層で構成され、To-Nbが微量混入する。

柱穴は検出されなかった。

遺物

出土していない。

時期　出土遺物がないため断定はできないが、掘り込まれている層位から判断すると縄文時代前期以前に属すると思われる。



第29図　14号住居状遺構

16号住居状遺構

遺構（第30図、写真図版17）

調査区北側の５Ｈ～６Ｈグリッドに位置する。９号住居跡の壁を確認するためにベルトを設定して掘り下げたところ、９号住居跡の床面より約25cm上位で平坦な部分が確認されるとともに東側で壁が確認されたので住居状遺構として登録した。９号住居跡の覆土中に当遺構の床面と同レベルの焼土が確認されているので、住居跡であった可能性が高い。当遺構は９号住居跡の精査後に確認されたが、断面を観察すると当遺構が９号住居跡を切っているので、新旧関係は精査の順序とは逆で（新）16号住居状遺構→（旧）９号住居跡である。

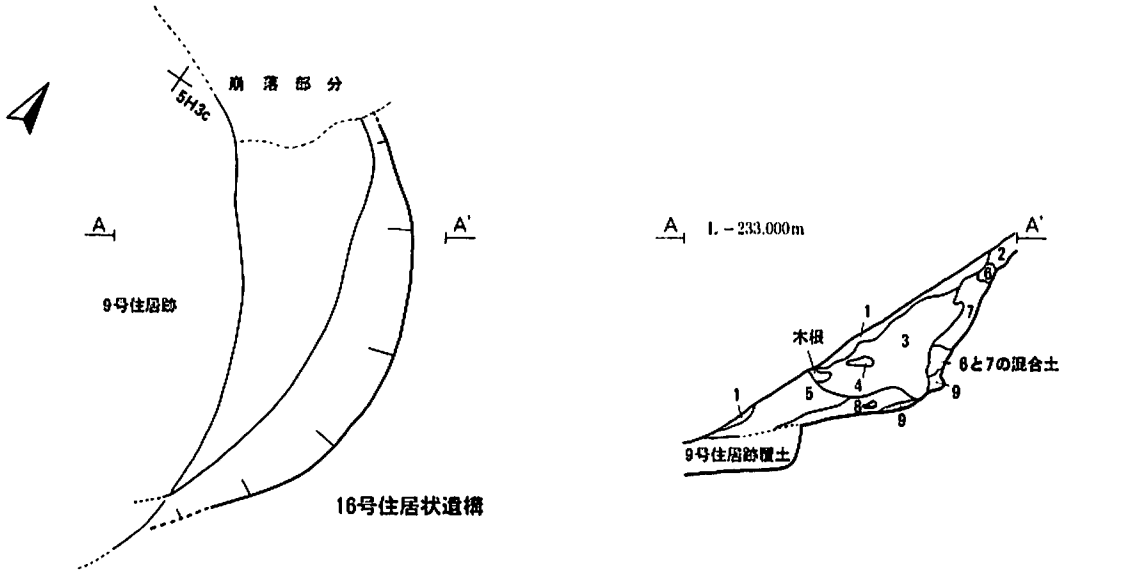
床面の一部と壁の一部が確認されているだけなので、**平面形・規模**とも不明である。壁は東壁のみ確認されており、床面からほぼ直線的に開きながら立ち上がっている。確認された**床面**は概ね平坦である。**覆土**は９層に分層され、黒色土～黒褐色土主体で構成されている。

柱穴は検出されなかった。

遺物（第56図174、写真図版45－174）

174の土器片が覆土中から出土している。

時期　出土遺物が少ないため断定はできないが、９号住居跡との重複関係から縄文時代後期前葉以降に位置付けられる。



16号住居状遺構
1 7.5YR1.7/1 黒 シルト 粘性中 しまり弱 Ⅰ層相当土（表土）
2 7.5YR2/2 黒褐 シルト 粘性中 しまり中 灰黄褐色シルト少量、径10mm前後の小礫少量混入
3 10R2/1 黒 シルト 粘性中 しまり強 6層ブロック微量、径10cm前後の小礫少量混入
炭化物極微量混入
4 10R3/2 黒褐 シルト 粘性中 しまり中 径10cm前後の小礫少量、炭化物粒微量混入
5 10R2/2 黒褐 シルト 粘性強 しまり中 To-Nb微量、径10cm前後の小礫少量混入
6 10R5/3 にぶい黄褐 シルト 粘性中 しまり中 径10cm前後の小礫少量混入
7 10R3/1 黒褐 シルト 粘性中 しまり弱 径10cm前後の小礫少量混入、6層がモヤ状に混入
8 10R2/3 黒褐 シルト 粘性中 しまり強 径10cm前後の小礫少量混入、6層がブロック状に少量混入
炭化物極微量混入
9 7.5YR2/2 黒褐 粘土質シルト 地山粒少量、径10cm前後の子礫が少量 混入

0　1:50　2m

第30図　16号住居状遺構

2．土坑

土坑として36基登録している。調査区の中央部から南側にかけて検出された。大半の土坑の平面形は円形もしくは楕円形である。検出された36基のうちフラスコ状土坑は4基であるが、15K～16Lグリッドに集中している。土坑の帰属する時代・時期は、出土遺物がないものが多いため、確定できたものは非常に少ない。21号土坑や遺物の出土する土坑、他の遺構との重複関係がある土坑以外の土坑は検出面から縄文時代に属すと判断したが、あくまでもその可能性が高いということで報告している。

1号土坑（第31・56図、写真図版18・45）

20M～20Nグリッドに位置し、Ⅱ層除去後Ⅶ層上面で円形状の黒褐色土の広がりによって検出された。**平面形**は楕円形状を呈し、**規模**は開口部で178.0×154.0cm、底部で139.0×122.0cm、深さは最大で37.0cmである。**底面**は断面図には表れないが中央部分が僅かにくぼむ。この他に南西側の壁際には大小数個の礫が確認され、礫は僅かであるが火を受けていた。中央部では炭化材や炭化物粒が僅かに認められる。**覆土**は6層に分層され、黒褐色土主体で構成される。南壁際には崩落したと思われる明褐色土が混入する。**遺物**は覆土下位から175・176の縄文土器片と177・178の石器が出土した。**時期**は出土遺物が少ないため断定はできないが、縄文時代早期中葉と思われる。

2号土坑（第31図）

11Kグリッドに位置し、3号住居跡精査終了後約5cm下位のⅣ層上面で、黒褐色土中に含まれるTo-Nbの量の多寡やしまりの違いによって認識した。**平面形**は円形を呈し、**規模**は開口部で44.0×44.0cm、底部で33.0×31.0cm、深さは最大で17.5cmである。**底面**は概ね平坦で、目立った凹凸は見られない。**覆土**は黒～黒褐色土の単層でしまりはなくボソボソしている。To-CuブロックやTo-Nbが少量混入する。**遺物**は出土していない。**時期**は3号住居跡との重複関係から縄文時代後期中葉以前と思われる。

3号土坑（第31図、写真図版18）

11Kグリッドに位置し、3号住居跡精査終了後約10cm下位のⅣ層上面で円形状の黒色土の広がりによって検出された。**平面形**は円形を呈し、**規模**は開口部で55.0×52.0cm、底部で45.0×41.0cm、深さは最大で18.4cmである。**底面**は概ね平坦で、目立つ凹凸は見られない。**覆土**は黒色土の単層でTo-Nbが混入する。**遺物**は出土していない。**時期**は3号住居跡との重複関係から縄文時代後期中葉以前と思われる。

4号土坑（第31図、写真図版18）

11Kグリッドに位置し、Ⅲc層除去後Ⅳ層上面で円形状の黒色土の広がりによって検出された。**平面形**は南西側がやや張り出す円形状で、**規模**は開口部で92.0×87.0cm、底部で79.0×72.0cm、深さは最大で16.0cmである。**底面**は中央部が僅かにくぼみ、丸みを帯びている。東側では溝状に一段深い部分が見られる。**覆土**は黒色土主体で構成され、全体的にしまっている。To-Nbの多寡で4層に分層された。下層の方が多く含まれている。**遺物**は出土していない。**時期**の詳細は出土遺物がないため不明である。

5号土坑（第31図、写真図版18）

16Kグリッドに位置し、Ⅱ層除去後Ⅲc層上面で円形状のTo-Cuの広がりによって検出された。**平面形**は

楕円形を呈し、東西方向が長い。断面形はフラスコ状を呈す。**規模**は開口部で87.0×81.0cm、底部で125.0×109.0cm、深さは最大で64.0cmである。底面は概ね平坦である。**覆土**は5層に分層され、黒～黒褐色土混じりのTo-Cu層の上層、To-Cuの2次堆積層と思われる中層、To-Cuの1次堆積層である下層、黒褐色土に褐色土が混入する最下層で構成される。**遺物**は出土していない。**時期**は覆土下層にTo-Cuの1次堆積層が確認されることから縄文時代前期以前と思われる。

6号土坑（第31図、写真図版19）

16Lグリッドに位置し、Ⅲc層中～下面で円形状の黒褐色土の広がりによって検出された。なお、調査担当者のミスで覆土上面は掘り下げてしまっている。**平面形**は円形状を呈し、断面形はフラスコ状を呈す。**規模**は開口部で107.0×107.0cm、底部で123.0×116.0、深さは最大で36.0cmである。**底面**は概ね平坦であるが西側が高くなっている。**覆土**は5層に分層された。上層は上記の通り断面記録を欠くが黒褐色土主体であった。中層は暗褐色土主体で、下層は黒褐色土主体で構成される。**遺物**は覆土中から磨滅した縄文土器片が出土した。**時期**の詳細は判断できるだけの出土遺物がないため不明である。

7号土坑（第31図、写真図版19）

11Kグリッドに位置し、3号住居跡の下位約10cm、Ⅳ層上面で円形状の黒色土の広がりによって検出された。**平面形**は円形状を呈し、**規模**は開口部で79.0×75.0cm、底部は長軸63.0cm、短軸48.0cmである。深さは最大で46.0cmである。**底面**は概ね平坦である。**覆土**は6層に分層され、黒色土主体の上層と黒褐色土主体の中～下層で構成される。中～下層にはTo-Nbが混入する。**遺物**は出土していない。**時期**は出土遺物がなく、断定はできないが3号住居跡との重複関係から縄文時代後期中葉以前と思われる。

8号土坑（第32図、写真図版19）

15L～16Lグリッドに位置し、Ⅱ層除去後Ⅲc層上面で楕円形状の黒褐色土の広がりによって検出された。**平面形**は隅丸張胴形を呈し、**規模**は開口部で99.0×87.0cm、底部で75.0×69.0cm、深さは最大で43.0cmである。**底面**は概ね平坦で、目立った凹凸は見られない。**覆土**は黒褐色土を主体に構成され、3層に分層される。中～下層にはTo-Cuが混入する。**遺物**は覆土中層から磨滅した縄文土器片が出土した。**時期**の詳細は判断できるだけの出土遺物がないため不明である。

9号土坑（第32図、写真図版19）

15K～16Kグリッドに位置し、Ⅱ層除去後Ⅲc層上面で円形状の黒色土の広がりによって検出された。直下には31号土坑があり、この土坑の大部分が埋没した後で当遺構は構築されている。**平面形**は円形を呈し、**規模**は開口部で96.0×96.0cm、底部で44.0×33.0cm、深さは最大で68.0cmである。**底面**は開口部に比べて極端に小さく、中央部がややくぼみ丸みを帯びている。**覆土**は黒色土主体の上層と黒褐色土主体の中～下層で構成され、5層に分層される。中層にはTo-Cuが混入する。**遺物**は出土していない。**時期**の詳細は出土遺物がないため不明である。

10号土坑（第32図、写真図版20）

15K～16Kグリッドに位置する。掘り込みはⅢc最上面から行われているが確認できず、5～10cm下位で

円形状の黒色土の広がりによって検出された。南西側は調査区外に広がっている。確認された部分から判断すると**平面形**は円形を呈すと思われる。**規模**は開口部で92.0×(68.0)cm、底部で86.0×(65.0)cm、深さは最大で26.0cmである。**底面**は概ね平坦で、目立った凹凸は見られない。底面で大小7個の礫が確認されたが、使用の痕跡はみられなかった。**覆土**は黒色土主体で構成され、全体にTo-Cuが混入する。礫以外の**遺物**は出土していない。**時期**の詳細は出土遺物がないため不明である。

11号土坑（第32図、写真図版20）

15Lグリッドに位置し、Ⅱ層除去後Ⅲc層上面で円形状の黒褐色土の広がりによって検出された。**平面形**は楕円形を呈し、**規模**は開口部で70.0×60.0cm、底部で61.0×50.0cm、深さは最大で12.0cmである。**底面**は概ね平坦で、目立った凹凸は見られない。**覆土**は黒褐色土の単層で構成され、黒色土ブロックが混入する。**遺物**は覆土中から磨滅した縄文土器片が出土した。**時期**の詳細は判断できるだけの出土遺物がないため不明である。

12号土坑（第32図、写真図版20）

14L～15Lグリッドに位置し、Ⅱ層除去後Ⅲc層上面で円形状の黒褐色土の広がりによって検出された。**平面形**は隅丸張胴形を呈し、**規模**は開口部で55.0×54.0cm、底部で50.0×49.0cm、深さは最大で22.0cmである。**底面**は概ね平坦で、目立った凹凸は見られない。**覆土**は黒褐色土の単層で構成され、暗褐色土粒が混入する。**遺物**は出土していない。**時期**の詳細は出土遺物がないため不明である。

13号土坑（第32図、写真図版20）

14Kグリッドに位置し、Ⅲc層上面で楕円形状の黒褐色土の広がりによって検出された。**平面形**は楕円形を呈し、**規模**は開口部で69.0×58.0cm、底部で51.0×51.0cm、深さは最大で17.0cmである。**底面**は中央部が僅かにくぼみ、丸みを帯びている。**覆土**は黒褐色土主体で構成され、底面壁際には崩落したと思われるTo-Cu混じりの暗褐色土が混入する。**遺物**は覆土中から磨滅した縄文土器片が出土した。**時期**の詳細は判断できるだけの出土遺物がないため不明である。

14号土坑（第32図、写真図版21）

12Lグリッドの調査区際に位置し、Ⅴ層上面で円形状の黒色土の広がりによって検出された。東側は調査区外に広がっている。調査区際の断面からはⅢc層上面からの掘り込みが確認できるが、検出時には確認できなかった。東側が調査区外に広がるため全体の形は判然としないが、確認された部分から**平面形**は円形もしくは楕円形を呈すと思われる。**規模**は開口部で(80.0)×(38.0)cm、底部で(69.0)×(29.0)cm、調査区際の断面からわかる最大の深さは75.0cmである。**底面**は丸みを帯びている。**覆土**は黒色土主体で構成される。北壁際には崩落したと思われるTo-Nb混じりの暗褐色土が混入する。**遺物**は出土していない。**時期**の詳細は出土遺物がないため、断定はできないが、掘り込まれている層位から判断すると、縄文時代前期に属すると思われる。

15号土坑（第32図、写真図版21）

13Lグリッドに位置し、Ⅲc層上面で円形状の黒褐色土の広がりによって検出された。**平面形**は楕円形を

呈し、**規模**は開口部で61.0×53.0cm、底部で54.0×43.0cm、深さは最大で18.0cmである。**底面**は概ね平坦で、目立った凹凸は見られない。**覆土**は黒褐色土の単層である。**遺物**は出土していない。**時期**の詳細は出土遺物がないため不明である。

16号土坑（第32図、写真図版21）

13Jグリッドに位置し、Ⅲａ層で楕円形状の黒色土の広がりによって検出された。西側の一部が調査区外に広がっている。**平面形**は長楕円形を呈し、**規模**は開口部で139.0×(88.0)cm、底部で127.0×(77.0)cm、深さは最大で28.0cmである。**底面**は概ね平坦で、目立った凹凸は見られない。**覆土**は黒色土の単層である。**遺物**は出土していない。**時期**の詳細は出土遺物がないため不明である。

17号土坑（第32・57図、写真図版21・45）

8Hグリッドに位置し、Ⅲａ層で円形状の黒色土の広がりによって検出された。**平面形**は円形を呈し、**規模**は開口部で99.0×89.0cm、底部で86.0×78.0cm、深さは最大で23.0cmである。**底面**は概ね平坦で、目立った凹凸は見られない。**覆土**は黒色土主体の上層と黒褐色土主体の下層で構成される。全体に黄橙色パミスが混入する。**遺物**は覆土中から179・180の縄文土器片が出土した。**時期**は出土遺物が少ないため断定はできないが、縄文時代後期と思われる。

18号土坑（第33・57図、写真図版22・45）

7H～8Hグリッドに位置し、Ⅲａ層で円形状の黒色土の広がりによって検出された。**平面形**は円形状を呈し、**規模**は開口部で119.0×105.0cm、底部で103.0×93.0cm、深さは最大で9.0cmである。**底面**はやや凹凸が見られる。調査員の手違いによって注記を欠くが、**覆土**は黒色土の単層であった。**遺物**は覆土中から181の石器が出土した。**時期**の詳細は判断できるだけの出土遺物がないため不明である。

19号土坑（第33・57図、写真図版22・45）

14Jグリッドに位置する。実際の掘り込みはⅡ層から行われているが、確認できず約20cm下位で方形状の暗褐色土の広がりとして検出された。西側は調査区外に広がっている。全体像は不明であるが、確認された部分から判断すると**平面形**は隅丸方形もしくは隅丸長方形を呈すと思われる。**規模**は開口部で(49.0)×78.0cm、底部で(42.0)×64.0cm、深さは最大で24.0cmである。**底面**は概ね平坦である。**覆土**は暗褐色土主体で構成される。上位には褐色土ブロックが混入する。**遺物**は覆土中から182の縄文土器が出土した。**時期**は出土遺物が少ないため断定はできないが、縄文時代後期と思われる。

20号土坑（第33図、写真図版22）

10Iグリッドに位置し、4号住居状遺構の精査終了後、床面直下で円形状の黒褐色土の広がりによって検出された。4号住居状遺構に伴う可能性も考えられる。**平面形**は楕円形を呈し、**規模**は開口部で134.0×118.0cm、底部で125.0×110.0cm、深さは最大で15.0cmである。**底面**には中央にやや浅い窪みが2箇所確認される。木根などの攪乱の可能性がある。**覆土**は黒褐色土の単層である。**遺物**は出土していない。**時期**は出土遺物がないため断定はできないが、4号住居状遺構との重複関係から縄文時代後期と思われる。

21号土坑（第33図、写真図版23）

８Ｉ～８Ｊグリッドに位置する。表土除去後Ⅶ層で10～30㎜の礫の集中とともに円形状の黒褐色土の広がりによって検出された。**平面形**はひょうたん形を呈し、**規模**は開口部の長軸が345.0㎝、北西側の短軸が146.0㎝、南東側の短軸が116.0㎝で、底部の長軸が330.0㎝、北西側の短軸が125.0㎝、南西側の短軸が116.0㎝である。深さは最大で28.0㎝である。**底面**は東側が一段高くなっているが、目立った凹凸は見られない。**覆土**は６層に分層され、黒褐色土主体で構成される。中央のくびれ部分では礫とともに暗褐色土の堆積が確認される。**遺物**は西側の部分と東側の部分の境で自然礫とともにイノシシと思われる獣骨（頭骨一個分の小破片数点、左右下顎犬歯各１点、左第三後臼歯１点、後臼歯破片１点）が出土した。**時期**は礫とともに出土した獣骨から近世以降と思われる。

22号土坑（第33・57図、写真図版22・45）

７Ｈグリッドに位置する。Ⅲａ層で半円状の黒色土の広がりによって検出されたが、第１トレンチの断面を観察すると、実際の掘り込みはⅡ層から行われていることが確認された。西側半分はトレンチによって底面直上まで削られてしまっている。**覆土**は調査員の手違いによって上層は削られてしまって記録は残っていないが、黒色土主体で構成されている。**平面形**は楕円形を呈す。**規模**は西側がトレンチによって削られてしまったため推定であるが、開口部で(118.0)×(102.0)㎝、底部で104.0×91.0㎝、深さは最大で18.0㎝である。**底面**は東側がやや浅く窪んでいる。**遺物**は覆土中から183～188の縄文土器片が出土した。**時期**は出土遺物が少ないため断定はできないが、縄文時代後期中葉～後葉と思われる。

23号土坑（第33図、写真図版23）

14Ｌグリッドに位置し、Ⅲａ層で円形状の黒褐色土の広がりによって検出された。**平面形**は隅丸胴張形を呈し、**規模**は開口部で63.0×61.0㎝、底部で52.0×50.0㎝、深さは最大で16.0㎝である。**底面**は中央が若干くぼんでいる。**覆土**は黒褐色土で構成され、To-Nbの多寡によって２層に分層される。**遺物**は出土していない。**時期**の詳細は出土遺物がないため不明である。

24号土坑（第33図、写真図版23）

14Ｌグリッドに位置し、Ⅲａ層で円形状の黒褐色土の広がりによって検出された。**平面形**は円形を呈し、**規模**は開口部で53.0×51.0㎝、底部で48.0×45.0㎝、深さは最大で15.0㎝である。**床面**は概ね平坦である。**覆土**は黒褐色土で構成され、To-Nbの多寡によって３層に分層される。**遺物**は出土していない。**時期**の詳細は出土遺物がないため不明である。

25号土坑（第33図、写真図版24）

14Ｌグリッドに位置し、Ⅲａ層で円形状の暗褐色土の広がりによって検出された。**平面形**は隅丸方形状を呈し、**規模**は開口部で68.0×60.0㎝、底部で60.0×50.0㎝、深さは最大で21.0㎝である。**底面**には南西側が一段低くなる部分が見られる。**覆土**は３層に分層され、上層は暗褐色土、下層は黒褐色土で構成される。全体にTo-Nbが混入する。**遺物**は出土していない。**時期**の詳細は出土遺物がないため不明である。

26号土坑（第33・57図、写真図版24・46）

10Kグリッドに位置し、Ⅳ層で円形状の黒褐色土の広がりによって検出された。**平面形**は円形を呈し、**規模**は開口部で57.0×53.0cm、底部で52.0×44.0cm、深さは最大で8.0cmである。**底面**は概ね平坦で、目立った凹凸はみられない。**覆土**は黒褐色土の単層で構成される。**遺物**は覆土最上位から189の土器が出土した。189はⅣ群３類ａの土器で、十腰内Ⅲ式に相当する土器である。**時期**は出土遺物から縄文時代後期中葉と思われる。

27号土坑（第33図、写真図版24）

10K～11Kグリッドに位置し、Ⅳ層で円形状の黒褐色土の広がりによって検出された。**平面形**は円形を呈し、**規模**は開口部で56.0×52.0cm、底部で45.0×44.0cm、深さは最大で16.0cmである。**底面**は概ね平坦で、目立った凹凸はみられない。**覆土**は黒褐色土の単層で構成される。**遺物**は出土していない。**時期**は出土遺物がないため断定はできないが、26号土坑に形態が類似することから縄文時代後期中葉と思われる。

28号土坑（第33図、写真図版24）

11Kグリッドに位置し、Ⅳ層で円形状の黒褐色土の広がりによって検出された。**平面形**は円形を呈し、**規模**は開口部で52.0×49.0cm、底部で45.0×39.0cm、深さは最大で19.0cmである。**底面**は概ね平坦である。**覆土**は黒褐色土の単層で構成される。**遺物**は出土していない。**時期**は出土遺物がないため断定はできないが、27号土坑と同様、26号土坑に形態が類似することから縄文時代後期中葉と思われる。

29号土坑（第34・57図、写真図版25・46）

11Jグリッドに位置し、３号住居跡の精査終了後、床面から約５cm下位のⅣ層で円形状の黒褐色土の広がりによって検出された。**平面形**は円形を呈し、**規模**は開口部で104.0×100.0cm、底部で99.0×95.0cm、深さは最大で21.0cmである。**底面**は概ね平坦である。**覆土**は黒褐色土主体で構成され、To-Nbの多寡によって３層に分層される。**遺物**は覆土下位から190～193の縄文土器片が出土した。**時期**は出土遺物が少ないため断定はできないが、３号住居跡より下層で検出されていることから縄文時代後期中葉以前と思われる。

30号土坑（第34・57図、写真図版25・46）

14Kグリッドに位置し、Ⅲａ層で円形状の黒褐色土の広がりによって検出された。**平面形**は円形を呈し、**規模**は開口部で56.0×50.0cm、底部で42.0×39.0cm、深さは最大で18.0cmである。**床面**は概ね平坦で、西側にやや傾斜している。**覆土**は黒褐色土の単層で構成される。**遺物**は覆土上位で垂直に立てられたように194と195の土器片が出土した。194・195ともに粗製の深鉢の口縁部片である。**時期**は出土遺物から縄文時代後期と思われる。

31号土坑（第34図、写真図版25）

15K～16Kグリッドに位置する。15K・16Kグリッド間の断面に立ち上がりが確認できたためにⅣ層上面で広げたところ、暗褐色土の広がりによって検出された。９号土坑は当遺構の埋没後に構築されていることから（新）９号土坑→（旧）31号土坑である。**平面形**は円形を呈し、断面形はフラスコ状を呈す。**規模**は開口部で120.0×112.0cm、底部で120.0×120.0cm、深さは最大で70.0cmである。上半部の壁は一部が崩落しているため凸凹している。**底面**は概ね平坦である。**覆土**は８層に分層され、壁の崩落土である上層と黒褐色土主

体で構成される下層に大きく分けられる。下層の黒褐色土にはさまれてTo-Cuの1次堆積層が確認される。**遺物**は出土していない。**時期**は覆土の堆積状況から縄文時代前期中葉以前と思われる。

32号土坑（第34図、写真図版25）

16Lグリッドに位置し、Ⅵ層で円形状の黒色土の広がりによって検出された。**平面形**は円形を呈し、断面形はフラスコ状を呈す。**規模**は開口部で128.0×116.0cm、底部で138.0×136.0cm、深さは最大で63.0cmである。**底面**は概ね平坦で、中央に副穴を1基伴う。副穴の規模は開口部で24.0×20.0cmである。**覆土**は13層に分層される。上層は黒～黒褐色土、中層は暗褐色土、下層は黒褐色土主体で構成される。**遺物**は覆土中から剥片が1点出土した。**時期**の詳細は判断できるだけの出土遺物がないため不明である。

33号土坑（第34図、写真図版26）

7H～8Hグリッドに位置し、Ⅲa層で楕円形状の黒色土の広がりによって検出された。**平面形**は隅丸長方形状を呈す。**規模**は開口部で116.0×74.0cm、底部で110.0×74.0cm、深さは最大で18.0cmである。**底面**はやや凹凸が見られる。**覆土**は黒色土の単層で構成される。**遺物**は出土していない。**時期**の詳細は出土遺物がないため不明である。

34号土坑（第34・57図、写真図版26・46）

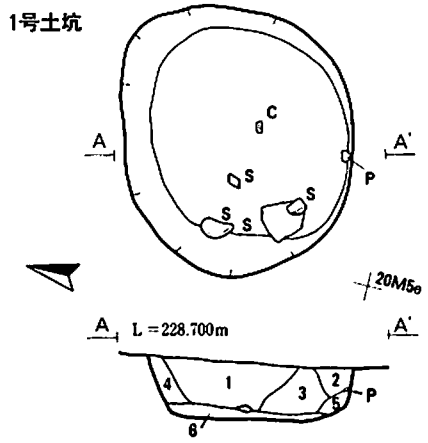
8Iグリッドに位置する。6号住居状遺構の精査終了後、Ⅲa層で黒色土の広がりとして検出された。6号住居状遺構と重複しており、当遺構が切られている事から（新）6号住居状遺構→（旧）34号土坑である。**平面形**は楕円形を呈し、**規模**は開口部で135.0×112.0cm、底部で125.0×101.0cm、深さは最大で15.0cmである。**底面**は概ね平坦である。**覆土**は黒色土の単層で構成される。底面から覆土下位にかけては土器片とともにこぶし大の亜角礫の混入が確認された。**遺物**は底面から覆土下位にかけて196の土器が出土した。**時期**は6号住居状遺構との重複関係から縄文時代後期前葉～中葉と思われる。

35号土坑（第34図、写真図版26）

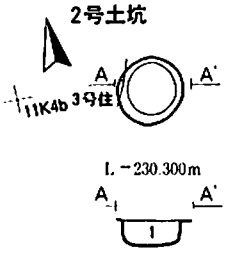
5Fグリッドに位置する。17号住居跡の炉の精査終了後、直下で楕円形状の黒色土の広がりとして検出された。17号住居跡と重複しており、当遺構が切られている事から（新）17号住居跡→（旧）35号土坑である。**平面形**は楕円形を呈し、**規模**は開口部で107.0×81.0cm、底部で71.0×47.0cm、深さは最大で66.0cmである。**底面**は北側で一段低くなっている。**覆土**は調査員の手違いにより記録を欠くが、黒色土主体で構成される。**遺物**は出土していない。**時期**は17号住居跡との重複関係から縄文時代後期後葉以前と思われる。

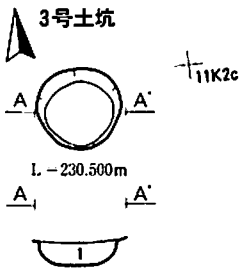
36号土坑（第34・57図、写真図版26・46）

11Jグリッドに位置し、3号住居跡精査終了後、Ⅲa層で黒色土の広がりとして検出された。3号住居跡に当遺構が切られている事から（新）3号住居跡→（旧）36号土坑である。**平面形**は円形を呈し、**規模**は開口部で93.0×80.0cm、底部で85.0×73.0cm、深さは最大で36.0cmである。**底面**は中央が若干くぼんでいる。**覆土**は3層に分層され、黒色土主体で構成される。**遺物**は覆土中から197の石器が出土した。**時期**は出土遺物が少ないため断定はできないが、3号住居跡との重複関係から縄文時代後期中葉以前と思われる。



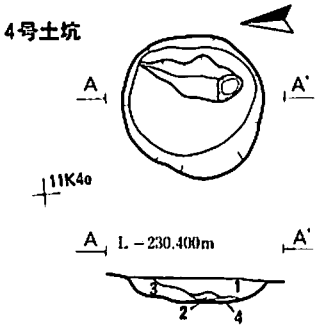
1号土坑
1 10YR2/3黒褐 シルト 粘性弱 しまり弱 礫・黄色・灰色土粒少量
木根多量混入
2 10YR4/4褐 シルト 粘性弱 しまり弱 黒褐色土混入、下部は黄色が
強くなっている
3 10YR3/2黒褐 シルト 粘性弱 しまり弱 全体が黄色がかっている
4 10YR2/3黒褐 シルト 粘性弱 しまり弱 黄色土粒少量混入
5 10YR6/8明黄褐 シルト 粘性中 しまり弱
6 10YR3/2黒褐 シルト 粘性弱 しまり弱 黄色土粒少量混入



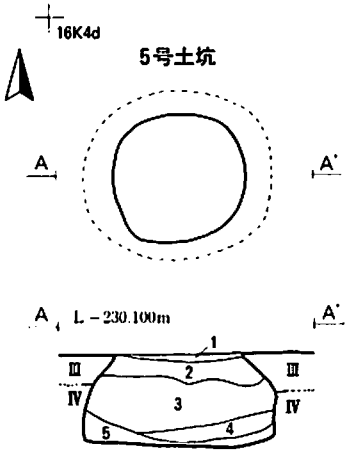


2号土坑
1 10YR2/1.5黒～黒褐 シルト 粘性中 しまり弱 To-Cu中ブロック・To-Nb少量混入
ボソボソしている

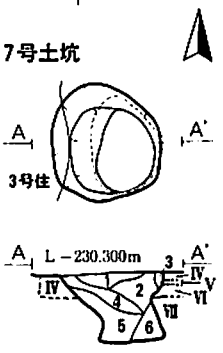
3号土坑
1 10YR2/1黒 シルト 粘性中 しまり中 To-Nb中量混入

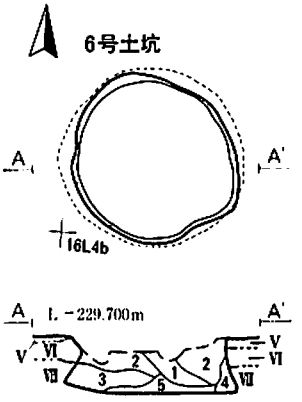


4号土坑
1 10YR1.7/1黒 シルト 粘性中 しまり強 To-Nb微量混入
2 10YR2/1黒 シルト 粘性中 しまり強 To-Nb中量混入
3 10YR1.7/1黒 シルト 粘性中 しまり強 To-Nb少量混入
4 10YR1.7/1黒 シルト 粘性中 しまり強 To-Nb中量混入



5号土坑
1 10YR5/8黄褐 軽石 粘性中 しまり弱 To-Cuの2次堆積層
黒褐色土中量混入
2 10YR6/8明黄褐 軽石 粘性弱 しまり弱 To-Cuの2次堆積層
黒色土粒まばらに混入
3 10YR5/8黄褐 軽石 粘性中 しまり弱 To-Cuの2次？堆積層
4 10YR6/8明黄褐 軽石 粘性中 しまり弱 To-Cuの堆積層
5 10YR2/3黒褐 シルト 粘性中 しまり弱 褐色シルト多量混入



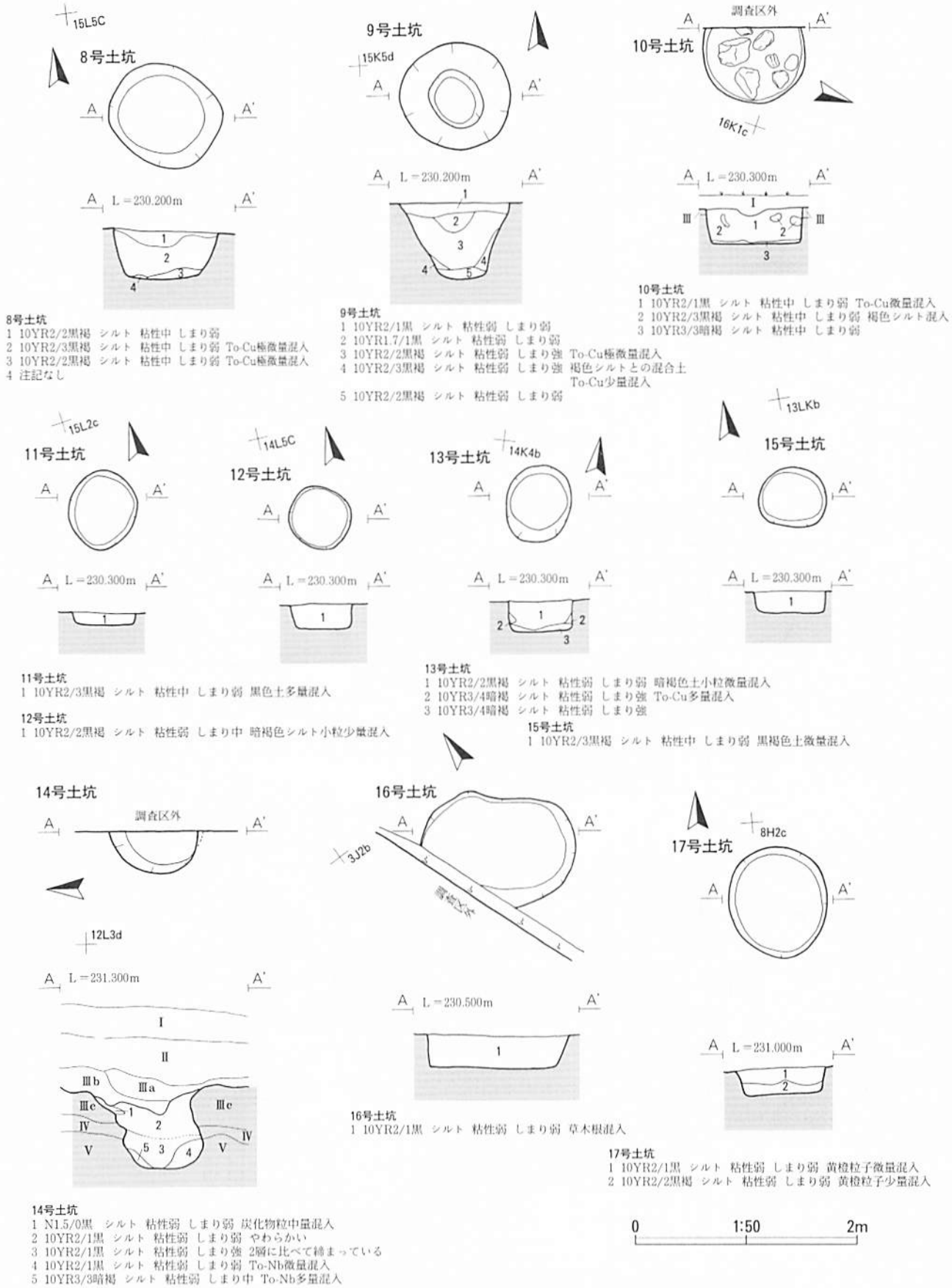


7号土坑
1 10YR2/1黒 シルト 粘性弱 しまり弱
2 10YR2/2黒褐 シルト 粘性弱 しまり弱 To-Nb中量混入
3 10YR3/4暗褐 シルト 粘性弱 しまり弱 To-Nb少量混入
4 10YR2/2黒褐 シルト 粘性弱 しまり弱 To-Nb少量混入
5 10YR2/2黒褐 シルト 粘性弱 しまり弱 To-Nb微量混入
4層よりはかたくしまっている
6 10YR2/2黒褐 シルト 粘性中 しまり弱 To-Nb少量、To-H中量混入

6号土坑
1 10YR2/2黒褐 シルト 粘性中 しまり強
2 10YR3/4暗褐 シルト 粘性強 しまり弱 To-Nb極微量混入
3 10YR2/3黒褐 シルト 粘性中 しまり強
4 10YR2/3黒褐 シルト 粘性中 しまり弱 To-Nb微量混入、やわらかい
5 10YR2/3黒褐 シルト 粘性中 しまり強 上面にTo-Nbがみられる

0 1:50 2m

第31図　1号土坑～7号土坑



8号土坑
1 10YR2/2黒褐 シルト 粘性中 しまり弱
2 10YR2/3黒褐 シルト 粘性中 しまり弱 To-Cu極微量混入
3 10YR2/2黒褐 シルト 粘性中 しまり弱 To-Cu極微量混入
4 注記なし

9号土坑
1 10YR2/1黒 シルト 粘性弱 しまり弱
2 10YR1.7/1黒 シルト 粘性弱 しまり弱
3 10YR2/2黒褐 シルト 粘性弱 しまり強 To-Cu極微量混入
4 10YR2/3黒褐 シルト 粘性弱 しまり強 褐色シルトとの混合土 To-Cu少量混入
5 10YR2/2黒褐 シルト 粘性弱 しまり弱

10号土坑
1 10YR2/1黒 シルト 粘性中 しまり弱 To-Cu微量混入
2 10YR2/3黒褐 シルト 粘性中 しまり弱 褐色シルト混入
3 10YR3/3暗褐 シルト 粘性中 しまり弱

11号土坑
1 10YR2/3黒褐 シルト 粘性中 しまり弱 黒色土多量混入

12号土坑
1 10YR2/2黒褐 シルト 粘性弱 しまり中 暗褐色シルト小粒少量混入

13号土坑
1 10YR2/2黒褐 シルト 粘性弱 しまり弱 暗褐色土小粒微量混入
2 10YR3/4暗褐 シルト 粘性弱 しまり強 To-Cu多量混入
3 10YR3/4暗褐 シルト 粘性弱 しまり強

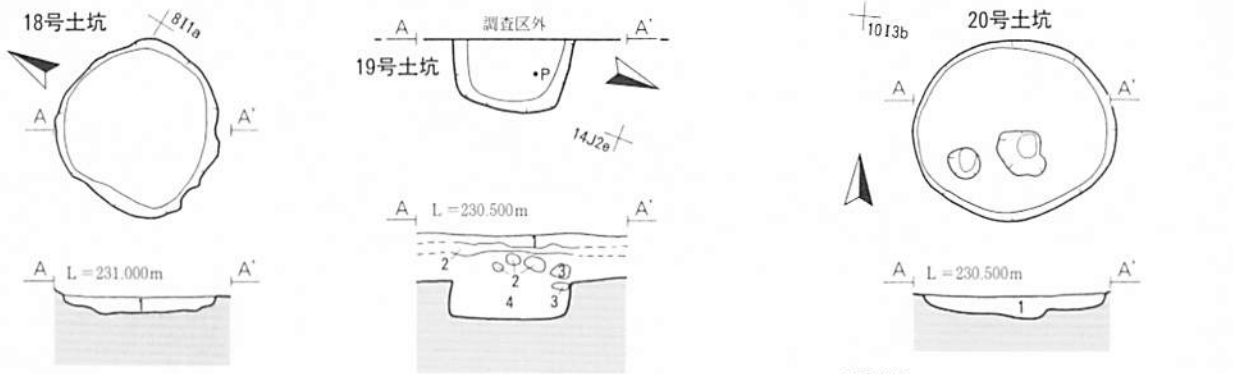
15号土坑
1 10YR2/3黒褐 シルト 粘性中 しまり弱 黒褐色土微量混入

14号土坑
1 N1.5/0黒 シルト 粘性弱 しまり弱 炭化物粒中量混入
2 10YR2/1黒 シルト 粘性弱 しまり弱 やわらかい
3 10YR2/1黒 シルト 粘性弱 しまり強 2層に比べて締まっている
4 10YR2/1黒 シルト 粘性弱 しまり弱 To-Nb微量混入
5 10YR3/3暗褐 シルト 粘性弱 しまり中 To-Nb多量混入

16号土坑
1 10YR2/1黒 シルト 粘性弱 しまり弱 草木根混入

17号土坑
1 10YR2/1黒 シルト 粘性弱 しまり弱 黄橙粒子微量混入
2 10YR2/2黒褐 シルト 粘性弱 しまり弱 黄橙粒子少量混入

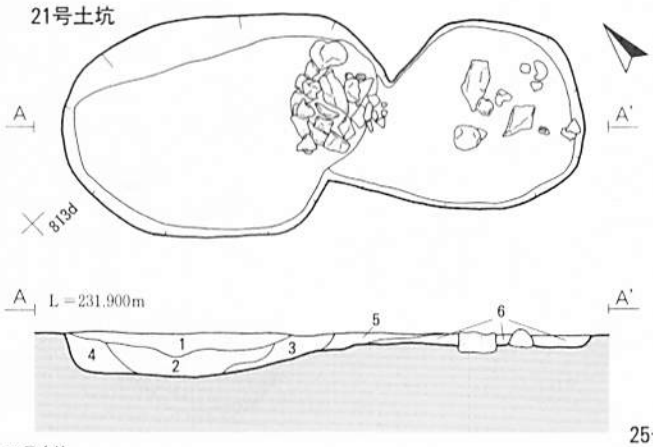
第32図　8号土坑～17号土坑



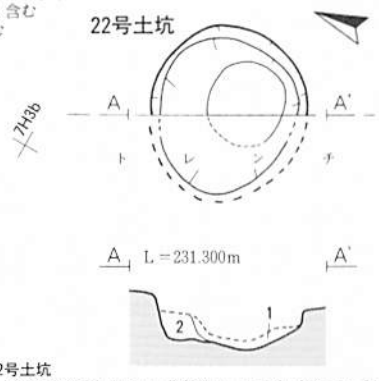
18号土坑
注記なし

19号土坑
1 10YR2/2黒褐 シルト 粘性弱 しまり弱 現表土、木根多量混入
2 10YR2/2黒褐 シルト 粘性弱 しまり弱 木根少量、礫極微量混入
3 10YR4/6褐 シルト 粘性中 しまり弱 2層土を上方に薄く含む
4 10YR3/3暗褐 シルト 粘性中 しまり弱 3層土を薄く含む

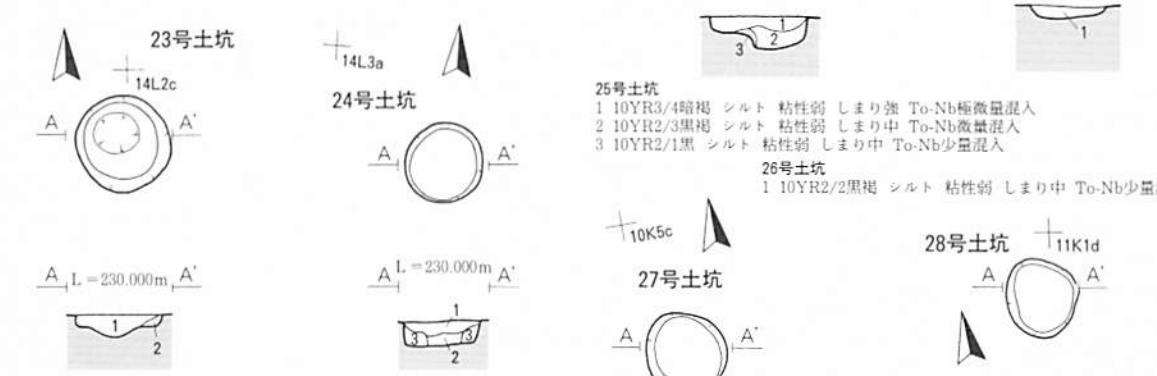
20号土坑
1 10YR2/2黒褐 砂質シルト To-Cuしみ状にみられる



21号土坑
1 10YR3/2黒褐 シルト 粘性弱 しまり弱 にぶい黄橙色粘土質土少量
径10mm程の亜角礫中量混入
2 10YR2/2黒褐 シルト 粘性弱 しまり中 明黄褐色粘土質シルト中粒少量
径10～30mmの亜角礫少量混入
3 10YR3/4暗褐 シルト 粘性中 しまり弱 径10～30mmの亜角礫混入
4 2.5Y3/2黒褐 シルト 粘性中 しまり中 にぶい黄色砂質シルトとの混合土
径10mm程の亜角礫中量混入
5 10YR3/3暗褐 シルト 粘性弱 しまり弱 明黄褐色粘土質シルト小粒少量
径10～30mmの亜角礫少量混入
6 10YR6/6明黄褐 粘土質シルト 粘性中 しまり強 こぶし大の亜角礫少量混入



22号土坑
1 10YR1.7/1黒 シルト 粘性強 しまり中 径2～5mm程の小礫中量
炭化物粒少量混入
灰黄色粒微量混入
2 10YR2/1黒 シルト 粘性中 しまり中 To-Cuモヤ状に少量混入



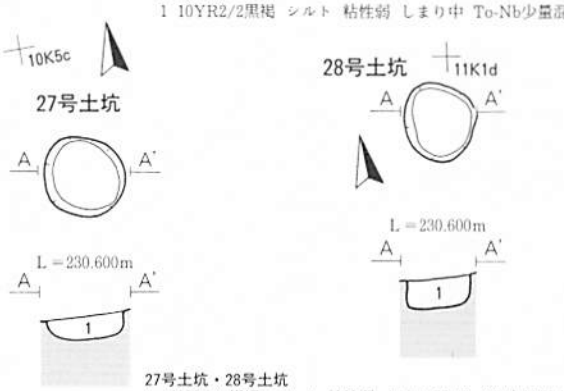
25号土坑
1 10YR3/4暗褐 シルト 粘性弱 しまり強 To-Nb極微量混入
2 10YR2/3黒褐 シルト 粘性弱 しまり中 To-Nb微量混入
3 10YR2/1黒 シルト 粘性弱 しまり中 To-Nb少量混入

26号土坑
1 10YR2/2黒褐 シルト 粘性弱 しまり中 To-Nb少量混入

23号土坑
1 10YR2/3黒褐 シルト 粘性弱 しまり強 To-Nb微量混入
2 10YR2/2黒褐 シルト 粘性弱 しまり中 To-Nb少量混入

24号土坑
1 10YR2/3黒褐 シルト 粘性弱 しまり強 To-Nb極微量混入
2 10YR2/3黒褐 シルト 粘性弱 しまり強 To-Nb微量混入、1層より暗い
3 10YR2/2黒褐 シルト 粘性弱 しまり中 To-Nb少量混入

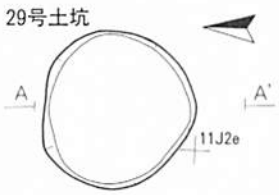
0 1:50 2m



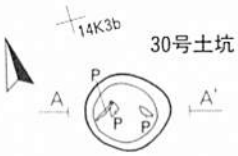
27号土坑・28号土坑
1 10YR2/2黒褐 シルト 粘性弱 しまり弱 To-Nb少量混入

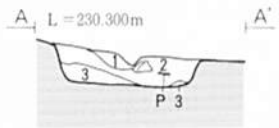
第33図　18号土坑～28号土坑

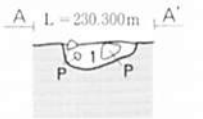
29号土坑



30号土坑



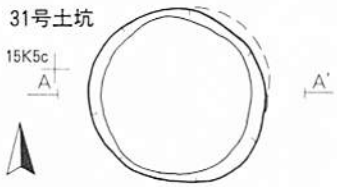


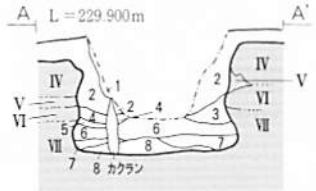


29号土坑
1 10YR2/3黒褐 シルト 粘性弱 しまり中 To-Nb極微量、角礫多量混入
2 10YR2/2黒褐 シルト 粘性弱 しまり中 To-Nb多量、炭化物粒少量混入
3 10YR2/3黒褐 シルト 粘性弱 しまり中 To-Nb少量、炭化物粒極微量混入
径10～30mmの亜角礫混入

30号土坑
1 10YR2/2黒褐 シルト 粘性弱 しまり中 黄褐色粒まばらに混入

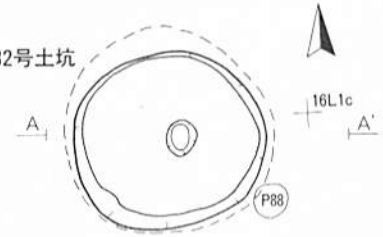
31号土坑

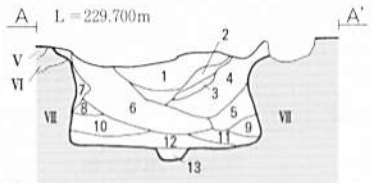




31号土坑
1 10YR2/2黒褐 シルト 粘性弱 粘性中 To-Cu微量混入
Ⅲ層土がしみ状にみられる
2 10YR3/4暗褐 シルト 粘性弱 粘性強 To-Cu微量混入（Ⅲ層相当土）
3 10YR2/2黒褐 シルト 粘性弱 粘性弱 To-Nb中量混入
4 10YR2/3黒褐 シルト 粘性弱 粘性中 To-Nb微量混入
5 10YR3/4暗褐 シルト 粘性弱 粘性中
6 10YR2/2黒褐 シルト 粘性弱 粘性強 東側では暗褐色粘土質シルト混入
7 2.5Y7/8黄 軽石 粘性弱 粘性弱 To-Cu層
8 10YR2/3黒褐 シルト 粘性中 粘性中 To-Nb極微量混入

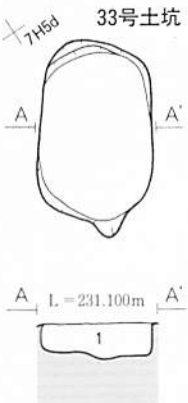
32号土坑



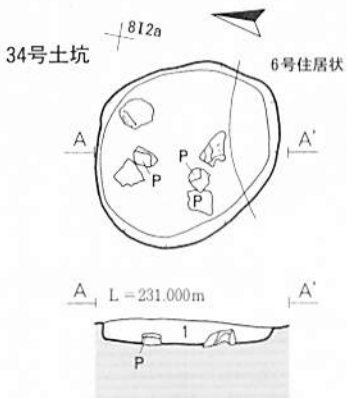


32号土坑
1 10YR2/1黒 シルト 粘性弱 しまり弱 To-Nb極微量混入
2 10YR2/3黒褐 シルト 粘性中 しまり中
3 10YR3/4暗褐 シルト 粘性中 しまり弱 To-Nb少量混入
4 10YR3/4暗褐 シルト 粘性中 しまり弱 黒褐色シルトとの混合土
5 10YR2/2黒褐 シルト 4層中ブロック中量混入
6 10YR2/2黒褐 シルト 粘性中 しまり中
7 10YR2/2黒褐 シルト 粘性弱 しまり中 To-Nb極微量混入
8 10YR4/6褐 シルト 粘性弱 しまり強 上面にTo-Nb層がみられる
9 10YR4/6褐 シルト 粘性弱 しまり強
10 10YR2/2黒褐 シルト 粘性中 しまり中 To-Nb微量混入
11 10YR2/3黒褐 シルト 粘性中 しまり中 To-Nb微量混入
12 10YR3/2黒褐 シルト 粘性中 しまり中 Ⅶ層小ブロック部分的にみられる
13 10YR3/2黒褐 シルト 粘性中 しまり中

33号土坑

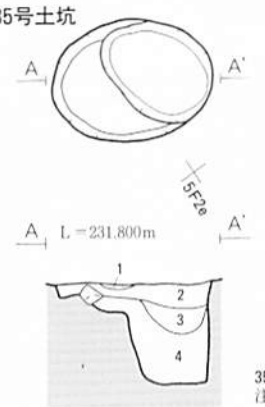


34号土坑



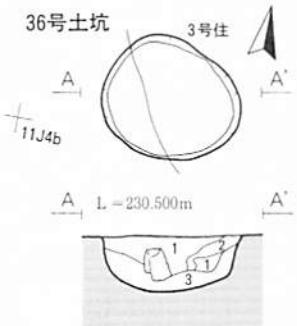
33号土坑・34号土坑
1 10YR2/1黒 シルト 粘性弱 しまり中 褐色砂質シルトしみ状にみられる

35号土坑



35号土坑
注記なし

36号土坑



36号土坑
1 7.5YR2/1黒 シルト 粘性中 しまり強 To-Cuブロック少量、To-Nb微量混入
径10mm程の亜角礫少量混入
2 10YR2/2黒褐 シルト 粘性中 しまり強 To-Nb微量、径10mm程の亜角礫少量混入
3 7.5YR7/1黒 シルト 粘性中 しまり強 にぶい黄褐色シルト粒微量、To-Nb微量
径50mm程の礫微量混入

0 1:50 2m

第34図 29号土坑～36号土坑

3．焼土遺構

9基を登録している。調査区北側の4H～5Hグリッドで3基、中央部の12Lグリッドで2基、南側の17L～20Mグリッドで4基検出した（遺構図版内では○号焼土と表記）。

1号焼土遺構（第35図、写真図版27）

調査区中央部の12Lグリッドに位置し、Ⅲa層上面で検出された。焼土は37.0×35.0cmの範囲に不整形に広がり、かたくしまっている。焼土の発達は良好で、厚さは最大6.0cmである。**遺物**は出土していない。**時期**の詳細は遺物が伴わないため不明である。

2号焼土遺構（第35図、写真図版27）

調査区中央部の12Lグリッドに位置し、Ⅱ層で検出された。焼土は27.0×24.0cmの範囲に楕円形状に広がり、かたくしまっている。焼土の発達は良好で、厚さは最大3.0cmである。焼土層に21.0×11.0cmの礫がはりついて出土した。この礫には使用痕跡は認められなかった。この礫以外には、**遺物**は出土していない。**時期**の詳細は遺物が伴わないため不明である。

3号焼土遺構（第35図、写真図版27）

調査区北側の5Hグリッドに位置し、Ⅱ層で検出された。焼土は59.0×28.0cmの範囲に不整形に広がり、しまっている。焼土の厚さは最大11.0cmで、焼土の発達あまり良好ではない。当遺構は5H～6Hグリッドで検出された16号住居状遺構のプラン内に存在し、床面と同レベル上に位置することから16号住居状遺構に伴う可能性が高い。**遺物**は出土していない。**時期**は16号住居状遺構との関係から縄文時代後期前葉以降に位置付けられる。

4号焼土遺構（第35図、写真図版27）

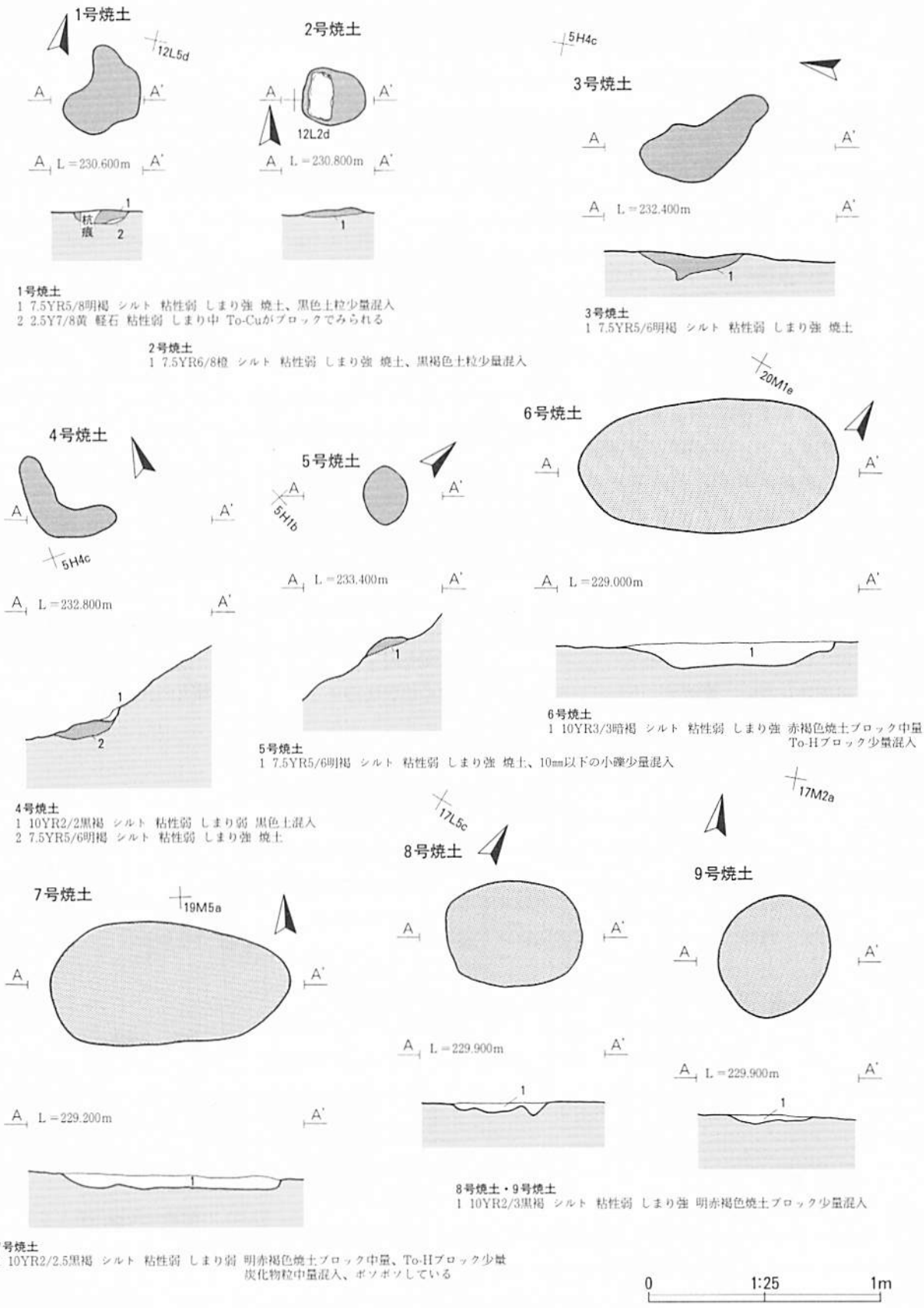
調査区北側の5Hグリッドに位置し、Ⅱ層で検出された。焼土は42.0×34.0cmの範囲に不整形に広がり、しまっている。焼土の厚さは最大6.0cmで、焼土の発達はあまり良好ではない。当遺構は16号住居状遺構のプラン内に存在し、床面と同レベル上に位置することから16号住居状遺構に伴う可能性が高い。**遺物**は出土していない。**時期**は16号住居状遺構との関係から縄文時代後期前葉以降に位置付けられる。

5号焼土遺構（第35図、写真図版28）

調査区北側の4Hグリッドに位置し、Ⅱ層で検出された。焼土は25.0×19.0cmの範囲に楕円形状に広がり、しまっている。焼土の厚さは最大4.0cmで、焼土の発達はあまり良好ではない。**遺物**は出土していない。**時期**の詳細は遺物が伴わないため不明である。

6号焼土遺構（第35図、写真図版28）

調査区南側の20Lグリッドに位置し、Ⅶ層で検出された。焼土は112.0×57.0cmの範囲に長楕円形に広がり、厚さは断面図では表現できないほど薄い。暗褐色土に混じってブロックで散在しており、当地に廃棄された異地性の焼土と思われる。**遺物**は出土していない。**時期**の詳細は遺物が伴わないため不明である。



1号焼土
1 7.5YR5/8明褐 シルト 粘性弱 しまり強 焼土、黒色土粒少量混入
2 2.5Y7/8黄 軽石 粘性弱 しまり中 To-Cuがブロックでみられる

2号焼土
1 7.5YR6/8橙 シルト 粘性弱 しまり強 焼土、黒褐色土粒少量混入

3号焼土
1 7.5YR5/6明褐 シルト 粘性弱 しまり強 焼土

4号焼土
1 10YR2/2黒褐 シルト 粘性弱 しまり弱 黒色土混入
2 7.5YR5/6明褐 シルト 粘性弱 しまり強 焼土

5号焼土
1 7.5YR5/6明褐 シルト 粘性弱 しまり強 焼土、10㎜以下の小礫少量混入

6号焼土
1 10YR3/3暗褐 シルト 粘性弱 しまり強 赤褐色焼土ブロック中量
To-Hブロック少量混入

7号焼土
1 10YR2/2.5黒褐 シルト 粘性弱 しまり弱 明赤褐色焼土ブロック中量、To-Hブロック少量
炭化物粒中量混入、ボソボソしている

8号焼土・9号焼土
1 10YR2/3黒褐 シルト 粘性弱 しまり強 明赤褐色焼土ブロック少量混入

第35図　1号焼土遺構～9号焼土遺構

7号焼土遺構（第35図、写真図版28）

調査区南側の19L～19Mグリッドに位置し、Ⅵ層で検出された。焼土は103.0×53.0cmの範囲に長楕円形に広がり、厚さは断面図では表現できないほど薄い。黒褐色土に混じってブロックで散在しており、当地に廃棄された異地性の焼土と思われる。遺物は出土していない。時期の詳細は遺物が伴わないため不明である。

8号焼土遺構（第35図、写真図版28）

調査区南側の17Lグリッドに位置し、Ⅲc層上面で検出された。焼土は58.0×46.0cmの範囲に楕円形に広がり、厚さは断面図では表現できないほど薄い。黒褐色土に混じってブロックで散在しており、当地に廃棄された異地性の焼土と思われる。遺物は出土していない。時期の詳細は遺物が伴わないため不明である。

9号焼土遺構（第35図、写真図版28）

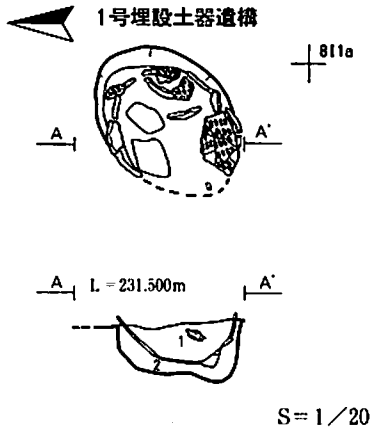
調査区南側の17L～17Mグリッドに位置し、Ⅲc層上面で検出された。焼土は54.0×47.0cmの範囲に楕円形に広がり、厚さは断面図では表現できないほど薄い。黒褐色土に混じってブロックで散在しており、当地に廃棄された異地性の焼土と思われる。遺物は出土していない。時期の詳細は遺物が伴わないため不明である。

4．埋設土器遺構

1号埋設土器遺構（第36・58図、写真図版30・47）

調査区北側の7Hグリッドに位置し、Ⅱ層で検出された。土器の胴部下半が正位の状態で埋設されている。重機による表土除去時に土器の上部を壊してしまっており、本来は完形の土器が埋設されていた可能性が高い。掘りすぎにより西側の一部を失っているが、楕円形の掘り方が確認された。掘り方の規模は45.0×34.0cm、深さは最大で16.0cmである。土器内部は黒色土、掘り方の覆土は黒褐色土で構成されている。遺物は埋設されていた土器（205）だけである。胴部に最大径を持つ算盤球のような形の壺で、頸部全周に外面側からの貫通孔が巡っている。底部はやや丸みを帯びており、埋設するのに適した形をしている。口縁から胴部下半は縄文（RL）が横位方向に施文される。底部外面は横位方向のミガキ調整痕が観察される。内面も丁寧なミガキ調整が行われている。

時期は類似する土器の出土事例が少ないため断定はできないが、検出面等から縄文時代中期末以降と思われる。



1号埋設土器遺構
1 10YR2/1黒 シルト 粘性弱 しまり弱 黄褐色シルト微量混入
2 10YR2/2黒褐 シルト 粘性弱 しまり弱 木根微量混入

第36図　1号埋設土器遺構

5．柱穴状土坑（第37・38図　第4表）

住居跡等の柱穴に類似するが建物跡等にはならない土坑である。全部で158基を登録しており、Ⅱ層で6基、Ⅲａ層で41基、Ⅲｃ層で29基、Ⅲ①層で8基、Ⅲ②層で5基、Ⅳ層で45基、Ⅴ層で8基、Ⅵ層で15基、Ⅶ層で1基検出された。調査区の南側ではⅢｃ層やⅣ層で検出されたものが多くみられるが、これはⅣ層より上位の層がないか極端に薄いためであり、本来はⅡ層から掘り込まれたものと思われる。まとまって検出されているが住居跡等に認定することはできなかった。調査区の北側から中央部にかけてはⅢａ層で検出されたものが多い。こちらも南側と同様住居跡等に認定することはできなかったが、5号、6号、23号、29号の4基に関しては他の柱穴状土坑に比べて規模が大きく、掘立柱建物等の遺構になる可能性がある。なお、柱穴状土坑個々の規模や覆土は第4表に記載してあるので参照していただきたい。

柱穴状土坑から出土した遺物は第58図と写真図版46に掲載している。4号、6号、25号、48号柱穴状土坑の覆土からは縄文土器片が、112号柱穴状土坑からは不定形石器が、128号柱穴状土坑からは銅銭が出土した。

6．遺物包含層

北側遺物包含層（第39図、写真図版3）

5Ｅ・5Ｆグリッド（以下北西部）と6Ｆ・7Ｆ・7Ｇグリッド（以下南東部）の2箇所に分かれて形成されている。地形図からの概算であるが、面積は約28㎡、深さは最大で約60cmである。5Ｇ・5Ｈ・6Ｈグリッドは比較的平坦な部分であるが、そこから7Ｅグリッド側に向かって傾斜している。調査区外との境界からも土器片が出土しており、当包含層の範囲は南西側の調査区外にも広がっていることが推測される。

北側包含層は基本層序のⅡ層とした黒色土を主体としているが、北西部では若干差異が見られ、幾分彩度のある黒褐色土を主体としている。この他に部分的であるが暗褐色土層やにぶい黄褐色土層が混入する。しかし、焼土や炭化物などの混入は観察されず、1層から5層までの単純な分層に止まってしまった。このため廃棄単位の把握は不可能であった。遺物の取り上げは単純に出土地点と出土層位を記録して行っている。

遺物（206～243　第59～62図、写真図版48～51）

北西部からは206～210の土器と211～214の石器が出土している。出土した遺物の大半は1層（黒色土層）からの出土である。211の尖頭器が2層（黒褐色土層）から出土している。出土した土器はⅣ群3類から5類である。地文及び入組文を構成する帯状文内には2種の原体を用いて、羽状に施文している土器が多い。

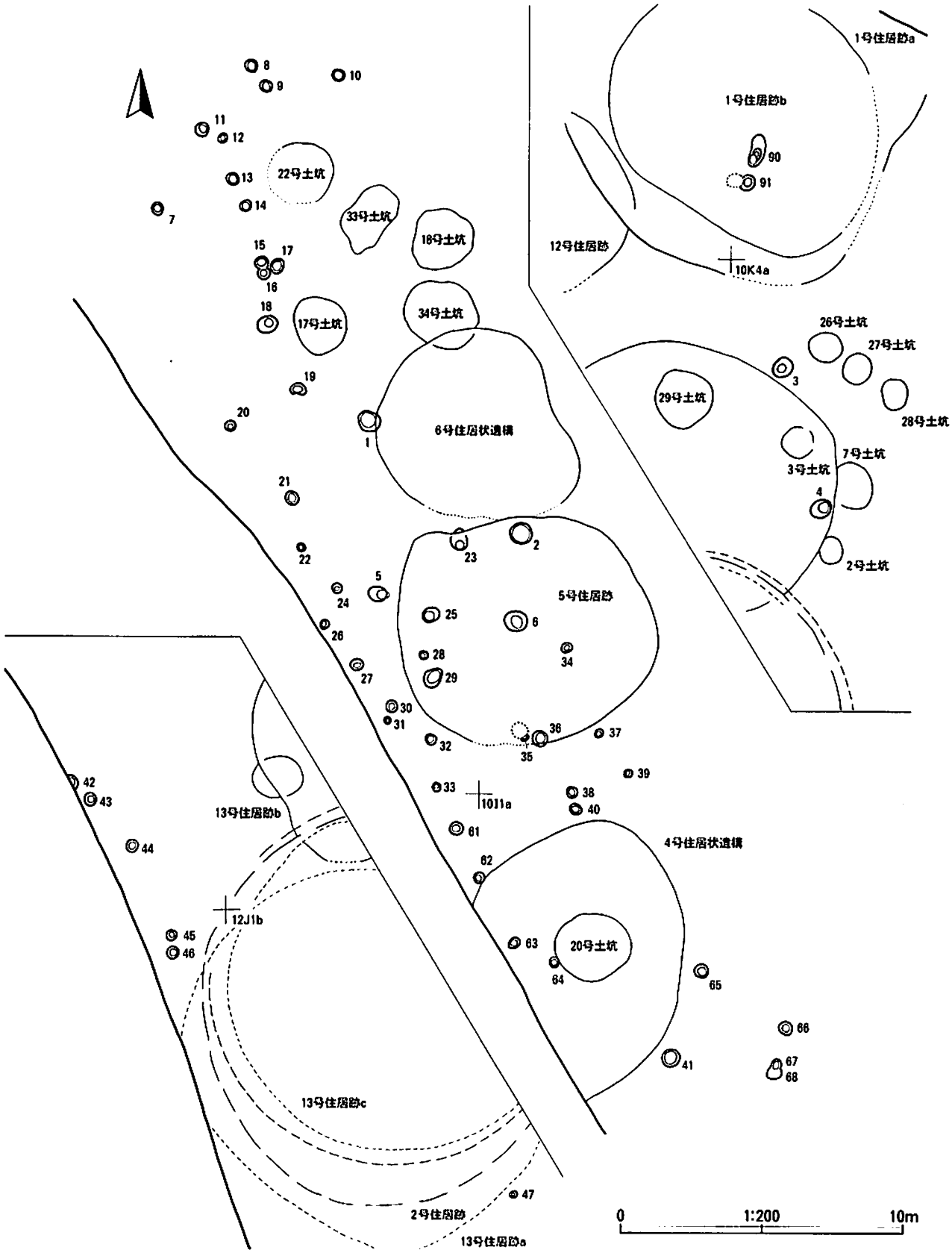
南東部からは215～239の土器と240～242の石器、243の土製品（ミニチュア土器）が出土している。1層から3層まで遺物は出土しているが、中心は2層の黒色土層である。Ⅳ群1類、2類の土器が若干出土するが主体はⅣ群3類から5類の土器である。

時期　北西部、南東部ともⅣ群3類から5類の土器が出土しており、後期中葉から後期後葉にかけての短い間に形成されたものと思われる。

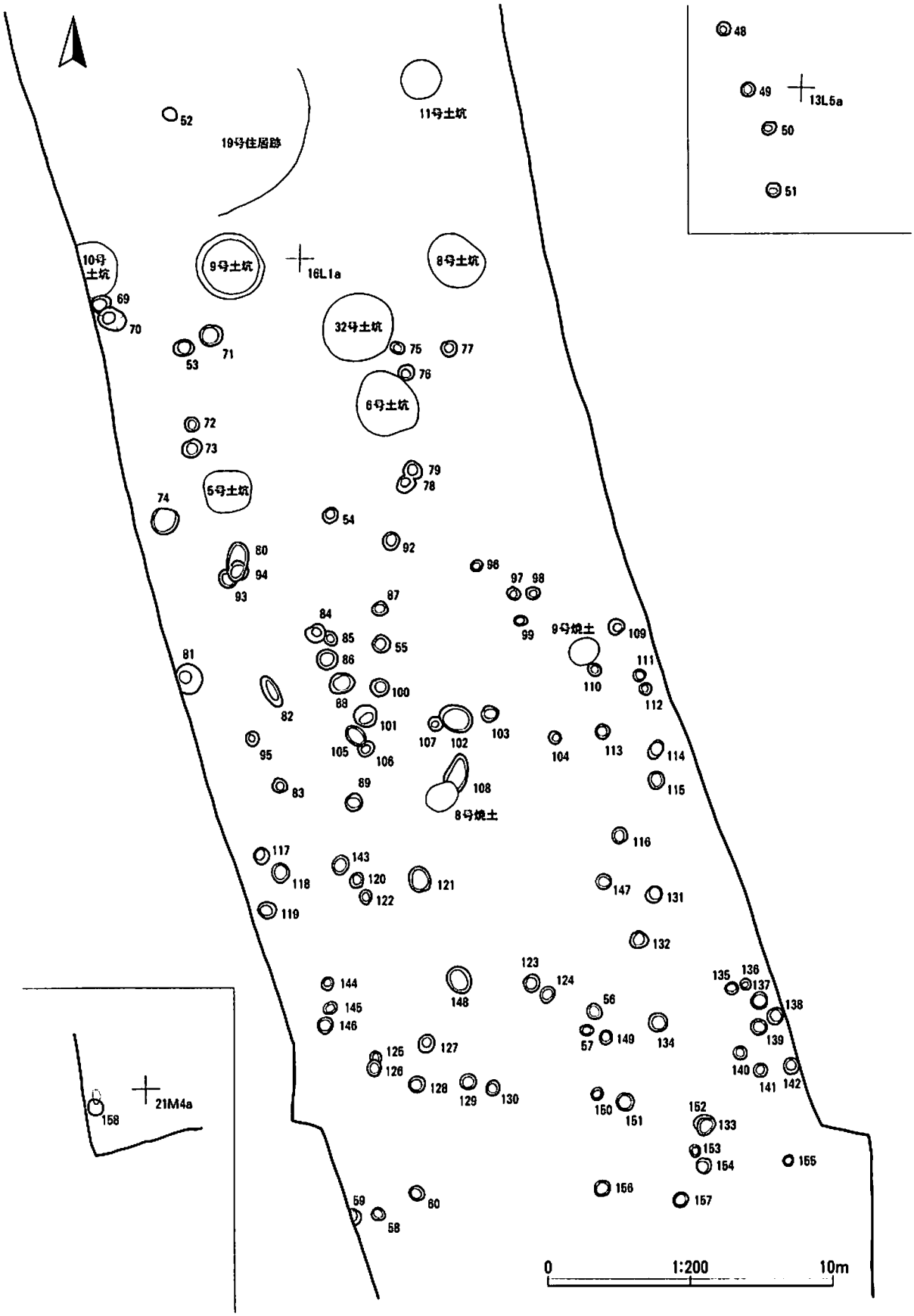
第４表　柱穴状土坑観察表

No.	位置	検出層位	開口部(cm)	深さ(cm)	埋土・混入物の状況	備考
1	08H4c•d	Ⅱ層上	37.0×40.0	不明	10YR2/1黒色土	
2	09I1a	Ⅱ層上	31.0×40.0	7.3	10YR2/1黒色土	
3	10K5a	Ⅱ層上	31.0×35.0	31.9	10YR2/1黒色土	
4	11K3b	Ⅱ層上	33.0×33.0	37.2	10YR2/1黒色土	土器片(198)
5	09H2d	Ⅱ層下	32.0×40.0	51.3	10YR2/3黒褐色土	
6	09I1b	Ⅱ層下	34.0×40.0	53.9	10YR2/2黒褐色土	土器片(199)(200)
7	07G5e	Ⅲa	17.0×17.0	25.9	10YR2/2黒褐色土	
8	07H3a	Ⅲa	22.0×22.0	9.7	10YR2/2黒褐色土	
9	07H3b	Ⅲa	21.0×21.0	26.3	10YR2/2黒褐色土	
10	07H3c	Ⅲa	23.0×22.0	24.5	10YR2/2黒褐色土	
11	07H4a	Ⅲa	24.0×29.0	16.2	10YR2/2黒褐色土	
12	07H4a	Ⅲa	15.0×15.0	6.0	10YR2/2黒褐色土	
13	07H5a	Ⅲa	20.0×22.0	28.0	10YR2/3黒褐色土	
14	07H5a	Ⅲa	16.0×18.0	31.4	10YR2/3黒褐色土	
15	08H1b	Ⅲa	23.0×22.0	15.4	10YR2/3黒褐色土	
16	08H1b	Ⅲa	21.0×23.0	21.3	10YR2/1黒色土	
17	08H1b	Ⅲa	22.0×27.0	29.0	10YR2/1黒色土	
18	08H2b	Ⅲa	35.0×29.0	25.6	10YR2/2黒褐色土	
19	08H3b	Ⅲa	22.0×29.0	8.6	10YR2/2黒褐色土	
20	08H4a	Ⅲa	16.0×14.0	6.2	10YR2/2黒褐色土	
21	08H5b	Ⅲa	22.0×24.0	15.4	10YR2/3黒褐色土	
22	09H1b	Ⅲa	12.0×12.0	5.0	10YR2/3黒褐色土	
23	09H1e	Ⅲa	30.0×40.0	48.3	10YR2/3黒褐色土	
24	09H2c	Ⅲa	14.0×16.0	6.2	10YR2/3黒褐色土	
25	09H2e	Ⅲa	27.0×27.0	33.8	10YR2/2黒褐色土、To-Cuが染み状に見られる。	土器片(201)
26	09H3c	Ⅲa	16.0×17.0	16.2	10YR2/2黒褐色土	
27	09H3c	Ⅲa	19.0×21.0	6.4	10YR2/2黒褐色土	
28	09H3c	Ⅲa	15.0×15.0	17.4	10YR2/2黒褐色土	
29	09H3e	Ⅲa	29.0×38.0	43.2	10YR2/2黒褐色土、To-Cu中ブロック少量含む。	
30	09H4c	Ⅲa	16.0×15.0	13.8	10YR2/2黒褐色土	
31	09H4c	Ⅲa	11.0×11.0	12.5	10YR2/3黒褐色土	
32	09H5e	Ⅲa	17.0×15.0	7.8	10YR2/3黒褐色土	
33	09H5e	Ⅲa	13.0×14.0	5.3	10YR2/2黒褐色土	
34	09I3b	Ⅲa	17.0×18.0	14.4	10YR2/2黒褐色土	
35	09I4•5a	Ⅲa	16.0×17.0	15.6	10YR2/1黒色土	
36	09I4•5b	Ⅲa	26.0×28.0	20.8	10YR2/2黒褐色土	
37	09I4c	Ⅲa	15.0×16.0	7.2	10YR2/3黒褐色土	
38	09I5b-10I1b	Ⅲa	20.0×17.0	8.4	10YR2/1黒色土	
39	09I5c	Ⅲa	14.0×9.0	13.0	10YR2/3黒褐色土	
40	10I1b	Ⅲa	16.0×19.0	13.3	10YR2/1黒色土	
41	10I5d	Ⅲa	28.0×26.0	10.4	10YR2/3黒褐色土	
42	11I3d	Ⅲa	32.0×20.0	24.2	10YR2/3黒褐色土	
43	11I4d	Ⅲa	21.0×22.0	23.1	10YR2/2黒褐色土	
44	11I4e	Ⅲa	19.0×20.0	26.6	10YR2/2黒褐色土	
45	12J1a	Ⅲa	16.0×16.0	18.9	10YR2/2黒褐色土、炭1%含む。	
46	12J1a	Ⅲa	20.0×18.0	17.9	10YR2/2黒褐色土、両側にTo-Cuが見られる。	半分残存
47	13K1b	Ⅲa	15.0×16.0	16.0	10YR2/1黒色土	
48	13K4d	Ⅲa	20.0×25.0	40.9	10YR3/3暗褐色土、10YR2/2黒褐色土を柱状に含む。	土器片(202)
49	13K5e	Ⅲa	22.0×23.0	35.5	10YR3/3暗褐色土、10YR2/2黒褐色土多量含む。	
50	13K5e	Ⅲa	22.0×22.0	37.3	10YR3/3暗褐色土	
51	14K1e	Ⅲa	19.0×23.0	36.9	2.5Y7/8黄色砂質シルトが薄く分布。	
52	15K3c	Ⅲa	25.0×23.0	60.1	10YR2/2黒褐色土、黄色土粒含む。	
53	16K2c•d	Ⅲa	32.0×31.0	50.5	10YR3/2黒褐色土、石・黄色土粒含む。	
54	16L5a	Ⅲa	26.0×27.0	32.6	10YR2/3黒褐色土、To-Nb含む。	
55	17L2b	Ⅲa	30.0×30.0	36.8	10YR2/2黒褐色土、To-Nb含む。	
56	18L3c	Ⅲa	48.0×50.0	17.0	10YR2/3黒褐色土、To-Nb少量含む。	
57	18M5c-19M1c	Ⅲa	32.0×28.0	19.2	10YR2/2黒褐色土、黄色土粒微量含む。	
58	19L2b	Ⅲa	22.0×21.0	13.8	10YR2/2黒褐色土、黄色土粒微量含む。	
59	19L2b	Ⅲa	25.0×12.0	12.7	10YR2/2黒褐色土	半分残存
60	19L2c	Ⅲa	26.0×25.0	15.6	10YR2/3黒褐色土	
61	10H1e	Ⅲc	23.0×20.0	7.5	10YR2/3黒褐色土	
62	10H2e-10I2a	Ⅲc	17.0×18.0	7.2	10YR2/3黒褐色土	
63	10I3a	Ⅲc	16.0×16.0	7.8	10YR2/3黒褐色土	
64	10I3b	Ⅲc	15.0×14.0	14.1	10YR2/3黒褐色土	
65	10I4d	Ⅲc	20.0×22.0	10.7	10YR2/3黒褐色土	
66	10J5a	Ⅲc	22.0×24.0	13.4	10YR2/3黒褐色土	
67	10J5a	Ⅲc	20.0×18.0	17.2	10YR2/1黒色土	
68	10J5a	Ⅲc	22.0×20.0	16.9	10YR2/1黒色土	
69	16K1b	Ⅲc	30.0×28.0	32.9	10YR2/1黒色土	
70	16K2b	Ⅲc	50.0×36.0	19.8	10YR2/2黒褐色土、To-Cu・To-Nb含む。	
71	16K2d	Ⅲc	39.0×39.0	22.3	10YR2/3黒褐色土、10YR2/1黒色土中量含む。	
72	16K3d	Ⅲc	18.0×25.0	52.5	10YR2/1黒色土、To-Nbを底面近くに含む。	
73	16K4d	Ⅲc	32.0×33.0	41.8	10YR2/1黒色土、10YR2/3黒褐色土中量含む。	
74	16K5c	Ⅲc	46.0×54.0	11.4	10YR2/3黒褐色土、To-Nb中量含む。	
75	16L2b	Ⅲc	24.0×24.0	17.1	10YR2/2黒褐色土、10YR3/4暗褐色土を含む。	
76	16L2•3b	Ⅲc	27.0×26.0	25.8	10YR2/2黒褐色土、10YR3/4暗褐色土を含む。	
77	16L2c	Ⅲc	27.0×27.0	27.0	10YR2/2黒褐色土	
78	16L4b	Ⅲc	31.0×30.0	34.5	10YR2/2黒褐色土、10YR5/6黄褐色土が底部に混入。	
79	16L4b•c	Ⅲc	30.0×30.0	19.9	10YR2/2黒褐色土、10YR5/6黄褐色土ブロック含む。	

No	位　置	検出層位	開口部(cm)	深さ(cm)	埋土・混入物の状況	備　考
80	17K1d・e	Ⅲc	34.0×66.0	20.9	10YR2/3黒褐色土、10YR2/1黒色土多量含む。	
81	17K3d	Ⅲc	47.0×48.0	63.7	10YR2/2黒褐色土	
82	17K3e	Ⅲc	24.0×60.0	38.6	10YR2/2黒褐色土、To-Nb中量含む。	
83	17K5e	Ⅲc	24.0×23.0	21.3	10YR2/1黒色土	
84	17L2a	Ⅲc	34.0×34.0	30.0	10YR2/2黒褐色土、底部に向かってTo-Nbの混入が強くなる。	
85	17L2a	Ⅲc	20.0×24.0	16.7	10YR2/2黒褐色土、底部に向かってTo-Nbの混入が強くなる。	
86	17L2a	Ⅲc	36.0×35.0	16.3	10YR2/2黒褐色土、底部に向かってTo-Nbの混入が強くなる。	
87	17L2b	Ⅲc	28.0×24.0	25.0	10YR2/2黒褐色土	
88	17L3a	Ⅲc	40.0×38.0	42.3	10YR2/2黒褐色土、To-Nb少量含む。	
89	17L5a・b	Ⅲc	30.0×28.0	33.0	10YR2/2黒褐色土、To-Nb含む。	
90	10K2a	Ⅳ層	25.0×53.0	29.8	10YR2/3黒褐色土	
91	10K2a	Ⅳ層	29.0×27.0	19.9	10YR2/3黒褐色土	
92	16L5b	Ⅳ層	25.0×28.0	27.5	10YR2/2黒褐色土、To-Nb含む。	
93	17K1d	Ⅳ層	27.0×25.0	12.7	10YR2/2黒褐色土、To-Nb含む。	
94	17K1d・e	Ⅳ層	34.0×38.0	12.8	10YR2/2黒褐色土	
95	17K1e	Ⅳ層	22.0×24.0	10.0	10YR2/2黒褐色土	
96	17L1d	Ⅳ層	19.0×18.0	7.8	10YR2/2黒褐色土	
97	17L1d	Ⅳ層	20.0×22.0	7.7	10YR2/2黒褐色土、To-Nb含む。	
98	17L1e	Ⅳ層	25.0×23.0	38.5	10YR2/2黒褐色土	
99	17L2d	Ⅳ層	20.0×17.0	6.4	10YR2/2黒褐色土、To-Nb少量含む。	
100	17L3b	Ⅳ層	30.0×28.0	10.3	10YR2/2黒褐色土	
101	17L3・4b	Ⅳ層	35.0×40.0	49.8	10YR2/2黒褐色土、壁面近くにTo-Nbを含む。	
102	17L3・4c	Ⅳ層	56.0×46.0	12.2	10YR2/2黒褐色土	
103	17L3d	Ⅳ層	24.0×24.0	9.8	10YR2/2黒褐色土、To-Nb含む。	
104	17L4e	Ⅳ層	18.0×20.0	15.9	10YR2/2黒褐色土、10YR3/4暗褐色土少量含む。	
105	17L4b・c	Ⅳ層	30.0×43.0	10.8	10YR2/2黒褐色土、To-Nb少量含む。	
106	17L4b	Ⅳ層	26.0×24.0	12.4	10YR2/2黒褐色土	
107	17L4c	Ⅳ層	23.0×21.0	11.1	10YR2/2黒褐色土、10YR3/4暗褐色土少量含む。	
108	17L4・5c	Ⅳ層	41.0×70.0	10.9	10YR2/2黒褐色土、To-Nb微量含む。	
109	17M2a	Ⅳ層	26.0×24.0	25.5	10YR2/2黒褐色土、底部にTo-Nb微量含む。	
110	17M3a	Ⅳ層	22.0×21.0	8.8	10YR2/2黒褐色土、To-Nb含む。	
111	17M3a・b	Ⅳ層	23.0×22.0	27.4	10YR2/2黒褐色土、To-Nb含む。	
112	17M3b	Ⅳ層	20.0×21.0	15.2	10YR2/2黒褐色土、To-Nb微量含む。	石器 (203)
113	17M4a	Ⅳ層	25.0×25.0	19.4	10YR2/2黒褐色土、To-Nb少量含む。	
114	17M4b	Ⅳ層	24.0×35.0	11.2	10YR2/2黒褐色土、底部にTo-Nb微量含む。	
115	17M4・5b	Ⅳ層	30.0×33.0	43.4	10YR2/2黒褐色土、底部にTo-Nb微量含む。	
116	17M5a-18M1a	Ⅳ層	24.0×22.0	51.0	10YR2/2黒褐色土、底部にTo-Nb微量含む。	
117	18K1e	Ⅳ層	25.0×26.0	24.6	10YR2/2黒褐色土、To-Nb含む。	
118	18K1e	Ⅳ層	32.0×33.0	39.1	10YR2/2黒褐色土、To-Nb含む。	
119	18K2e	Ⅳ層	26.0×23.0	24.1	10YR2/2黒褐色土、To-Nb含む。	
120	18L1b	Ⅳ層	23.0×26.0	42.0	10YR2/2黒褐色土、10YR3/4暗褐色土含む。	
121	18L1c	Ⅳ層	40.0×43.0	14.0	10YR2/3黒褐色土、黒色土微量含む。	
122	18L2b	Ⅳ層	20.0×25.0	32.4	10YR2/2黒褐色土、10YR3/4暗褐色土がブロックで混入。	
123	18L3e	Ⅳ層	26.0×29.0	20.0	10YR2/2黒褐色土、To-Nb微量含む。	
124	18L3e	Ⅳ層	26.0×26.0	9.5	10YR2/2黒褐色土、To-Nb微量含む。	
125	18L4b	Ⅳ層	20.0×16.0	15.7	10YR2/2黒褐色土	
126	18L4・5b	Ⅳ層	25.0×26.0	16.8	10YR2/2黒褐色土	
127	18L4c	Ⅳ層	28.0×27.0	21.5	10YR2/2黒褐色土	
128	18L5c	Ⅳ層	23.0×24.0	20.6	10YR2/2黒褐色土、10YR3/4暗褐色土を底部に含む。	銭貨 (204)
129	18L5d	Ⅳ層	26.0×23.0	9.8	10YR2/2黒褐色土、10YR3/4暗褐色土を含む。	
130	18L5d	Ⅳ層	20.0×21.0	10.4	10YR2/2黒褐色土、10YR3/4暗褐色土を含む。	
131	18M1・2b	Ⅳ層	27.0×28.0	31.0	10YR2/2黒褐色土、To-Nb含む。	
132	18M2a・b	Ⅳ層	38.0×30.0	54.6	10YR2/2黒褐色土	
133	18M4a	Ⅳ層	20.0×19.0	25.9	10YR2/2黒褐色土、10YR4/6褐色土が混入。	
134	18M4b	Ⅳ層	34.0×34.0	42.7	10YR2/2黒褐色土	
135	18M3c	Ⅴ層	22.0×20.0	16.8	10YR2/2黒褐色土。黄色土粒中量含む。	
136	18M3c	Ⅴ層	15.0×18.0	6.4	10YR2/2黒褐色土	
137	18M3d	Ⅴ層	30.0×30.0	12.9	10YR2/2黒褐色土、To-Nb・To-H含む。	
138	18M3・4d	Ⅴ層	32.0×28.0	31.8	10YR2/2黒褐色土	
139	18M4d	Ⅴ層	30.0×27.0	10.2	10YR2/2黒褐色土	
140	18M4c	Ⅴ層	26.0×25.0	22.4	10YR2/2黒褐色土	
141	18M4・5d	Ⅴ層	23.0×23.0	9.8	10YR2/2黒褐色土、10YR4/6褐色土混入。	
142	18M4・5d	Ⅴ層	26.0×27.0	22.5	10YR2/2黒褐色土、To-H少量含む。	
143	18L1a	Ⅵ層	32.0×31.0	34.9	10YR2/2黒褐色土、To-Nb少量含む。	
144	18L3a	Ⅵ層	22.0×20.0	20.4	10YR2/2黒褐色土、To-Nb微量含む。	
145	18L4a	Ⅵ層	24.0×21.0	9.6	10YR2/2黒褐色土、To-Nbがブロックで混入。	
146	18L4a	Ⅵ層	32.0×36.0	32.8	10YR2/2黒褐色土	
147	18M1a	Ⅵ層	23.0×22.0	5.9	10YR2/2黒褐色土、全体にTo-Nb含む。	
148	18M3・4a	Ⅵ層	27.0×27.0	22.0	10YR2/2黒褐色土、10YR4/6褐色土が底部に混入。	
149	18M4a	Ⅵ層	24.0×25.0	23.1	10YR2/2黒褐色土、10YR4/6褐色土とTo-Nbが混入。	
150	18M5a	Ⅵ層	18.0×17.0	16.1	10YR2/2黒褐色土、10YR4/6褐色土が底部に混入。	
151	18M5a	Ⅵ層	30.0×29.0	37.5	10YR2/2黒褐色土、10YR4/6褐色土少量含む。	
152	18M5c-19M1c	Ⅵ層	34.0×29.0	33.0	10YR2/3黒褐色土、10YR4/4褐色土含む。	
153	19M1c	Ⅵ層	16.0×18.0	10.2	10YR2/2黒褐色土、10YR4/4褐色土含む。	
154	19M1c	Ⅵ層	24.0×20.0	19.5	10YR3/4暗褐色土	
155	19M1d	Ⅵ層	16.0×21.0	9.7	10YR2/3黒褐色土、10YR4/4褐色土含む。	
156	19M2a	Ⅵ層	26.0×26.0	37.7	10YR2/2黒褐色土、10YR4/4褐色土微量含む。	
157	19M2b	Ⅵ層	25.0×24.0	21.4	10YR2/2黒褐色土、10YR4/4褐色土を底部に含む。	
158	21L1e	Ⅶ層	27.0×29.0	42.7	10YR2/1黒色土	両側包含層内


1号住居跡a
1号住居跡b
90
91
12号住居跡
10K4a
22号土坑
33号土坑
18号土坑
17号土坑
34号土坑
6号住居状遺構
26号土坑
27号土坑
28号土坑
29号土坑
7号土坑
3号土坑
2号土坑
5号住居跡
13号住居跡b
11I1a
4号住居状遺構
20号土坑
12J1b
13号住居跡c
2号住居跡
13号住居跡a
0
1:200
10m

第37図　柱穴状土坑①


19号住居跡
11号土坑
10号土坑
9号土坑
8号土坑
32号土坑
6号土坑
5号土坑
9号焼土
8号焼土
16L1a
13L5a
21M4a
0
1:200
10m

第38図　柱穴状土坑②

南側遺物包含層（第39図、写真図版３・29）

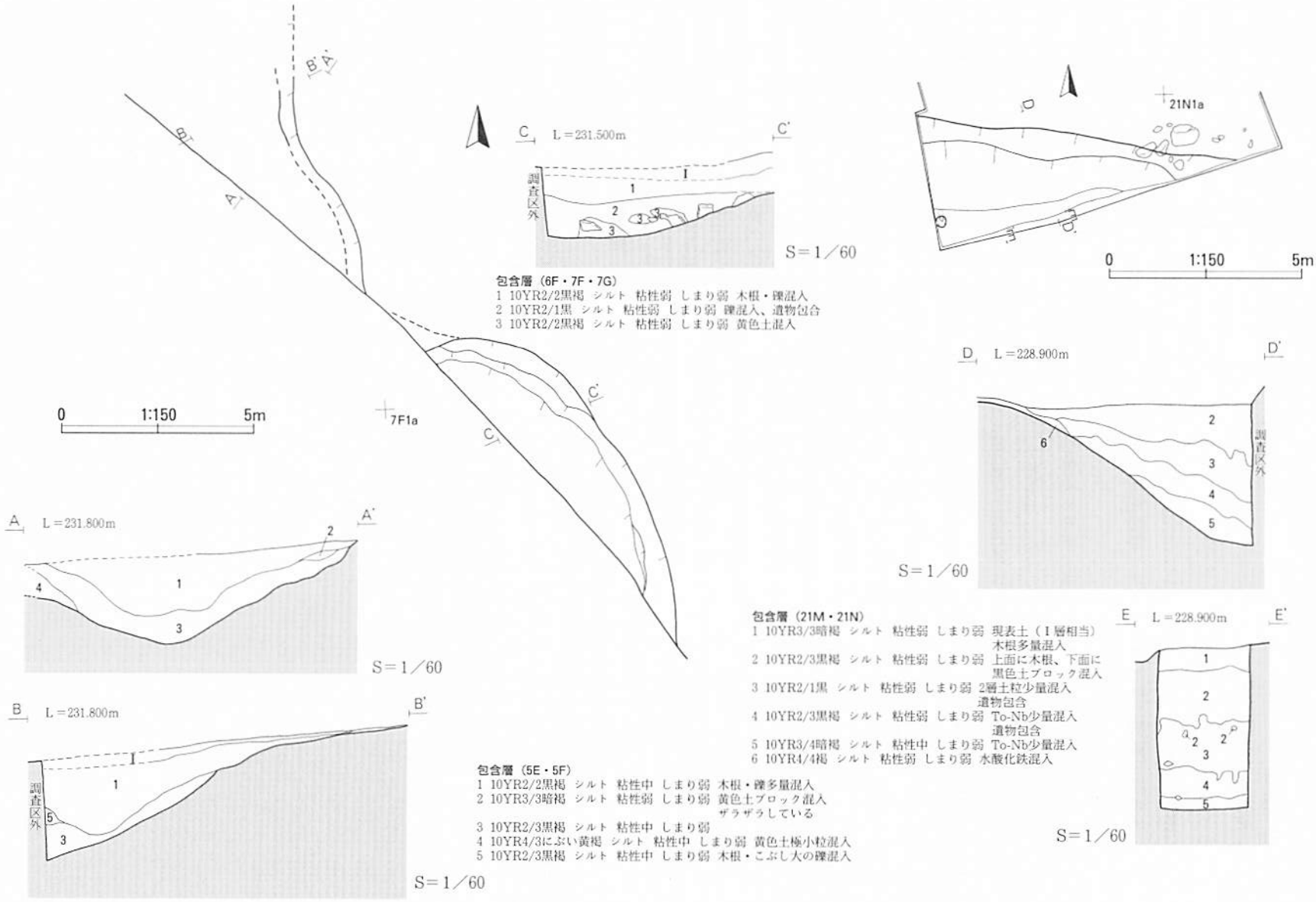
調査区南西端の21Ｌ・21Ｍグリッドに約16㎡にわたって包含層が形成されている。深さは最大76㎝で、平均化すると約30㎝である。調査前の現況地形からはわからなかったが、旧地形は現況地形の標高で229.0m付近から南側（高家川とその支流のオリバ川下流）に向かって急激に落ち込んでいることが調査によって判別した。包含層の範囲は南側の調査区外（道路予定地の下）にも広がっていることが土層観察から明らかになった。

包含層は基本土層のⅠ層・Ⅱ層・Ⅳ層に相当する堆積土が確認されたが、Ⅲａ層に相当するTo-Cuを含む堆積土は確認されなかった。当包含層の主体となる層は３層で、基本層序ではⅡ層に相当する黒色土である。この層より上位はⅠ層相当の暗褐色土と黒褐色土の堆積が確認されたが、遺物はほとんど出土しなかった。下層は基本層序のⅣ層に相当するTo-Nbを含む黒褐色土層と暗褐色土層、褐色土である。基本層序Ⅳ層に相当する４層からも遺物が出土している。層の堆積状況から、調査区側から調査区外に向かって（北側から南側に向かって）廃棄が行われていたと考えられる。しかし、後期の土器の下位から弥生土器が出土するなど、必ずしも古いものから順に堆積している訳ではないようである。

遺物（244～285　第63～66図、写真図版51～53）

244～283の土器と284、285の石器が出土している。各層ともⅣ群（後期）の土器の出土が目立つ。４層から５層の間では244（Ⅳ群１類：縄文時代後期前葉相当）と245の土器が出土している。４層からは246の粗製土器しか出土していない。３層からは247～253の土器が出土しており、252のⅣ群３類（後期中葉相当）、247、248などの後期の粗製土器に混じって249～251のⅤ群（弥生時代後期）の土器が出土している。２層からは259のⅣ群３類の土器と262のⅣ群４類（後期後葉相当）の土器が出土している。１層からは粗製土器しか出土していない。なお、層位不明のもののなかにはⅠ群の272が出土している。遺物個々については実測図や観察表を参照していただきたい。

時期　Ⅳ群の土器が中心であるが、Ⅳ群の土器とともにⅤ群の土器も出土している。このことから縄文時代後期から弥生時代にかけて断続的にやや長期にわたって形成されたものと思われる。



包含層（6F・7F・7G）
1 10YR2/2黒褐 シルト 粘性弱 しまり弱 木根・礫混入
2 10YR2/1黒 シルト 粘性弱 しまり弱 礫混入、遺物包含
3 10YR2/2黒褐 シルト 粘性弱 しまり弱 黄色土混入

包含層（21M・21N）
1 10YR3/3暗褐 シルト 粘性弱 しまり弱 現表土（Ⅰ層相当）木根多量混入
2 10YR2/3黒褐 シルト 粘性弱 しまり弱 上面に木根、下面に黒色土ブロック混入
3 10YR2/1黒 シルト 粘性弱 しまり弱 2層土粒少量混入 遺物包含
4 10YR2/3黒褐 シルト 粘性弱 しまり弱 To-Nb少量混入 遺物包含
5 10YR3/4暗褐 シルト 粘性中 しまり弱 To-Nb少量混入
6 10YR4/4褐 シルト 粘性弱 しまり弱 水酸化鉄混入

包含層（5E・5F）
1 10YR2/2黒褐 シルト 粘性中 しまり弱 木根・礫多量混入
2 10YR3/3暗褐 シルト 粘性弱 しまり弱 黄色土ブロック混入 ザラザラしている
3 10YR2/3黒褐 シルト 粘性中 しまり弱
4 10YR4/3にぶい黄褐 シルト 粘性中 しまり弱 黄色土極小粒混入
5 10YR2/3黒褐 シルト 粘性中 しまり弱 木根・こぶし大の礫混入

第39図 遺物包含層

V．出土した遺物

今回の発掘調査で出土した遺物は縄文土器、弥生土器、石器、土製品、石製品、金属製品、銭貨、陶磁器類、アスファルト塊、動物遺存体（獣骨）、植物遺存体（炭化種実）である。

1．縄文土器・弥生土器

当遺跡では遺構内・外合わせて、大コンテナで約13箱出土している。そのうち３号住居跡と南側遺物包含層（21M・21N）で約８割を占めている。出土した土器の時期は縄文時代早期、前期、中期、後期、弥生時代後期で、縄文時代後期の土器が大半を占める。土器の分類は遺構内・外を含め、時期毎に縄文時代早期をⅠ群、前期をⅡ群、中期をⅢ群、後期をⅣ群、弥生時代をⅤ群、その他をⅥ群として区分を行い、従来の土器型式に準拠して細分を行った。

Ⅰ群の土器

縄文時代早期に属する土器群である。すべて早期中葉の貝殻沈線文系の土器である。破片資料が多く、全体の様子を窺える資料は290、302の２点のみである。18M・19Mグリッドに集中して出土している。文様の種類などによって６類に細分される。

Ⅰ群１類（272、286、302　第65・67・68図、写真図版53～55）

口縁部に数条の連続刺突列が施文される土器群である。272は上半には縄文施文後にＤ字状の刺突文が５条以上施文される。下半は沈線文が施文されており、やや古い様相を呈す。286は口縁部資料である。爪形状の刺突文が４条以上施文される。302は爪形状の刺突文が３条以上施文される。下半は縦位の丁寧な器面調整のみである。白浜式に相当する土器群である。

Ⅰ群２類（287、290、297、361　第67・73図、写真図版54・59）

縦位の器面調整のみで無文の土器群である。白浜式に相当すると思われる土器群である。

Ⅰ群３類（299～301、305　第65図、写真図版55）

貝殻腹縁圧痕文を羽状（横位）に施文している土器群である。焼成はあまり良くなく、土器は非常にやわらかい。300は口縁端部に１条の沈線を巡らせ、沈線の下から貝殻腹縁圧痕文を施文している。口唇部には刻みが施される。鳥木沢式、蛍沢ＡⅡ式に相当する土器群である。

Ⅰ群４類（175、176、288、291、293～296、298、362　第56・67・73図、写真図版45・54・59）

貝殻条痕文が施文された土器を一括した。土器の焼成は良好で、かたくしまっているものが多い。他のⅠ群の土器に比べると薄手である。175は縄文が施文される。176、362は表裏両面ともに貝殻条痕文が施文されており、口唇部には刻みが施される。291、293～295も口唇部に刻みが施される。

Ⅰ群５類（44、47、67、106、289、303、335　第42・45・50・67・68・71図、写真図版34・36・40・54・55・58）

３類以外の貝殻腹縁圧痕文が施文された土器群である。44、47、106は３類に比べると焼成は良好で、かたくしまっている。44・67・106は山形状に、47・289は縦位と斜位に施文されている。67は３類に近い胎土であり、やわらかい。口唇部には貝殻による刻みが施される。303は３類に近い胎土である。外面には横位の、口縁部内面には斜位の圧痕文が施文されている。口唇部は貝殻による圧痕がなされる。頸部には刺突が施される。335は斜位に施文されている。

Ⅰ群6類（292　第67図、写真図版54）

乳房状の底部片である。

Ⅱ群の土器（306～309・337・341・356・357　第68・71・72図、写真図版55・58・59）

前期の円筒下層式に属すると思われる土器群である。すべて破片資料である。調査区中央の11L～16LのⅢc層中心に出土している。306、307、337、341・356・357は胎土に繊維が含まれている。外面の文様は斜縄文が用いられることが多いが、357は口縁部に結び目縄文（綾繰文）が施文されている。308、309は外面の文様は網目状撚糸文が施文される。胎土に繊維は含まれない。

Ⅲ群の土器（322　第70図、写真図版56）

322の1個体のみ、調査区北側の6Hで出土した。頸部全周に連続刺突文が巡り、刺突文直下のみ同一原体による羽状縄文が施文される。胴部は縄文（RL）が縦位に施文される。縄文時代中期末葉の最花式に相当する土器である。

Ⅳ群の土器

後期前葉から後葉にわたる土器群である。当遺跡で出土した土器の中で最も多い。分類は従来の土器型式を参考にして行っているが、断片的な資料については資料が持ちうる刻目帯の有無や地文の種類等の外面的特徴を抽出して行った。粗製土器や半粗製土器については鈴木克彦氏の編年案（2001）を参考に行った。

＜Ⅳ群1類＞

後期前葉に位置付けられ、十腰内Ⅰ式に比定される土器群である。調査区北側の9号住居跡・18号住居跡やその周辺、中央部の5号住居跡で出土している。粗製土器以外は口縁部の破片資料で全体の様子を窺える資料は出土していない。波状の入組文や沈線によって方形や三角形に区画された文様をもつ土器が多い。施文されている文様や器形などによってa～fの6つに細分される。

Ⅳ群1類a（135、324　第52・70図、写真図版42・57）

文様帯が波状の入組文で構成される土器群である。口縁部のみで全体を窺える資料は出土しなかった。

Ⅳ群1類b（141、320　第53・70図、写真図版42・56）

方形を主体とした沈線による区画を有する土器群である。口縁部のみで全体を窺える資料は出土しなかった。

Ⅳ群1類c（310　第69図、写真図版55）

三角形を主体とした沈線による区画を有する土器群である。口縁部のみで全体を窺える資料は出土しなかった。

Ⅳ群1類d（329、332　第71図、写真図版58）

折り返し口縁になっている土器を一括した。破片資料のみである。

Ⅳ群1類e（3、6、96、128、129、134、137、167、220、232、234、257、321、346　第40・51・52・55・60・62・64・70・72図、写真図版32・41・42・44・49・50・52・56・58）

口縁の断面形が「く」の字状を呈す粗製土器及び半粗製土器を一括した。口縁端部がやや尖る土器が多い。

Ⅳ群1類f（244、245　第63図、写真図版51・52）

撚糸文が施文される粗製土器である。1個体分出土した。器種は深鉢である。245は無文であるが244と同一個体の底部であるため当類に含めた。

＜Ⅳ群２類（232　第61図、写真図版50）＞

後期前葉から中葉に位置付けられる土器である。調査区北側で１点のみ出土している。口縁部資料である。頸部には沈線が少なくとも２条巡る。口縁部は左右非対象な波状を呈す。

＜Ⅳ群３類＞

後期中葉に位置付けられ、十腰内Ⅲ式に比定される土器群である。当遺跡のなかで最も出土量が多い。調査区のほぼ全体で出土しているが、なかでも３号住居跡、南北２箇所の遺物包含層からの出土が多い。文様は入組文を主体とし、鍵状やＣ字状、もしくは鍵状にＣ字状を組合せたものなどのモチーフがみられる。後期の土器のなかでは他の類に比べて器形全体の様子が窺える資料が多い。器種は鉢、深鉢、壷、注口、単孔土器などである。施文されている文様などによってａ～ｉの９つに細分される。

Ⅳ群３類ａ（４、52、57、71、75、76、90、104、108、189、225、235、259、273　第40・43・45・47・49・50・57・60・62・64・65図、写真図版32・34～36・38・40・46・49・50・52・53）

文様帯が入組文で構成される土器群である。モチーフには鍵状、Ｃ字状などがみられる。入組文を構成する帯状文内が１種の原体を異方向に回転させて施文する、いわゆる異方向羽状縄文のものを一括した。このなかには当類に属すると思われる破片資料も含めている。口縁部や頸部に刻目帯を有する土器ともたない土器はほぼ同数である。原体にはＲＬの０段多条を用いることが多いようである。

Ⅳ群３類ｂ（34、49、55、72～74、91、206、238、316、350　第41・43・45・47・59・62・69・72図、写真図版33・34・36・38・48・50・56・58）

文様帯が入組文で構成される土器群である。モチーフには鍵状、Ｃ字状などがみられる。入組文を構成する帯状文内が２種の原体で羽状に施文されているものを一括した。口縁端部に刻目帯を有する土器が多い。原体には０段多条が多用される。

Ⅳ群３類ｃ（53、226、227、252、266、317、358　第43・60・61・63・65・69・73図、写真図版34・49・51・53・56・59）

文様帯が入組文で構成される土器群である。モチーフには鍵状、Ｃ字状などがみられる。入組文を構成する帯状文内が羽状にならないものを一括した。口縁端部や頸部に刻目帯を有する土器が多い。原体にはＲＬの０段多条が多用される。

Ⅳ群３類ｄ（56、94、95、171、237、315　第43・48・56・62・69図　写真図版34・38・45・50・56）

文様帯が直線的な帯状文で構成される土器群である。帯状文内は１種の原体による羽状縄文が施文されている。磨消手法による無文帯が帯状に巡るものが多い。56、94は口唇が肥厚する。95は94と同一個体である。237は胴部破片である。

Ⅳ群３類ｅ（９、12、33、48、71、84、92、97、164、166、169、217、228、229、236、276、354、360　第40～42・45・47・48・55・60～62・66・72・73図、写真図版32～34・36・38・39・44・48～50・53・59）

口縁端部もしくは頸部（一部に胴部）に刻目帯を有する土器を一括した。口縁部に刻目帯を有する土器には１条のもの（33、71、97、166、228、236、354）と２条以上のもの（84、169、360）がある。12、92、164、217、229、276は頸部に、９、48は体部に刻目帯を有する土器である。48は外面に貼瘤を有する。Ⅳ群４類（後期後葉）の土器を多分に含んでいる可能性がある。

Ⅳ群３類ｆ（８、264　第40・65図、写真図版32・53）

口縁部に刻目帯をもたない土器を一括した。８は口唇部に小突起がつく。264は口唇部が肥厚する。無文

帯より一段高くして縄文を充填している。

Ⅳ群３類ｇ（153　第53図、写真図版43）

単孔土器である。直線と弧状の刻目帯を用いて施文している。文様は穿孔部を中心に展開している。

Ⅳ群３類ｈ（15、68、69、224　第40・45・60図、写真図版32・36・39）

注口部のみの土器を一括した。69は外面に黒光りするほどミガキ調整を行っている。15と69には割れ口にアスファルトと思われる物質が付着している。

Ⅳ群３類ｉ（42、60、77～80、83、99、138、139、145、319、325、327　第42・44・46・47・49・52・53・70・71図、写真図版34・35・37～39・42・43・56・57）

土器の体部上半が外反し、口径と比べて底径が極端に小さい粗製土器及び半粗製土器を一括した。77、99は口縁端部が肥厚する。原体はＬＲを用いるものが多い。

＜Ⅳ群４類＞

後期後葉に位置付けられ、十腰内Ⅳ式に比定される土器群である。調査区北側の17号住居跡及びその周辺、南側遺物包含層で出土している。文様は入組文を主体とし、襷掛け状や木葉状などのモチーフがみられる。器種は鉢、深鉢、壺、注口などである。施文されている文様などによってａ～ｆの６つに細分される。

Ⅳ群４類ａ（10　第40図、写真図版32）

文様帯が襷掛け状の入組文で構成され、口縁部が無文になる土器である。口縁端部と頸部に刻目帯を有し、刻目帯にはさまれた口縁部が無文になる。入組文を構成する帯状文内は２種の原体による羽状縄文を充填手法で施文している。

Ⅳ群４類ｂ（31、158～161、165、186、207、312　第41・54・55・57・59・69図、写真図版33・43～45・48・56）

文様帯が襷掛け状の入組文で構成される土器群である。入組文を構成する帯状文内は２種の原体による羽状縄文か斜縄文を施文する。施文の手法は充填のものが多いようである。

Ⅳ群４類ｃ（210、262、274、275　第59・64～66図、写真図版48・52・53）

文様帯が木葉状の入組文で構成される土器群である。入組文を構成する帯状文内は２種の原体によるもので、充填手法が主である。262の口縁は５単位の波状口縁で、頂上部に大突起が付き、一番低い部分に小突起が付く。274、275は口縁端部や頸部に刻目帯を有する。

Ⅳ群４類ｄ（35、93　第41・47図、写真図版33・38）

突起を有する口縁部資料を一括した。

Ⅳ群４類ｅ（187　第57図、写真図版45）

貼瘤を有する資料を一括した。187の１点のみで胴部資料である。

Ⅳ群４類ｆ（102、156、233、256、263、313、326　第49・54・61・64・65・69・71図、写真図版40・43・50・52・56・57）

体部が丸みを帯び、口縁部が内傾する粗製土器及び半粗製土器を一括した。斜縄文が施文される土器の原体はＲＬを用いるものが多い。156、263の外面はミガキ調整のみである。233、313は口縁端部が肥厚する。256は丸底状で、２種の原体による羽状縄文が施文される。313は口縁端部の内側が殺がれて傾斜している。

＜Ⅳ群５類＞

後期に比定される土器群を一括した。器種は鉢、浅鉢、深鉢、台付鉢、壷、香炉形土器？である。施文されている文様などによってａ～ｈの８つに細分される。

Ⅳ群５類ａ（89、107、280、333　第47・50・66・71図、写真図版38・40・53・58）

沈線のみが観察される土器片である。すべて胴部資料である。

Ⅳ群５類ｂ（11、85、148、174、183、188、209、245、254、265、328、345　第40・47・53・56・57・59・63・65・71・72図、写真図版32・38・43・45・48・51～53・57・58）

粗製土器・半粗製土器のうち、羽状縄文が施文されている土器及び２種の原体によって施文されている土器（11、245）を一括した。羽状縄文は１種の原体によって施文される土器よりも２種の原体によって施文される土器のほうが多い。11、148、188、254は口唇部が肥厚する。209は口唇部が内殺ぎされている。

Ⅳ群５類ｃ（13、23、41、43、54、61～66、81、82、87、109、157、163、168、179、180、184、185、190、191、194、198、199、218、222、230、239、246、248、253、258、260、271、277、314、363　第40～47、50、54、55、57、58、60～66、69、73図、写真図版32～38、40、43～46、48～53、56、59）

粗製土器・半粗製土器のうち、ＲＬ縄文が施文されている土器を一括した。13、163、180、198、246、260、271は口唇部が肥厚する。66は口唇部が平坦になっている。82は口唇部に粘土を足して肥厚化している。218、363は頸部に沈線が数条巡る。222は壷形の土器で頸部に縄文圧痕が施文される。

Ⅳ群５類ｄ（２、５、45、46、51、58、59、88、103、146、149、151、162、170、192、193、200～202、208、222、231、261、268、323、347　第40・42～44・47・49・53・55・57～59・61・64・65・70・72図、写真図版32・34・35・38・40・43～46・48・50・52・53・57・58）

粗製土器・半粗製土器のうち、ＬＲ縄文が施文されている土器を一括した。２、151、193、261は口唇部が肥厚する。５は鋸歯状の沈線、46、162、268は平行沈線、146は不規則な沈線が施文される。

Ⅳ群５類ｅ（22、40、86、101、136、152、154、196、223、247、349　第41・42・47・49・52・53・57・60・63・72図、写真図版32・33・38・39・42・43・46・49・51・58）

粗製土器・半粗製土器のうち、不規則な縄文が施文されている土器を一括した。223は丸底状で上げ底状になっている。

Ⅳ群５類ｆ（100、150、279、304、351～353、195、348　第49・53・57・66・68・72図、写真図版39・43・46・53・55・58）

粗製土器・半粗製土器のうち、無文の土器を一括した。279は成形時の指頭圧痕が観察される。304は口縁部資料で口唇部が内殺ぎされている。

Ⅳ群５類ｇ（１、７、14、32、50、98、140、182、215、216、219、221、278、344、364、355、364　第40・41・43・48・52・57・60・66・72・73図、写真図版32～34・39・42・45・48・49・53・58・59）

粗製土器・半粗製土器のうち、底部資料を一括した。７の外底面には笹葉痕、98、278の外底面には木葉痕、355の外底面には縄文が観察される。50、221は高台状を呈しており、221は高台のつけね部分に刻目帯が１条巡っている。

Ⅳ群５類ｈ（269、270、318、330　第65・69・71図、写真図版53・56・58）

上記以外の土器を一括した。269は撚糸文が施文されている。270、330は沈線が施文されている。318は香炉形土器もしくは土偶の頭部である。器体の全周に刻目帯が巡り、刻目帯と刻目帯の連結部分には貼瘤がされる。

Ⅴ群の土器

弥生時代に属すると思われる土器群である。すべて破片資料である。2号住居跡及び周辺のⅡ層からの出土が多い。外面の文様の種類によって5類に細分される。

Ⅴ群1類（21、26～30、281、283、340、342、359　第41・66・72・73図、写真図版32・33・53・58・59）

沈線文を多用する土器群である。平行沈線文、山形文、連弧文、渦巻き文などが施文される。Ⅴ群のなかでは出土点数が最も多い。2号住居跡及び周辺からの出土が多い。弥生時代後期に属すると思われる。縄文を併用するものが多い。

Ⅴ群2類（249、250　第63図、写真図版51）

帯縄文が施文されている土器群である。縄文施文後平行沈線文や連続山形文が施文されている。弥生時代後期に属すると思われる。南側遺物包含層（21L・21M）からの出土である。

Ⅴ群3類（282　第66図、写真図版53）

282は外面に隆帯をもつ土器の口縁部資料である。隆帯は指頭により連続的な押圧が加えられている。踏瀬大山式に併行する土器である。

Ⅴ群4類（25、105、343　第41・49・72図、写真図版32・40・58）

交互刺突文と沈線文が施文されている土器群である。25、105、343の3点のみで全体の様子を窺える資料は得られなかった。焼成があまり良くなく、土器は非常にやわらかい。弥生時代後期の天王山式・湯舟沢式に併行すると思われる土器群である。

Ⅴ群5類（24・251・331・338　第41・63・71・72図、写真図版32・51・58）

Ⅴ群に属すると思われる縄文のみの土器である。全体的に器面の磨滅が著しいものが多い。

Ⅵ群の土器（205、311、334、336、339　第58・69・71・72図、写真図版47・55・58）

時期を特定できなかった土器である。205は1号埋設土器である。頚部全周に貫通孔が巡る土器である。外面はＲＬ縄文が施文される。311、334、336、339は結節縄文が施文されている。

2．石器

当遺跡で出土した石器は石鏃6点、尖頭器3点、石錐1点、石匙2点、篦状石器1点、不定形石器20点、UF9点、剥片20点、砕片11点、石核1点、打製石斧2点、磨製石斧6点、磨製石斧未成品2点、半円状扁平打製石器1点、調整痕を有する礫2点、磨石・敲石類36点、石皿3点、台石1点、砥石1点、円礫38点、棒状礫5点の総数171点である。全て登録を行い、UF、剥片、砕片、円礫、棒状礫を除く88点のうち76点を実測・掲載している。使用・加工痕跡のない円礫・棒状礫のなかでも注意を促すものについては登録を行い、そのうち2点実測・掲載している。

分類を行うにあたって、剥片石器は石鏃、尖頭器、石錐、石匙、篦状石器に分けそれ以外は不定形石器として扱った。その他については形状と使用痕跡から石核、打製石斧、磨製石斧、半円状扁平打製石器、調整痕を有する礫、磨石・敲石類、石皿、台石、砥石に分けた。

石鏃（110、365～369　第50・74図、写真図版40・60）

扁平で左右対称、尖頭部と幅広な基部を有する小形の石器である。3号住居跡から1点、遺構外から5点出土している。全て掲載している。基部の形態が判別できるものは5点で、全て有茎鏃である。基部の形態から2種類に分けられる。

石鏃A類（110、365、366、369　第50・74図、写真図版40・60）

平基の有茎鏃である。110・365・369は平面形が正三角形状を呈すものである。両面とも丁寧に調整が施されている。110の基部にはアスファルトが付着している。366は平面形が二等辺三角形を呈すもので、基部は丸みを帯びている。

石鏃B類（367　第74図、写真図版60）

凸基の有茎鏃である。367のみである。縁辺が直線的で菱形に近い形状を呈す。

上記外として368がある。基部が欠損している。調整は2側縁には施されているが、素材の剥離面を大きく残している。大きさ・重量を考えると未製品の可能性がある。

尖頭器（16、211、370　第40・59・74図、写真図版32・48・60）

両側縁から調整によって尖頭部を作り出している石器である。石鏃よりは大形で厚さ、重量がある。1号住居跡から1点、遺物包含層から1点、遺構外から1点出土している。全て掲載している。16と370は基部資料である。16は細身のもので、両面とも丁寧に整形されている。370は他のものと比べると大形のもので、調整も粗い。211は2側縁が直線的で、基部は丸みを帯びるものである。素材の剥離面は残るものの両面とも370と比べると比較的丁寧に整形されている。

石錐（371　第74図、写真図版60）

穿孔具と考えられている石器である。端部に四方向からの調整によって錐部を作っている。断面形は菱形状を呈す。遺構外から1点出土している。棒状のもので両面とも入念な調整が施されている。先端部の摩滅が著しい。

石匙（372、373　第74図、写真図版60）

両側縁から抉りを入れることで作り出されたつまみ部とつまみ部とは異なる側縁に刃部を有する石器である。遺構外から2点出土しており、2点とも掲載している。272、273ともにつまみ部を上にすると刃部が横長になる横形の石匙である。刃部は腹面側からの急斜度調整によって作り出されている。断面形はD字状を呈す。373はバルブを除去する調整がなされている。

箆状石器（374　第74図、写真図版60）

平面形は撥形もしくは楕円形を呈し、端部に刃部を有する石器を箆状石器とした。遺構外から1点出土している。横長の剥片を素材とし、素材の形状を大きく変えることなく刃部の作出と整形を行っている。

不定形石器（17、111～113、130、142、203、212、213、240、284、375～378　第40・50・51・53・58・74図、写真図版32・40～42・46・60）

前述のとおり石鏃、尖頭器、石錐、石匙、篦状石器以外の剥片石器を一括して扱っている。1号住居跡から1点、3号住居跡から3点、5号住居跡から1点、9号住居跡から2点、112号柱穴状土坑から1点、遺物包含層から4点、遺構外から8点の計20点出土しており、16点掲載した。

当遺跡出土の不定形石器は刃部の位置と形態から大きく4つに大別し、必要に応じて細分を行っている。

不定形石器A類（111～113、130、142、240、375～377　第50・51・53・62・74図、写真図版40～42・51・60）

剥片の側縁に刃部を有するもので、緩斜度調整によって刃部を作り出している。削器に類するものである。1側縁に刃部があるもの（A1：111、113、240、375～377）と2側縁以上に刃部をもつもの（A2：112、130、142）の2種に細分される。111は交互両面調整によって、112、113、130、240、376、377は背面側から調整によって、142は腹面側からの調整によって、375は両面からの調整によって刃部を作り出している。

不定形石器B類（213、284　第59・66図、写真図版48・53）

剥片の端部に刃部を有するものである。急斜度調整によって刃部を作り出しており、掻器に類するものである。213は背面側からの調整によって、284は両面からの調整によって刃部を作り出している。284の背面側の調整は非常に緩斜度の調整で片刃状の刃部作出の意図が窺える。

不定形石器C類（17、203　第40・58図、写真図版32・46）

側縁の一部に抉入状の刃部を有するものである。17、203ともに背面側からの細かい調整によって刃部を作り出している。

不定形石器D類（212、378　第59図、写真図版48・60）

対向する二辺に相対する剥離痕を有するものである。所謂楔形石器に近似するものである。二点とも片面全面に礫面を残し、断面形がD字状で厚みのあるものである。

石核（380　第74図、写真図版60）

石核と思われるものが遺構外から1点出土している。作業面は1面のみで、作業面以外の面は礫面のままである。

打製石斧（172、387　第56・75図、写真図版45・61）

剥離調整によって成形された石斧である。6号住居状遺構から1点、遺構外から1点出土している。172は棒状の礫の端部に両面からの剥離調整によって刃部を作り出している。側面には敲打痕がみられる。基部側は欠損している。387は片面に礫面を大きく残す石斧である。基部側・刃部側ともに欠損しているため全体像は不明である。

磨製石斧（18、115、382～385　第40・50・75図、写真図版32・40・61）

敲打や研磨によって成形された石斧である。1号住居跡から1点、3号住居跡から1点、遺構外から4点の計6点が出土している。18、115、383～385は定角式磨製石斧である。両面とも顕著な研磨痕がみられる。完形のものは383の1点のみで他の4点は18が基部のみの資料、115、384、385が刃部もしくは刃部の一部を欠損している資料である。382は片面の刃部にのみ研磨痕がみられる。基部及び側縁には剥離痕がみられる。382は刃部が研磨によって成形されているため完成品としたが、大部分が剥離調整の段階で止まっているため、未成品の可能性もある。

磨製石斧未成品（116、381　第50・75図、写真図版40・60）

製作の途中であると思われるものである。３号住居跡から１点、遺構外から１点出土している。116は片面の中央部分に研磨痕がみられるが、その他の大部分は敲打による成形段階で止まっており、側面には剥離痕が残っている。381は片面の中央部分に研磨痕がみられるが、その他の部分は敲打による調整段階もしくは未調整であるため未成品とした。刃部には両面からの剥離痕が観察される。このまま使用された可能性もある。

半円状扁平打製石器（386　第75図、写真図版61）

一側縁が直線状で反対の側縁が弧状をなし、器形が概ね半円状を呈すように剥離調整された石器である。遺構外から１点出土している。直線状を呈す側縁には磨痕が顕著に観察される。両面とも縁辺部のみの調整しか施しておらず、素材の面を残している。

調整痕を有する礫（119、177　第51・56図、写真図版41・45）

３号住居跡から１点、１号土坑から１点、遺構外から１点の計３点出土しており、そのうち２点を掲載した。棒状の礫の縁辺部に調整加工がなされている。119は一側縁の約1/2に両面から連続的な調整が施されている。他方の側縁には調整が施された範囲と同等の部分で稜の潰れが観察される。177は一側縁の約3/5に調整が施されており、稜は潰れている。用途等詳細は不明である。

磨石・敲石類（19、36～38、117、118、131、132、155、173、197、214、241、242、285、388～402　第40・41・50・51・53・56・57・74・76・77図、写真図版32・33・41・43・45・46・60～62）

遺構内外から計36点出土している。そのうち30点を掲載した。この器種は自然礫を利用して「磨る・敲く・潰す」という機能を有する石器の一群である。使用痕跡によって機能別に分類されるが、使用痕跡は単独で観察されるものよりも複合して観察されるものが多いことから、一括して扱っている。観察される使用痕跡の組合せによってＡ～Ｆ類の６類に分類し、素材の正面観の形状によって細分している。当遺跡ではＡ類が多数を占めている。

＜磨石・敲石Ａ類　磨石＞

磨面のみを有する礫である。素材の正面観によってＡ１類～Ａ４類に細分される。

磨石・敲石Ａ１類（37、118、155、388、394、396　第41・50・53・76図、写真図版33・41・43・61・62）

円形基調の礫である。使用面は37、388、394、396が表裏２面、118、155は全面またはほぼ全面である。

磨石・敲石Ａ２類（38、117、131、391、397　第41・50・51・76・77図、写真図版33・41・61・62）

楕円形基調の礫である。使用面は397が１面、38、117、131が表裏２面である。391の使用面は両端部に４面あり、末端部は線状になっている。131は約1/2を欠損している。

磨石・敲石Ａ３類（36、402　第41・77図、写真図版33・62）

方形基調の礫である。36は４面を使用面としている。402は使用面が１面のみの資料である。

磨石・敲石Ａ４類（197、241、242　第57・62図、写真図版46・51）

Ａ１～Ａ３類に入らない礫の一群である。使用面はすべて表裏２面である。

＜磨石・敲石Ｂ類　凹石＞

凹部のみを有する礫である。素材の正面観によってＢ１類～Ｂ３類に細分される。

磨石・敲石Ｂ１類（214　第59図、写真図版48）

楕円形基調の礫である。凹部は表裏の２箇所に観察される。

磨石・敲石Ｂ２類（401　第77図、写真図版62）

方形基調の礫である。凹部は表裏２箇所に観察される。

磨石・敲石Ｂ３類（173　第56図、写真図版45）

Ｂ１、Ｂ２類に入らない礫の一群である。表面に凹部が観察される。

＜磨石・敲石Ｃ類　敲石（389、400　第76・77図、写真図版61・62）＞

敲打痕のみが観察される石器で、棒状の礫を素材としている。389は下端部のみに、400は上下両端に敲打痕が観察される。

＜磨石・敲石Ｄ類　磨石＋敲石＞

磨面と敲打痕を有する礫である。素材の正面観によってＤ１類～Ｄ３類に細分される。

磨石・敲石Ｄ１類（398、399　第77図、写真図版62）

円形基調の礫である。398、399ともに磨面は表裏２面に観察される。398は側縁の３箇所に、399は側縁のほぼ全周に敲打痕が観察される。

磨石・敲石Ｄ２類（395　第76図、写真図版61）

球形基調の礫である。磨面は表裏２面の中央部に観察される。下端部には敲打痕が観察される。

磨石・敲石Ｄ３類（19　第40図、写真図版32）

方形基調の礫である。３面に磨面が、上端部に敲打痕が観察される。

＜磨石・敲石Ｅ類　磨石＋敲石＋凹石（285　第66図、写真図版53）＞

285の１点のみである。磨面、凹部、敲打痕を有する楕円形基調の礫である。表裏２面に磨面と凹部が、下端部には敲打痕が観察される。

＜磨石・敲石Ｆ類　特殊磨石（390、392、393　第76図、写真図版61）＞

断面形が三角形もしくは扁平な礫を素材とし、一側縁または複数の側縁を使用している、特殊磨石と呼ばれる礫の一群である。390は表裏２面とも平滑になっており、使用の痕跡が窺える。392・393は一部のみの資料である。

石皿（20・39・403　第40・42・77図、写真図版32・33・62）

大形の礫の一面もしくは二面に、広範囲にわたって磨面もしくは磨面と敲打痕が観察される石器である。１号住居跡から１点、２号住居跡から１点、遺構外から１点出土している。20はやや凹んだ使用面の観察される礫破砕片である。39、403の使用面は１面のみでほぼ平坦である。

台石（178　第56図、写真図版45）

大形の礫の平坦面に敲打痕が観察される石器である。１号土坑から１点出土している。不整形の礫を使用している。

砥石（404　第77図、写真図版62）

遺構外から１点出土している。ブロック状の礫の１面のみを使用している。使用による線条痕が顕著である。

円礫（120・121　第51図、写真図版41）

明瞭な使用痕跡は確認できなかったが、遺構内からの出土であったため掲載した。

この他にＵＦ２点（114・143　第50・53図、写真図版40）と剥片２点（181・379　第74図、写真図版45・60）を掲載している。

３．土製品

当遺跡で出土した土製品はミニチュア土器５点、土偶２点、スタンプ形土製品２点、円盤状土製品１点である。すべて掲載している。

ミニチュア土器（122、133、144、243、405　第51・62・78図、写真図版41・51・62）

非常に小形の土器の一群でミニチュア土器といわれているものである。３号住居跡から１点、５号住居跡から１点、９号住居跡から１点、包含層から１点、遺構外から１点の計５点出土している。122は口縁部から胴部までの破片資料である。口縁端部と頸部に刻目帯を有し、頸部の刻目帯から下部には異方向羽状縄文が施文されている。133、144は手づくね製で無文である。144の口唇部には細かい刻目が観察される。243、405は縄文が施文されているものである。

土偶（123、406　第51・78図、写真図版41・62）

３号住居跡から１点、遺構外から１点の計２点が出土している。123は頭部・両腕・左つま先を欠いている。胸部から腹部にかけては棒状工具による刺突によって、腰部には縦方向の短沈線によって施文されている。406は脚部のみの資料である。

スタンプ形土製品（124、407　第51・78図、写真図版41・62）

３号住居跡から１点、遺構外から１点の計２点が出土している。124は実測図の下面にあたる部分に沈線によって施文されている。つまみ状の部分には貫通孔を有す。407は器面全体に沈線によって施文されている。つまみ状の部分には貫通孔を有す。

円盤状土製品（408　第78図、写真図版62）

408の１点のみで遺構外から出土している。沈線と縄文によって施文された土器片を利用し、沈線が長軸の位置になるように再加工している。中央部にはアスファルトと思われる物質が付着している。

4．石製品

当遺跡で出土した石製品は軽石製品２点である。この他に調査区外で表採された円盤状石製品があるが、参考資料として掲載している。

軽石製品（147、409　第53・78図、写真図版43・62）

12号住居跡から１点、遺構外から１点の計２点が出土している。147は刃のない斧のような形状をしている。ほぼ全面研磨されている。上部の一部を欠損している。409は板状のものである。上部に表裏両面から穿孔されている。穿孔された部分より上部は欠損している。

円盤状石製品（410　第78図、写真図版62）

調査区外で表採されたものである。若干であるが研磨痕が観察される。

5．銭貨（204、411　第58・78図、写真図版46・62）

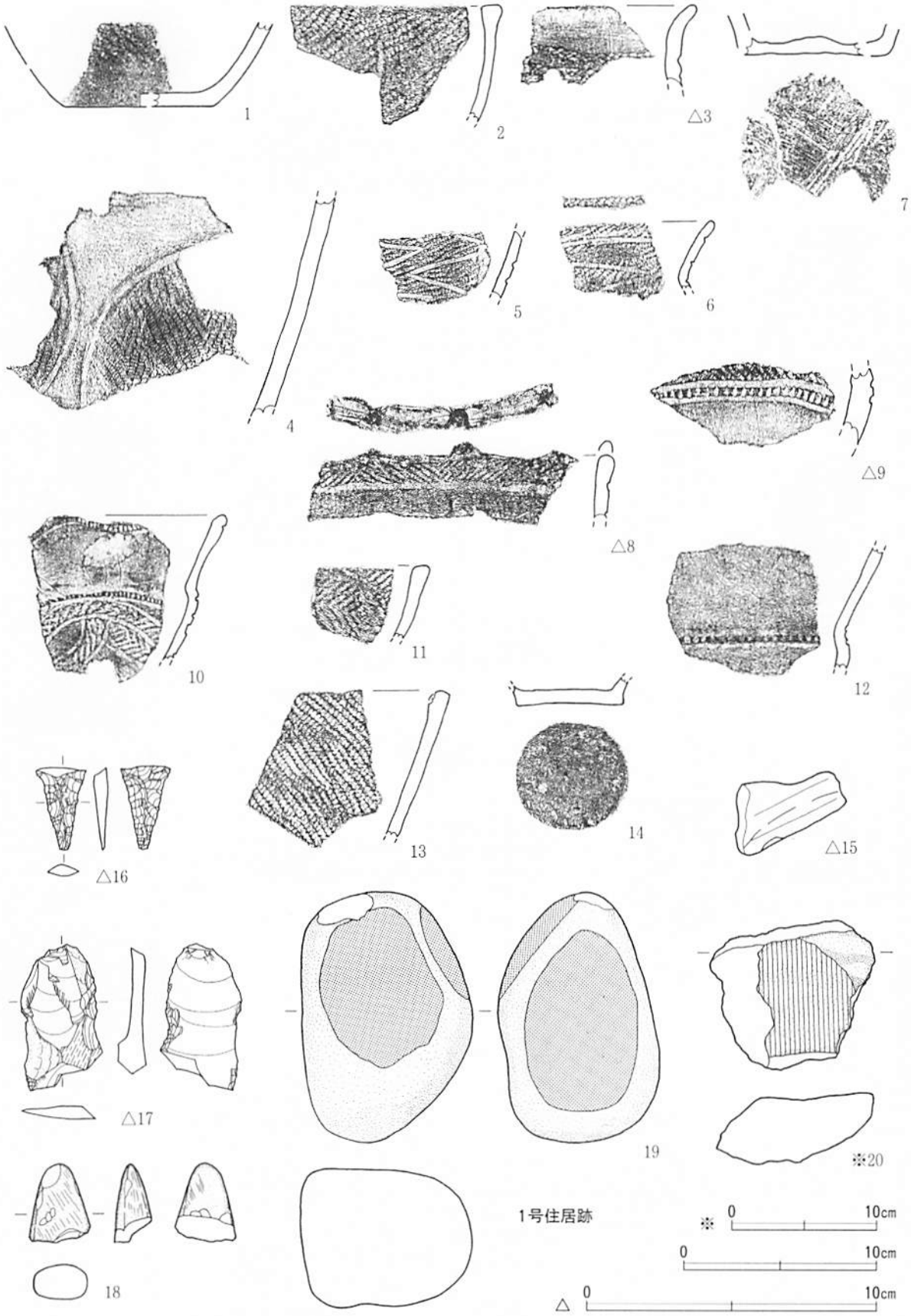
本遺跡では２枚の古銭が出土している。204は128号柱穴状土坑から出土したものである。銭名はあるものの磨滅していて解読することはできなかった。411は寛永通宝で、遺構外から出土したものである。新寛永である。

6．自然遺物（125～127　写真図版41）

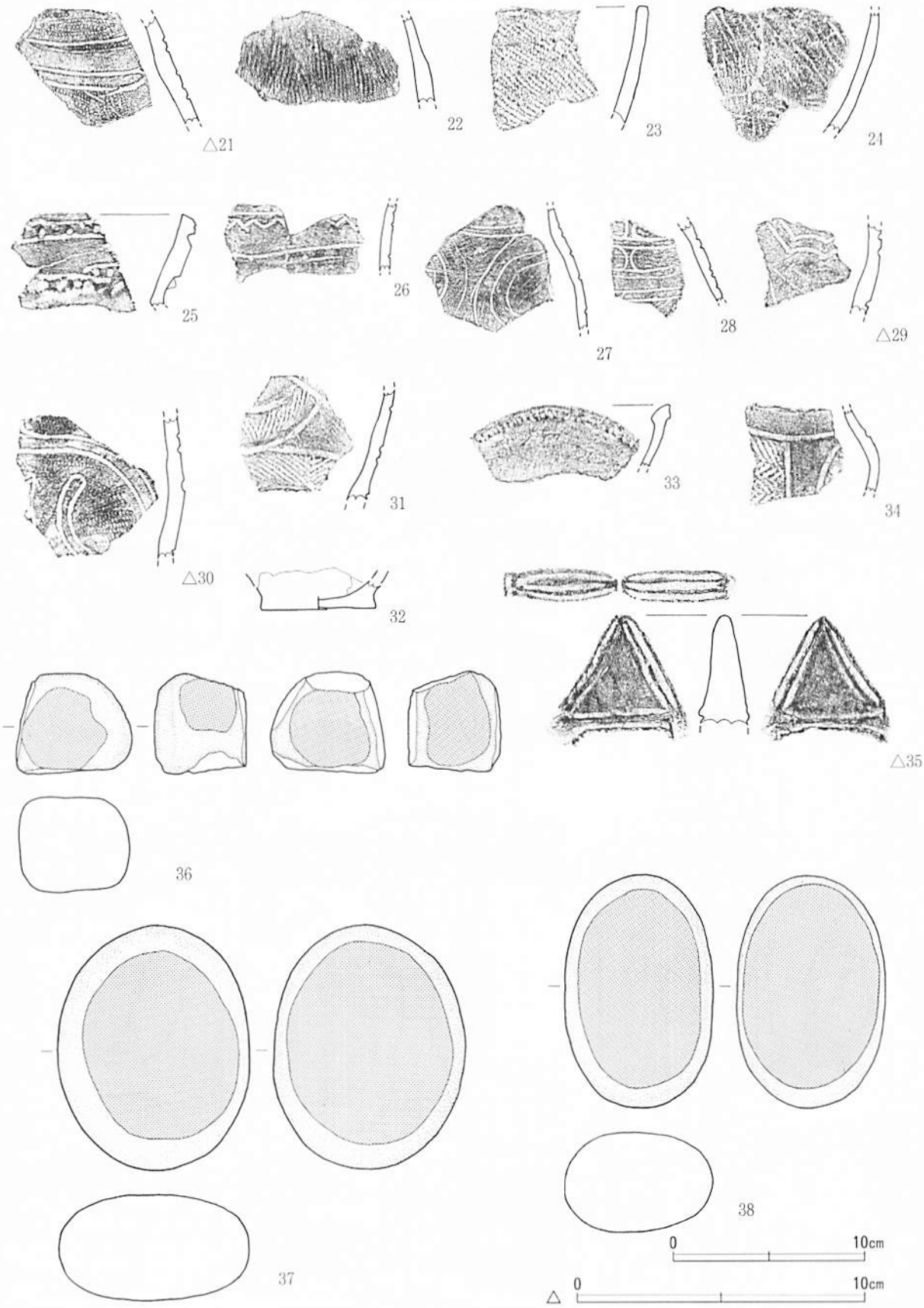
自然遺物にはアスファルト、炭化した木の実、獣骨がある。125、126はアスファルトで、ともに３号住居跡からの出土である。このうちの１点を分析に出しており、成果はⅦ章で述べる。この他に150の土器の中にも容器一杯にアスファルトが詰まって出土している。127は炭化した木の実で、３号住居跡からの出土である。

この他に21号土坑からは獣骨が出土している。種類はイノシシと思われ、部位は頭骨１個分（右側頭骨破片、側頭骨破片を含む）、左右下顎犬歯各１点、左第三後臼歯１点、後臼歯破片１点である。（註１）

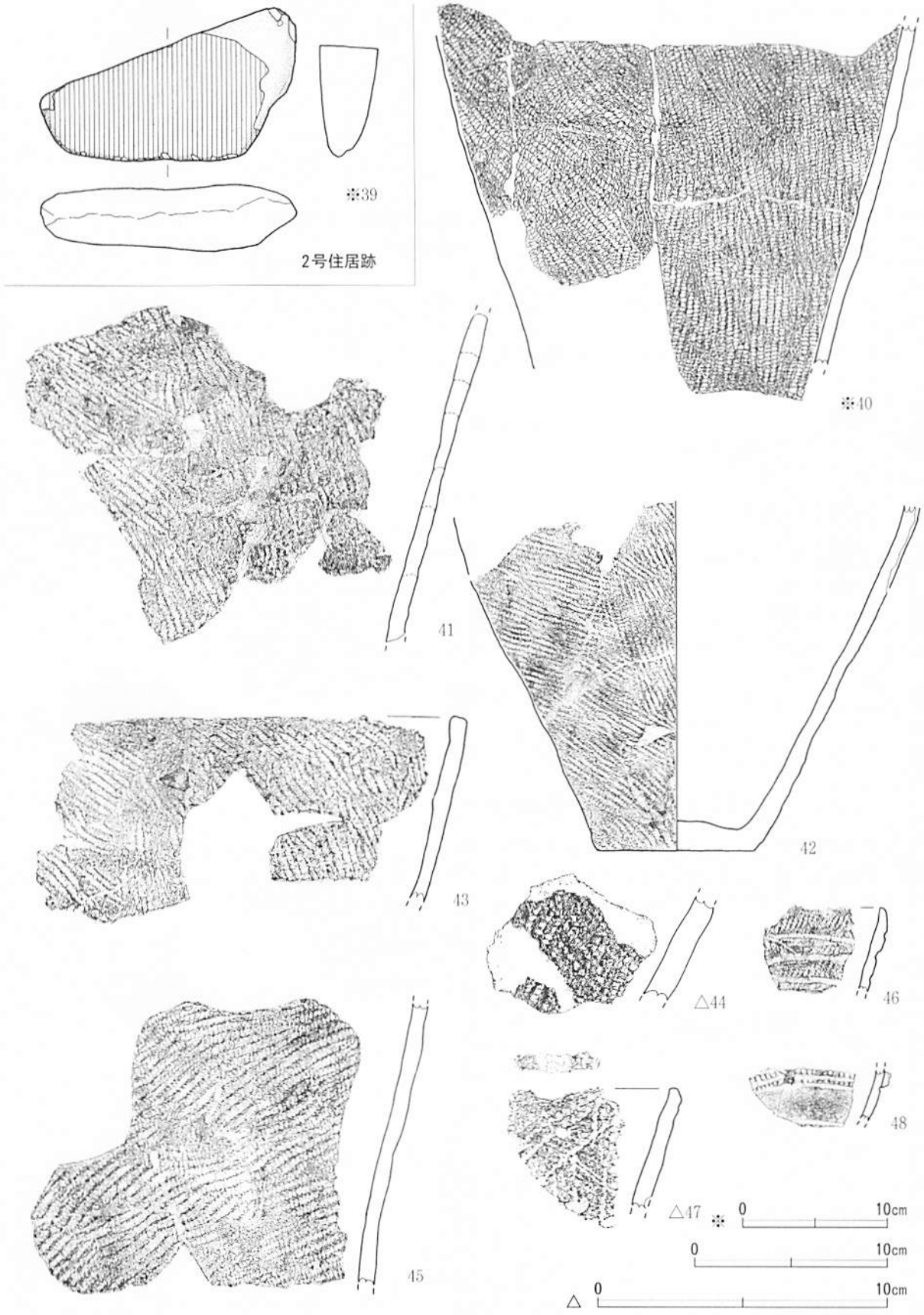
註１　獣骨の同定は八戸市縄文学習館の小林和彦氏に依頼した。



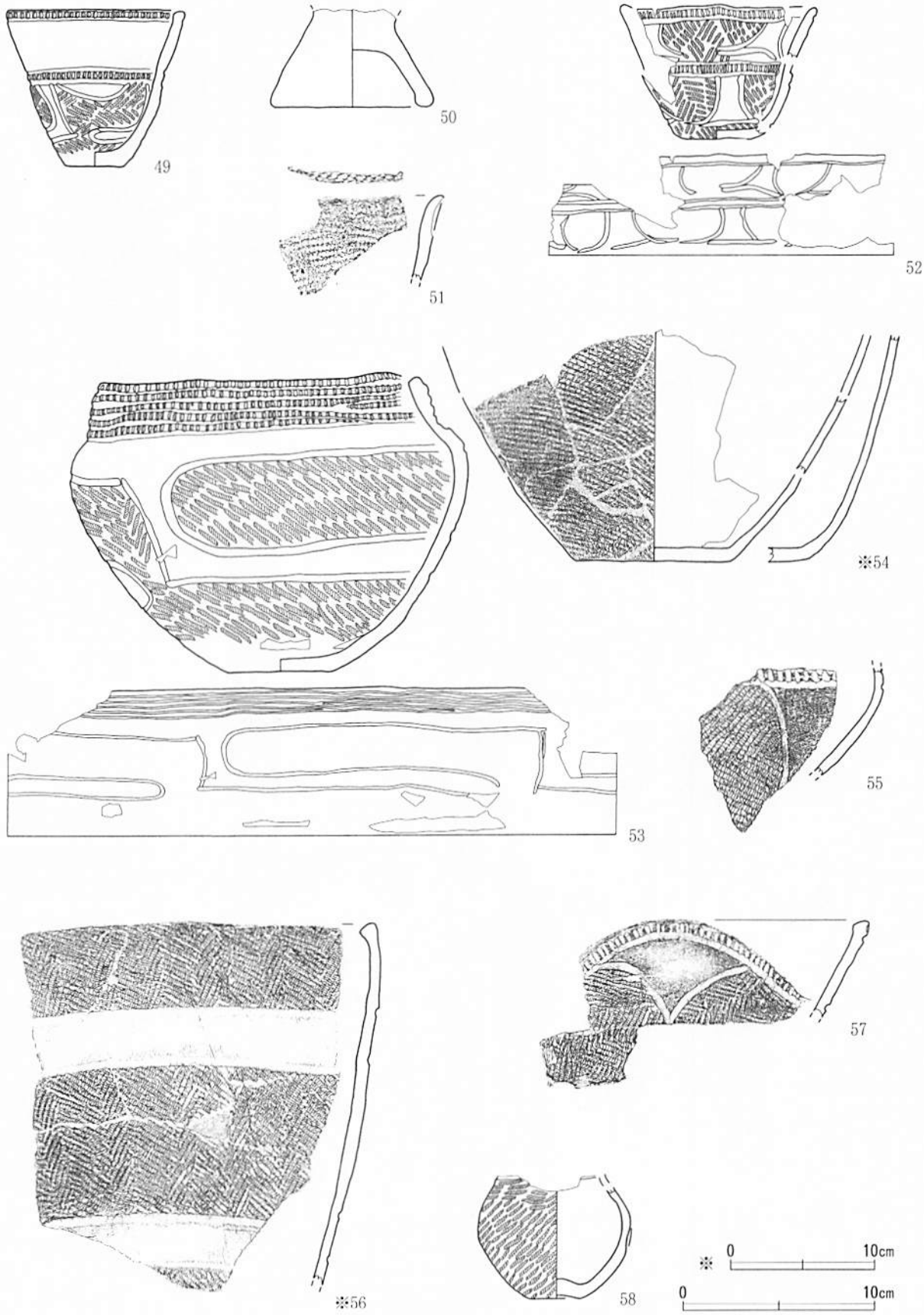
第40図　遺構内出土遺物１（住居跡①）



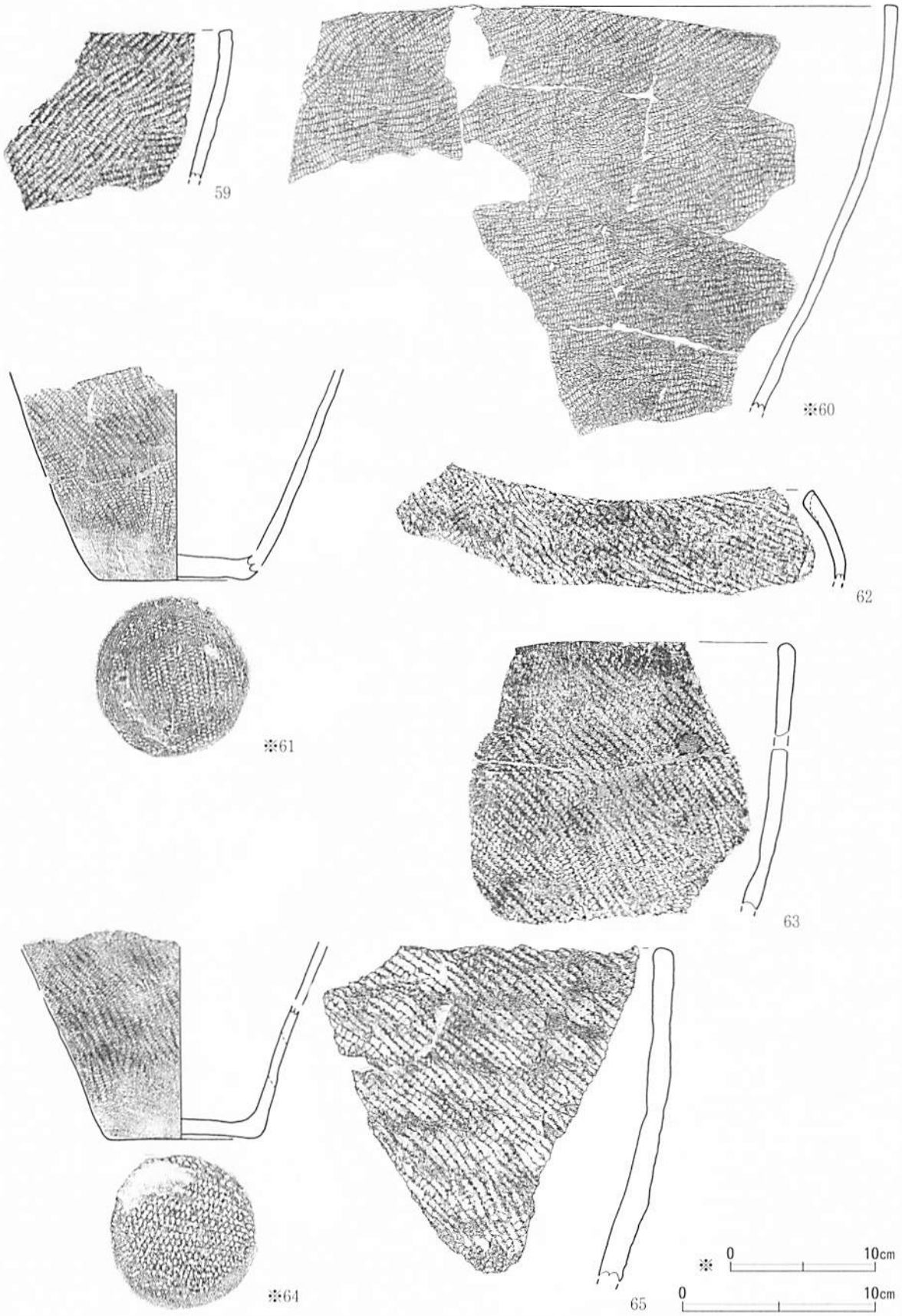
第41図　遺構内出土遺物２（住居跡②）



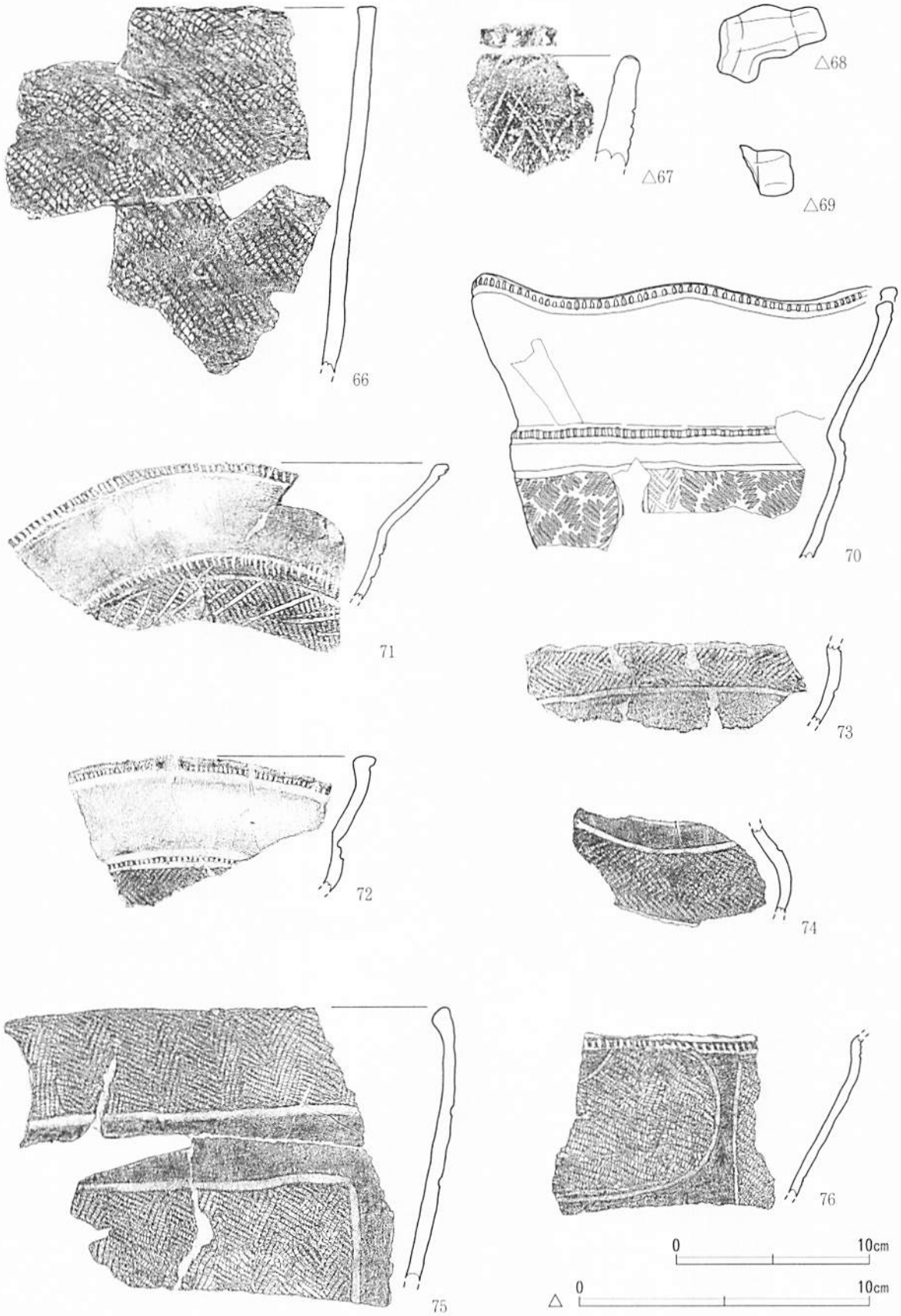
第42図　遺構内出土遺物３（住居跡③）



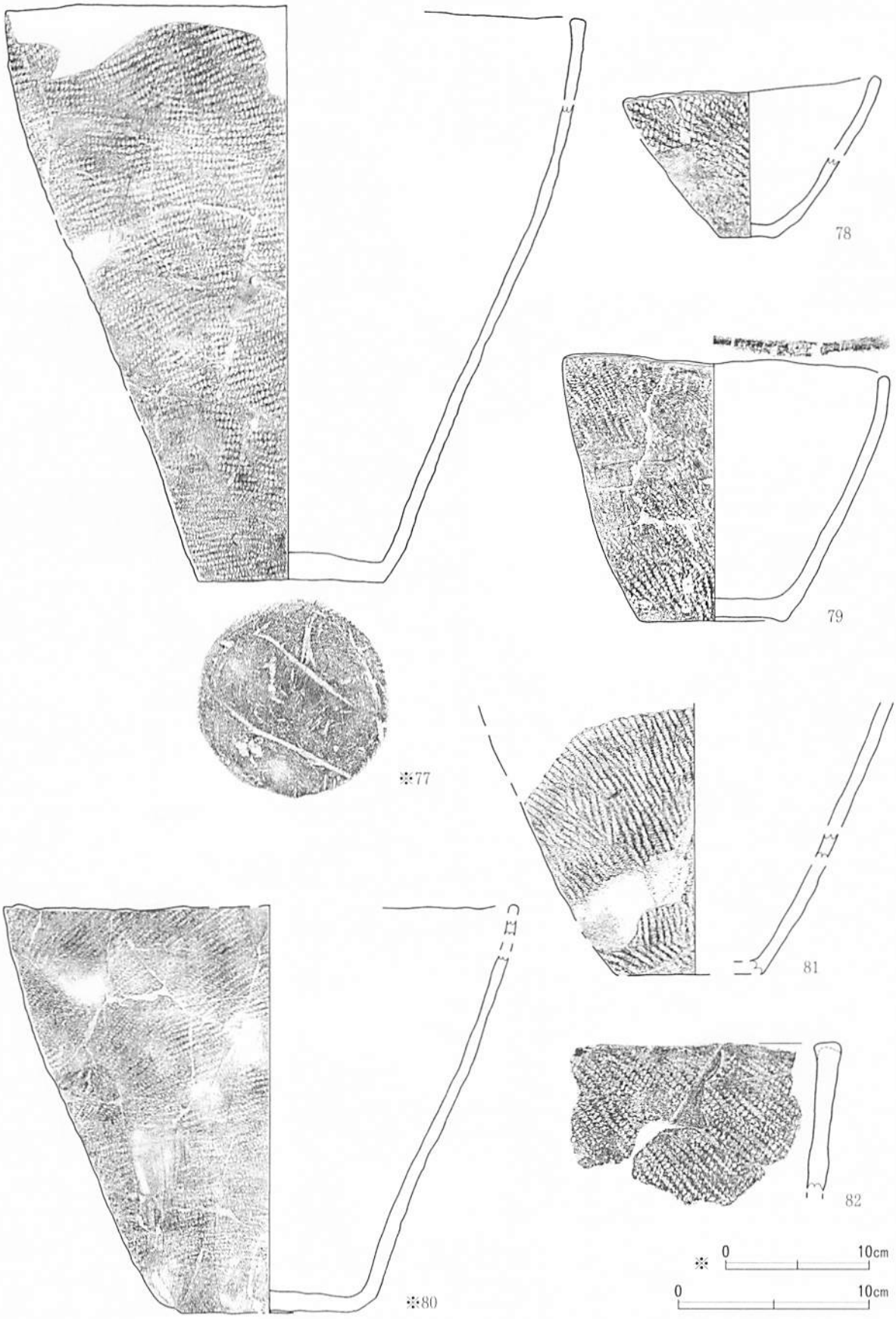
第43図　遺構内出土遺物４（住居跡④）



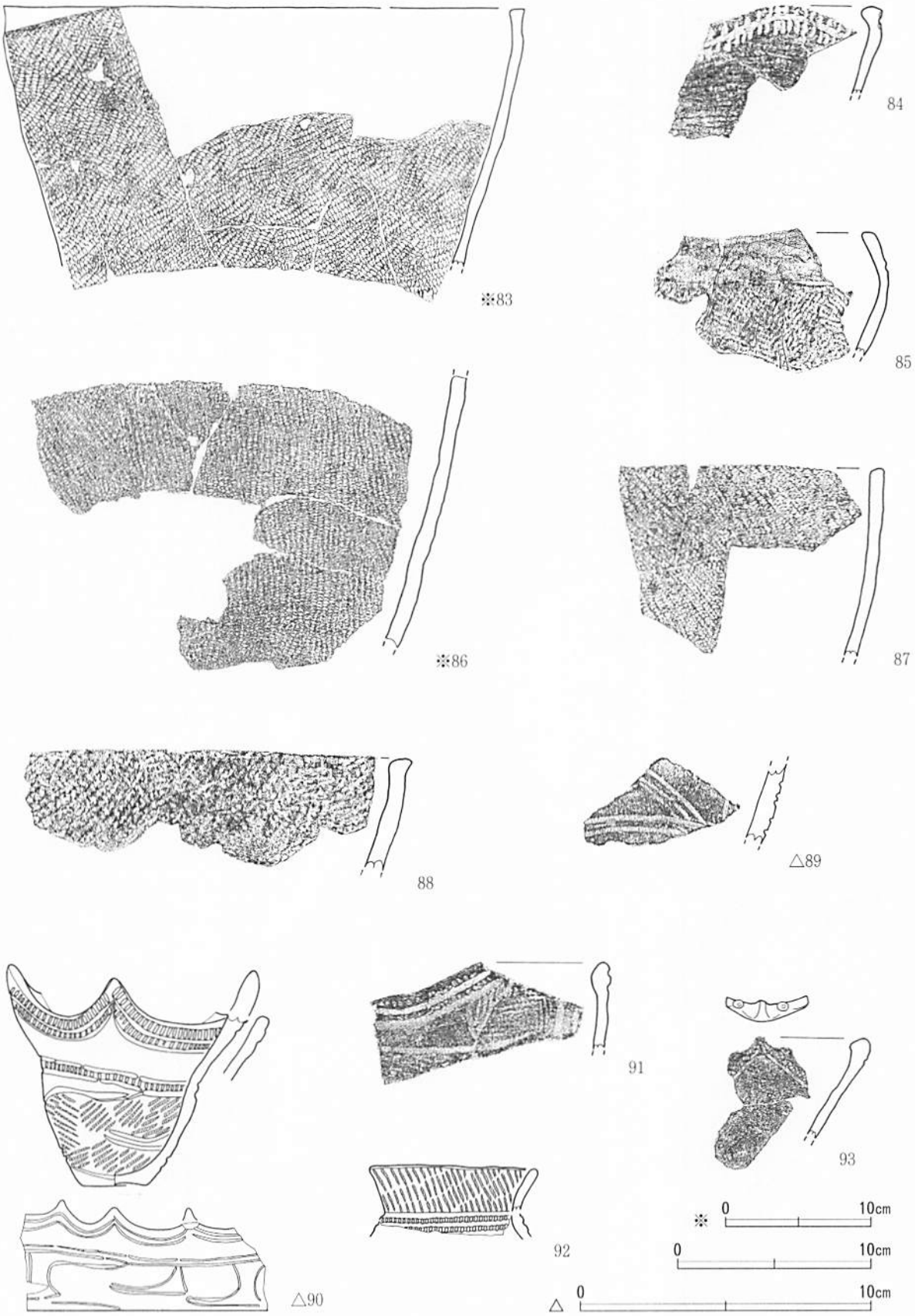
第44図　遺構内出土遺物５（住居跡⑤）



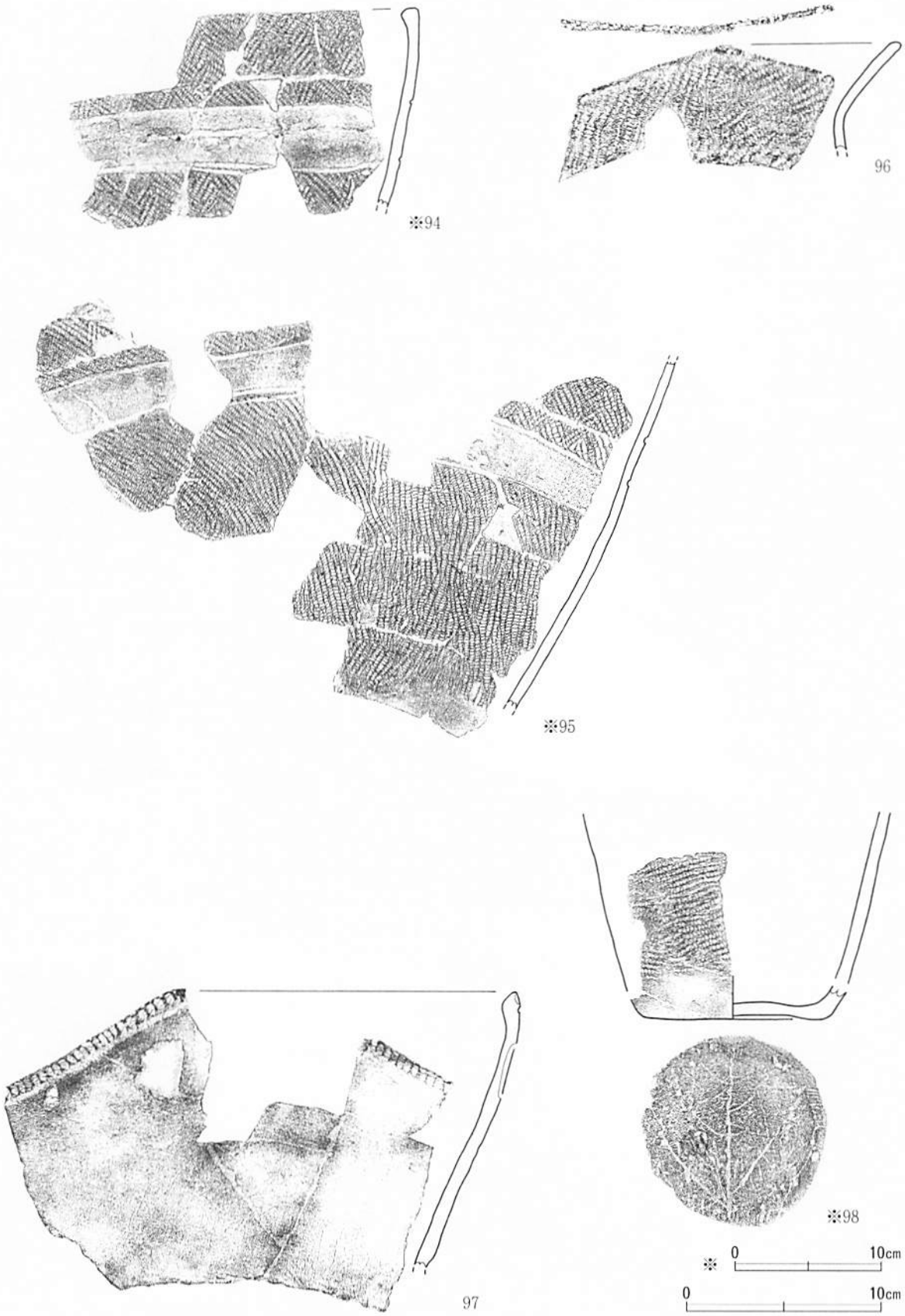
第45図　遺構内出土遺物６（住居跡⑥）



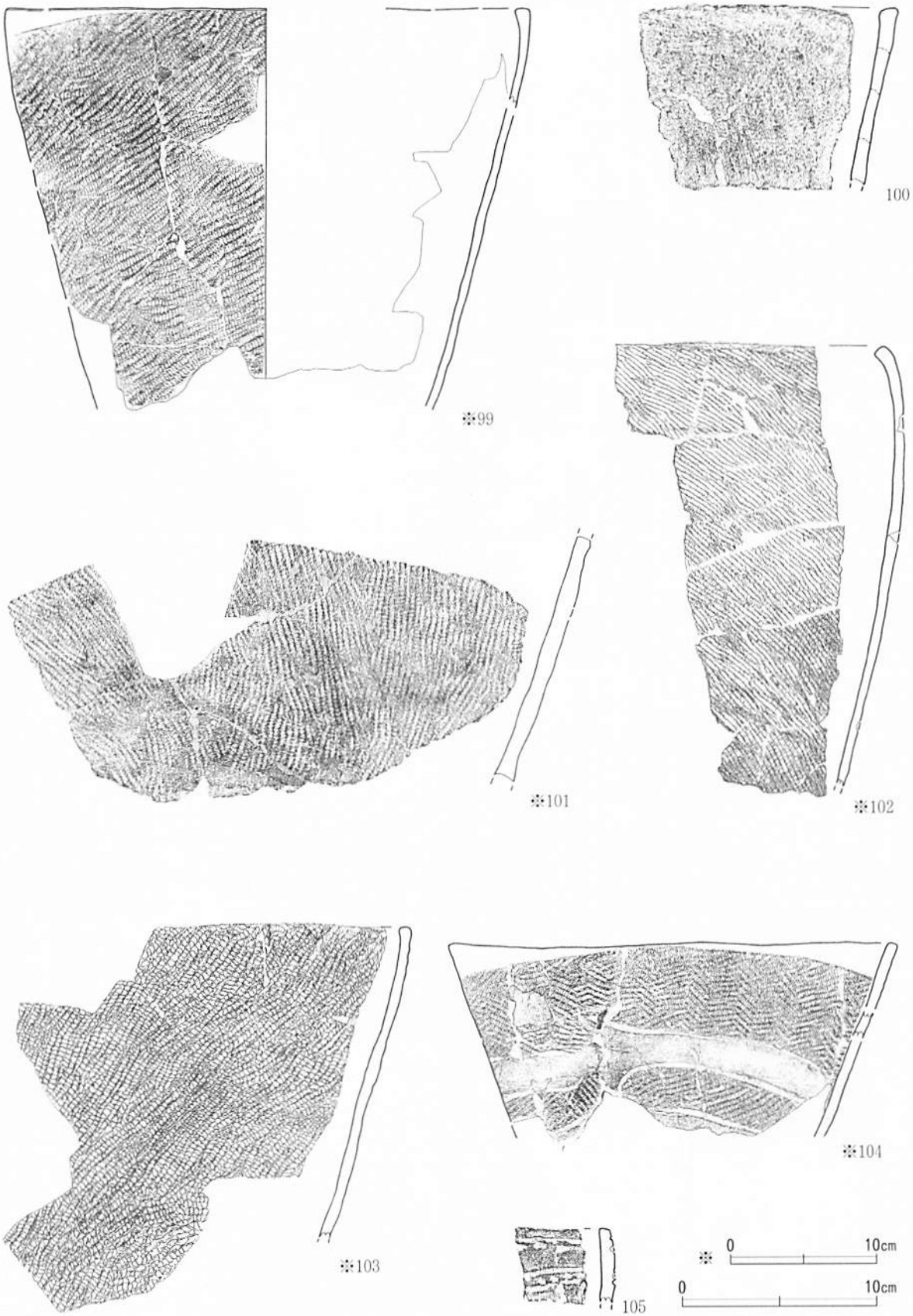
第46図　遺構内出土遺物７（住居跡⑦）



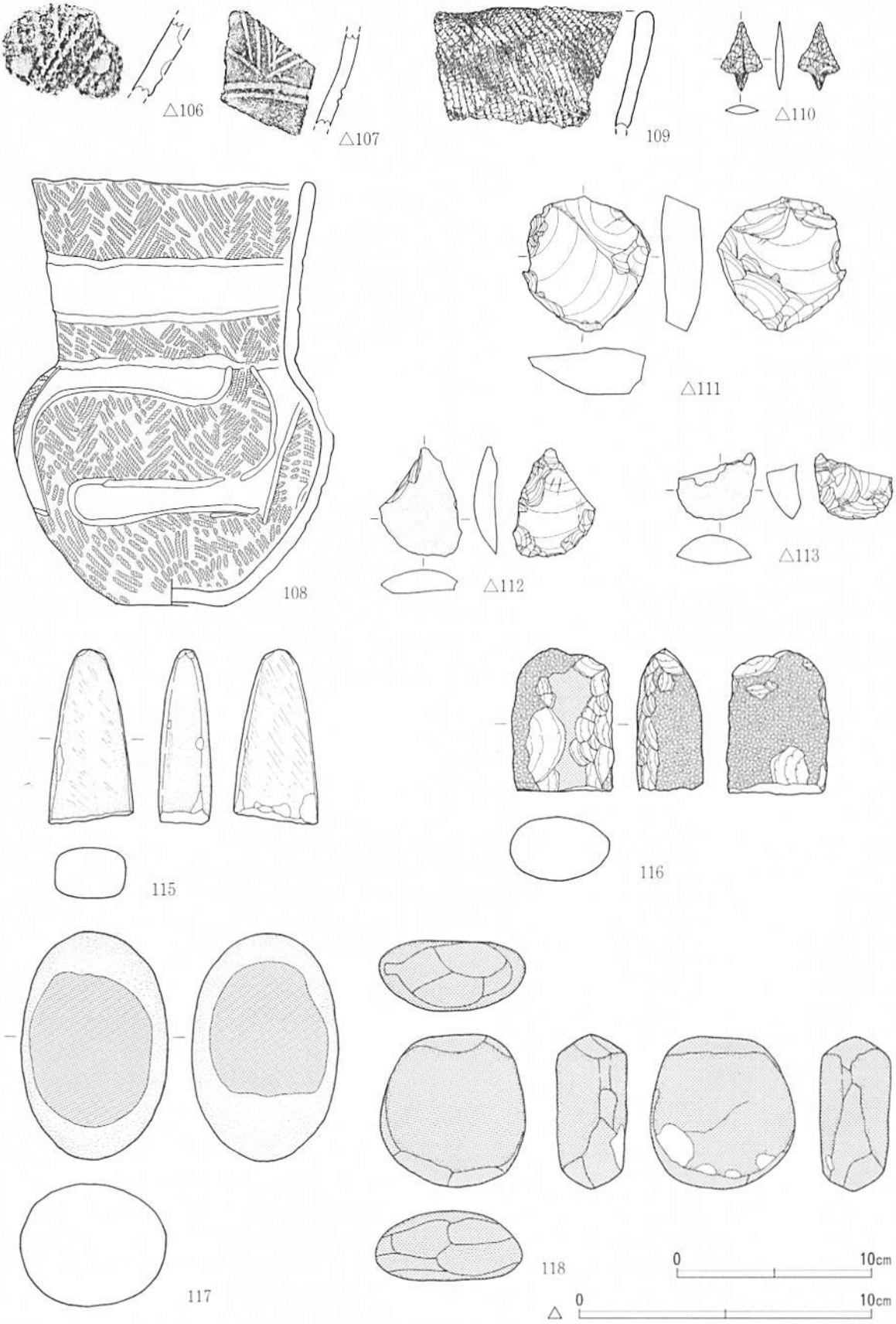
第47図　遺構内出土遺物８（住居跡⑧）



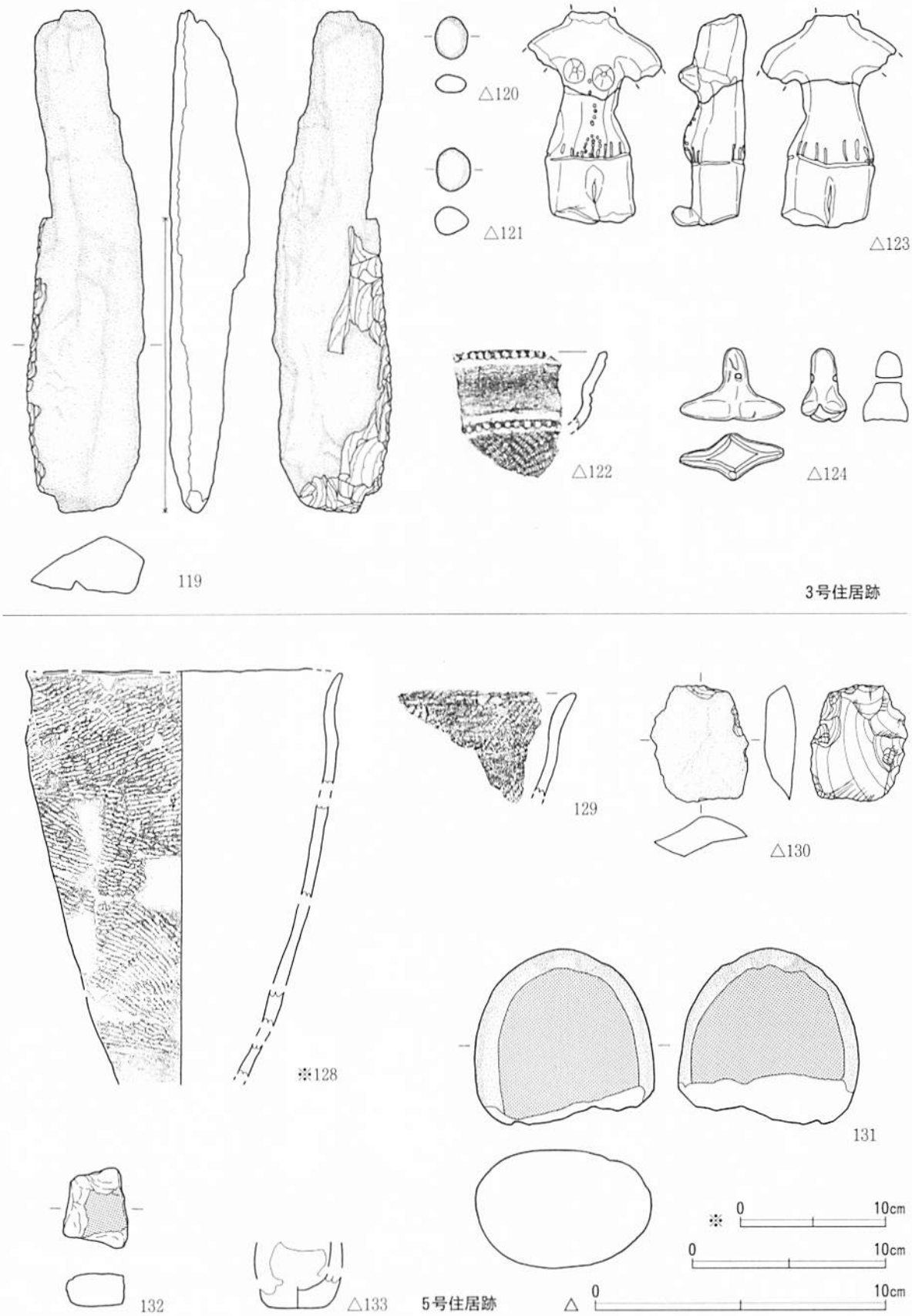
第48図　遺構内出土遺物 9 （住居跡⑨）



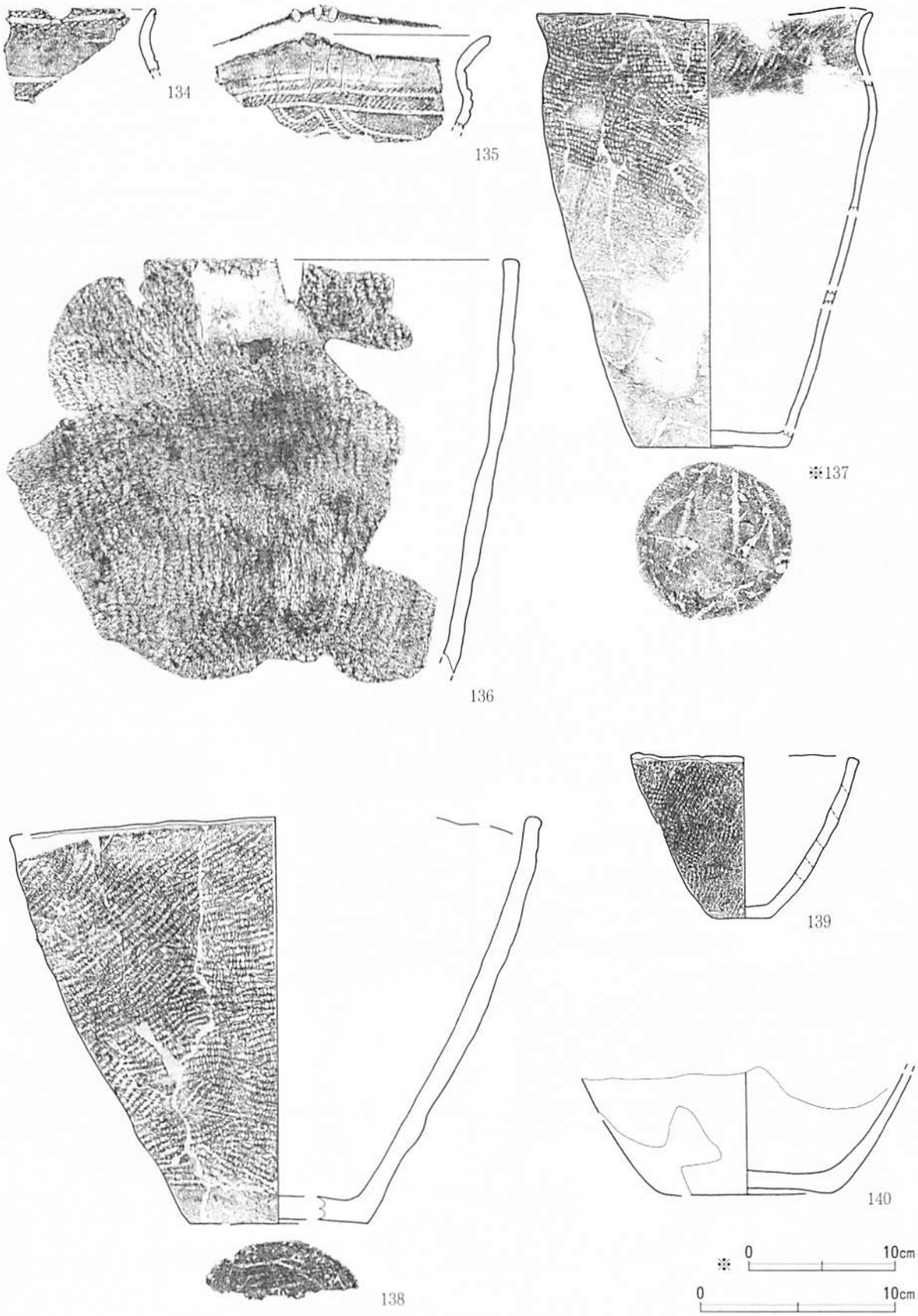
第49図　遺構内出土遺物10（住居跡⑩）



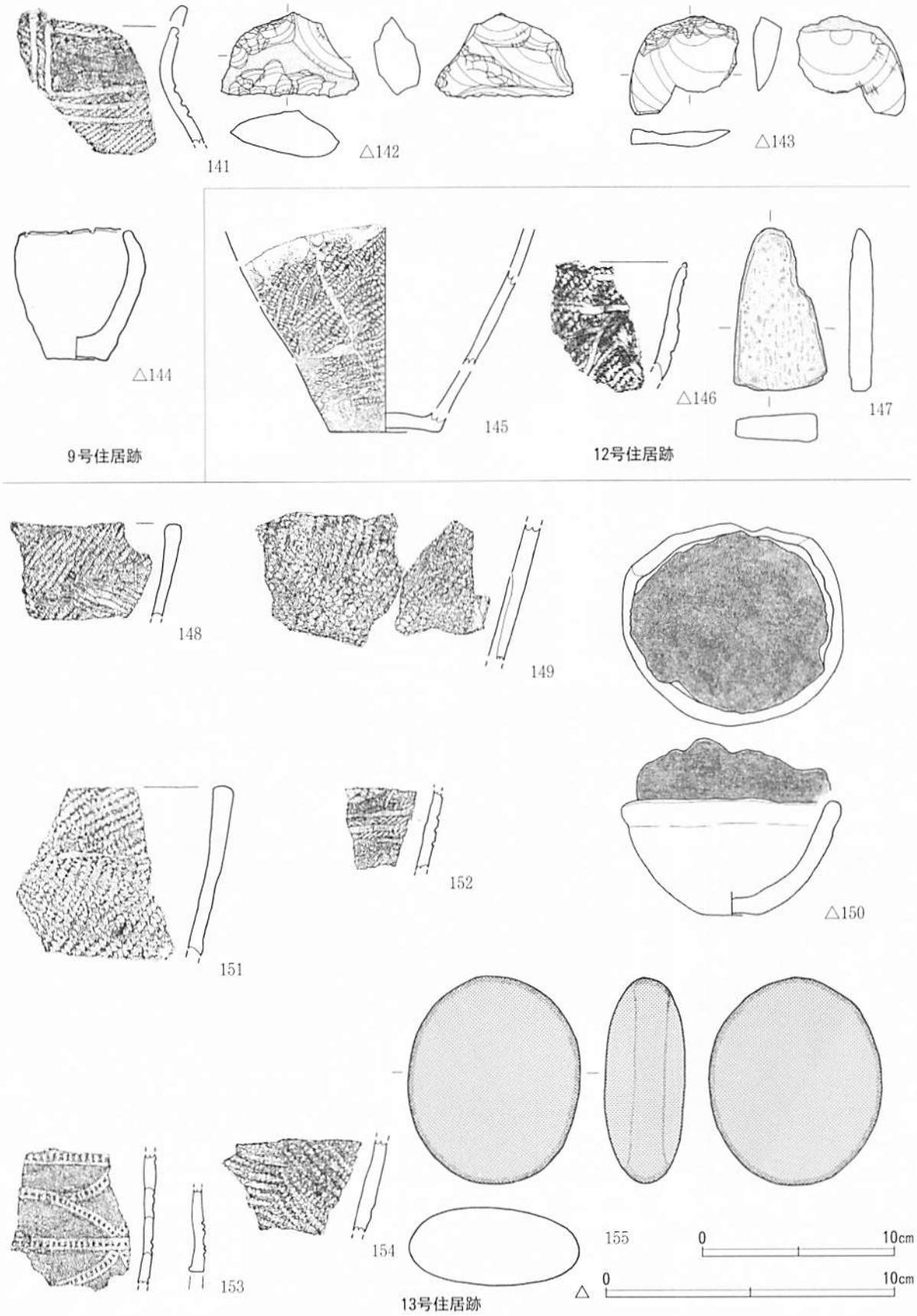
第50図　遺構内出土遺物11（住居跡⑪）



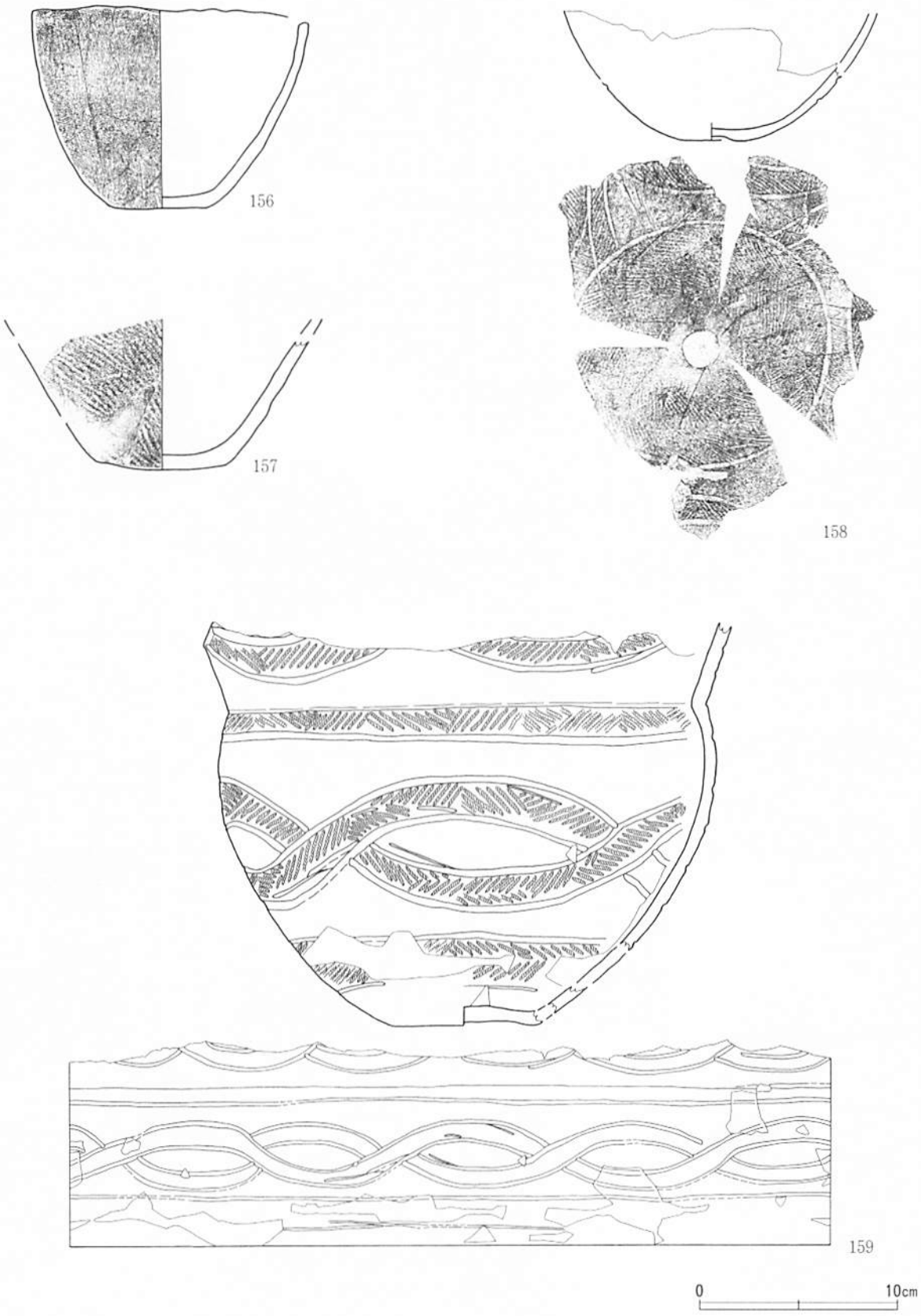
第51図　遺構内出土遺物12（住居跡⑫）



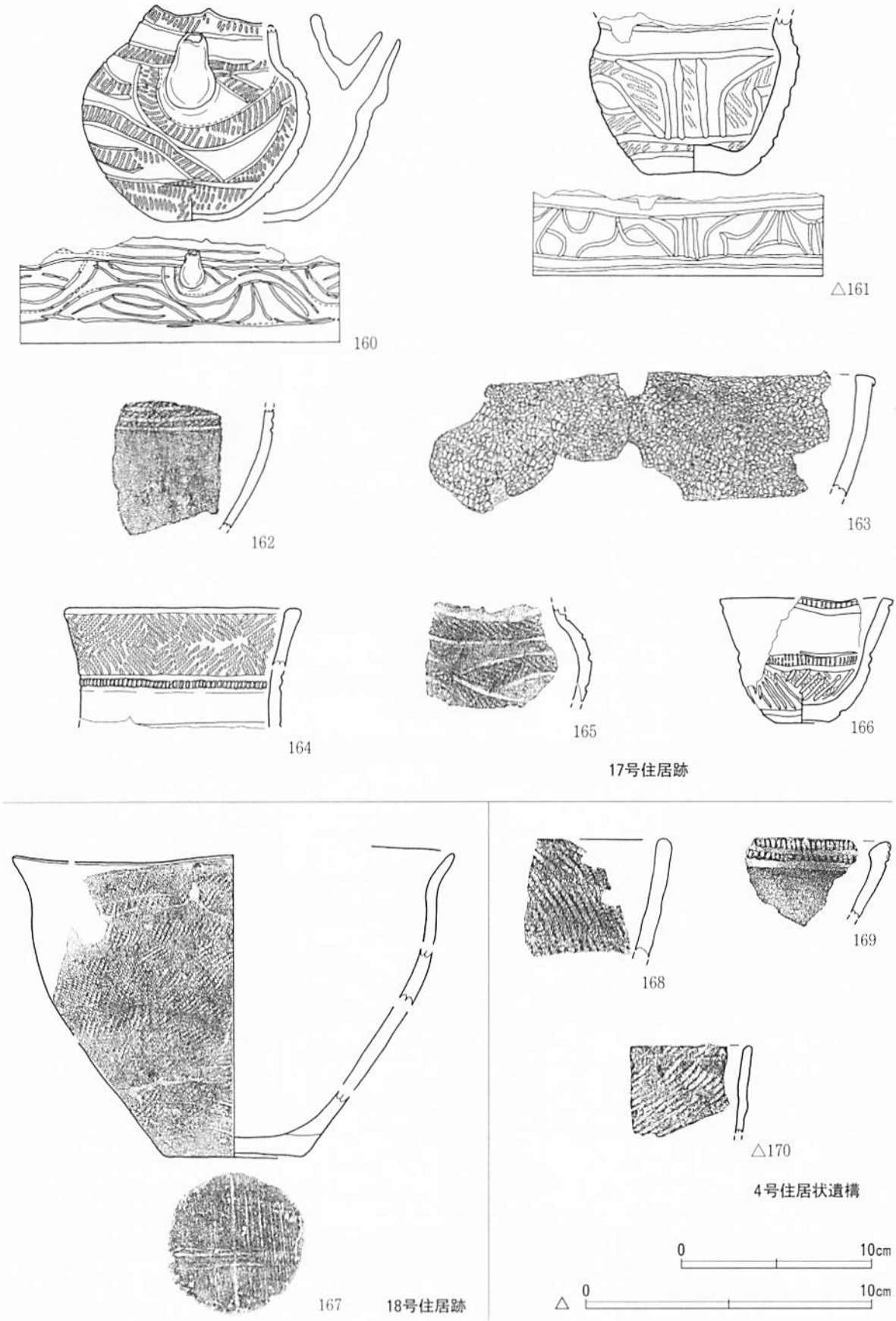
第52図　遺構内出土遺物13（住居跡⑬）



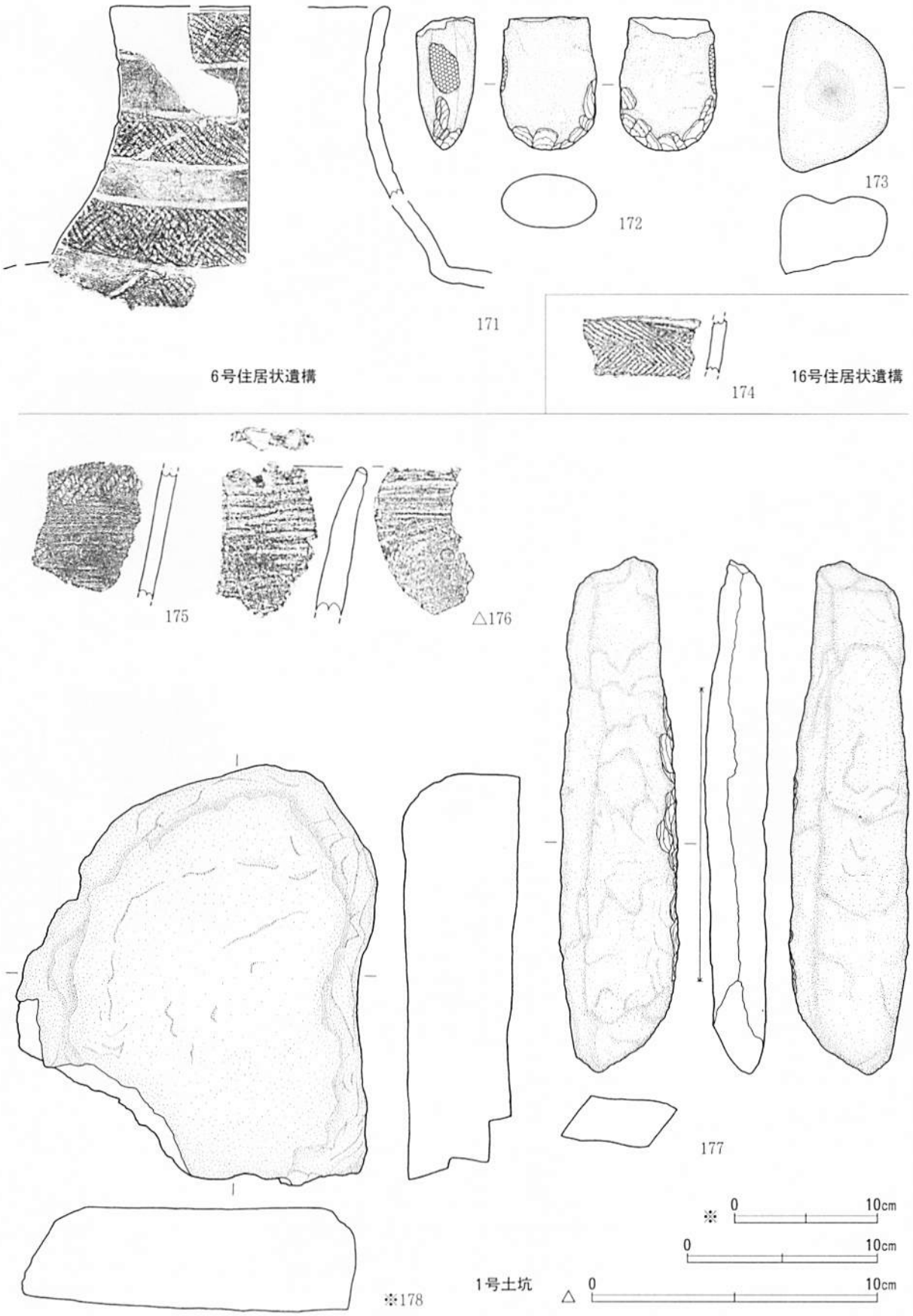
第53図　遺構内出土遺物14（住居跡⑭）



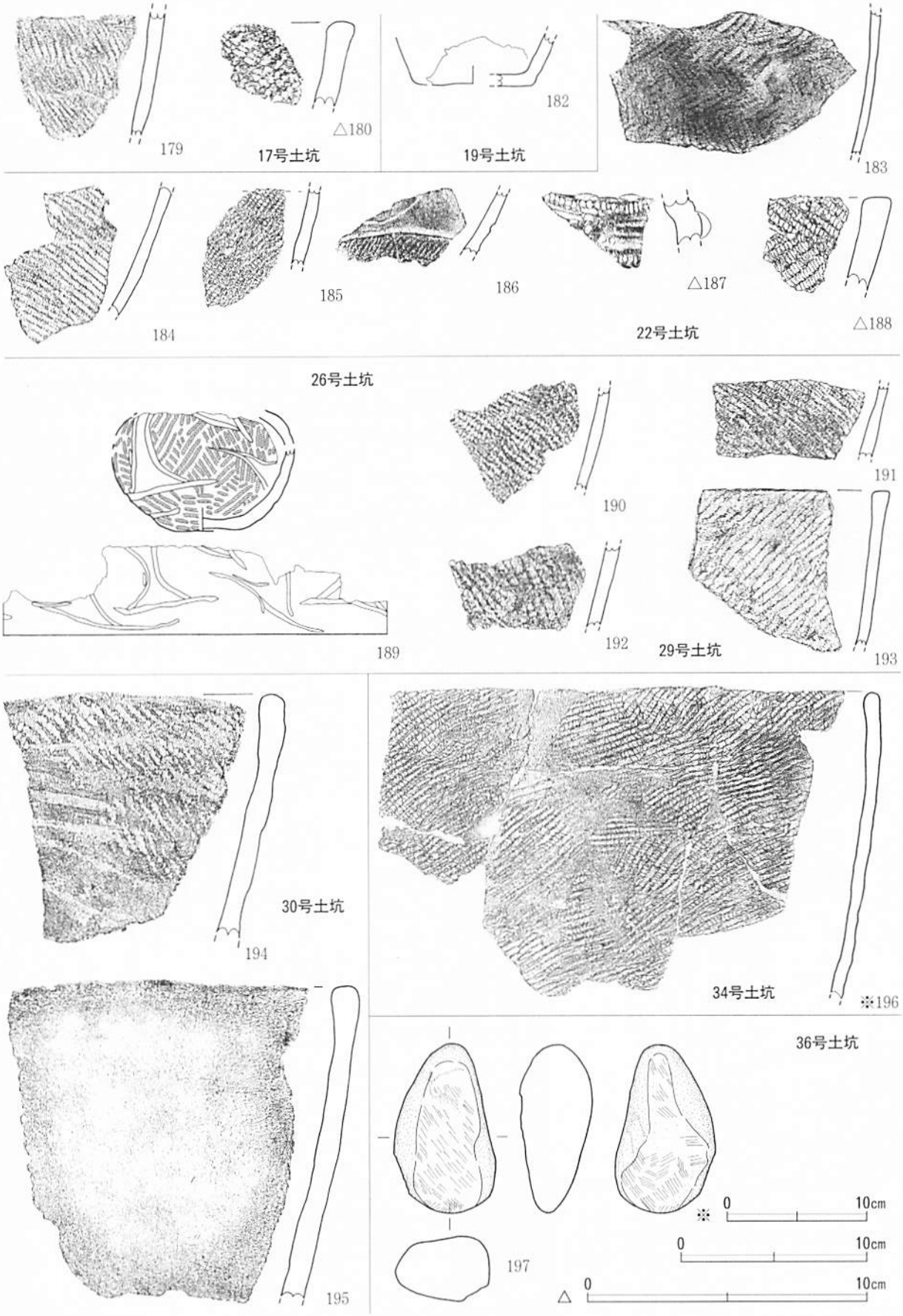
第54図　遺構内出土遺物15（住居跡⑮）



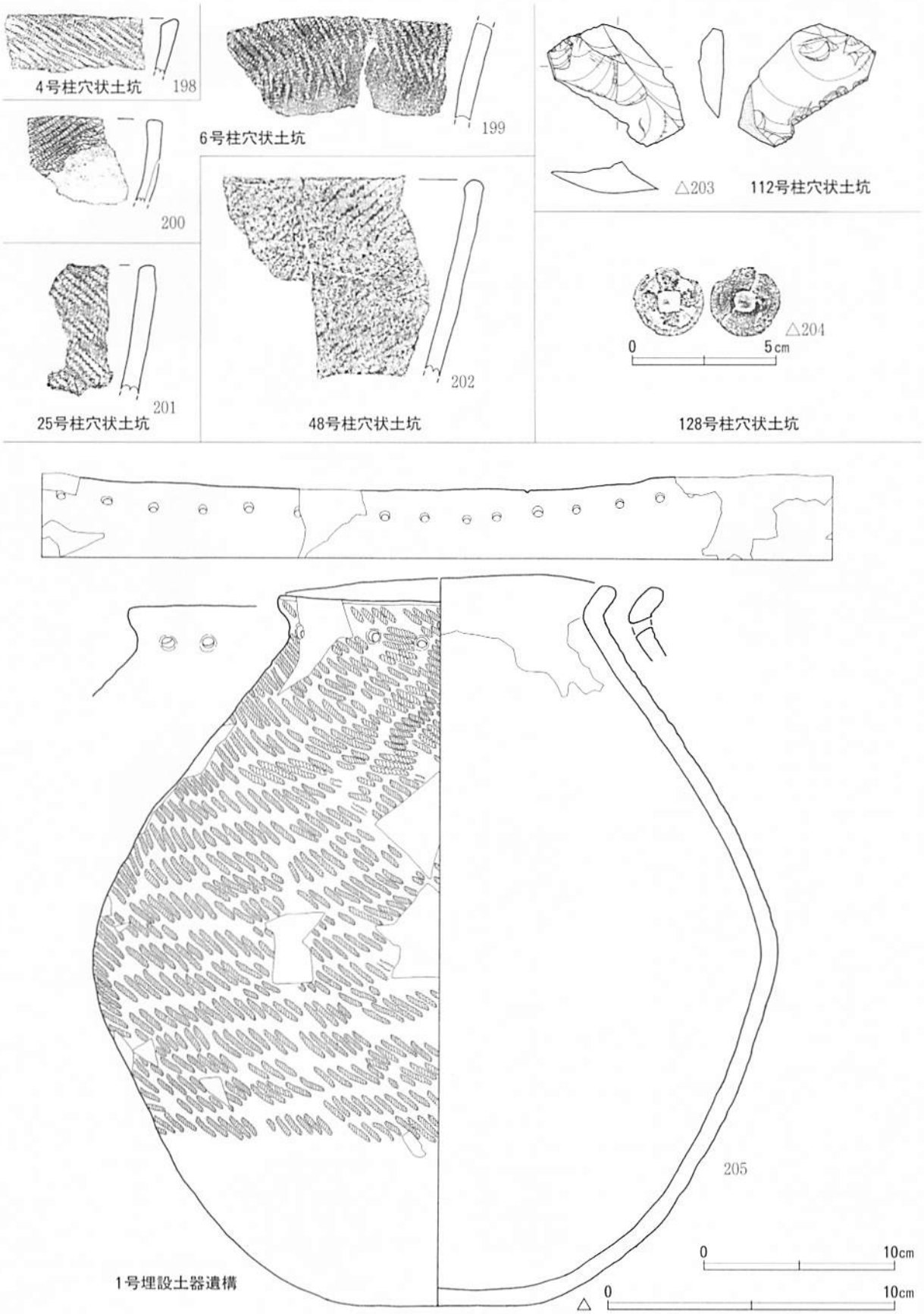
第55図　遺構内出土遺物16（住居跡⑯・住居状遺構①）



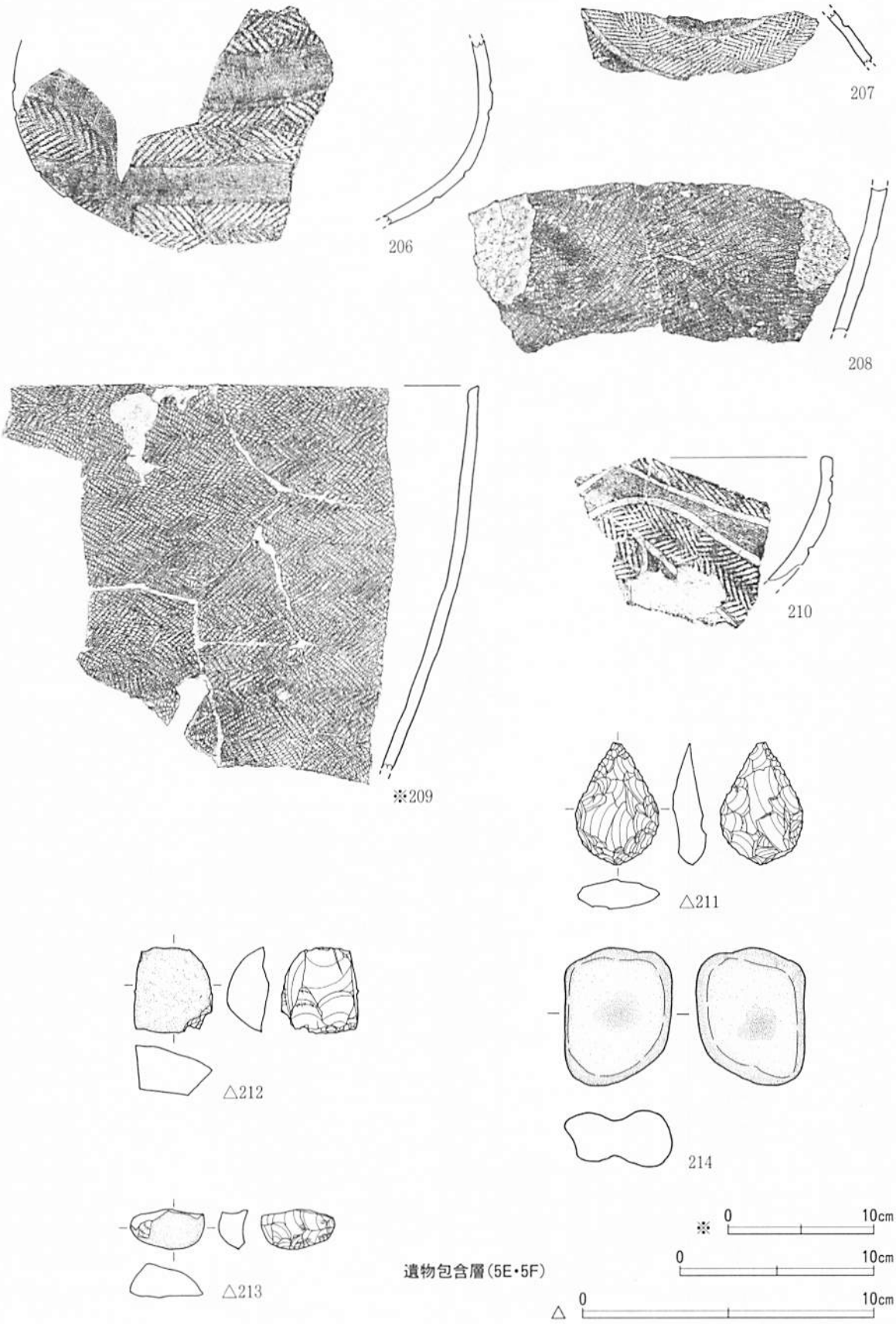
第56図　遺構内出土遺物17（住居状遺構②・土坑①）



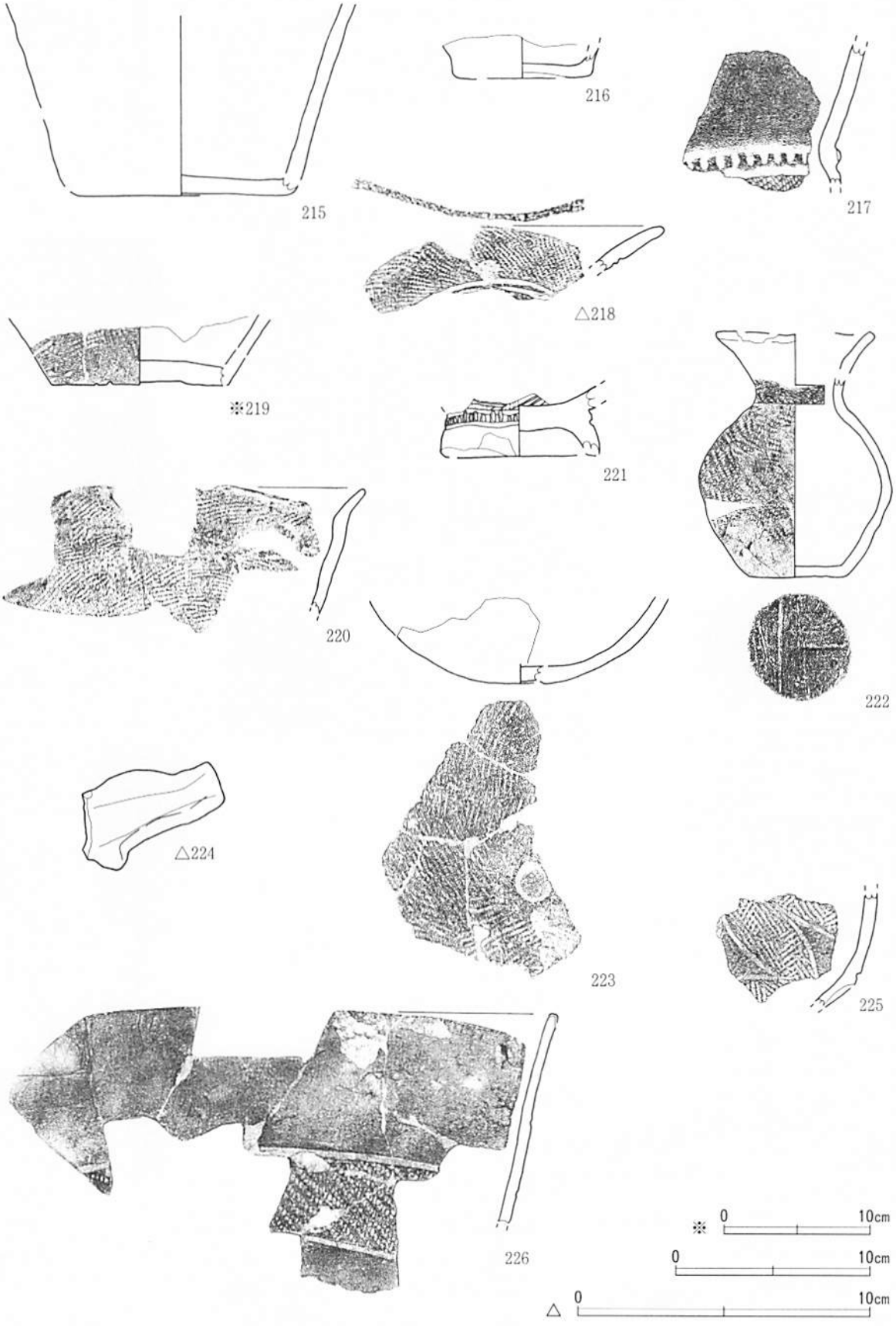
第57図　遺構内出土遺物18（土坑②）



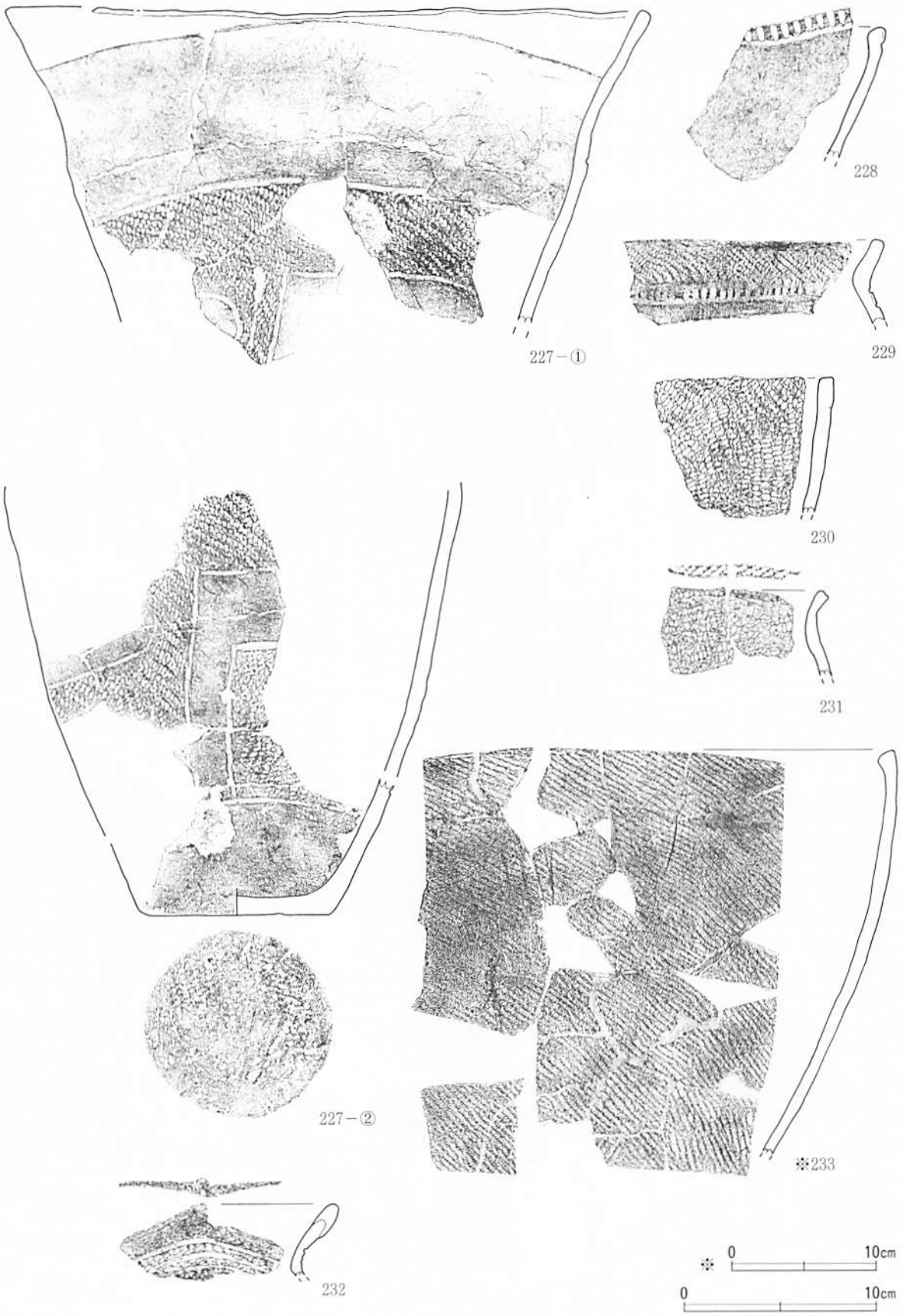
第58図　遺構内出土遺物19（柱穴状土坑・埋設土器遺構）



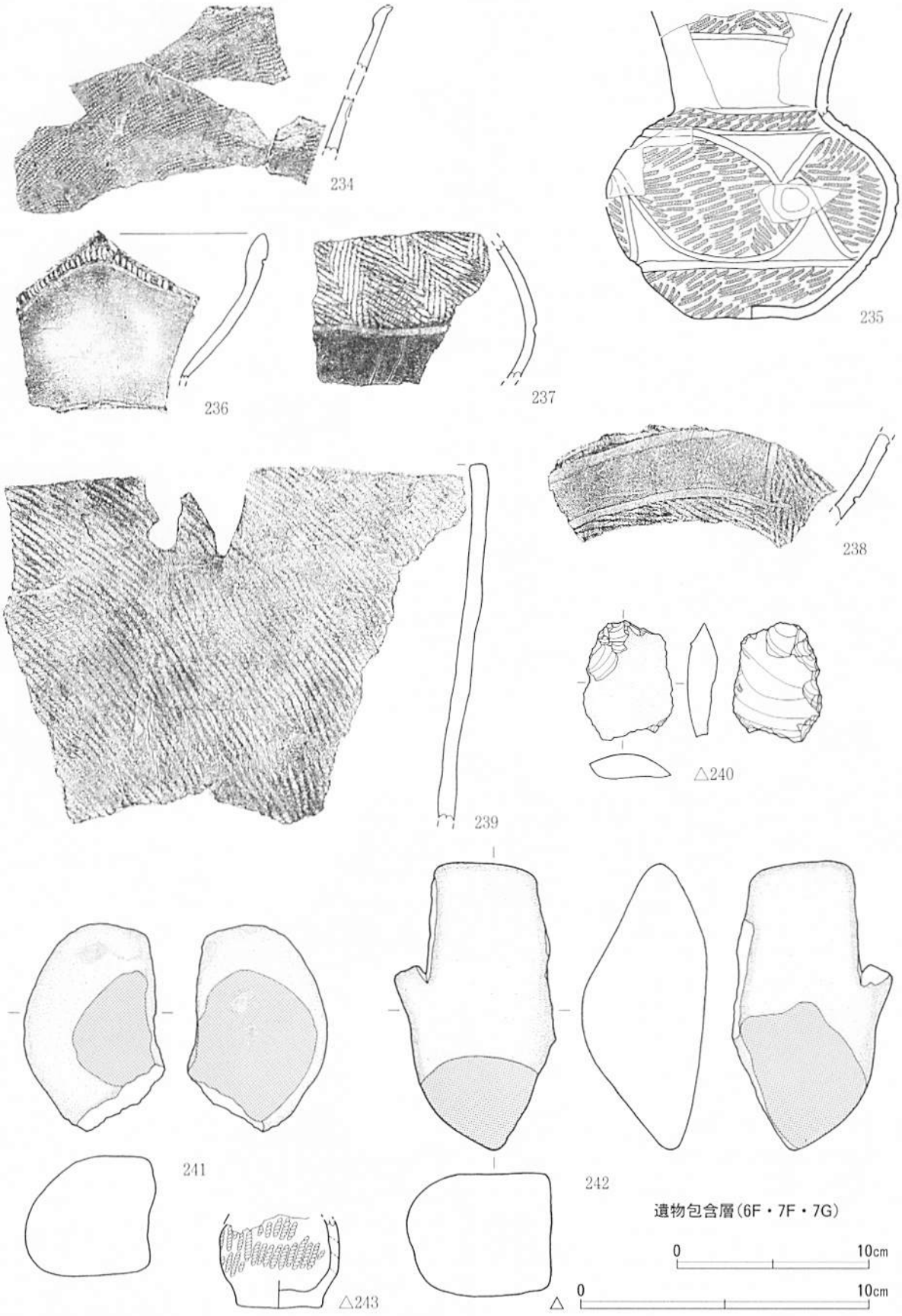
第59図　遺物包含層出土遺物 1



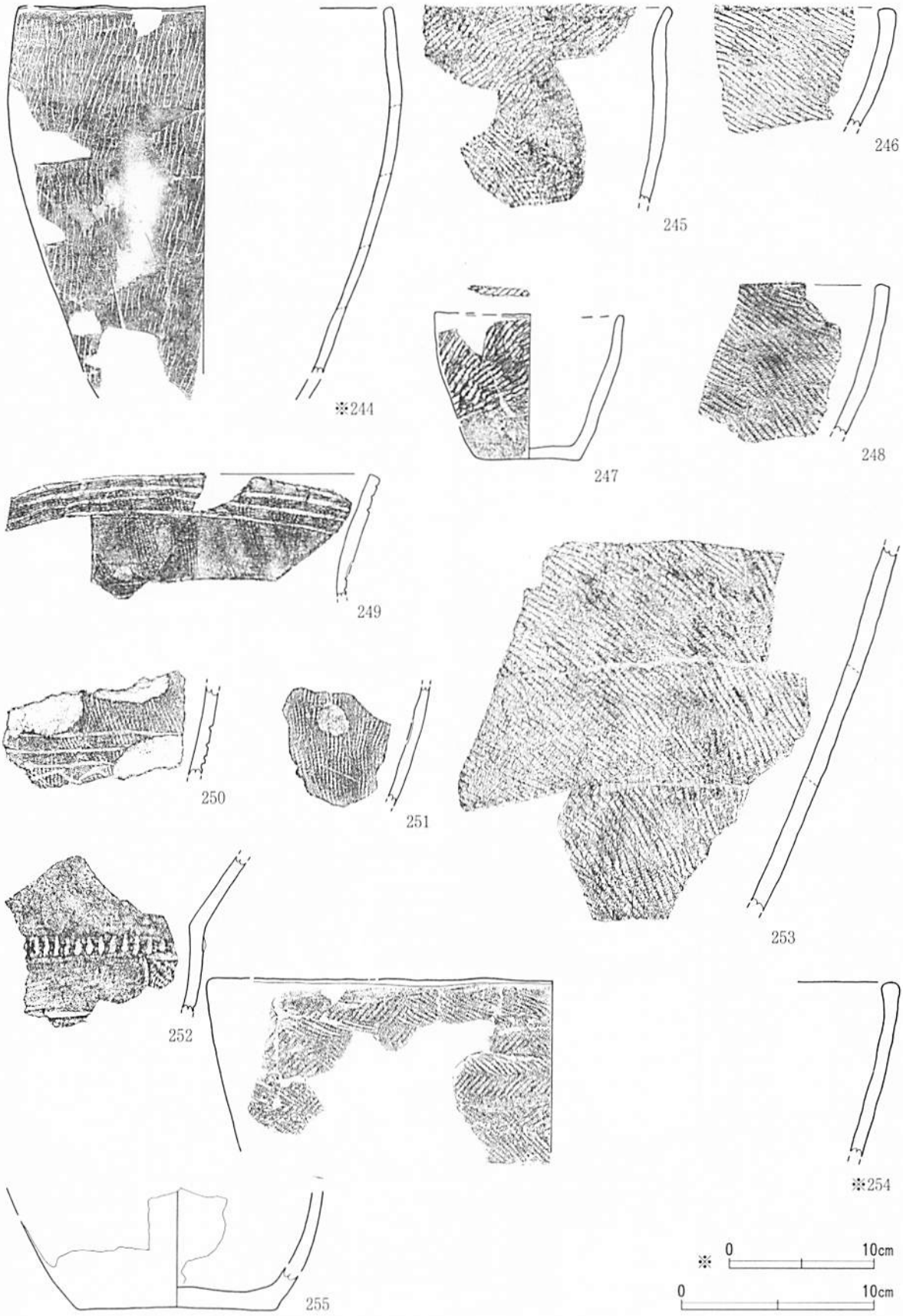
第60図　遺物包含層出土遺物 2



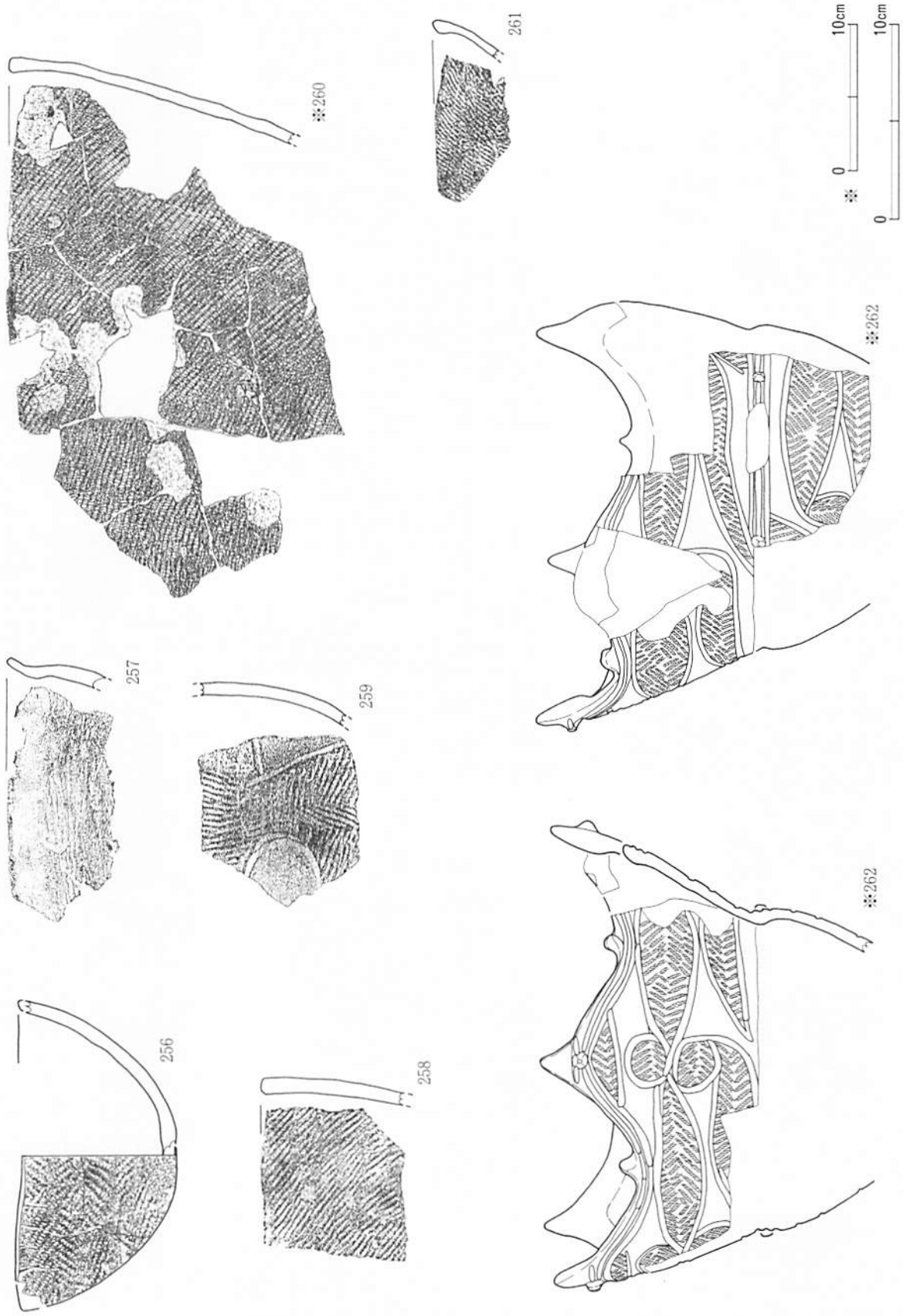
第61図　遺物包含層出土遺物 3



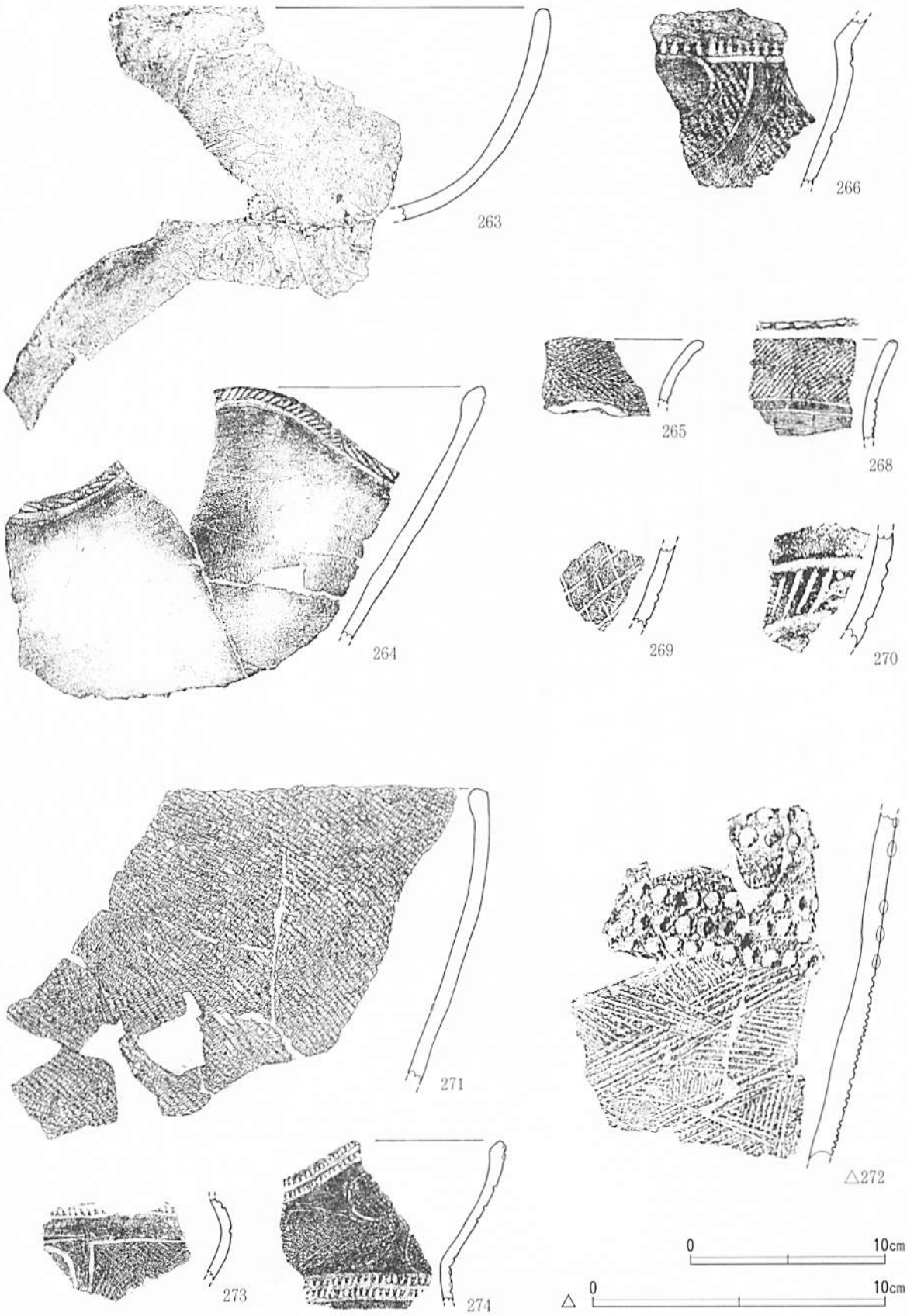
第62図　遺物包含層出土遺物 4



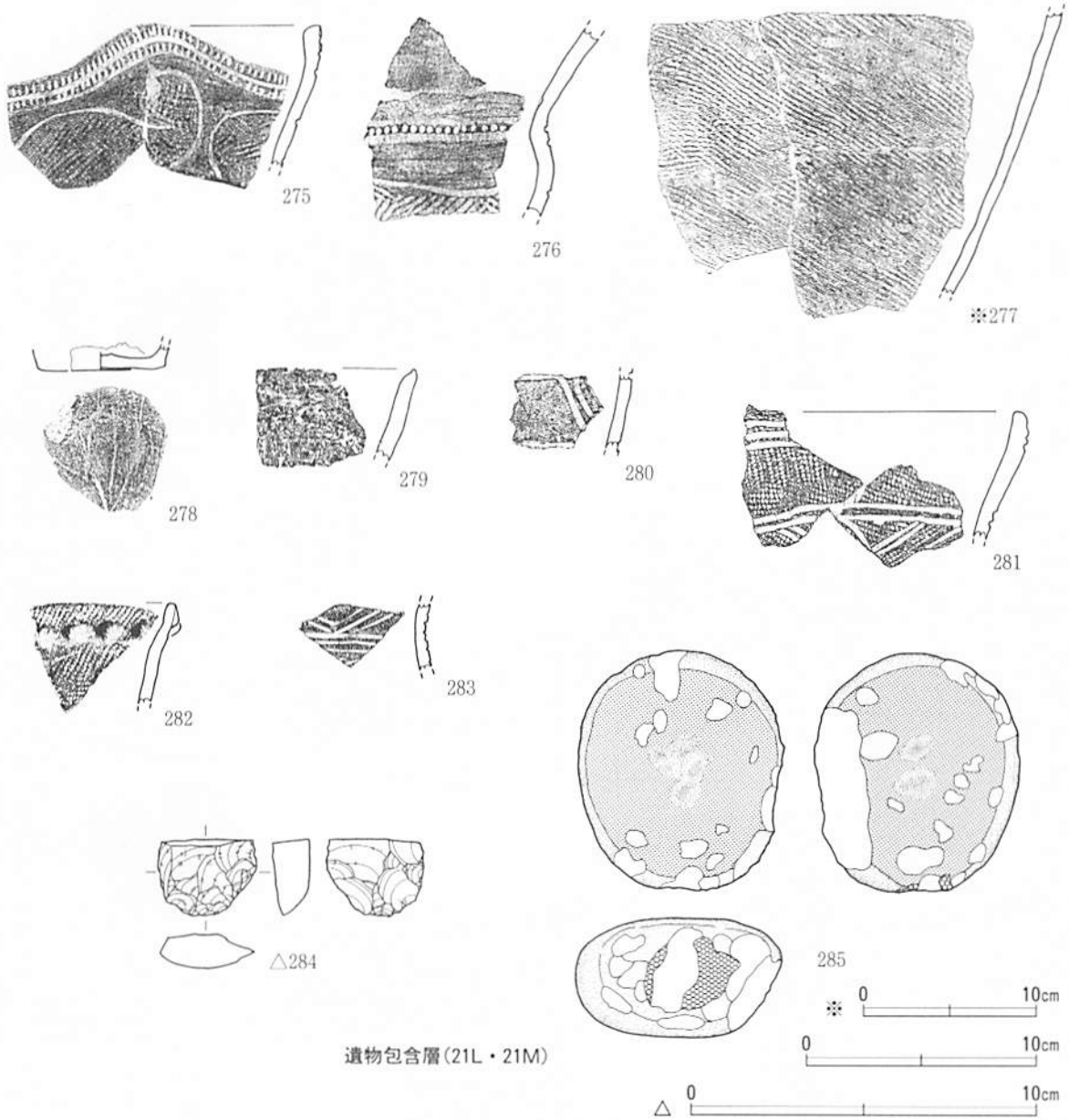
第63図　遺物包含層出土遺物 5



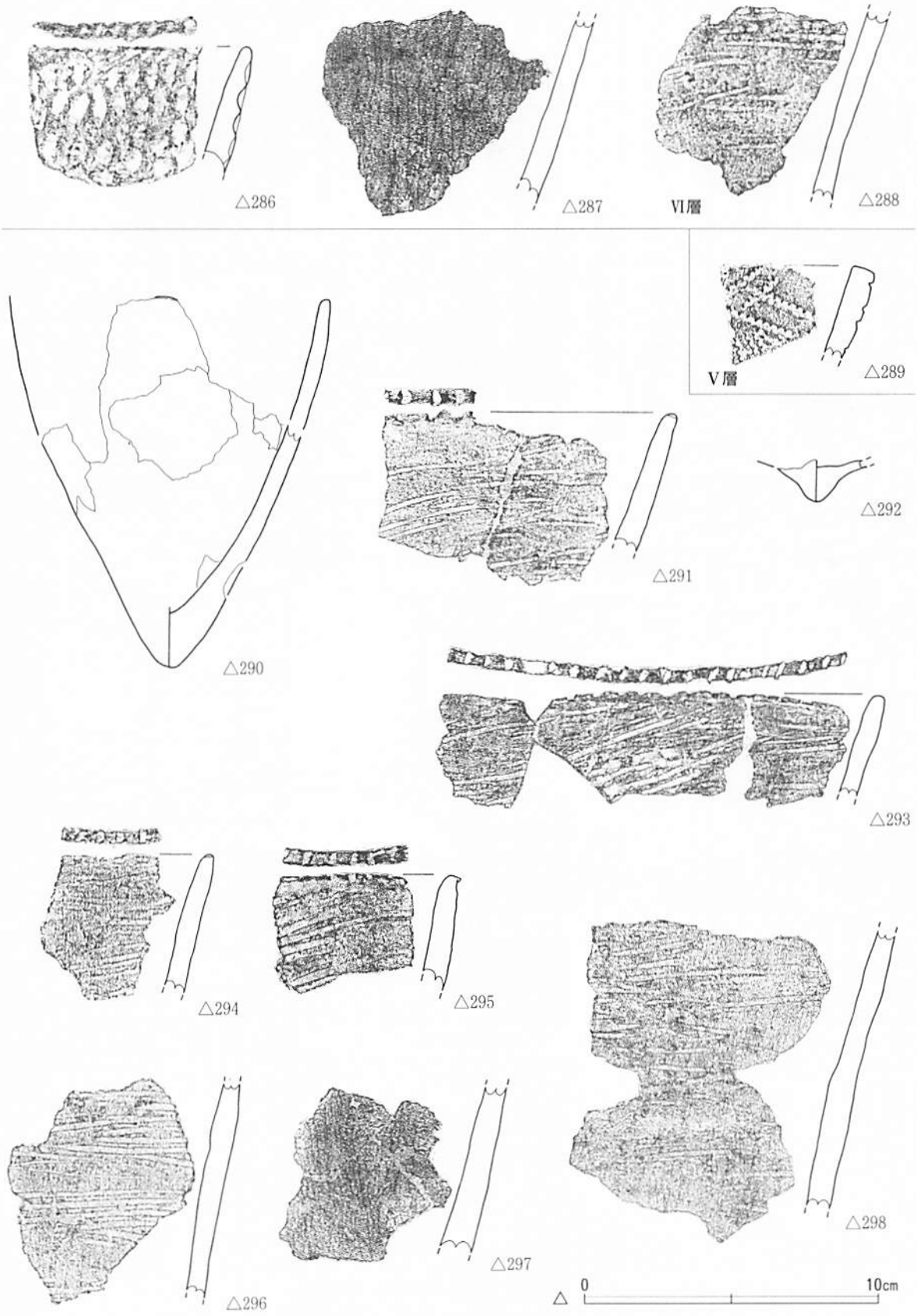
第64図　遺物包含層出土遺物 6



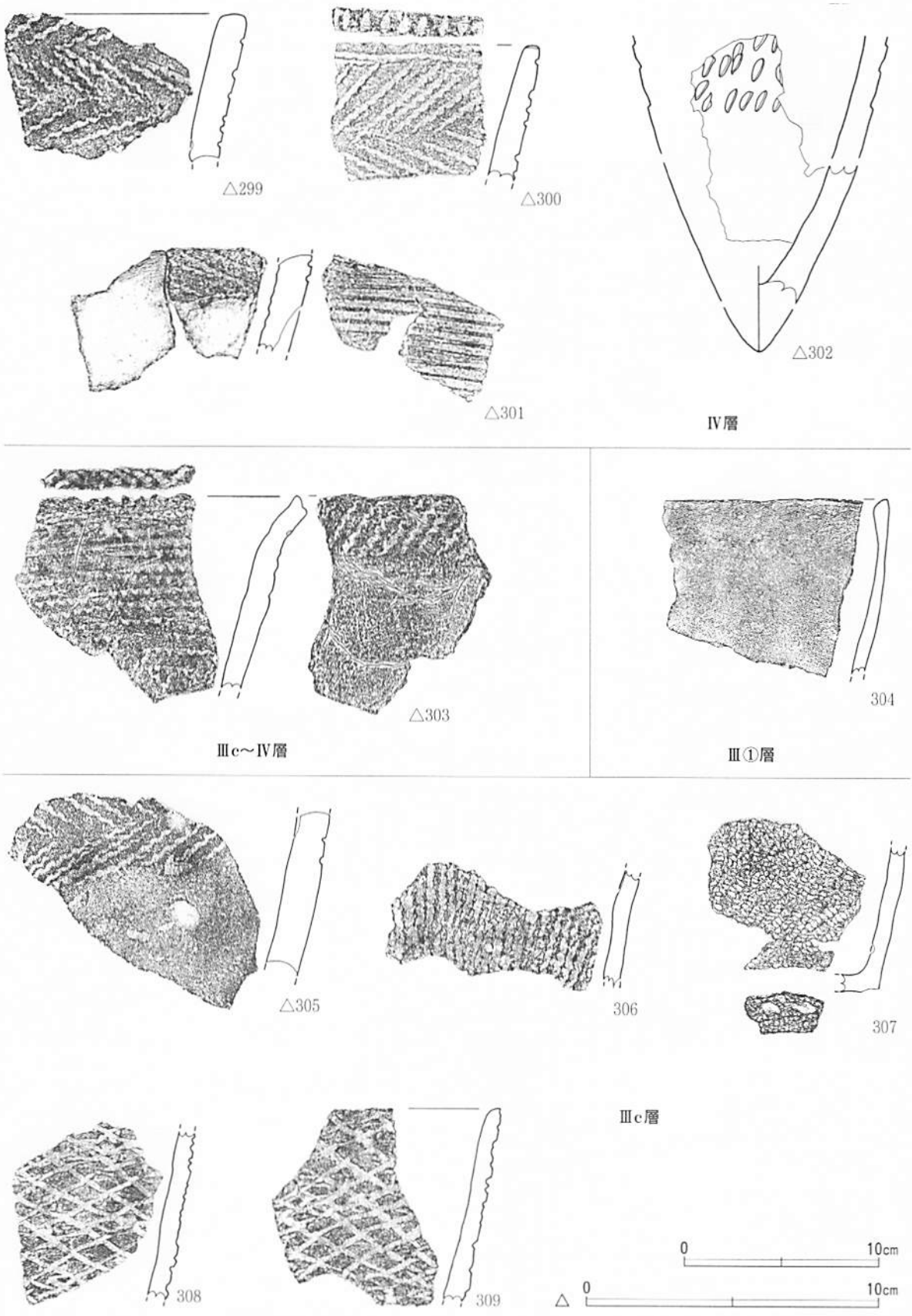
第65図　遺物包含層出土遺物 7



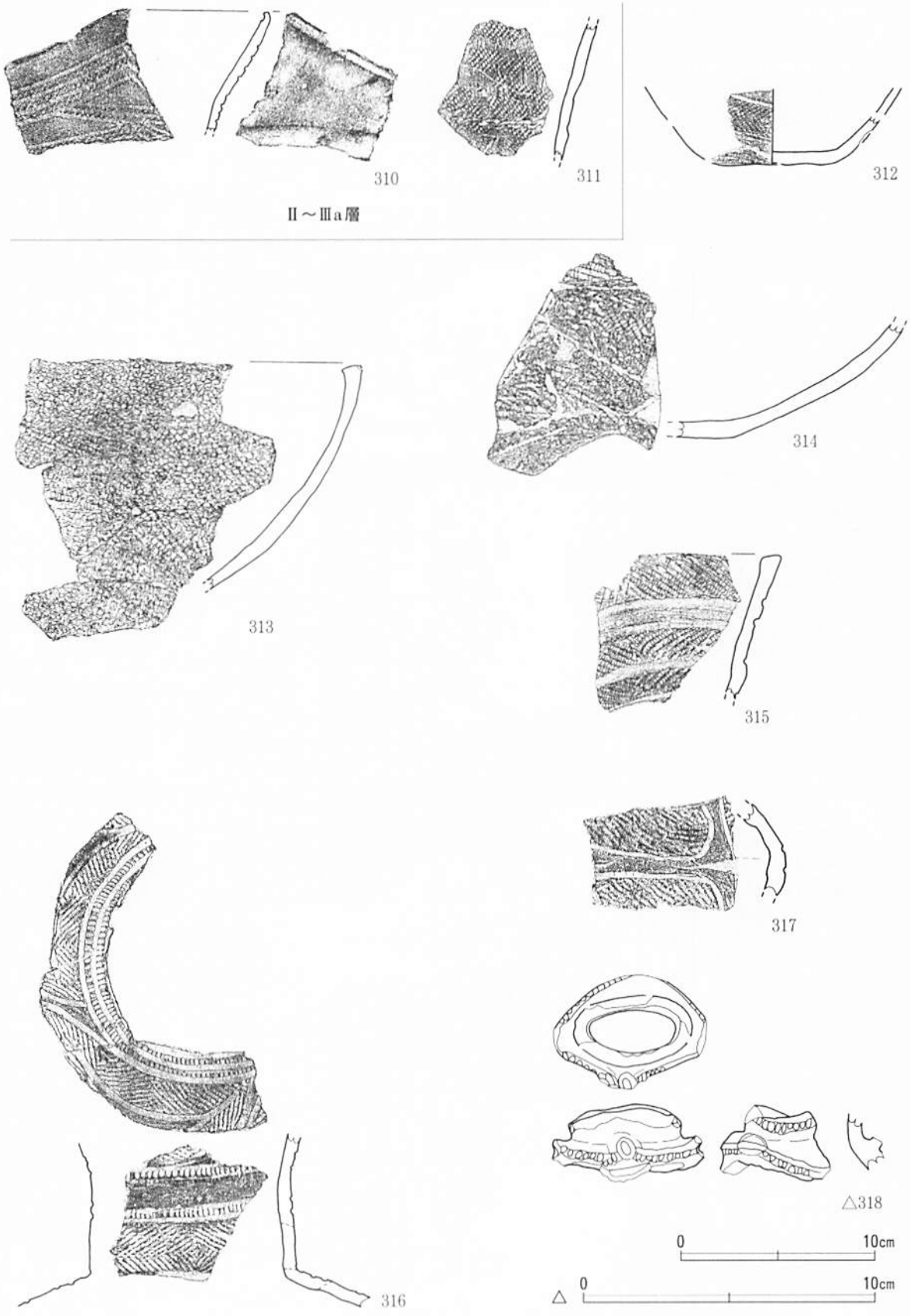
第66図　遺物包含層出土遺物 8



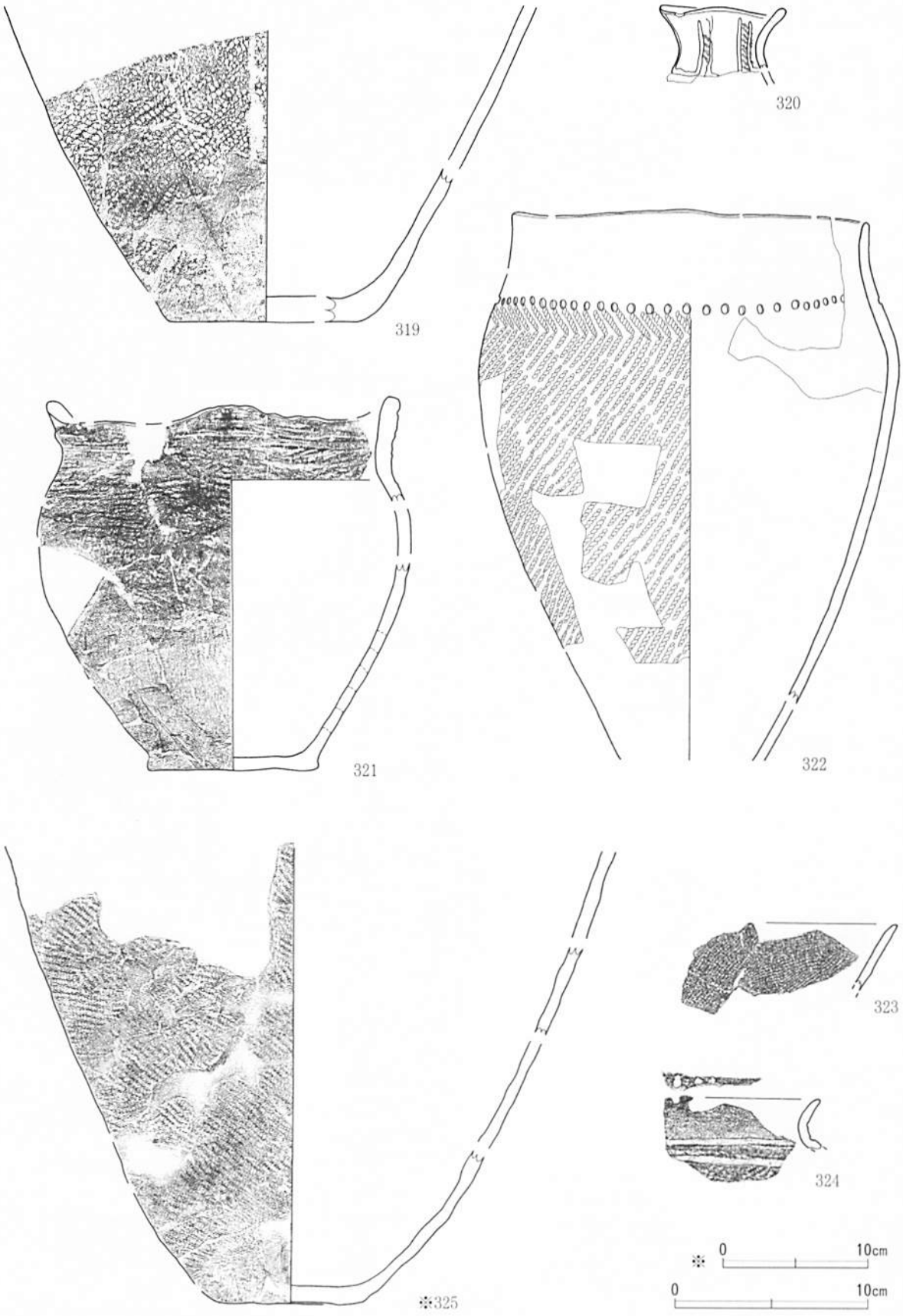
第67図　遺構外出土遺物１（土器①）



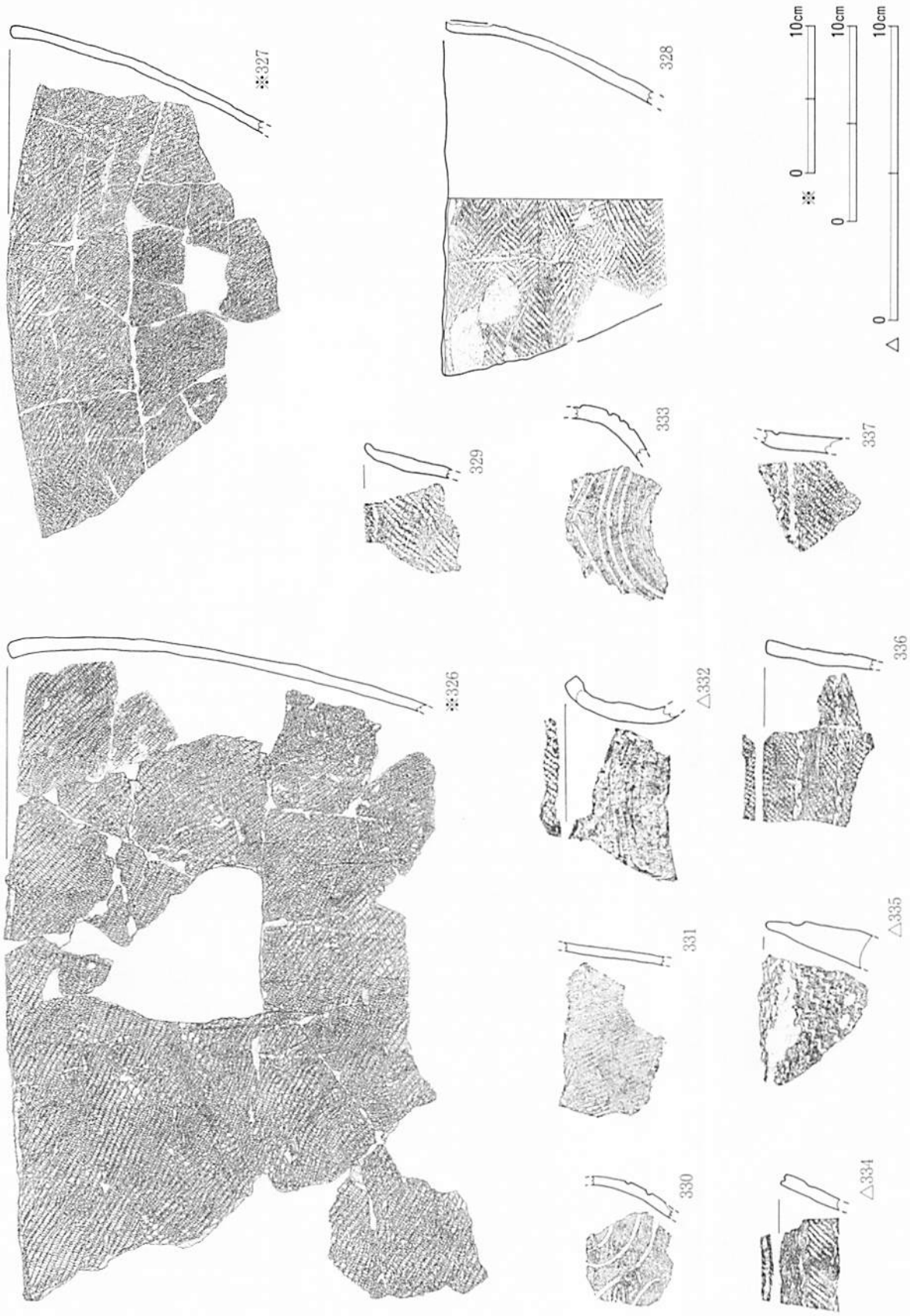
第68図　遺構外出土遺物２（土器②）



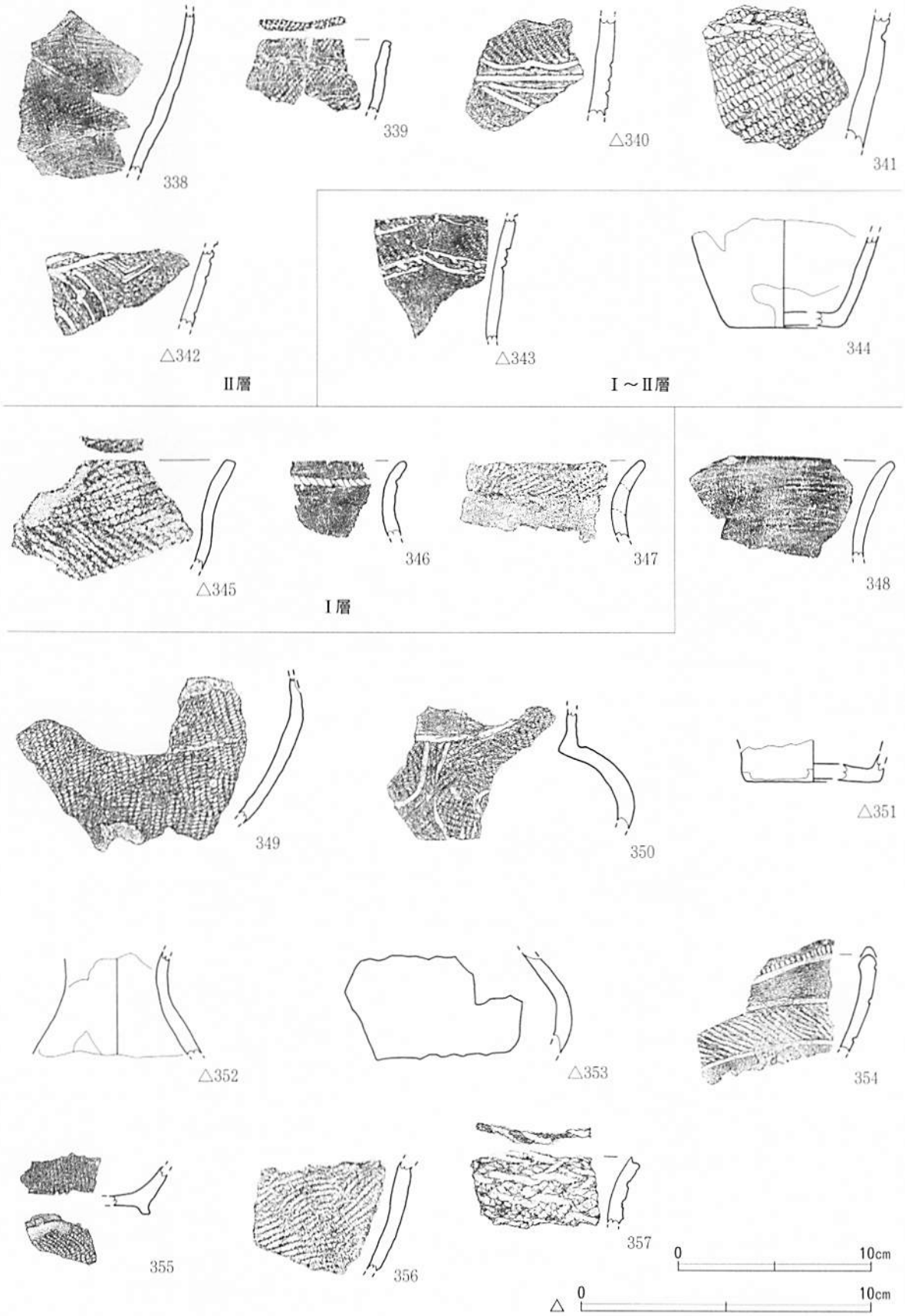
第69図　遺構外出土遺物３（土器③）



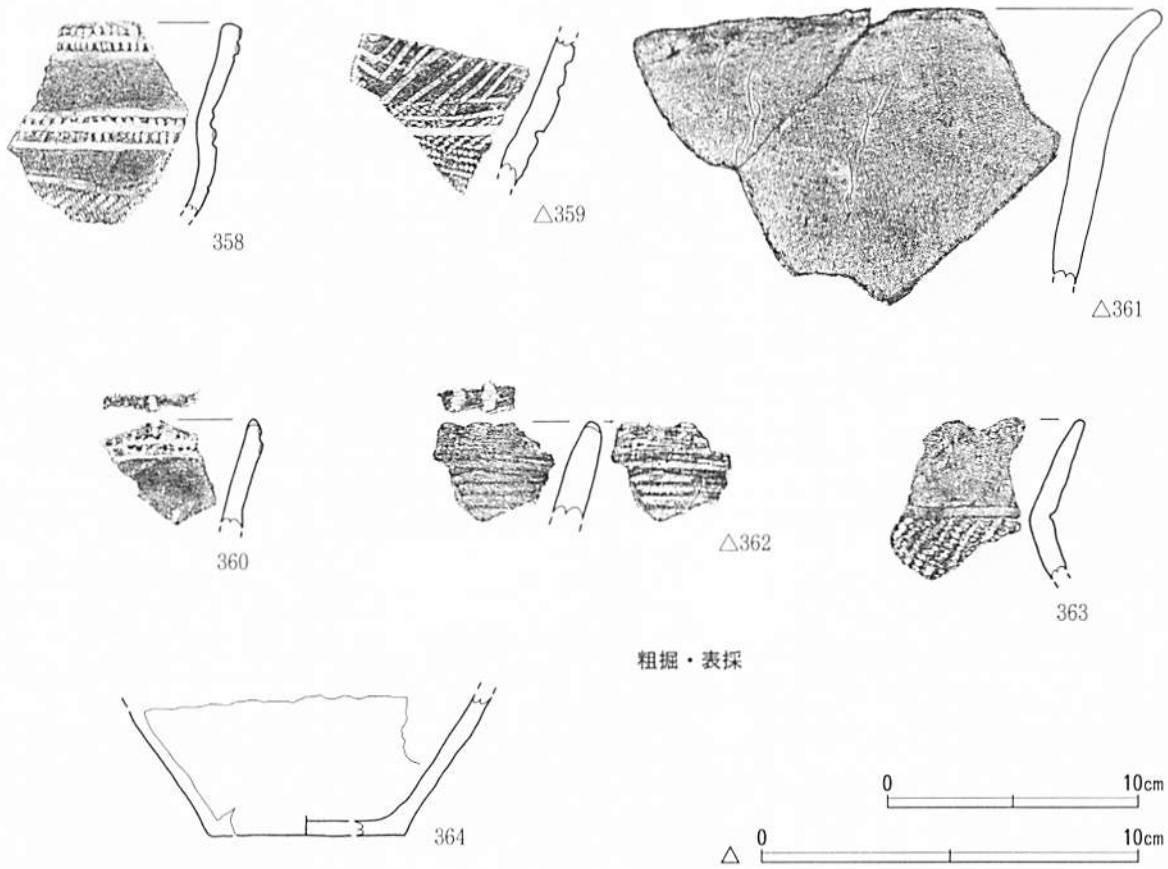
第70図　遺構外出土遺物４（土器④）



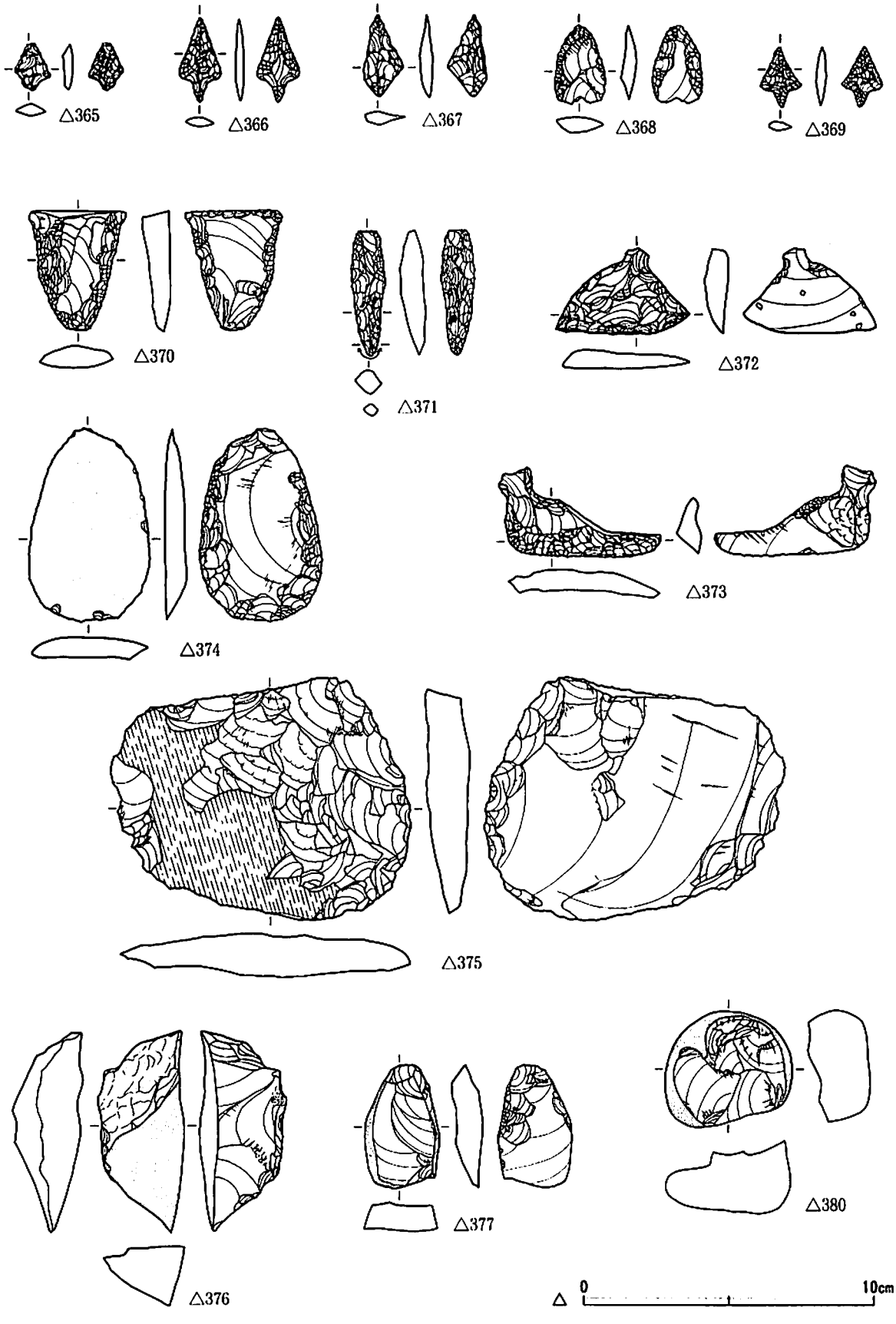
第71図　遺構外出土遺物５（土器⑤）



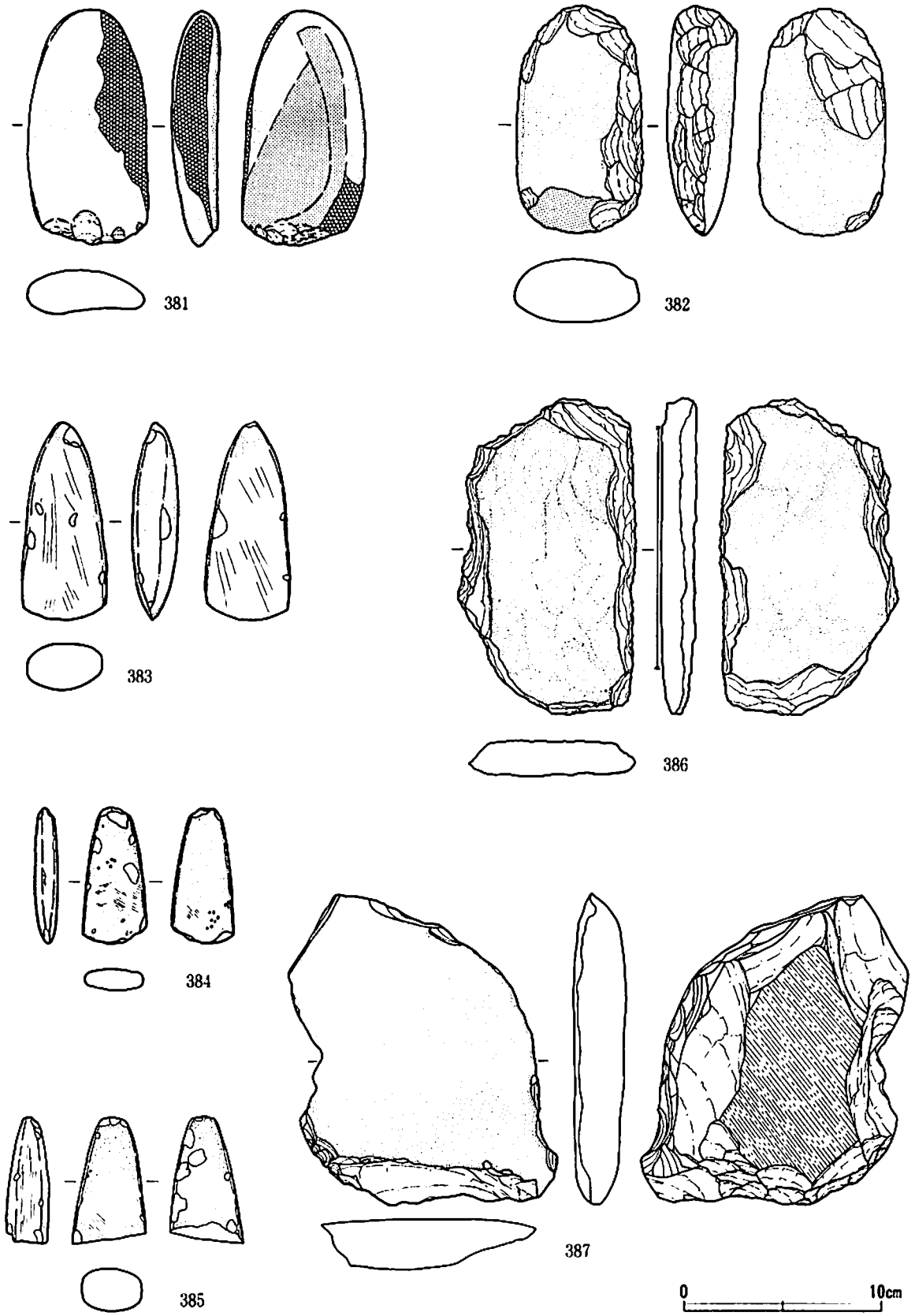
第72図　遺構外出土遺物６（土器⑥）



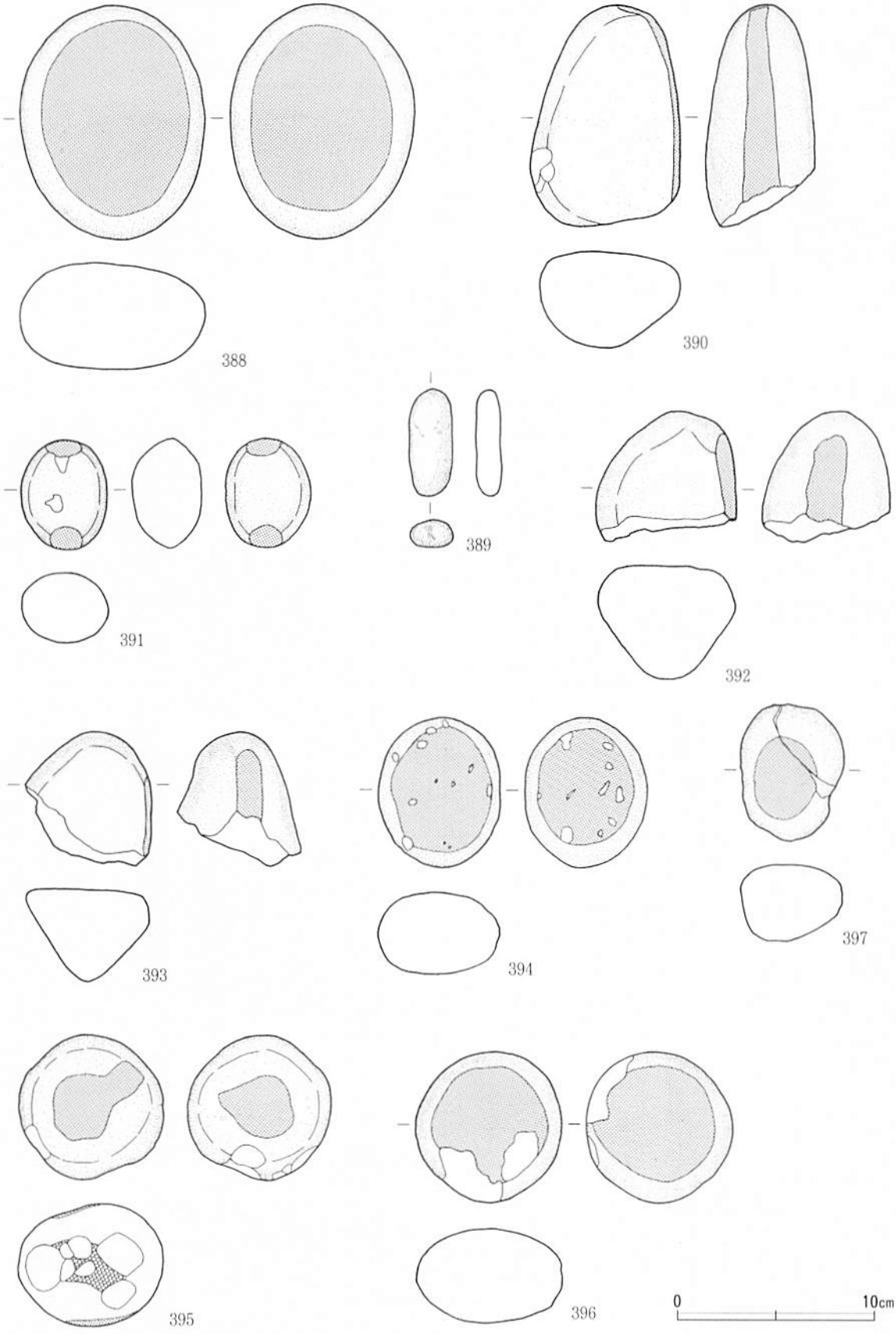
第73図　遺構外出土遺物７（土器⑦）



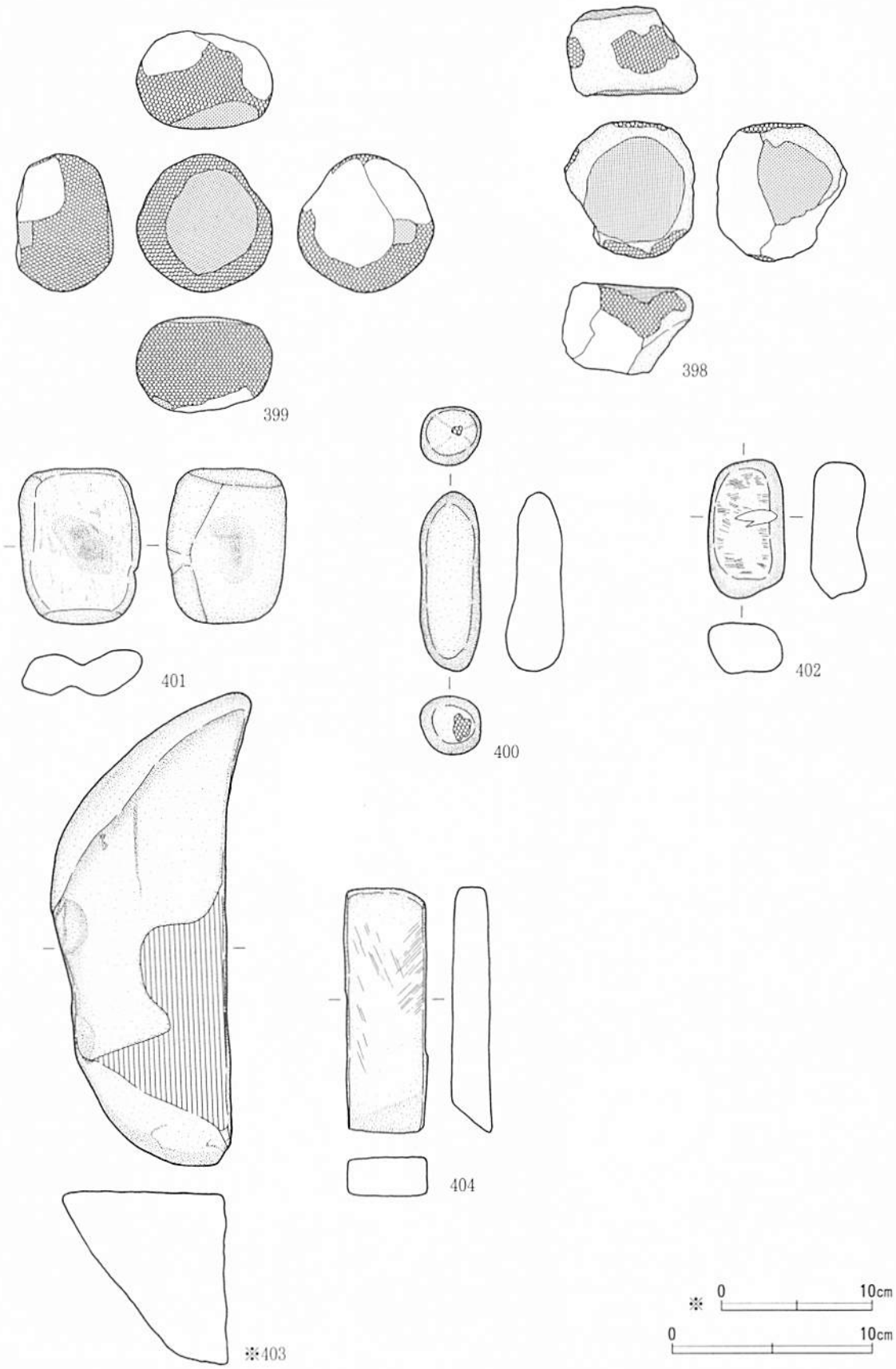
第74図　遺構外出土遺物８（石器①）



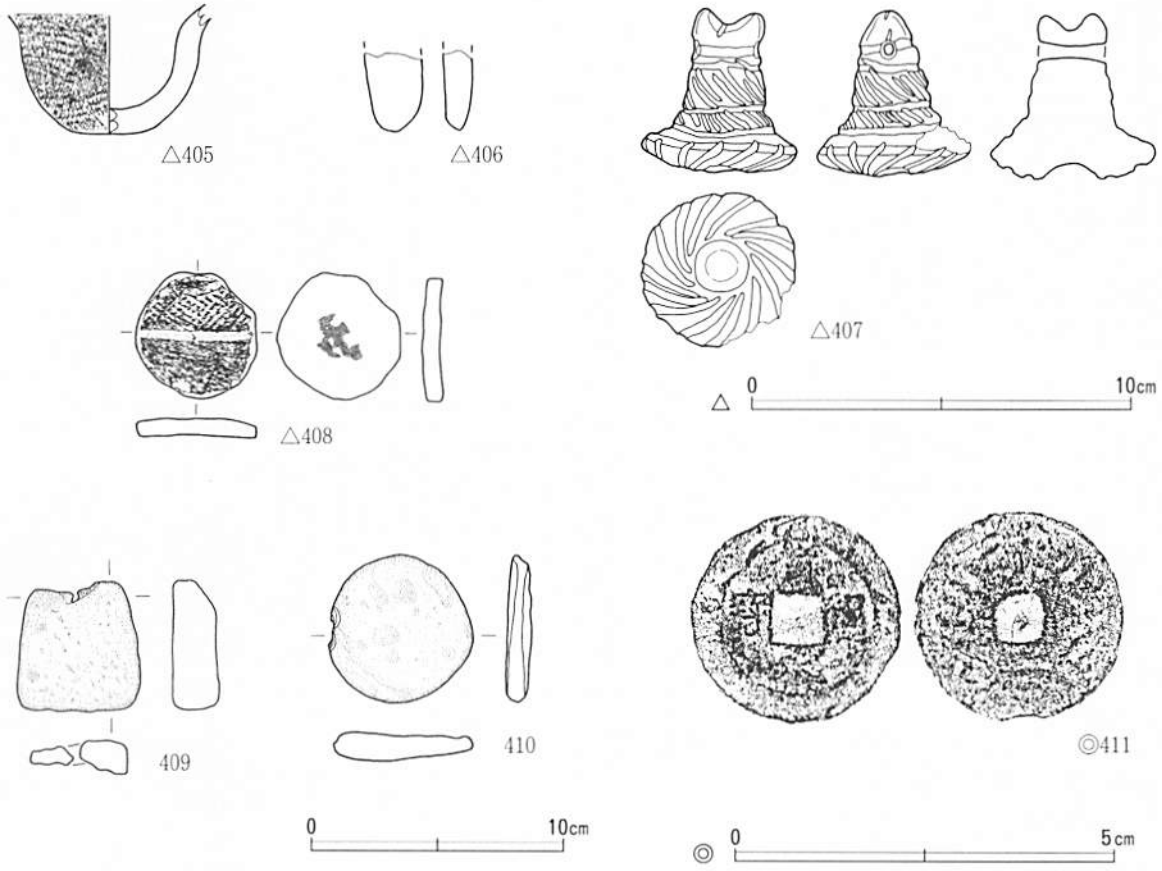
第75図　遺構外出土遺物９（石器②）



第76図　遺構外出土遺物10（石器③）



第77図　遺構外出土遺物11（石器④）



第78図　遺構外出土遺物12（土製品・石製品・銭貨）

第5表　遺物観察表（土器）

掲載番号	出土地点	器種・部位	分類	文様の特徴	備考	図版	写真
1	1号住　覆土下位	鉢？・胴～底	Ⅳ5g	胴下：ＲＬ？　底・底面：Ｍ　内面：ミガキ		40	32
2	1号住　覆土下位	深鉢・口	Ⅳ5d	縄文（ＬＲ）　内面：ナデ		40	32
3	1号住　Q1覆土下位	深鉢・口	Ⅳ1e	頸：圧痕（ＬＲ）　内面：Ｎ		40	32
4	1号住　Q1覆土上位	深鉢・胴	Ⅳ3a	異方向羽状縄文（ＲＬ、0段多条）＋沈線　手法：磨消　内面：Ｍ	十腰内Ⅲ式相当	40	32
5	1号住　覆土	深鉢・胴	Ⅳ5d	縄文（ＬＲ）＋沈線　内面：ナデ		40	32
6	1号住　覆土	深鉢・口	Ⅳ1e	縄文（ＬＲ）＋沈線　口唇：圧痕（ＬＲ？）　内面：Ｎ		40	32
7	1号住　Q1覆土	深鉢・底	Ⅳ5g	底面：笹葉痕　内面：ナデ		40	32
8	1号住　覆土	注口？・口	Ⅳ3f	口唇：貼瘤突起　異方向羽状縄文（ＲＬ、０段多条）＋沈線　内面：Ｎ		40	32
9	1号住　Q1覆土	胴	Ⅳ3e	縄文（ＲＬ）　刻目帯（上下に沈線）　内面：ナデ		40	32
10	1号住　覆土	深鉢・口～胴	Ⅳ4a	口：波状　口端：刻目帯（下部に沈線）　頸：刻目帯（下部に沈線）　胴：入組文（襷掛け状）　縄文（ＬＲ）＋非結束羽状縄文（ＬＲ・ＲＬ）　手法：充填？　内面：Ｍ	小形 十腰内Ⅲ～Ⅳ式相当	40	32
11	1号住　覆土	鉢・口	Ⅳ5b	縄文　内面：ナデ		40	32
12	1号住　覆土	深鉢・胴	Ⅳ3e	頸：刻目帯（上下に沈線）　内面：ナデ		40	32
13	1号住　覆土	深鉢・口	Ⅳ5c	縄文（ＲＬ）　内面：Ｎ		40	32
14	1号住　Q1覆土	底	Ⅳ5g	内面：ナデ		40	32
15	1号住　覆土	注口・注口	Ⅳ3h		割れ口にアスファルト付着	40	32
21	2号住　床面(相当)	壺？・胴	Ⅴ1	縄文（ＲＬ？）→平行沈線文　内面：Ｎ		41	32
22	2号住　2層	壺？・胴	Ⅳ5e	縄文（ＲＬ？）　内面：ナデ		41	32
23	2号住　Q4覆土	深鉢・口	Ⅳ5c	縄文（ＲＬ）　内面：ナデ		41	32
24	2号住　Q4覆土	鉢？・胴	Ⅴ5	縄文（ＲＬ？）　内面：ナデ		41	32
25	2号住　覆土(12Ｊ　Ⅱ)	鉢？・口	Ⅴ4	平行沈線文＋交互刺突文　内面：ナデ	天王山式・湯舟沢式併行	41	32
26	2号住　覆土(12Ｊ　Ⅱ)	壺？・胴	Ⅴ1	平行沈線文＋山形文　内面：ナデ		41	32
27	2号住　覆土(12Ｊ　Ⅱ)	壺？・胴	Ⅴ1	縄文（ＲＬ？）＋渦巻き文　内面：ナデ	和井内東式併行	41	33
28	2号住　覆土(12Ｊ　Ⅱ)	胴	Ⅴ1	沈線文　内面：ナデ		41	33
29	2号住　覆土(12Ｊ　Ⅱ)	胴	Ⅴ1	連弧文　内面：ナデ		41	33
30	2号住　覆土(12Ｊ　Ⅱ)	壺・胴	Ⅴ1	縄文（ＲＬ？）→渦巻き文　内面：ナデ		41	33
31	2号住　覆土(12Ｊ　Ⅱ)	胴	Ⅳ4b	非結束羽状縄文（ＲＬ・ＬＲ）＋沈線　手法：充填　内面：ナデ		41	33
32	2号住　覆土(12Ｊ　Ⅱ)	底	Ⅳ5g	内面：ナデ		41	33
33	2号住　覆土(12J)	深鉢・口	Ⅳ3e	口：波状　口端：刻目帯　口唇：肥厚　内面：ミガキ		41	33
34	2号住　覆土(12J)	壺？・胴	Ⅳ3b	非結束羽状縄文（ＬＲ・ＲＬ、０段多条）＋沈線　手法：磨消　内面：ナデ	磨消部分に光沢あり	41	33
35	2号住　床下	深鉢・口	Ⅳ4d	口：突起付波状　沈線　内面：ナデ		41	33
40	3号住　床面	深鉢・胴	Ⅳ5e	縄文（ＲＬ）　内面：ナデ		42	33
41	3号住　床面	深鉢・胴	Ⅳ5c	縄文（ＲＬ）　内面：ナデ		42	33
42	3号住　床面	深鉢	Ⅳ3i	胴～胴下：縄文（ＲＬ）　底：部分的にナデ　内面：ナデ		42	34
43	3号住　床面	深鉢・口～胴	Ⅳ5c	縄文（ＲＬ）　内面：ナデ		42	34
44	3号住　床面	深鉢・胴	Ⅰ5	貝殻腹縁圧痕文（山形文）　内面：ナデ		42	34
45	3号住　床直	深鉢	Ⅳ5d	縄文（ＬＲ）　内面：ミガキ？		42	34
46	3号住　Q3床直	深鉢・口	Ⅳ5d	口：微波状　縄文（ＬＲ）→平行沈線（片刃状工具による）３段以上　内面：ナデ		42	34
47	3号住　Q3床直	深鉢・口	Ⅰ5	口：突起付波状　貝殻腹縁圧痕文（縦位・斜位）、刺突文２段以上　内面：ナデ		42	34

掲載番号	出土地点	器種・部位	分類	文様の特徴	備考	図版	写真
48	3号住　覆土下位	壺？・胴	Ⅳ3e	横割瘤、刻目帯（2段、上下に沈線）　内面：ミガキ	磨消部分に光沢あり	42	34
49	3号住　覆土下位	深鉢・完形	Ⅳ3b	口端：刻目帯（下部に沈線）　頚：刻目帯（上下に沈線） 胴：入組文　非結束羽状縄文(ＬＲ・ＲＬ、0段多条)＋沈線　手法：磨消　内面：ミガキ	十腰内Ⅲ式相当 胴部文様帯3単位	43	34
50	3号住　覆土下位	台付鉢・台部	Ⅳ5g	無文（ナデ）　内面：ナデ		43	34
51	3号住　覆土下位	深鉢・口	Ⅳ5d	口：縄文（ＬＲ）　口唇：縄文（ＬＲ）　内面：ミガキ		43	34
52	3号住　覆土下～中位	深鉢・1／2完	Ⅳ3a	口：微波状（5単位）　口端：刻目帯（下部に沈線）　頚：刻目帯（上下に沈線） 口～胴下：入組文　異方向羽状縄文（ＲＬ）＋沈線　手法：磨消　内面：Ｍ（光）	磨消部分黒い光沢あり	43	34
53	3号住　覆土下～中位	鉢（広口壺）・略完形	Ⅳ3c	口頚：刻目帯（5段、沈線）　底下：ミガキ 胴：入組文　斜縄文（ＲＬ、0段多条、）＋沈線　手法：磨消　内面：Ｍ（光沢）	十腰内Ⅲ式相当 胴部文様帯2単位	43	34
54	3号住　覆土下～中位	深鉢・胴～底	Ⅳ5c	縄文（ＲＬ、0段多条）　内面：ナデ	器面磨滅著しい	43	34
55	3号住　覆土中位	鉢？・胴	Ⅳ3b	非結束羽状縄文（ＬＲ・ＲＬ、0段多条)＋沈線　手法：磨消 刻目帯（1段以上、上下に沈線）　内面：ミガキ		43	34
56	3号住　覆土中位	深鉢・口	Ⅳ3d	口唇：肥厚　異方向羽状縄文（ＲＬ、0段多条)＋沈線　手法：磨消　内面：ミガキ		43	34
57	3号住　覆土中位	深鉢・口	Ⅳ3a	口：波状　口唇：肥厚　異方向羽状縄文（ＲＬ、0段多条）＋沈線　手法：磨消 刻目帯（下部に沈線）　内面：ミガキ		43	35
58	3号住　覆土中位	壺・頚～底	Ⅳ5d	頚：縄文（ＬＲ、0段多条)＋沈線　胴：縄文（ＬＲ、0段多条）　底：上げ底状　内面：Ｎ		43	35
59	3号住　覆土中位	深鉢・口	Ⅳ5d	縄文（ＬＲ、0段多条）　内面：ミガキ		44	35
60	3号住　覆土中位	深鉢・口	Ⅳ3i	縄文（ＬＲ）　内面：ミガキ		44	35
61	3号住　覆土中位	深鉢・胴～底	Ⅳ5c	胴下：縄文（ＲＬ）　底：ミガキ？　底面：網代痕　内面：ナデ		44	35
62	3号住　覆土中位	鉢？・口	Ⅳ5c	縄文（ＲＬ）　内面：ミガキ		44	35
63	3号住　覆土中位	深鉢・口	Ⅳ5c	縄文（ＲＬ）　内面：ナデ		44	35
64	3号住　覆土中位	深鉢・胴～底	Ⅳ5c	胴下：縄文（ＲＬ、0段多条）　底：ミガキ　底面：網代痕　内面：ナデ		44	35
65	3号住　覆土中位	深鉢・口	Ⅳ5c	縄文（ＲＬ）　内面：ナデ		44	36
66	3号住　覆土中位	深鉢・口	Ⅳ5c	縄文（ＲＬ）　内面：ミガキ	外面にタール状の付着物	45	36
67	3号住　覆土中位	深鉢・口	Ⅰ5	貝殻腹縁圧痕文（山形文）　口唇：貝殻による刻み（めくれ）　内面：ナデ		45	36
68	3号住　覆土中位	注口・注口	Ⅳ3h			45	36
69	3号住　覆土中位	注口・注口	Ⅳ3h	ミガキ（光沢）	割れ口アスファルト付着	45	36
70	3号住　覆土中～上位	深鉢・口～胴	Ⅳ3a	口：波状（5単位）　口端：刻目帯（下部に沈線）　頚：刻目帯（下部に沈線） 胴：入組文　異方向羽状縄文（ＲＬ、0段多条)＋沈線　手法：磨消　内面：Ｍ(光)	十腰内Ⅲ式相当 内面煤付着	45	36
71	3号住　覆土中～上位	深鉢・口	Ⅳ3e	口縁：刻目帯（下部に沈線）　口唇：肥厚　頚部：刻目帯（下部に沈線） 胴部：縄文（ＲＬ、0段多条)＋斜行沈線　内面：ミガキ	十腰内Ⅲ式相当	45	36
72	3号住　覆土中～上位	深鉢・口	Ⅳ3b	口端：刻目帯（下部に沈線）　口唇：肥厚　頚部：刻目帯（上下に沈線） 胴部：非結束羽状縄文（ＬＲ・ＲＬ、0段多条）　内面：ミガキ	十腰内Ⅲ式相当	45	36
73	3号住　覆土中～上位	壺・胴	Ⅳ3b	非結束羽状縄文（ＬＲ・ＲＬ、0段多条)＋沈線　手法：磨消　内面：ナデ		45	36
74	3号住　覆土中～上位	胴	Ⅳ3b	非結束羽状縄文（ＲＬ・ＬＲ、0段多条？)＋沈線　手法：磨消　内面：ナデ		45	36
75	3号住　覆土中～上位	深鉢・口	Ⅳ3a	異方向羽状縄文（ＲＬ、0段多条）＋沈線　手法：磨消　内面：ナデ		45	36
76	3号住　覆土中～上位	深鉢？・胴	Ⅳ3a	入組文　異方向羽状縄文(ＲＬ)＋沈線　手法：磨消　刻目帯(上下に沈線)　内面：Ｍ		45	36
77	3号住　覆土中～上位	深鉢・1／2完	Ⅳ3i	口～底：縄文（ＬＲ）　内面：ナデ		46	37
78	3号住　覆土中～上位	鉢・1／2完	Ⅳ3i	口～胴下：縄文（ＲＬ）　底：ミガキ　内面上半：ナデ　内面下半：ミガキ（光沢）		46	37
79	3号住　覆土中～上位	鉢・略完形	Ⅳ3i	口～底：縄文（ＲＬ、ＬＲ)→ナデ　口唇：一部に刻み　内面：ナデ	外面：タール状の付着物 内面：炭化物？付着	46	37
80	3号住　覆土中～上位	深鉢・1／2完	Ⅳ3i	口～胴下：縄文（ＬＲ）　底：ナデ（横位）　内面：ナデ		46	37

掲載番号	出土地点	器種・部位	分類	文様の特徴	備考	図版	写真
81	3号住　覆土中～上位	深鉢・胴～底	Ⅳ5c	胴～胴下：縄文（ＲＬ、０段多条）　底：ミガキ（横位）　内面：ミガキ		46	37
82	3号住　覆土中～上位	深鉢・口	Ⅳ5c	縄文（ＲＬ）　内面：ナデ		46	37
83	3号住　覆土中～上位	深鉢・口	Ⅳ3i	縄文（ＬＲ）　内面：ナデ		47	38
84	3号住　覆土中～上位	深鉢？・口	Ⅳ3e	口：波状　口端：刻目帯（中央に沈線）　口唇：肥厚　内面：ミガキ？		47	38
85	3号住　覆土中～上位	鉢？・口～胴	Ⅳ5b	口：無文　胴：異方羽状向縄文（ＲＬ）　内面：ミガキ		47	38
86	3号住　覆土中～上位	深鉢・胴	Ⅳ5e	縄文（ＲＬ）　内面：ナデ		47	38
87	3号住　覆土中～上位	深鉢・口	Ⅳ5c	縄文（ＲＬ、０段多条）　内面：ナデ		47	38
88	3号住　覆土中～上位	深鉢・口	Ⅳ5d	縄文（ＬＲ）　口唇：肥厚　内面：ミガキ		47	38
89	3号住　覆土中～上位	壷・胴	Ⅳ5a	沈線　内面：ナデ		47	38
90	3号住　覆土上位	深鉢・1／2完	Ⅳ3a	口：波状（５単位）、刻目帯（２段、下部に沈線）　頸：刻目帯（上下に沈線） 胴：入組文　異方向羽状縄文（ＬＲ、０段多条）＋沈線　手法：磨消　内面：Ｎ？	小形	47	38
91	3号住　覆土上位	深鉢・口	Ⅳ3b	口：波状　口端：刻目帯（２段、下部に沈線）　口唇：肥厚 入組文　非結束羽状縄文（ＬＲ・ＲＬ）＋沈線　手法：磨消？　内面：ナデ		47	38
92	3号住　覆土上位	壷？・口～頸	Ⅳ3e	口：縄文（ＲＬ、０段多条）　頸：刻目帯（２段、下部に沈線）　内面：ミガキ（光沢）	器面黒い光沢あり	47	38
93	3号住　覆土上位	深鉢・口	Ⅳ4d	口：突起付波状、縄文（ＲＬ）＋沈線　手法：充填　口唇：肥厚　内面：ミガキ？		47	38
94	3号住　覆土上位・ 5号住　覆土	深鉢・口	Ⅳ3d	口唇：肥厚　異方向羽状縄文（ＲＬ、０段多条）＋沈線　手法：磨消　内面：ナデ	95と同一個体	48	38
95	3号住　覆土上位	深鉢・口～胴	Ⅳ3d	口：異方向羽状縄文（ＲＬ、０段多条）＋沈線　手法：磨消 胴：縄文（ＲＬ、０段多条）　内面：ミガキ＋ナデ（上半）	94と同一個体	48	38
96	3号住　覆土上位	深鉢・口	Ⅳ1e	口：波状　口～頸：縄文（ＲＬ）　口唇：圧痕（ＬＲ）　内面：ナデ		48	39
97	3号住　覆土上位	深鉢？・口	Ⅳ3e	口：波状、刻目帯（下部に沈線）　口唇：肥厚　内面：ミガキ		48	39
98	3号住　覆土上位	深鉢・胴～底	Ⅳ5g	胴下：縄文（ＬＲ）　底：ナデ　底面：木葉痕　内面：ナデ		48	39
99	3号住　覆土上位	深鉢・口～胴	Ⅳ3i	口～胴：縄文（ＬＲ）　内面：ナデ	内面煤付着	49	39
100	3号住　覆土上位	深鉢？・口	Ⅳ5f	無文　口唇：肥厚　内面：ナデ		49	39
101	3号住　覆土上位	深鉢？・胴	Ⅳ5e	縄文（ＬＲ、ＲＬ）　内面：ナデ		49	39
102	3号住　覆土上位	深鉢・口～胴	Ⅳ4f	縄文（ＲＬ）　内面：ミガキ		49	40
103	3号住　覆土上位	深鉢・口～胴	Ⅳ5d	縄文（ＬＲ）　内面：ナデ		49	40
104	3号住　覆土上位他	深鉢・口～頸	Ⅳ3a	口頸：入組文　異方向羽状縄文（ＬＲ、０段多条）＋沈線　手法：磨消　内面：ミガキ	十腰内Ⅲ式相当	49	40
105	3号住　覆土	口	Ⅴ4	平行沈線（３段以上）＋刺突文（三角形・円形）　内面：ミガキ？		49	40
106	3号住　覆土上（11K）	深鉢・胴	Ⅰ5	貝殻腹縁圧痕文（連続波状）＋刺突文　内面：ナデ		50	40
107	3号住　覆土	壷・胴	Ⅳ5a	沈線　内面：ナデ？		50	40
108	3号住　PP38 覆土下位	壷・略完形	Ⅳ3a	口頸：異方向羽状縄文（ＲＬ、０段多条）＋沈線 胴：異方向羽状縄文（ＲＬ、０段多条）＋沈線　手法：磨消　内面：Ｍ（口頸）＋Ｎ（胴～底）	十腰内Ⅲ式相当 胴部文様帯3単位	50	40
109	3号住　PP39　覆土	深鉢・口	Ⅳ5c	縄文（ＲＬ）　内面：ナデ		50	40
128	5号住　床面	深鉢・口～底	Ⅳ1e	口～胴下：縄文（Ｌ）　底：ミガキ（横位）　内面：ナデ	十腰内Ⅰ式（新）相当	51	41
129	5号住　Q2覆土	深鉢・口	Ⅳ1e	縄文（ＬＲ）　内面：ナデ		51	41
134	9号住　床面	鉢？・口	Ⅳ1e	縄文（ＬＲ）＋沈線　内面：ミガキ		52	42
135	9号住　床直	鉢？・口	Ⅳ1a	口：波状　口唇：刻目　入組文　縄文（ＬＲ）＋沈線　手法：磨消　内面：ミガキ		52	42
136	9号住　覆土上位	深鉢・口～胴	Ⅳ5e	縄文（ＲＬ）　内面：ミガキ		52	42
137	9号住　覆土上位	深鉢・1／2完	Ⅳ1e	口：波状　口～胴：縄文（ＬＲ）　胴下～底：ナデ（横位）＋ミガキ 内面：縄文（ＬＲ）（口）＋ナデ（胴～底）	十腰内Ⅰ式（新）相当 内面煤付着	52	42

掲載番号	出土地点	器種・部位	分類	文様の特徴	備考	図版	写真
138	9号住　覆土上位	深鉢・口～底	Ⅳ3i	口～胴下：縄文（ＬＲ）　底：ナデ（横位）　底部：木葉痕？　内面：ナデ		52	42
139	9号住　覆土上位	深鉢・1／2完	Ⅳ3i	口～胴下：縄文（ＬＲ、０段多条）　底：ナデ　内面：ナデ		52	42
140	9号住　Q1覆土上位	鉢？・胴～底	Ⅳ5g	胴下：縄文（ＲＬ、０段多条）　底・底面：ミガキ　内面：ミガキ		52	42
141	9号住　南側覆土	鉢？・口	Ⅳ1b	縄文（ＬＲ、ＲＬ）＋沈線　手法：磨消　内面：ミガキ		53	42
145	12号住　Q2覆土下位	深鉢・胴～底	Ⅳ3i	胴：縄文（ＬＲ）　底：ナデ（横位）　底面：無調整　内面：ナデ		53	43
146	12号住　Q4覆土	鉢？・口	Ⅳ5d	縄文（ＬＲ）、沈線　内面：ナデ		53	43
148	13号住　中撤上	深鉢・口	Ⅳ5b	非結束羽状縄文（ＬＲ・ＲＬ）　内面：ナデ		53	43
149	13号住　中撤上	深鉢・胴	Ⅳ5d	縄文（ＬＲ）　内面：ミガキ		53	43
150	13号住	鉢・略完形	Ⅳ5f	器面調整（ミガキ、横位）のみ　内面：ミガキ	アスファルト入り土器	53	43
151	13号住	深鉢・口	Ⅳ5d	縄文（ＬＲ）　内面：ミガキ？		53	43
152	13号住	胴	Ⅳ5e	縄文（ＬＲ、ＲＬ）→平行沈線　内面：ミガキ		53	43
153	13号住　PP7　覆土下	単孔土器・胴	Ⅳ3g	沈線＋刻目　内面：ナデ	器面全体にＭ（光）	53	43
154	13号住　PP7　覆土下	深鉢・胴	Ⅳ5e	縄文（ＲＬ）　内面：ナデ？		53	43
156	17号住　覆土下～中位	鉢・略完形	Ⅳ4f	器面調整（ミガキ、横位）のみ　内面：ミガキ	外面：タール状のもの付着 内面：煤付着	54	43
157	17号住　覆土中位	深鉢・ 胴下～底	Ⅳ5c	胴下：縄文（ＲＬ、０段多条）　底：丁寧なナデ（横位）縄文 底面：丁寧なナデ　内面：ミガキ		54	43
158	17号住　床直	鉢？・胴～底	Ⅳ4b	胴：入組文　非結束羽状縄文（ＲＬ・ＬＲ、０段多条）＋沈線　手法：充填？ 胴下：縄文（ＲＬ？）　底面：上げ底状　内面：ミガキ（光沢）	器面全体黒い光沢あり	54	43
159	17号住　覆土下位	深鉢・頸～底	Ⅳ4b	口：入組文？　縄文（ＲＬ、ＬＲ）＋沈線　頸：縄文（ＲＬ、ＬＲ）＋沈線 胴：入組文　非結束羽状縄文（ＲＬ・ＬＲ）＋沈線　手法：充填 胴下：非結束羽状縄文（ＲＬ・ＬＲ）＋沈線　底：ナデ　内面：ミガキ	内面煤付着 十腰内Ⅳ式相当	54	44
160	17号住　床面	注口・略完形	Ⅳ4b	口：突起付、縄文（ＬＲ、０段多条）＋沈線　胴：入組文　縄文（ＬＲ、０段多条）＋沈線 手法：充填　底：ナデ　内面：ミガキ（口）＋ナデ（胴～底）	十腰内Ⅳ式相当	55	44
161	17号住　床下	鉢・頸～底	Ⅳ4b	頸：平行沈線　胴：縄文（ＬＲ）＋沈線　手法：充填　底：ミガキ 内面：ミガキ（頸～胴下）＋ナデ（底）	磨消部分黒い光沢あり 小形	55	44
162	17号住　覆土下位	胴	Ⅳ5d	縄文（ＬＲ）、平行沈線　内面：ナデ		55	44
163	17号住　覆土下位	深鉢・口	Ⅳ5c	縄文（ＲＬ）　内面：ナデ		55	44
164	17号住　覆土上位	壷？・口～頸	Ⅳ3e	口：非結束羽状縄文（ＲＬ・ＬＲ、０段多条）　頸：刻目帯（上下に沈線）　内面：Ｍ		55	44
165	17号住　Q1覆土	壷？・胴	Ⅳ4b	入組文　非結束羽状縄文（ＲＬ・ＬＲ、0段多条）　手法：充填　内面：ナデ	十腰内Ⅳ式相当　小形	55	44
166	17号住　Ｐ44覆土下位	深鉢・口～底	Ⅳ3e	口：波状　口端：刻目帯（下部に沈線）　頸：刻目帯（上下に沈線） 胴：縄文（ＲＬ）→斜行沈線　底：ミガキ　内面：ミガキ	内面煤付着	55	44
167	18号住　床面	鉢・口～底	Ⅳ1e	口～胴下：縄文（ＬＲ）→部分的にナデ？ 底：ナデ（横位）　底面：笹葉痕　内面：ナデ	十腰内Ｉ式（新）相当 外面煤？付着	55	44
168	4号住居状　Q3覆土	深鉢・口	Ⅳ5c	縄文（ＲＬ）　内面：（ミガキ）		55	45
169	4号住居状　Q3覆土	鉢？・口	Ⅳ3e	口：刻目帯（２段、下部に沈線）　口唇：肥厚　内面：ナデ		55	45
170	4号住居状　ＰＰ1覆土	深鉢・口	Ⅳ5d	縄文（ＬＲ）　内面：ナデ？	薄手	55	45
171	6号住居状　覆土上位	壷・口～頸	Ⅳ3d	口頸：異方向羽状縄文（ＲＬ、０段多条）＋平行沈線（５段）　手法：磨消　内面：Ｎ		56	45
174	16号住居状　4～5層	胴	Ⅳ5b	非結束羽状縄文（ＬＲ・ＲＬ）＋沈線　内面：ミガキ		56	45
175	1号土坑　覆土下位	深鉢・胴	Ｉ4	縄文（ＬＲ）＋貝殻条痕文　内面：ナデ		56	45
176	1号土坑　覆土	深鉢・口	Ｉ4	表裏両面に貝殻条痕文　口唇：刻目　内面：ナデ		56	45
179	17号土坑　覆土	深鉢・胴	Ⅳ5c	縄文（ＲＬ）　内面：ミガキ？		57	45

掲載番号	出土地点	器種・部位	分類	文様の特徴	備考	図版	写真
180	17号土坑　覆土	深鉢？・口	Ⅳ5c	縄文（ＲＬ）　口唇：肥厚　内面：ナデ		57	45
182	19号土坑　覆土	深鉢？・底	Ⅳ5g	内面：ナデ		57	45
183	22号土坑　覆土	深鉢・胴	Ⅳ5b	非結束羽状縄文（ＲＬ・ＬＲ、０段多条）　内面：ミガキ	薄手、焼成良好	57	45
184	22号土坑　覆土	鉢？・胴	Ⅳ5c	縄文（ＲＬ、０段多条）　内面：ナデ		57	45
185	22号土坑　覆土	深鉢？・胴	Ⅳ5c	縄文（ＲＬ）　内面：ナデ		57	45
186	22号土坑　覆土	壷・胴	Ⅳ4b	縄文（ＲＬ）＋沈線　手法：磨消　内面：ミガキ		57	45
187	22号土坑　覆土	壷・胴	Ⅳ4e	刻目帯（２段）　瘤状突起あり　内面：ミガキ＋ナデ	十腰内Ⅳ式相当	57	45
188	22号土坑　覆土	深鉢・口	Ⅳ5b	非結束羽状縄文（ＲＬ・ＬＲ、０段多条）　内面：ナデ		57	45
189	26号土坑　覆土最上位	壷・胴～底	Ⅳ3a	胴：入組文　異方向羽状縄文（ＲＬ、０段多条）＋沈線　手法：磨消　内面：ナデ	十腰内Ⅲ式相当	57	46
190	29号土坑　覆土下位	深鉢・胴	Ⅳ5c	縄文（ＲＬ）　内面：ミガキ？		57	46
191	29号土坑　覆土下位	深鉢・胴	Ⅳ5c	縄文（ＲＬ、０段多条）　内面：ミガキ		57	46
192	29号土坑　覆土下位	深鉢・胴	Ⅳ5d	縄文（ＬＲ？）　内面：ミガキ？		57	46
193	29号土坑　覆土下位	深鉢・口	Ⅳ5d	縄文（ＬＲ、０段多条）　内面：ミガキ？		57	46
194	30号土坑　覆土	深鉢・口	Ⅳ5c	縄文（ＲＬ）　内面：ナデ	厚手	57	46
195	30号土坑　覆土	深鉢・口	Ⅳ5f	無文　内面：ナデ	厚手	57	46
196	34号土坑　覆土	深鉢・口～胴	Ⅳ5e	縄文（ＬＲ）　内面：ナデ		57	46
198	4号柱穴　覆土	鉢？・口	Ⅳ5c	縄文（ＲＬ、０段多条）　口唇：肥厚　内面：ミガキ		58	46
199	6号柱穴　覆土	深鉢？・胴	Ⅳ5c	縄文（ＲＬ）　内面：ミガキ		58	46
200	6号柱穴　覆土	鉢？・口	Ⅳ5d	縄文（ＬＲ、０段多条）　内面：ナデ		58	46
201	25号柱穴　覆土	深鉢？・口	Ⅳ5d	縄文（ＬＲ）　内面：ナデ		58	46
202	48号柱穴　覆土	浅鉢？・口	Ⅳ5d	縄文（ＬＲ）　内面：ナデ		58	46
205	1号埋設土器遺構	壷・略完形	Ⅵ	口～胴下：縄文（ＲＬ）　頸：全周に貫通孔　底：ミガキ（横位）　内面：ミガキ		58	47
206	5Ｄ・5Ｅ　1～3層	壷・胴	Ⅳ3b	非結束羽状縄文（ＬＲ・ＲＬ、０段多条）＋沈線　手法：充填？　内面：ナデ	磨消部分に黒い光沢あり	59	48
207	5Ｄ・5Ｅ　1～3層	壷・胴	Ⅳ4b	非結束羽状縄文（ＬＲ・ＲＬ、０段多条）＋沈線　手法：充填？　内面：ミガキ		59	48
208	5Ｅ　1層下～中位	深鉢・胴	Ⅳ5d	縄文（ＬＲ）　内面：ミガキ（光沢）		59	48
209	5Ｄ・5Ｅ　1層	深鉢・口～胴	Ⅳ5b	非結束羽状縄文（ＬＲ・ＲＬ、０段多条）　内面：ミガキ？		59	48
210	5Ｅ　1層	壷・口	Ⅳ4c	口：波状　入組文　非結束羽状縄文（ＬＲ・ＲＬ、０段多条）＋沈線 手法：磨消　内面：ミガキ		59	48
215	6Ｆ・7Ｆ　3層	深鉢・ 胴下～底	Ⅳ5g	器面調整（ミガキ）のみ　内面：ナデ＋ミガキ		60	48
216	7Ｆ　3層	底	Ⅳ5g	内面：ナデ		60	48
217	7Ｆ　3層	深鉢・頸	Ⅳ3e	頸：刻目帯（上下に沈線）　縄文（ＬＲ、０段多条）　内面：ナデ		60	48
218	6Ｆ　2～3層	鉢？・口	Ⅳ5c	口唇：圧痕（ＲＬ）　口：縄文（ＲＬ）　内面：ミガキ（光沢）		60	48
219	6Ｆ・7Ｆ　2～3層	深鉢・底	Ⅳ5g	底：縄文（ＲＬ？）　内面：ナデ	内面煤付着	60	49
220	6Ｆ・7Ｆ　2～3層	深鉢・口～胴	Ⅳ1e	縄文（ＬＲ）　内面：ナデ		60	49
221	7Ｆ　2～3層	台付鉢？・底	Ⅳ5g	高台つけね：縄文（ＬＲ）→刻目帯（上下に沈線）　内面：ナデ		60	49
222	7Ｇ　2～3層	壷・略完形	Ⅳ5c	頸：圧痕（ＲＬ、０段多条）　胴：縄文（ＲＬ、０段多条） 底：ナデ　底面：笹葉痕　内面：ナデ		60	49
223	7Ｆ　2層	壷・底	Ⅳ5e	底：縄文（ＬＲ、０段多条）　底面：上げ底状　内面：ナデ		60	49
224	7Ｆ　2層中～上位	注口・注口	Ⅳ3h			60	49
225	6Ｆ　1～2層	壷・胴	Ⅳ3a	入組文　異方向羽状縄文（ＲＬ、０段多条）＋沈線　手法：磨消　内面：ミガキ（光沢）		60	49

掲載番号	出土地点	器種・部位	分類	文様の特徴	備考	図版	写真
226	6F　1～2層	深鉢？・口	Ⅳ3c	縄文（ＲＬ）＋平行沈線　手法：磨消　内面：ミガキ	227と同一個体	60	49
227－①	6F・7F　1～2層	深鉢・口～胴	Ⅳ3c	入組文　縄文（ＲＬ）＋沈線　手法：磨消　内面：ミガキ（光沢）	226と同一個体	61	49
227－②	6F・7F　1～2層	深鉢・胴～底	Ⅳ3c	胴：入組文　縄文（ＲＬ）＋沈線　手法：磨消 底：ミガキ　底面：縄文（ＲＬ）　内面：ミガキ（光沢）	226と同一個体	61	49
228	6F・7F　1～2層	深鉢・口	Ⅳ3e	口：波状　口端：刻目帯（下部に沈線）　内面：ミガキ		61	49
229	7F　1～2層	深鉢・口	Ⅳ3e	口：縄文（ＲＬ）　頸部：刻目帯（上下に沈線）　内面：ナデ		61	49
230	7F　1～2層	深鉢・口	Ⅳ5c	縄文（ＲＬ）　内面：ナデ		61	50
231	7F　1～2層	鉢？・口	Ⅳ5d	縄文（ＬＲ）　口唇：圧痕（ＬＲ）　内面：ナデ		61	50
232	7G　1～2層	深鉢・口	Ⅳ2	口：波状　頸：平行沈線＋縄文（ＲＬ）　口唇：突起　内面：ナデ	十腰内Ⅱ式？	61	50
233	7F・7G　1～2層	深鉢・口～胴	Ⅳ4f	縄文（ＲＬ、０段多条）　内面：ミガキ		61	50
234	7F・7G　1～2層	鉢？・口	Ⅳ1e	縄文（ＬＲ）　内面：ナデ		62	50
235	6F　1層	壺・頸～底	Ⅳ3a	口：異方向羽状縄文（ＬＲ、０段多条）＋沈線 胴：入組文　縄文（ＬＲ、０段多条）＋沈線　手法：磨消　内面：Ｍ（口頸）＋Ｎ（胴～底）	十腰内Ⅲ式相当 胴部文様帯5単位	62	50
236	6F　1層	深鉢・口	Ⅳ3e	口：波状　口端：刻目帯（下部に沈線）　口唇：肥厚　内面：ミガキ		62	50
237	6F・7F　1層	壺？・胴	Ⅳ3d	異方向羽状縄文（ＲＬ、０段多条）＋沈線　手法：磨消　内面：ナデ		62	50
238	7F　1層	壺・胴	Ⅳ3b	入組文　非結束羽状縄文（ＬＲ・ＲＬ、０段多条）＋沈線　手法：磨消　内面：ミガキ		62	50
239	7F　1層	深鉢・口～胴	Ⅳ5c	縄文（ＲＬ）　内面：ナデ		62	50
244	21Ｌ・Ｍ　4～5層	深鉢・口～胴	Ⅳ1f	口～胴：撚糸文（Ｌ）？→ミガキ？　内面：ナデ	外面煤？付着	63	51
245	21Ｌ・Ｍ　4下～5上	深鉢・口	Ⅳ5b	縄文（ＬＲ、ＲＬ）　内面：ナデ		63	51
246	21Ｌ・Ｍ　4層中位	深鉢・口	Ⅳ5c	口唇：肥厚　縄文（ＲＬ）　内面：ミガキ		63	51
247	21Ｌ・Ｍ　3～4層	深鉢・1／2完	Ⅳ5e	口～胴下：縄文（Ｌ）　口唇：縄文（Ｌ）　底：ナデ（横） 内面：ミガキ（口～胴）＋ナデ（底）	小形	63	51
248	21Ｌ・Ｍ　3層	深鉢・口	Ⅳ5c	縄文（ＲＬ、０段多条）　内面：ミガキ		63	51
249	21Ｌ・Ｍ　3層	鉢？・口	Ⅴ2	帯縄文（ＲＬ）→平行沈線文　内面：ナデ		63	51
250	21Ｌ・Ｍ　3層	胴	Ⅴ2	帯縄文（ＲＬ）→平行沈線文＋山形文　内面：ナデ		63	51
251	21Ｌ・Ｍ　3層上位	胴	Ⅴ5	縄文（ＲＬ）　内面：ナデ		63	51
252	21Ｌ・Ｍ　3層上位	深鉢・頸～胴	Ⅳ3c	頸：刻目帯　縄文（ＲＬ、０段多条）＋区画沈線　内面：ナデ	266と同一個体	63	51
253	21Ｌ・Ｍ　3層上位	深鉢・胴	Ⅳ5c	縄文（ＲＬ）　内面：ミガキ		63	51
254	21Ｌ・Ｍ　2～3層	深鉢？・口頸	Ⅳ5b	口頸：非結束羽状縄文（ＬＲ・ＲＬ、０段多条）　口唇：肥厚　内面：ナデ		63	52
255	21Ｌ・Ｍ　2層下位	深鉢・底	Ⅳ1f	底・底面：ミガキ　内面：ナデ	244と同一個体	63	52
256	21Ｌ・Ｍ　2層下位	鉢・1／2完	Ⅳ4f	口～底：非結束羽状縄文（ＲＬ・ＬＲ）　内面：ミガキ		64	52
257	21Ｌ・Ｍ　2層	深鉢・口	Ⅳ1e	無文　内面：ナデ		64	52
258	21Ｌ・Ｍ　2層	深鉢・口	Ⅳ5c	縄文（ＲＬ）　内面：ミガキ？		64	52
259	21Ｌ・Ｍ　2層	壺？・胴	Ⅳ3a	入組文　異方向羽状縄文（ＲＬ、０段多条）＋沈線　手法：磨消　内面：ナデ		64	52
260	21Ｌ・Ｍ　2層	深鉢・口～胴	Ⅳ5c	縄文（ＲＬ）　内面：ミガキ		64	52
261	21Ｌ・Ｍ　2層	鉢？・口	Ⅳ5d	縄文（ＬＲ）　内面：ミガキ		64	52
262	21Ｌ・Ｍ　2層	深鉢・口～胴	Ⅳ4c	口端：平行沈線（０段）＋大突起に瘤　頸：平行沈線（３段）＋瘤 口：突起付波状（大小５単位） 口＋胴：入組文（木葉状）　非結束羽状縄文（ＲＬ・ＬＲ、０段多条）＋沈線 手法：充填？　内面：ミガキ	十腰内Ⅳ式相当 内面煤付着	64	52

掲載番号	出土地点	器種・部位	分類	文様の特徴	備考	図版	写真
263	21L・M 2層	浅鉢？・口～胴	Ⅳ4f	無文（ミガキ調整のみ） 内面：ミガキ		65	52
264	21L・M 2層	深鉢・口	Ⅳ3f	口端：圧痕（RL）+沈線 口：大波状 内面：ナデ		65	53
265	21L・M 2層西壁	深鉢・口	Ⅳ5b	非結束羽状縄文（RL・LR） 内面：ミガキ		65	53
266	21L・M 2層上位	深鉢・頸～胴	Ⅳ3c	頸：刻目帯(下部に沈線) 胴：入組文 縄文（RL）+沈線 手法：磨消 内面：ナデ	252と同一個体	65	53
267	21L・M 2層				粘土塊	－	53
268	21L・M 1層	深鉢・口～頸	Ⅳ5d	口唇：刺突文 口：縄文（LR） 頸：平行沈線 内面：ナデ		65	53
269	21L・M 1層	深鉢・胴	Ⅳ5h	網目状撚糸文 内面：ナデ		65	53
270	21L・M 1層	胴	Ⅳ5h	沈線 磨消 内面：ミガキ		65	53
271	21L・M 1層	鉢・口	Ⅳ5c	縄文（RL） 内面：ミガキ		65	53
272	21L・M	深鉢・胴	Ⅰ1	縄文（LR）→D字状刺突5条以上+沈線文 内面：ナデ	白浜式相当	65	53
273	21L・M	壺？・頸～胴	Ⅳ3a	頸：刻目帯（上下に沈線） 胴：異方向羽状縄文（RL、0段多条）+沈線 手法：磨消 内面：ナデ？		65	53
274	21L・M	深鉢・口	Ⅳ4c	口端：刻目帯（2段、下部に沈線） 口：波状、入組文 非結束羽状縄文（LR・RL）+沈線 手法：充填？ 頸：刻目帯（2段、上下に沈線） 内面：ナデ		65	53
275	21L・M	深鉢・口	Ⅳ4c	口端：刻目帯（2段、下部に沈線） 口：波状、入組文 非結束羽状縄文（LR・RL）+沈線 手法：充填？ 内面：ミガキ		66	53
276	21L・M	深鉢・頸～胴	Ⅳ3e	頸：刻目帯(上下に沈線) 胴：非結束羽状縄文（LR・RL）+沈線 手法：磨消 内面：N		66	53
277	21L・M	深鉢・胴	Ⅳ5c	縄文（RL） 内面：ナデ		66	53
278	21L・M	底	Ⅳ5g	木葉痕 内面：ナデ		66	53
279	21L・M	口	Ⅳ5f	無文 内面：ナデ	手づくね	66	53
280	21L・M	胴	Ⅳ5a	沈線 内面：ミガキ？		66	53
281	21L・M	深鉢・口	Ⅴ1	口：縄文（RL）→平行沈線文+山形文 内面：ナデ		66	53
282	21L・M	口	Ⅴ3	口：指頭による連続的な押圧 内面：ナデ	踏瀬大山式併行	66	53
283	21L・M	胴	Ⅴ1	沈線 内面：ナデ		66	53
286	18M Ⅵ層下位	深鉢・口	Ⅰ1	口縁部に爪形の刺突文4条以上 口唇：刻み 内面：ナデ	白浜式相当	67	54
287	19M Ⅵ層	深鉢・胴	Ⅰ2	縦位方向の器面調整のみ 内面：ナデ？	白浜式相当	67	54
288	19M Ⅵ層	深鉢・胴	Ⅰ4	貝殻条痕文 内面：ミガキ？		67	54
289	10J Ⅴ層	深鉢・口	Ⅰ5	羽状+斜位の貝殻腹縁圧痕文 内面：ナデ		67	54
290	19M Ⅳ層	深鉢・口～底	Ⅰ2	縦位方向の器面調整（丁寧なミガキ）のみ 内面：ミガキ	白浜式相当	67	54
291	19M Ⅳ層下位	深鉢・口	Ⅰ4	貝殻条痕文 口唇：刻み 内面：ナデ		67	54
292	19M Ⅳ層下位	深鉢・底	Ⅰ6	乳房状	物見台式相当？	67	54
293	19M Ⅳ層中～下位	深鉢・口	Ⅰ4	貝殻条痕文 口唇：刻み 内面：ミガキ？		67	54
294	19M Ⅳ層中～下位	深鉢・口	Ⅰ4	貝殻条痕文 口唇：刻み 内面：ナデ		67	54
295	19M Ⅳ層中～下位	深鉢・口	Ⅰ4	貝殻条痕文 口唇：刻み 内面：ナデ		67	54
296	19M Ⅳ層中～下位	深鉢・胴	Ⅰ4	貝殻条痕文 内面：ミガキ？		67	54
297	19M Ⅳ層中～下位	深鉢・胴	Ⅰ2	縦位方向の器面調整のみ 内面：ミガキ？		67	54
298	19M Ⅳ層中～下位	深鉢・胴	Ⅰ4	貝殻条痕文 内面：ナデ		67	54
299	10J Ⅳ層	深鉢・口	Ⅰ3	羽状の貝殻腹縁圧痕文 内面：ナデ	鳥木沢式相当	68	54
300	10J Ⅳ層	深鉢・口	Ⅰ3	口唇：刻み 口：沈線+羽状の貝殻腹縁圧痕文 内面：ナデ	鳥木沢式相当	68	55

掲載番号	出土地点	器種・部位	分類	文様の特徴	備考	図版	写真
301	13L　Ⅳ層上位	深鉢・胴	I 3	表裏両面に貝殻条痕文		68	55
302	17・18M　Ⅳ層	深鉢・胴～底	I 1	縦位方向の器面調整（丁寧なミガキ） →爪形状刺突文（3段以上、片刃平棒工具による）　内面：M	白浜式相当	68	55
303	18M　Ⅲc～Ⅳ層	深鉢・口	I 5	口・口裏・口唇：貝殻腹縁圧痕文　頸：刺突列　内面：ナデ		68	55
304	5G　Ⅲ①層	鉢・口	Ⅳ5f	無文（ミガキ調整のみ）　内面：ミガキ？		68	55
305	11J　Ⅲc層	深鉢・胴	I 3	羽状の貝殻腹縁圧痕文　下部は無文　内面：ナデ		68	55
306	11L　Ⅲc層上位	深鉢・胴	Ⅱ	縄文　内面：ナデ	繊維多量含む	68	55
307	11L　Ⅲc層	深鉢・底	Ⅱ	縄文（LR）　外底面：縄文（LR）？　内面：ナデ	繊維多量含む	68	55
308	16L　Ⅲc層	深鉢・胴	Ⅱ	網目状撚糸文　内面：ナデ		68	55
309	16L　Ⅲc層	深鉢・口	Ⅱ	網目状撚糸文　内面：ナデ		68	55
310	5F～5G　Ⅱ下～Ⅲa上	深鉢・口	Ⅳ1c	口：波状、縄文（LR）+沈線　手法：磨消　口裏：沈線　内面：ミガキ		69	55
311	13L　Ⅱ下～Ⅲa上	深鉢・胴	Ⅵ	結節縄文？（LR）　内面：ナデ		69	55
312	5E　Ⅱ層中～下位	鉢？・胴～底	Ⅳ4b	胴下：入組文　非結束羽状縄文（LR・RL、0段多条）+沈線　手法：充填 底・底面：M（光）　内面：M	十腰内Ⅳ式相当	69	56
313	4D　Ⅱ層上位	深鉢・口～胴	Ⅳ4f	縄文（RL）　内面：ミガキ	314と同一個体	69	56
314	4D　Ⅱ層上位	深鉢・胴～底	Ⅳ5c	縄文（RL）　内面：ミガキ	313と同一個体	69	56
315	5F　Ⅱ層	深鉢？・口	Ⅳ3d	異方向羽状縄文（RL、0段多条）+沈線　手法：磨消　内面：ミガキ		69	56
316	5F　Ⅱ層	壺・口～胴	Ⅳ3b	入組文　非結束羽状縄文（LR・RL、0段多条）+沈線　手法：磨消 口：刻目帯（2段以上、上下に沈線）　内面：ナデ		69	56
317	5H　Ⅱ層	壺・胴	Ⅳ3c	縄文（RL、0段多条）+沈線　手法：磨消　内面：ナデ		69	56
318	5H　Ⅱ層	香炉形？・頭？	Ⅳ5h	瘤+平行沈線+刻み　内面：ナデ		69	56
319	5H　Ⅱ層	深鉢・胴下～底	Ⅳ3i	胴下：縄文（LR）→一部ナデ？（縦位）　底：ナデ（横位）　内面：ナデ		70	56
320	6G　Ⅱ層	壺・口	Ⅳ1b	口：波状（4単位）　口頸：縄文（R）+沈線　手法：充填　内面：ナデ	十腰内Ⅰ式（新）相当	70	56
321	6H　Ⅱ層	鉢・1／2完	Ⅳ1e	口：波状（4単位）　口頸：沈線（2段）　胴上：縄文（L？）→部分的ナデ 胴下：ナデ（粗）　内面：ミガキ？	十腰内Ⅰ式（新）相当 外面：タール？付着	70	56
322	6H　Ⅱ層	深鉢・口～底	Ⅲ	頸部：連続刺突文（横位、竹管）　胴上端：異方向羽状縄文（RL） 胴部：RL　内面：ミガキ？	最花式相当 底面欠　内外面煤付着	70	56
323	6H　Ⅱ層	鉢？・口	Ⅳ5d	縄文（LR）　内面：ミガキ	薄手	70	57
324	7G　Ⅱ層	鉢？・口	Ⅳ1a	口唇：刻み　頸：縄文（LR）+沈線　手法：充填？　内面：ミガキ		70	57
325	7H　Ⅱ層	深鉢・胴～底	Ⅳ3i	胴：縄文（RL、0段多条）　底：ナデ（横位）　底面：無調整　内面：ナデ	外面煤？付着	70	57
326	7H・8H　Ⅱ層	深鉢・口～胴	Ⅳ4f	縄文（RL）　内面：ナデ		71	57
327	7H・8H　Ⅱ層	鉢？・口	Ⅳ3i	縄文（RL）　内面：ミガキ		71	57
328	8H　Ⅱ層	鉢・口～胴	Ⅳ5b	口～胴：非結束羽状縄文（LR・RL、0段多条）　内面：ミガキ（光沢）	内面煤付着	71	57
329	8H　Ⅱ層	鉢？・口	Ⅳ1d	口：折り返し　縄文（LR）　内面：ナデ		71	58
330	8H　Ⅱ層	壺？・胴	Ⅳ5h	縄文→渦巻き状の沈線　内面：ナデ		71	58
331	8H　Ⅱ層	胴	V5	縄文（RL）　内面：ナデ		71	58
332	8・9J　Ⅱ層	深鉢・口	Ⅳ1d	口：波状、折り返し　口唇：圧痕（RL）　内面：ナデ		71	58
333	9I・10I　Ⅱ直上	壺・胴	Ⅳ5a	沈線　内面：ミガキ		71	58
334	10I　Ⅱ層	口	Ⅵ	口唇：沈線　口：結節縄文？（LR）　内面：ナデ		71	58

掲載番号	出土地点	器種・部位	分類	文様の特徴	備考	図版	写真
335	11K　Ⅱ層	深鉢・口	Ⅰ5	貝殻腹縁圧痕文　内面：ナデ		71	58
336	12L　Ⅱ層	口	Ⅵ	口唇：圧痕（ＲＬ）　口：結節縄文（ＬＲ）　内面：ナデ		71	58
337	13J　Ⅱ層	胴	Ⅱ	結節縄文？（ＬＲ）　内面：ナデ	繊維含む	71	58
338	13L　Ⅱ層	深鉢・胴	Ⅴ5	縄文（ＬＲ）　内面：ナデ		72	58
339	13L　Ⅱ層	口	Ⅵ	口唇：圧痕（ＲＬ）　口：結節縄文（ＬＲ）？　内面：ナデ		72	58
340	13L　Ⅱ層	胴	Ⅴ1	縄文（ＲＬ）→沈線　内面：ナデ		72	58
341	13L　Ⅱ層	深鉢・胴	Ⅱ	結節縄文（ＬＲ）？　内面：ナデ	繊維含む	72	58
342	21M　Ⅱ層	胴	Ⅴ1	沈線＋縄文（ＲＬ）　内面：ナデ		72	58
343	8Ⅰ　Ⅰ～Ⅱ層	胴	Ⅴ4	交互刺突文　内面：ナデ		72	58
344	9H　Ⅰ～Ⅱ層	鉢？・底	Ⅳ5g	内面：ナデ		72	58
345	13L　Ⅰ層	深鉢？・口	Ⅳ5b	口唇：圧痕（ＬＲ）　異方向羽状縄文（ＬＲ）　内面：ナデ		72	58
346	不明　Ⅰ層	口	Ⅳ1e	頸：圧痕（Ｌ？）　内面：ナデ		72	58
347	不明　Ⅰ層	鉢？・口	Ⅳ5d	縄文（ＬＲ）　内面：ミガキ		72	58
348	5G　粗掘	深鉢・口	Ⅳ5f	無文　内面：ナデ		72	58
349	6G・7G　粗掘	鉢？・胴	Ⅳ5e	縄文（ＲＬ）　内面：ナデ		72	58
350	5H　粗掘	壺・頸～胴	Ⅳ3b	胴：入組文　非結束羽状縄文（ＬＲ・ＲＬ、０段多条）＋沈線　手法：磨消　内面：ナデ		72	58
351	6G　粗掘	壺・底	Ⅳ5f	無文　内面：ナデ	352・353と同一個体 小形	72	58
352	6G　粗掘	壺・胴	Ⅳ5f	無文　内面：ナデ	351・353と同一個体	72	58
353	6G　粗掘	壺・胴	Ⅳ5f	無文　内面：ナデ	351・352と同一個体	72	58
354	6G　粗掘	深鉢・口	Ⅳ3e	口端：刻目帯（下部に沈線）　口唇：肥厚 口：波状、縄文（ＲＬ）＋平行沈線　手法：磨消　内面：ミガキ		72	59
355	10～12K　粗掘	底	Ⅳ5g	外底面：縄文（ＲＬ）　内面：ナデ		72	59
356	13K　粗掘	胴	Ⅱ	縄文（ＲＬ）　内面：ナデ		72	59
357	13K　粗掘	深鉢・口	Ⅱ	口唇：刻み　口：結び目縄文（綾繰文）　内面：ナデ	繊維多量含む	72	59
358	15K　粗掘	深鉢・口～胴	Ⅳ3c	口端：刻目帯（２段、下部に沈線）　頸：刻目帯（２段、上下に沈線） 胴：縄文（ＬＲ、０段多条）＋沈線　手法：磨消　内面：ミガキ？		73	59
359	15K　粗掘	胴	Ⅴ1	沈線、縄文（ＬＲ、ＲＬ）　内面：ナデ		73	59
360	17L　粗掘	口	Ⅳ3e	口：波状　口唇：刻み　口端：刻目帯（2段、下部に沈線）　内面：ミガキ？		73	59
361	19M　粗掘	深鉢・口	Ⅰ2	無文（縦位の器面調整のみ）　内面：ミガキ		73	59
362	21M　粗掘	深鉢・口	Ⅰ4	口唇：刻み　口：表裏両面に貝殻条痕文		73	59
363	表採	深鉢・口～胴	Ⅳ5c	頸：平行沈線　胴：縄文（ＲＬ）　内面：ミガキ		73	59
364	表採	鉢・胴～底	Ⅳ5g	無文　内面：ナデ		73	59

部位の名称　口唇：口唇部、口：口縁部、口端：口縁端部、頸：頸部
　　胴：胴部、底：底部
内面調整　Ｎ：ナデ、Ｍ：ミガキ、光：光沢

第6表　遺物観察表（石器）

掲載番号	器種	出土地点	分類	石質	産地	長cm	幅cm	厚cm	重g	備考	図版	写真
16	尖頭器	1号住　覆土下位		頁岩	北上山地	〔2.9〕	〔1.7〕	〔0.5〕	〔1.5〕	基部のみ残存	40	32
17	不定形石器	1号住　覆土	C	頁岩	北上山地	〔5.0〕	〔2.8〕	〔1.0〕	〔9.8〕	端部欠損、片面調整	40	32
18	磨製石斧	1号住　Q1覆土上～中位		(細粒)閃緑岩	北上山地	〔4.1〕	〔3.1〕	〔1.8〕	〔28.9〕	刃部欠損、定角式	40	32
19	磨石・敲石類	1号住　覆土	D3	砂岩	北上山地	12.8	8.7	8.3	1211.9		40	32
20	石皿	1号住　覆土下位		砂岩	北上山地	〔10.3〕	〔11.4〕	〔4.0〕	〔478.0〕		40	32
36	磨石・敲石類	2号住　覆土下位	A3	マンガン鉱？	大野村周辺	〔5.2〕	6.0	4.8	〔304.6〕	上下両端破損	41	33
37	磨石・敲石類	2号住　Q2覆土	A1	花崗閃緑岩	北上山地	12.6	10.0	5.5	1129.4	平坦面使用	41	33
38	磨石・敲石類	2号住　Q2覆土	A2	花崗閃緑岩	北上山地	12.0	7.8	5.1	794.2	ほぼ全面使用	41	33
39	石皿	2号住　覆土下位		ホルンフェルス	北上山地	〔10.6〕	〔17.7〕	〔4.4〕	〔972.3〕		42	33
110	石鏃	3号住　南側覆土下位	B2	頁岩	北上山地	2.3	1.4	0.3	0.6	完形、アスファルト付着	50	40
111	不定形石器	3号住　覆土中位	A1	赤色頁岩	北上山地	4.6	4.4	1.6	36.7	交互両面調整	50	40
112	不定形石器	3号住　覆土中位	A2	頁岩	北上山地	〔3.7〕	〔2.8〕	〔0.8〕	〔7.7〕	欠損、片面調整	50	40
113	不定形石器	3号住　覆土中位	A1	頁岩	北上山地	〔2.3〕	〔2.7〕	〔1.2〕	〔5.8〕	欠損、片面調整	50	40
114	U. F.	3号住　覆土中位		頁岩	北上山地	3.3	5.0	6.5	9.4		50	40
115	磨製石斧	3号住　覆土中位		（細粒）閃緑岩	北上山地	〔9.0〕	〔4.4〕	〔2.6〕	〔168.7〕	刃部欠損、定角式	50	40
116	磨製石斧未成品	3号住　覆土上位		玢岩	北上山地	〔7.3〕	〔5.2〕	〔3.3〕	〔215.0〕	刃部欠損　乳棒状	50	40
117	磨石・敲石類	3号住　覆土上～中位	A2	石英斑岩	北上山地？	11.7	7.5	6.4	817.2	部分使用	50	41
118	磨石・敲石類	3号住　覆土上～中位	A1	玢岩	北上山地	7.8	7.4	3.6	371.8	ほぼ全面使用、特に両端部は面取り状に磨面がみられる	50	41
119	調整痕を有する礫	3号住　覆土上～中位		チャート	北上山地	25.2	6.1	4.1	581.8		51	41
120	円礫	3号住　覆土上～中位		石英安山岩	北上山地？	1.5	1.1	0.6	1.2	明瞭な使用痕なし	51	41
121	円礫	3号住　覆土上位		チャート	北上山地	1.5	1.2	0.9	2.0	明瞭な使用痕なし	51	41
130	不定形石器	5号住　炉覆土	A2	頁岩	北上山地	4.0	3.3	1.4	16.7	片面調整	51	41
131	磨石・敲石類	5号住　床面	A2	花崗閃緑岩	北上山地	〔9.0〕	〔9.3〕	〔6.0〕	〔730.9〕	ほぼ全面使用　使用顕著 約半分残存	51	41
132	磨石・敲石類	5号住　Q2覆土下位	A3	砂岩	北上山地	〔4.1〕	〔3.3〕	〔1.7〕	〔24.7〕	被熱？	51	41
142	不定形石器	9号住　炉覆土	A2	赤色頁岩	北上山地	〔2.9〕	〔4.8〕	〔1.6〕	〔19.0〕	片面調整　磨石からの転用か？	53	42
143	U. F.	9号住　炉覆土		赤色頁岩	北上山地	3.5	3.7	1.0	9.9	礫面平滑　磨石からの転用か？	53	－
155	磨石・敲石類	13号住　PP89　底面	A1	石英斑岩	北上山地	10.7	8.9	4.1	574.6	全面使用特に中央部は使用顕著	53	43
172	打製石斧	6号住居状　覆土		玢岩	北上山地	〔6.8〕	〔5.0〕	〔3.1〕	〔164.4〕	磨製石斧未成品？	56	45
173	磨石・敲石類	6号住居状　Q4覆土下位	B3	砂岩	北上山地	8.1	5.7	〔4.1〕	〔252.0〕	一部破損	56	45
177	調整痕を有する礫	1号土坑　覆土下位		チャート	北上山地	26.5	6.0	1.6	649.6		56	45
178	台石？	1号土坑　底面		チャート	北上山地	28.4	24.8	〔7.45〕	〔8400.0〕		56	45

掲載番号	器種	出土地点	分類	石質	産地	長cm	幅cm	厚cm	重g	備考	図版	写真
181	剥片	18号土坑　覆土		石英安山岩	北上山地？	3.0	3.5	0.8	7.4		－	45
197	磨石・敲石類	36号土坑　北側覆土	A4	砂岩	北上山地	8.7	5.3	3.7	207.3	擦痕顕著	57	46
203	不定形石器	112号柱穴　覆土	C	頁岩	北上山地	4.2	4.8	1.5	15.8	片面調整	58	46
211	尖頭器	5D・5E　2層		頁岩	北上山地	4.1	2.8	1.1	11.4	完形	59	48
212	不定形石器	5D・5E　1層	D	頁岩	北上山地	2.9	2.6	1.7	14.8		59	48
213	不定形石器	5D・5E　層位不明	B	緑色頁岩	北上山地	〔1.4〕	〔2.5〕	〔1.1〕	〔4.8〕	欠損、片面調整	59	48
214	磨石・敲石類	5D・5E　1層	B1	砂岩	北上山地	7.1	5.5	3.3	157.0		59	48
240	不定形石器	7F　2層中～上位	A1	赤色頁岩	北上山地	〔4.1〕	3.1	1.1	〔15.2〕	一部欠損、片面調整	62	51
241	磨石・敲石類	6F・7F　2層	A4	砂岩	北上山地	〔10.7〕	〔7.3〕	〔6.7〕	〔656.1〕	一部破損、部分使用	62	51
242	磨石・敲石類	6F・7F　上層	A4	砂岩	北上山地	14.9	〔8.4〕	6.6	〔960.4〕	一部のみ使用	62	51
284	不定形石器	21L・M　3層下位	B	頁岩	北上山地	〔2.2〕	〔2.4〕	〔1.1〕	〔7.7〕	欠損、両面調整	66	53
285	磨石・敲石類	21M　2層（黒褐色土）	E	花崗閃緑岩	北上山地	〔10.3〕	〔8.9〕	〔5.1〕	〔797.1〕	一部破損、凹→磨	66	53
365	石鏃	11J　Ⅱ層下位～Ⅲa層上位	B2	珪質頁岩	北上山地	〔1.7〕	〔1.2〕	0.4	〔0.6〕	先端・側縁欠損	74	60
366	石鏃	12L　Ⅱ層下位～Ⅲa層上位	B2	珪質頁岩	北上山地	2.9	1.4	0.3	1.0	完形	74	60
367	石鏃	12L南ベルト　Ⅱ層	C1	頁岩	北上山地	2.8	〔1.4〕	0.5	〔1.4〕	欠損	74	60
368	石鏃	6H　Ⅰ層		頁岩	北上山地	〔2.7〕	1.8	〔0.6〕	〔2.7〕	基部欠損、未製品？	74	60
369	石鏃	18L　粗掘	B2	珪質頁岩	北上山地	2.0	1.4	0.3	0.6	完形	74	60
370	尖頭器	15K　Ⅲb層		頁岩	北上山地	〔4.1〕	〔3.3〕	〔0.9〕	〔12.3〕	基部のみ残存、欠損後再調整	74	60
371	石錐	11J　Ⅱ層		頁岩	北上山地	4.3	1.2	0.9	4.7	完形、棒状、アスファルト？付着	74	60
372	石匙	14L　Ⅲa層	B1	頁岩	北上山地	3.0	4.6	0.8	7.9	完形、刃部の形態は直刃	74	60
373	石匙	9J　Ⅱ層直上	B1	頁岩	北上山地	3.0	〔5.4〕	1.0	〔8.4〕	欠損、刃部の形態は直刃	74	60
374	箆状石器	10K　Ⅱ層下位～Ⅲa層上位		頁岩	北上山地	6.6	4.2	0.8	30.1	完形、片面調整	74	60
375	不定形石器	5G　Ⅱ層	A1	チャート	北上山地	〔8.3〕	10.3	1.6	〔156.8〕	一部欠損、両面調整	74	60
376	不定形石器	9J　Ⅱ層直上	A1	頁岩	北上山地	〔6.9〕	〔3.0〕	〔2.2〕	〔37.0〕	欠損、片面調整	74	60
377	不定形石器	10I　Ⅰ層	A1	頁岩	北上山地	〔4.3〕	〔2.6〕	〔1.0〕	〔13.9〕	欠損、片面調整	74	60
378	不定形石器	10I　Ⅰ層	D	頁岩	北上山地	〔3.1〕	〔2.0〕	〔1.5〕	〔7.8〕		－	60
379	剥片	11J　Ⅱ層		頁岩	北上山地	1.4	1.8	0.5	0.8	調整剥片	－	60
380	石核	6G　Ⅱ層		頁岩	北上山地	4.0	4.4	2.5	54.3		74	60
381	磨製石斧未成品？	19L　Ⅵ層上位		玢岩	北上山地	11.8	6.1	2.2	266.0	完形	75	60
382	磨製石斧	8H　Ⅲc層上位		斑レイ岩	北上山地	11.3	6.3	3.4	380.3		75	60
383	磨製石斧	7H　Ⅱ層		玢岩	北上山地	9.9	4.3	2.3	140.8	完形、定角式	75	60
384	磨製石斧	9I　Ⅱ層		超塩基性岩？	北上山地	〔6.8〕	3.2	1.2	〔40.5〕	ほぼ完形、定角式	75	61
385	磨製石斧	9J　Ⅱ層直上		（細粒）閃緑岩	北上山地	〔6.4〕	〔3.7〕	〔2.2〕	〔80.4〕	刃部欠損、定角式	75	61

掲載番号	器種	出土地点	分類	石質	産地	長cm	幅cm	厚cm	重g	備考	図版	写真
386	半円状扁平打製石器？	12L　Ⅱ層上位		チャート	北上山地	15.7	8.9	1.8	373.7	完形	75	61
387	打製石斧？	10J　Ⅲc層～Ⅳ層		ホルンフェルス	北上山地	〔10.4〕	〔9.1〕	〔1.8〕	〔196.8〕	片面調整	75	61
388	磨石・敲石類	18M　Ⅵ層	A1	花崗閃緑岩	北上山地	11.8	9.4	5.4	931.1	平坦面使用	76	61
389	磨石・敲石類	17M　Ⅵ層上位	C	砂岩	北上山地	5.4	2.2	1.4	23.6	完形	76	61
390	磨石・敲石類	11L　Ⅲc層下位	F	砂岩	北上山地	〔11.1〕	7.6	〔5.1〕	〔585.9〕	表裏にも磨面あり	76	61
391	磨石・敲石類	12J　Ⅲc層上位	A2	砂岩	北上山地	5.5	4.4	3.6	119.7	両端部に磨面（4面）	76	61
392	磨石・敲石類	17K　Ⅲc層	F	石英斑岩	北上山地？	〔6.6〕	〔7.2〕	〔6.8〕	〔333.7〕	欠損	76	61
393	磨石・敲石類	15K　Ⅲb層	F	石英安山岩	北上山地？	〔7.8〕	〔6.4〕	〔5.6〕	〔251.7〕	一部のみ残存	76	61
394	磨石・敲石類	5F　Ⅱ層	A1	花崗閃緑岩	北上山地	7.6	6.2	4.1	292.9	平坦面使用	76	61
395	磨石・敲石類	5F　Ⅱ層	D2	マンガン鉱？	大野村周辺	7.3	7.3	6.3	569.6	部分使用	76	61
396	磨石・敲石類	6F　Ⅱ層	A2	花崗閃緑岩	北上山地	7.6	7.4	4.9	〔392.5〕	一部欠損、部分使用、使用顕著	76	62
397	磨石・敲石類	8I　Ⅱ層	A2	砂岩	北上山地	6.9	5.3	4.0	185.4	部分使用	76	62
398	磨石・敲石類	9H　Ⅱ層	D1	玢岩	北上山地	6.9	6.8	〔4.8〕	〔321.7〕	裏面の大部分欠損、部分使用	77	62
399	磨石・敲石類	11J　Ⅱ層	D1	マンガン鉱？	大野村周辺	〔6.8〕	〔6.5〕	4.4	〔318.7〕	一部破損　敲打痕（3箇所）	77	62
400	磨石・敲石類	15K　Ⅰ～Ⅱ層	C	砂岩	北上山地	8.9	3.0	2.9	107.1	完形	77	62
401	磨石・敲石類	不明　表採	B2	砂岩	北上山地	7.7	6.0	2.5	139.4		77	62
402	磨石・敲石類	表採	A3	チャート	北上山地	6.9	3.8	2.9	123.5	部分使用	77	62
403	石皿	13J　Ⅱ層		砂岩	北上山地	31.8	13.3	12.1	6000.0		77	62
404	砥石	18M　Ⅱ層上位		砂岩・頁岩互層	北上山地	12.1	4.1	〔1.9〕	〔199.5〕	使用面は1面	77	62

〔　〕は残存値

第7表　遺物観察表(土製品)

掲載番号	種　類	出土地点	部位	備　考	図版	写真
122	ミニチュア	3号住　覆土	口～胴	異方向羽状縄文（RL、0段多条） 頸：刻目帯（上下に沈線）　口端：刻目帯（下部に沈線） 内面調整：ミガキ（光沢）　胎土：砂粒多量、金雲母含む	51	41
123	土偶	3号住　覆土中～上位		頭部・両腕・左つま先欠損	51	41
124	スタンプ形土製品	3号住 覆土下位	完形	貫通孔	51	41
133	ミニチュア	5号住 Q2覆土	胴～底	ナデ　無文	51	41
144	ミニチュア	9号住　床直	完形	無文	53	42
243	ミニチュア	6F・7F　3層	胴～底	縄文（RL）	62	51
405	ミニチュア	6H　Ⅱ層	胴～底	縄文（RL）	78	62
406	土偶	粗掘	脚部		78	62
407	スタンプ形土製品	9J　Ⅱ層	略完形	貫通孔	78	62
408	円盤状土製品	9I　Ⅰ層	完形	アスファルト状物質付着	78	62

第8表　遺物観察表(石製品)

掲載番号	種　類	出土地点	石質	産地	長cm	幅cm	厚cm	重g	備　考	図版	写真
147	軽石製品	12号住　床直	軽石	奥羽山脈	8.3	4.8	1.5	〔27.3〕	一部欠損、斧状 全面研磨されている	53	43
409	軽石製品	8H　Ⅱ層	軽石	奥羽山脈	〔5.1〕	4.8	1.9	〔10.6〕	上部欠損、板状、穿孔あり	78	62
410	円盤状石器	調査区外　表採	凝灰岩	北上山地	5.9	5.8	1.1	56.2		78	62

第9表　遺物観察表(銭貨)

掲載番号	種　類	出土地点	材質	特　徴	図版	写真
204	判読不能	128号柱穴　覆土	銅		58	46
411	寛永通宝	21M　粗掘	銅	新寛永	78	62

Ⅵ. まとめ

今回の発掘調査の成果を項目毎に述べてまとめとしたい。

1．遺構

検出された遺構は、竪穴住居跡（以下住居跡と記す）13棟、住居状遺構４棟、土坑36基（内フラスコ状土坑４基、墓壙１基）、焼土遺構９基、柱穴状土坑158基、埋設土器遺構１基等である。遺構については住居跡を中心に若干まとめることとする。

竪穴住居跡

＜構築された時期＞

検出された住居跡の時期は出土遺物と重複関係から次のように推定される。１号住居跡ａ：縄文時代後期中葉～後葉（Ⅳ群３・４類）、１号住居跡ｂ：縄文時代後期中葉（Ⅳ群３類）、２号住居跡：弥生時代後期（Ⅴ群）、３号住居跡：後期中葉（Ⅳ群３類）、５号住居跡：後期前葉（Ⅳ群１類）、９号住居跡：後期前葉（Ⅳ群１類）、12号住居跡：後期中葉（Ⅳ群３類）、13号住居跡ａ：後期中葉（Ⅳ群３類）、13号住居跡ｂ・ｃ：後期前葉～中葉（Ⅳ群２類）、17号住居跡：後期後葉（Ⅳ群４類）、18号住居跡：後期前葉（Ⅳ群１類）、19号住居跡：前期中葉以前である。後期、特に後期中葉の住居跡が圧倒的に多く、本遺跡の中心となっている。

＜立地＞

竪穴住居跡は調査区中央部から北側にかけての比較的平坦な部分に位置する。縄文時代後期前葉の住居跡は調査区北側、標高233.0m～231.5mに集中している。後期中葉の住居跡は南東側のやや低い位置に存在しており、標高は232.0m～231.0mである。後期後葉の住居跡は前葉とほぼ同じ標高の233.0m～232.0mである。弥生時代の住居跡は縄文時代後期中葉の住居跡とほぼ同じ位置で構築されている。その中にあって前期中葉以前の住居跡だけが１棟離れて調査区南側の15Ｋ・16Ｌグリッドで検出された。遺物の項で記述するが、縄文時代早期（Ⅰ群）や前期（Ⅱ群）の土器も調査区南側に集中していることから前期以前の集落は後期の集落よりも若干南側にあったと思われる。

＜平面形と規模＞

炉を持つ住居跡10棟のうち全体の様相が窺えるものは７棟で、平面形はすべて円形もしくは楕円形である。規模は長軸径が６m以上の大形の住居跡は２棟、長軸径が４～６m未満の中形のものが４棟、４m未満の小形のものが１棟である。中形の４棟のうち２棟には壁柱穴がほぼ全周に確認された。

＜壁・覆土＞

ほとんどの住居跡で壁が確認され、半数以上の住居跡で壁高が20cmを超えている。特に３号住居跡の残りは良好で最大40cmである。覆土の確認できる縄文時代後期の住居跡８棟及び弥生時代の住居跡１棟のうち、１号住居跡ａ、２号住居跡、９号住居跡の覆土はⅡ層起源の黒色土主体で構成され、３号住居跡、５号住居跡、12号住居跡はやや彩度の高い黒褐色土で構成される。

調査区南側に位置する19号住居跡は住居跡としての認定が遅れてしまったために覆土等の記録を欠如している。記録はないものの、調査区をほぼ縦断していたTo-Cuの水成堆積層及び一次堆積層除去後に検出されたのは確かであり、住居跡のなかでは唯一To-Cuより下位に位置付けられる遺構であることは間違いない。住居跡の覆土については地点や時期による違いは観察されなかった。

＜床面＞

住居構築時の掘り込みは１号住居跡、３号住居跡ではⅣ層（To-Nb含む黒褐色土）、２号住居跡、９号住居跡、12号住居跡ではⅡ層（黒色土）、５号住居跡ではⅢａ層まで行われていた。どの住居跡でも貼り床は確認されなかった。

＜炉＞

炉は地床炉が７棟、石囲炉３棟である。残りの３棟は炉を確認できず、壁柱穴のみであった。９号住居跡の石囲炉は扁平で細長い亜角礫や円礫を素材にして南西側一部を除いて円形に配置し、礫を配置しなかった位置と対向する北東側には長さ25cm前後の棒状礫を立位（以下立石と表記）で配置するというものであった。立石の両脇には扁平な礫を配置していた。立石は他の炉を構成する礫との違いは見られなかった。しかし、炉を真上から観察すると、ただランダムに礫を配置したのではなく、立石と礫を配置していない部分を結ぶ線を軸に左右対称に配置していることが理解できる。今回の発掘調査で検出された他の石囲炉とは一線を画しており、何らかの意図が付随するものと思われる。

＜柱穴・土坑＞

柱穴や住居跡に伴うと思われる土坑の検出数や配置は各住居跡によって様々で規則性は見出せなかった。精査の結果主柱穴の配置が推測できる遺構もあるので挙げておきたい。ただし、野外調査の時点で確認されたものではなく、室内整理にはいってから検討の結果であることをお断りしておく。主柱穴が規則的に配置されると考えられる住居跡は１号住居跡ａ、ｂと13号住居跡ａ、ｃであり、前者の２棟は三角形に、後者の２棟は四角形に配置されると思われる。

17号住居跡のPP47の底面からは灰白色の粘土が出土した。土坑の規模は長径が64cm、短径が55cm、深さが26cmである。粘土を一時的に貯蔵するための土坑と思われる。この粘土が当遺跡で出土している土器と同じ粘土なのかは分析を行ってみないと判断は下せないが、同質のものであるとするならば、どこから採掘してきたのか等の課題が残る。

＜出入り口施設＞

出入り口と思われる施設が３号住居跡、13号住居跡ａ、13号住居跡ｂ、13号住居跡ｃで確認された。４棟とも壁際に小柱穴（いわゆる壁柱穴：以下壁柱穴と表記）がほぼ全周に巡る住居跡であるが、３号住居跡はその壁柱穴と比べると若干規模の大きい柱穴が２対検出された。13号住居跡ａ、13号住居跡ｂ、13号住居跡ｃでは壁柱穴と比べると明らかに規模が大きい柱穴が１対ずつ検出された。出入り口と想定される柱穴の間隔は３号住居跡が柱穴の中心同士で約50cm、13号住居跡ｂが柱穴の中心同士で約70cmである。人ひとりが何とか出入りできる間隔である。13号住居跡ａと13号住居跡ｃの柱穴の間隔はともに約100cmである。この２棟は３号住居跡や13号住居跡ｂと比較するとかなり余裕のある間隔である。

出入り口の向きは後期中葉の住居跡２棟（３号住居跡、13号住居跡ａ）と後期前葉から中葉の住居跡１棟（13号住居跡ｂ）が南西、もう一方の後期前葉から中葉の住居跡１棟（13号住居跡ｃ）がほぼ南を向いている。住居跡同士の重複関係から判断すると、後期前葉から中葉にかけての初めのうちは南側を向いていた出入り口施設は時期が新しくなるにつれて南西側に向きが変わっていったようである。なお、この３号住居跡と13号住居跡ａは同じ時期の住居跡であるが非常に隣接しているため同時に存在していた可能性は非常に低いと思われる。

＜その他の付属施設等＞

後期後葉に位置付けられる17号住居跡から砂塊が検出された。位置は住居跡の北東隅の壁付近で、床面から約10cm高い位置で検出された。規模等は43ページの文章や44、45ページの第23図、第24図を参照して頂きたい。この砂塊の用途等詳細は不明である。今回は出土事実の提示だけにとどめ、詳細な分析は今後の出土例数の増加をまって検討したい。

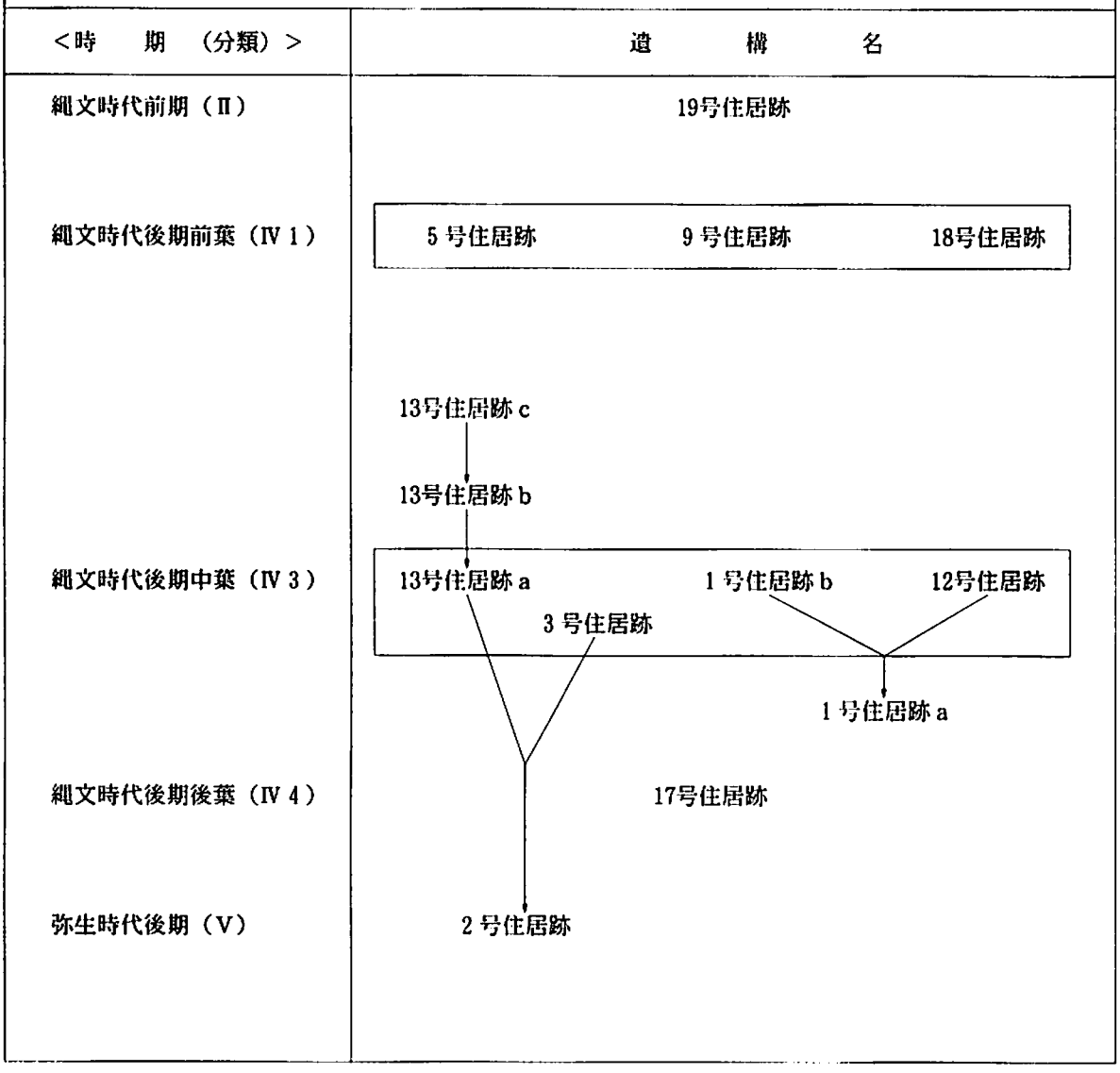
下記に上水沢Ⅱ遺跡で検出された住居跡の新旧関係を図にしたので参考にして頂きたい。

＜上水沢Ⅱ遺跡住居跡変遷図＞

＊□がほぼ同時期を表わす

＊縦のラインが新旧を表わす。

＊実線は遺構間の新旧関係を表わす



住居状遺構

調査区の中央に３棟、北側に１棟検出された。形状が判別できるものは２棟だけで、楕円形と不整形である。規模は5.0×3.7mと6.8×6.0mである。構築された時期については遺物が伴う遺構が少ないため、断定はできないが、４号住居状遺構、６号住居状遺構は後期に属すと思われる。14号住居状遺構は検出面から判断して前期以前、16号住居状遺構は９号住居跡との重複関係から後期前葉以降に位置付けられる。

16号住居状遺構は炉が確認できなかったために住居状遺構として登録したが、９号住居跡の覆土内とした部分でしっかりとした焼土層が形成されている焼土遺構が検出されており、この焼土遺構を地床炉とする住居跡であった可能性が高いと思われる。

土坑

南側を中心に36基検出された。このうち４基がフラスコ状土坑で、１基が墓壙である。フラスコ状土坑の規模は大きいもので径約1.4m、小さいもので径約1.2mである。フラスコ状土坑の帰属する時代は縄文時代であるがうち２基は覆土に１次堆積のTo-Cu層が確認されることから前期中葉以前に位置付けられる。残りの２基は判別するだけの資料が足らず不明とした。墓壙の平面形はひょうたん形で礫と伴にイノシシと思われる獣骨（頭骨一個分の小破片数点、左右下顎犬歯各１点、左第三後臼歯１点、後臼歯破片１点）が出土した。規模は土坑類最大で約２×1.5mである。時期は近世以降とされる。その他の土坑の平面形は円形もしくは楕円形である。規模は大きいもので開口部径約1.8m・深さ約0.4m、小さいもので開口部径約0.4m・深さ0.2mである。時期は出土する遺物が少なく、現段階で確定できるものは少ないが、縄文時代に属すると思われる。

焼土遺構

焼土遺構は調査区北側の４～５Ｈグリッドで３基、調査区中央部の12Ｌグリッドで２基、調査区南側の17Ｌ～20Ｍグリッドで４基の計９基検出した。平面形は不整形のものが多く、規模は最大で約1.2×0.6m、最小で約0.3×0.2mである。遺物は伴わなかった。

柱穴状土坑

柱穴状土坑は調査区北側の３Ｂ～６Ｉグリッドでは検出されなかったが、その他の部分で計158基が検出された。その内訳は次のとおりである。

Ⅱ層：６基、Ⅲａ層：54基、Ⅲｃ層：29基、Ⅳ層：45基、Ⅴ層：８基、Ⅵ層：15基、Ⅶ層１基。

調査区の北側、主に７Ｈ～９ＩにかけてはⅢａ層で検出された柱穴が多く、調査区の南側、16Ｋ～17ＬにかけてはⅢｃ層で、17Ｌから18ＭにかけてはⅣ層で検出された柱穴が多いようである。ただし、調査区の南側では表土直下のⅡ層・Ⅲ層の堆積が少ないことことから、Ⅳ層面で検出される柱穴が多くなってしまうのであろう。なかにはトレンチの断面でTo-Nbより下位で掘り込まれているがことが観察された柱穴状土坑もあり、古い時期の柱穴状土坑が存在することも窺われる。調査区の南側では早期中葉の土器が比較的量になって出土しており、この時期の遺構が存在した可能性は高いと思われる。なお、今回調査で検出された柱穴状土坑は特に住居跡や掘立柱建物跡になるような柱穴は確認されなかった。柱穴状土坑から出土した遺物は縄文土器、石器、銅銭である。

2．遺物

出土した遺物は縄文土器、弥生土器、石器、土製品、石製品、金属製品、銭貨、陶磁器類、アスファルト塊、動物遺存体（獣骨）、植物遺存体（炭化種実）である。ここの遺物については第４章や遺物観察表を参照していただくとして、出土した遺物の概観を述べてまとめとしたい。

縄文土器・弥生土器

縄文土器と弥生土器は大コンテナで約13箱出土している。時期の内訳は縄文時代早期（白浜式・物見台式？・烏木沢式：貝殻沈線文系土器群）が小コンテナで約１箱分、前期（円筒下層式相当）が極少量（10点未満）、中期（最花式）が１個体分、後期（十腰内式相当）が大部分（９割以上）を占め、弥生時代後期（天王山式・湯舟沢式・和井内東式・踏瀬大山式併行）が少量出土している。

縄文土器・弥生土器の概観を分類毎に述べたいと思う。なお、最後に土器の集成図（第79図～第81図）を付しているので参考にして頂きたい。

Ⅰ群とした早期の土器群はTo-Nb層であるⅤ層を挟んでⅣ層からⅥ層の間で出土している土器片が多い。白浜式の典型的な特徴である口縁部に数段にわたって施文される爪形の刺突文を有する土器片はTo-Nb層より下層のⅥ層より出土している。本類で一番出土点数の多かった貝殻条痕文の土器はTo-Nb層より上位のⅣ層からの出土が目立つ。また、物見台式と考えている乳房状を呈する底部片や烏木沢式に比定されると考えている土器片もⅣ層からの出土である。出土地点は調査区南側の18M～21Mに集中している。この他には３号住居跡の床面、覆土およびその周辺のⅣ層からの出土である。

Ⅱ群とした前期の土器おそらく円筒下層式に比定されると思われる土器群はⅢｃ層からの出土が中心である。出土地点は調査区中央部（３号住居跡周辺）の11Ｌグリッドやや南に位置する16Ｌグリッドで出土している。また、中間地点にあたる13Ｊや13Ｌグリッドでも当類の土器とおもわれるものがⅡ層から出土している。

Ⅲ群とした中期の土器は中期末葉に位置付けられる最花式相当の土器１個体分だけ出土した。出土位置は調査区北側の５Ｈグリッドで、出土層位はⅡ層である。

当遺跡で圧倒的に出土量が多いのはⅣ群、つまり後期の土器である。Ⅳ群の土器はⅡ層とⅢ層の境目から上位特にⅡ層を中心に出土している。Ⅳ群の土器はⅣ群１類（後期前葉）から４類（後期後葉）までⅡ層中で上下関係なく出土している。

Ⅳ群の土器の出土量を圧倒的に多くしている要因のひとつに３号住居跡が埋没する過程で土器の廃棄が行われていたことが挙げられる。３号住居跡からは当遺跡の半数に近い約６箱の縄文土器が出土した。出土の状況と接合状況を第16図～第18図に掲載しているので参照して頂きたい。第17図の土器の垂直分布図を参照してもわかるとおり、出土の中心は覆土の中位から上位にかけてである。上位に比べると覆土下位及び床面からの出土量は少ない

床面出土の土器と覆土中位から上位の土器を比較するとどちらもⅣ群３類と分類した後期中葉の範囲内で収まる土器群であり、床面と覆土出土の土器に違いが見られなかった。このことからこの住居跡を廃絶した時期と土器の廃棄を行った時期は土器の型式が変化するほどの時間差が無かったということが窺える。

この他の遺構に伴うⅣ群の土器の出土地点はⅣ群１類（後期前葉）は５号住居跡、９号住居跡、18号住居跡及びその周辺である。Ⅳ群２類は北側の遺物包含層からの出土である。Ⅳ群３類は３号住居跡、１号住居跡、北側遺物包含層からの出土が多い。Ⅳ群４類の土器は17号住居跡や南側遺物包含層からの出土が多い。

Ｖ群の土器は弥生時代後期の天王山・湯舟沢期の土器や和井内東式の土器、踏瀬大山式の土器に併行する土器群である。出土地点は２号住居跡と南側遺物包含層に集中して出土している。

１号埋設土器

この土器の大きな特徴は頸部全周にみられる貫通孔である。この貫通孔は土器の焼成前、縄文施文後に外面から内面のやや下方に向かって行われている。貫通孔内面は平坦化され、ミガキ調整が行われる。外面はもりあがりを指頭などによって平坦化するにとどまる。外面の文様は地文のみで、口縁から胴部下半にかけてはＲＬ縄文を横位方向に施文している。底部は内外面ともにミガキ調整が行われており、特に内面は丁寧に行われている。器形は胴部に最大径を持つ算盤球のような形の壷である。底部はやや丸みを帯びており、埋設するのに適した形をしている。

時期については、検出されたⅡ層（黒色土層）は縄文時代中期末葉から弥生時代後期まで幅広い時期の遺物が出土している層であるため、特定することが非常に難しい。状況証拠であるが、縄文時代中期末葉や弥生時代後期の遺物に比べて縄文時代後期の遺物が圧倒的に多く出土していることから縄文時代後期に属すると思われる。

当土器の用途を考える上で今のところ次の３点が挙げられる。①土器の内外面に２次焼成の痕跡や煤といった付着物は観察されない。②貫通孔には磨滅痕や圧痕は観察されない。③内面は全面きれいに磨き上げられている。以上から消極的ではあるが、液体を容れるための器と捉えておきたい。時期についても消極的ではあるが縄文時代後期としておきたい。今後、資料の増加をまって結論を下したいと思う。

石器

石器は総数で171点、重量にして約42.2kg分出土している。その内訳は石鏃６点（6.85ｇ）、尖頭器３点（25.18ｇ）、石錐１点（4.71ｇ）、石匙２点（16.27ｇ）、篦状石器１点（30.10ｇ）、不定形石器20点（409.61ｇ）、ＵＦ９点（63.10ｇ）、二次加工のない剥片20点（121.3ｇ）、砕片11点（82.24ｇ）、石核１点（54.31ｇ）、打製石斧２点（379.36ｇ）、磨製石斧６点（839.60ｇ）、磨製石斧未成品２点（480.94ｇ）、半円状扁平打製石器１点（373.68ｇ）、調整痕を有する礫２点（1231.40ｇ）、磨石・敲石類36点（12677.05ｇ）、石皿３点（7281.67ｇ）、台石１点（8400.00ｇ）、砥石１点（199.5ｇ）、円礫38点（3456.20ｇ）、棒状礫５点（6117.76ｇ）である。石器組成は石鏃、尖頭器、石匙といった定形的な剥片石器類が少なく、礫石器、特に磨石・敲石類の占める割合が高い。

石質は石鏃、尖頭器、石匙などの定形的な剥片石器では圧倒的に北上山地産の頁岩の占める割合が高い。磨石・敲石類をはじめとする礫石器では北上山地産の砂岩の割合が高く、次いでこれも北上山地産の花崗閃緑岩の割合が高い。この他に、出土点数は少ないがマンガン鉱製の石器が出土している。この石質は大野村という地域色を一番表わしていると思われる。マンガン鉱は大きさの割に重量があり、「磨る・敲く・潰す」といった用途に適していた石質と思われる。

土製品

掲載したものが全てである。土偶が２点、スタンプ形土製品が２点、円盤状土製品が１点、ミニチュア土器が５点出土している。出土地点は３号住居跡、５号住居跡、９号住居跡と遺構外からの出土である。

石製品

掲載したものが全てで、板状もしくは斧状の軽石製品が２点出土している。円盤状石器は調査区外での表採資料で参考資料として掲載した。斧状の軽石製品は12号住居跡から出土している。

銭貨

128号柱穴状土坑から銅銭が、粗掘り中に寛永通宝が１枚出土した。128号柱穴状土坑から出土した銅銭は磨滅が著しく、文字の判読不能であった。

アスファルト塊

３号住居跡からはブロック状のアスファルト塊が、13号住居からは無文の土器にアスファルトが容器一杯に詰まって出土した。化学分析に出しており、結果はⅦ章1項で詳細を述べているので参照して頂きたい。

動物遺存体（獣骨）

21号土坑から礫とともに獣骨が出土した。

植物遺存体（炭化種実）

３号住居跡からオニグルミと思われる炭化種実が出土した。

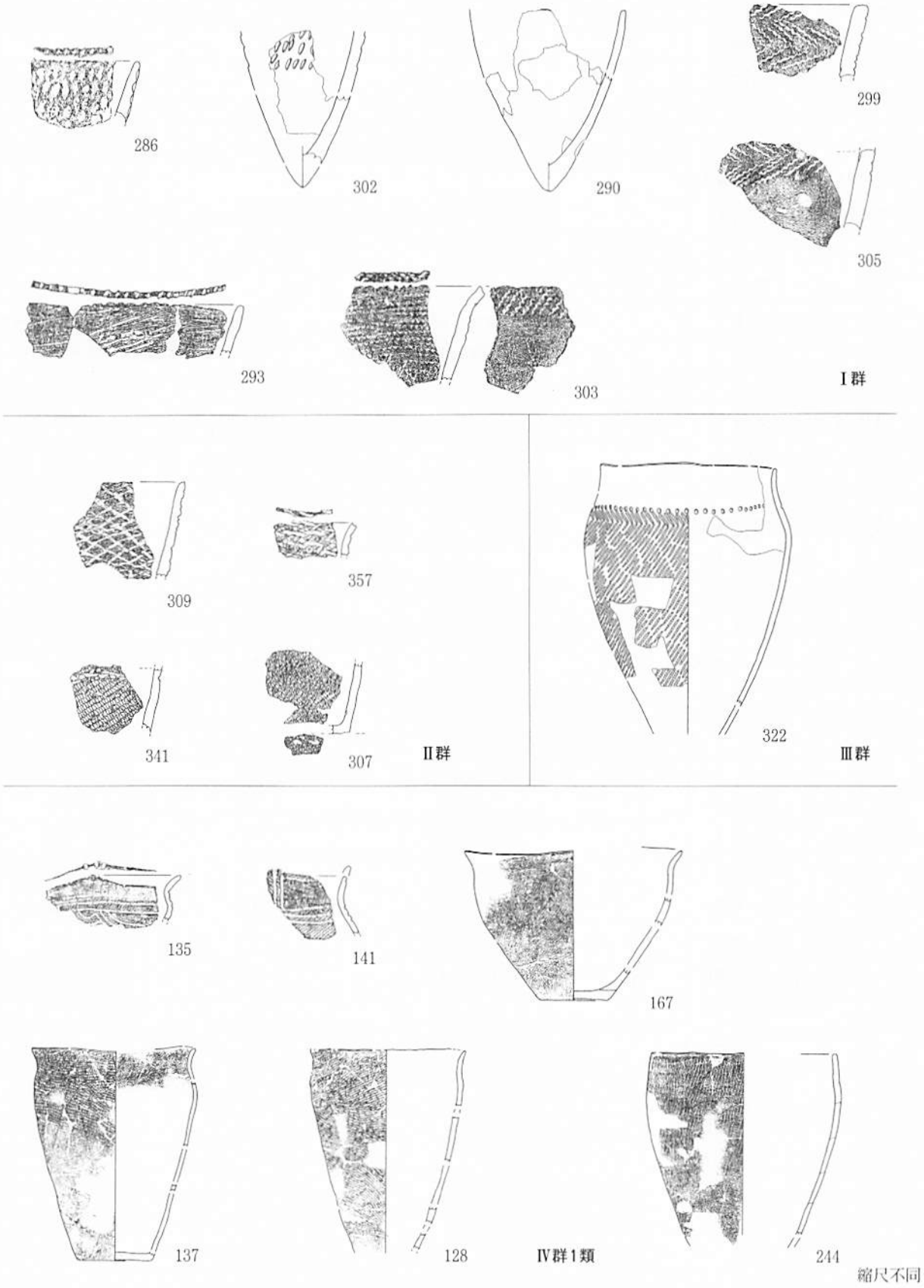
鉄製品・陶磁器類

釘などの鉄製品や磁器が出土しているが表土からの出土で、近代もしくは現代のものであるので掲載はしなかった。

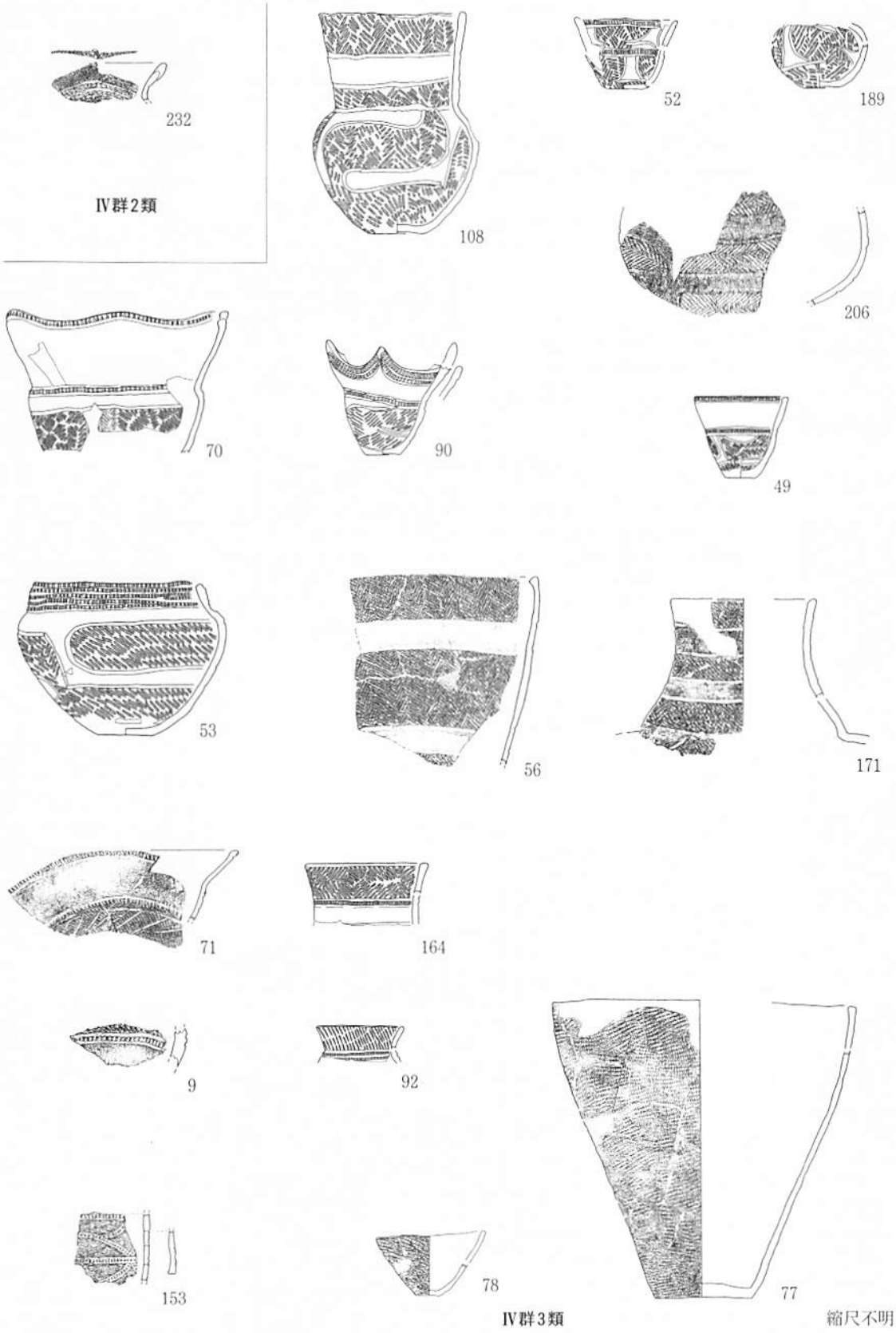
今回の発掘調査の結果、①当遺跡は縄文時代前期以前から弥生時代後期にわたる長い間断続的に集落が営まれており、その中心の時期は縄文時代後期であった。②縄文時代早期中葉の土器も出土しており、集落が営まれていない時期でも古くから利用されていた土地であったことが判明した。

縄文時代後期の集落については遺構・遺物の分布から、更に西側に広がるものと思われる。北・南両遺物包含層についても地形・調査区際の断面観察から、それぞれ西側と南西側に広がると思われる。今後当遺跡の南西側を調査する機会があれば、当該期の集落の様相が明らかになっていくことと思われる。

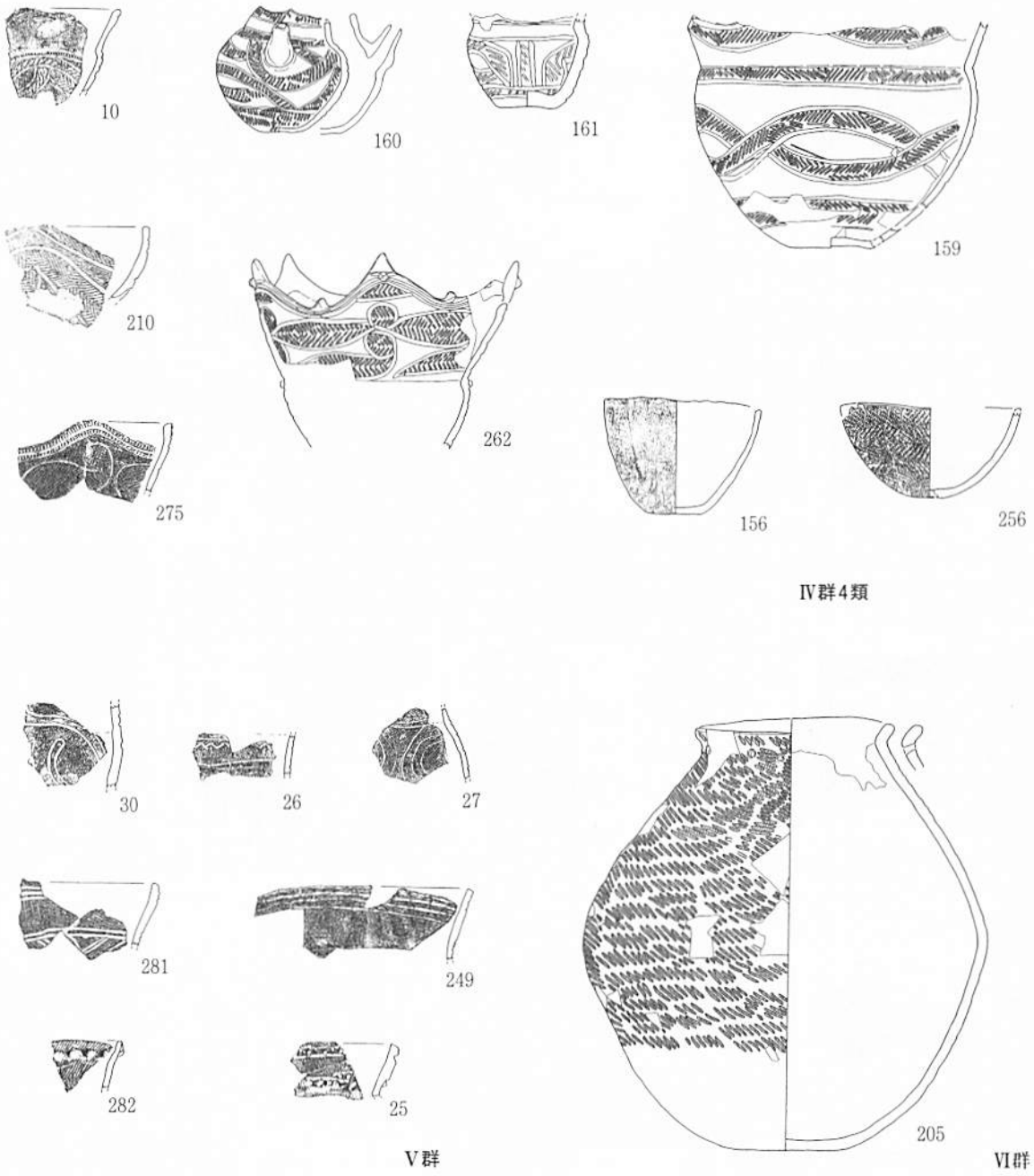
最後に、報告書を作成するにあたって、御指導・御助言・御協力いただいた方々並びに野外作業員・室内作業員の方々に厚く感謝申し上げる。


286
302
290
299
305
293
303
Ⅰ群
309
357
341
307
Ⅱ群
322
Ⅲ群
135
141
167
137
128
Ⅳ群1類
244
縮尺不同

第79図　土器集成図1


232
Ⅳ群2類
108
52
189
206
70
90
49
53
56
171
71
164
9
92
153
78
77
Ⅳ群3類
縮尺不明

第80図　土器集成図 2


10
160
161
159
210
262
275
156
256
Ⅳ群4類
30
26
27
281
249
282
25
Ⅴ群
205
Ⅵ群
縮尺不同

第81図　土器集成図 3

＜引用・参考文献＞

草間俊一　1963「種市町内諸遺跡の調査報告　後編」　種市町役場　1963『種市の歴史（原始～古代）』
岩手県農地林務部北上山系開発調査室　1972『北上山系開発地域　土地分類基本調査　陸中大野』
岩手県農地林務部北上山系開発調査室　1972『北上山系開発地域土地分類基本調査　陸中大野（別冊）』
岩手県農地林務部北上山系開発調査室　1972『北上山系開発地域　土地分類基本調査　久慈』
岩手県農地林務部北上山系開発調査室　1972『北上山系開発地域土地分類基本調査　久慈（別冊）』
岩手百科事典発行本部　1978『岩手百科事典』　岩手放送株式会社
㈶岩手県埋蔵文化財センター　1982『考古遺物資料第２集　岩手県久慈市・種市町・野田村』
㈶岩手県埋蔵文化財センター
　　1983『考古遺物資料第３集　岩手県種市町・野田村・大野村・山形村・普代村・田野畑村』
村上達夫・遠藤勝博・高橋義介
　　1983『君成田Ⅳ遺跡発掘調査報告書』㈶岩手県埋蔵文化財センター調査報告書第62集
栃沢満郎・小平忠孝　1983『小井田Ⅳ遺跡発掘調査報告書』㈶岩手県埋蔵文化財センター調査報告書第69集
佐々木清文ほか　1983『上野山遺跡発掘調査報告書』㈶岩手県埋蔵文化財センター調査報告書第67集
久慈市教育委員会　1985『大芦遺跡発掘調査報告書』久慈市埋蔵文化財報告書第５集
「角川日本地名大辞典」編纂委員会　1985『角川日本地名大辞典　３　岩手県』　角川書店
種市町立歴史民俗資料館　1985『種市町の文化財（１）種市町の土器・石器－縄文時代を中心として－』
一戸町教育委員会　1985『上野遺跡』一戸町文化財調査報告書第13集
岩手県教育委員会　1986『岩手県中世城館跡分布調査報告書』　岩手県文化財調査報告書第82集
松山力・大池昭二　1986『十和田火山噴出物と火山活動』
小笠原善範・藤田亮一他　1986『丹後谷地遺跡』八戸市埋蔵文化財調査報告書第15集　八戸市教育委員会
手塚　均他　1986『田柄貝塚Ⅰ』宮城県文化財調査報告書第111集　宮城県教育委員会
工藤利幸・中川重紀・田村壮一
　　1986『馬場野Ⅱ遺跡発掘調査報告書』㈶岩手県埋蔵文化財センター調査報告書第99集
通商産業省工業技術院地質調査研究所　1987『地域地質研究報告　陸中大野地域の地質』
玉川秀喜　1987『田中Ⅳ遺跡発掘調査報告書』㈶岩手県埋蔵文化財センター調査報告書第117集
田鎖壽夫他　1987『馬立Ⅰ・太田遺跡発掘調査報告書』㈶岩手県埋蔵文化財センター調査報告書第123集
鈴木　啓・日下部善巳・辻　秀人・藤原妃敏・馬場秀之他
　　1988『三貫地貝塚』福島県立博物館調査報告書第17集　福島県立博物館
久慈市教育委員会　1989『滝合遺跡』久慈市埋蔵文化財発掘調査報告書第９集
成田滋彦　1989「入江・十腰内式土器様式」『縄文土器大観４』小学館
佐々木嘉直　1989『源道遺跡発掘調査報告書』㈶岩手県埋蔵文化財センター調査報告書第138集
久慈市教育委員会　1990『久慈市内遺跡詳細分布調査報告書Ⅰ』　久慈市埋蔵文化財調査報告書第12集
高橋義介ほか　1990『明神遺跡発掘調査報告書』㈶岩手県埋蔵文化財センター調査報告書第150集
久慈市教育委員会　1991『久慈市内遺跡詳細分布調査報告書Ⅱ』　久慈市埋蔵文化財調査報告書第13集
久慈市教育委員会　1992『久慈市内遺跡詳細分布調査報告書Ⅲ』　久慈市埋蔵文化財調査報告書第14集
町田洋・新井房夫　1992『火山灰アトラス－日本列島とその周辺－』　東京大学出版会
濱田　宏ほか　1992『鼻館跡発掘調査報告書』㈶岩手県埋蔵文化財センター調査報告書第171集

久慈市教育委員会　1993『久慈市内遺跡詳細分布調査報告書Ⅳ』　久慈市埋蔵文化財調査報告書第15集
金子昭彦　1993『新山権現社遺跡発掘調査報告書』(財)岩手県埋蔵文化財センター調査報告書第188集
久慈市教育委員会　1994『久慈市内遺跡詳細分布調査報告書Ⅴ』　久慈市埋蔵文化財調査報告書第17集
久慈市教育委員会　1995『久慈市内遺跡詳細分布調査報告書Ⅵ』　久慈市埋蔵文化財調査報告書第19集
斎藤邦雄　1995『大日向Ⅱ遺跡発掘調査報告書第２～５次』(財)岩手県埋蔵文化財センター調査報告書第225集
久慈市教育委員会　1996『久慈市内遺跡詳細分布調査報告書Ⅶ』　久慈市埋蔵文化財調査報告書第20集
大川　清・鈴木公雄・工楽善通　1996『日本土器事典』雄山閣
千葉孝雄　1996『ゴッソー遺跡発掘調査報告書』(財)岩手県埋蔵文化財センター調査報告書第238集
久慈市教育委員会　1997『久慈市遺跡地図』　久慈市埋蔵文化財調査報告書第24集
大道篤史　1997『上甲子遺跡発掘調査報告書』(財)岩手県埋蔵文化財センター調査報告書第254集
菊池人見　1998『麦生Ⅲ・Ⅸ遺跡発掘調査報告書』(財)岩手県埋蔵文化財センター調査報告書第274集
高木　晃　1999『大芦Ⅰ遺跡発掘調査報告書』(財)岩手県埋蔵文化財センター調査報告書第306集
酒井宗孝ほか　2000『上野平遺跡掘調査報告書』(財)岩手県埋蔵文化財センター調査報告書第333集
鈴木克彦　2001『北日本の縄文後期土器編年の研究』雄山閣

Ⅶ. 分析・鑑定

1．大野村上水沢Ⅱ遺跡出土アスファルトの成分分析

株式会社 古環境研究所・小笠原正明（北海道大学高等教育機能開発総合センター）

(1) はじめに

縄文遺跡から出土する天然アスファルトは多様な炭化水素の混合物であるために、産地の同定は困難とされていた。1998年にパラフィン成分のマススペクトルのＺ数解析法が開発されてから、成分の定量的な分析が可能となった[1]。この手法により、縄文時代の原産地として秋田県二ツ井、新潟県新津の二ヶ所が確定され、そのアスファルトを区別することが可能となった。また、東北や新潟県の遺跡から発掘されたアスファルト数十点についても分析を行い、分類を行ってきた。ここでは上水沢Ⅱ遺跡出土のアスファルトについても、同様の手法を用いて分析を行った。

(2) 実　験

各試料から少量をとって元素分析を行った。別に約0.6gずつとり、ベンゼン-メタノール混合溶媒に溶解した。ろ過により不溶分を除いた後、溶液の溶媒部分を減圧蒸留で除き、n-ヘキサンに溶かした。ろ過により不溶分のアスファルテンを除き、減圧蒸留で溶媒を除き、残ったオイル分をHPLCによりパラフィン成分(Fr-P)、一芳香環成分（Fr-M)、二芳香環成分（Fr-D)、極性成分（Fr-PP）に分割した。このうちパラフィン成分について、FI-マススペクトルを得た。質量分析装置はJEOL-JMS-SX102Aを用いた。

(3) 結果と考察

元素分析の結果を表１に示した。Ｃ原子数に対するＨ原子数の比が１を超えているため、アスファルトであるとしても矛盾はない。

得られたマススペクトルを図１に示した。分子量400付近にピークがあるのはこれまで分析したアスファルトの特徴と一致する。

これを炭素環の数に対応するＺ数ごとに分割した。Ｚ数とは、パラフィン成分をC_nH_{2n+z}とした時のＺで、分子量とＭ＝14n+Ｚの関係にある。分割したスペクトルのうち、Ｚ＝－６（４環）に対するＺ＝－８（５環）の成分の比をとり、Ｒ値として表２に示した。産地については標準偏差も載せてある。また、各産地のＲ値との差を標準偏差で割った相対偏差も示した。絶対値が３を超えた場合、その産地のものではないとみなしている。ここでは、新潟県新津市に対して－2.300、秋田県二ツ井に対して1.809となっており、どちらの産地も可能性として考えられる。

この結果を過去の試料の分析結果と共に地図上に示したのが図２である。秋田県北部、岩手県北部には、上水沢Ⅱ遺跡も含め、どちらの産地ともみなせる試料が分布している。これをはさんで、北部は主に秋田県二ツ井と同系統の試料、南部は新潟県新津市と同系統の試料が分布している。したがってＲ値が中間程度を示す理由としては、アスファルトが混合して使用された可能性も考えられる。また、そもそも中間程度のＲ値を持つ産地が存在しているという可能性もある。

ただ、上水沢Ⅱ遺跡の試料については一点分析したのみであるため、今後数点の分析によりどちらかの産地のＲ値に寄る可能性もある。

謝　辞

この研究にご協力いただいた北海道大学機器分析センター、同農学部ＧＣ-ＭＳ＆ＮＭＲ室、同大学院工学研究科の宮尾晃氏に感謝します。

参考文献

1）我孫子昭二(1986)「アスファルト」『縄文文化の研究』８：205－222頁、雄山閣

2）小笠原正明(1999)「縄文時代の交易－アスファルトがたどった道」『化学』９月号：28－30頁

表1　元素分析の結果

試料名	C(%)	H(%)	N(%)	S(%)	H原子数／C原子数
上水沢Ⅱ	78.38	9.06	1.21	0.96	1.38

アスファルトならばC原子数に対するH原子数の比が1以上

表2　R値と産地の試料に対する相対偏差

県名	遺跡及び原産地名	R値	新潟県新津市試料に対する相対偏差	秋田県二ッ井試料に対する相対偏差
秋田	秋田県二ッ井駒形地区	0.632±0.036	−3.386	−
新潟	新潟県新津市大入地区	0.837±0.060	−	5.275
岩手	上水沢Ⅱ遺跡	0.698	−2.300	1.809

表中下線部は相対偏差3以上のものを示す。対応する産地のものではないとみなせる

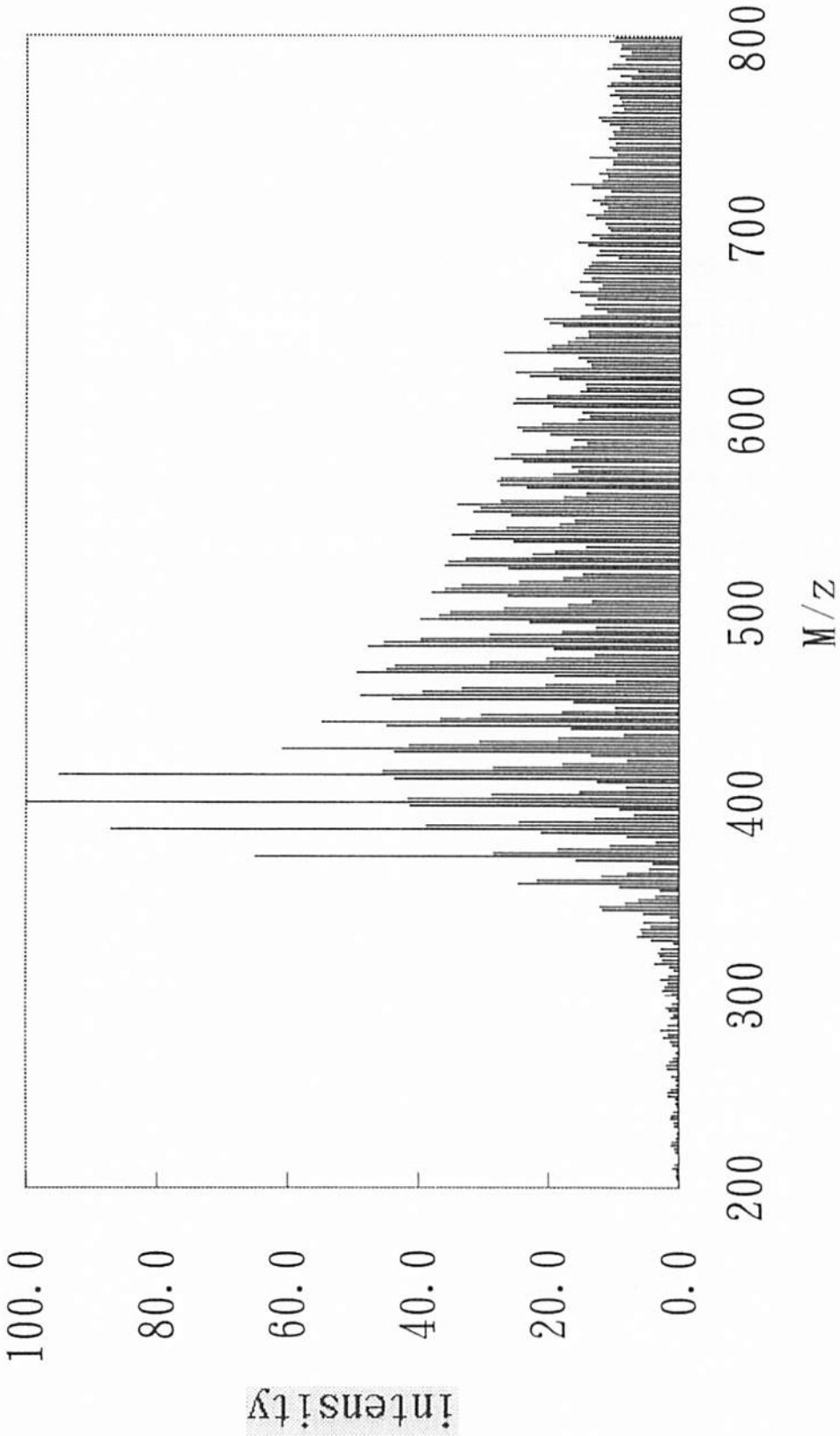


図１　上水沢Ⅱ遺跡の試料のパラフィン成分のマススペクトル

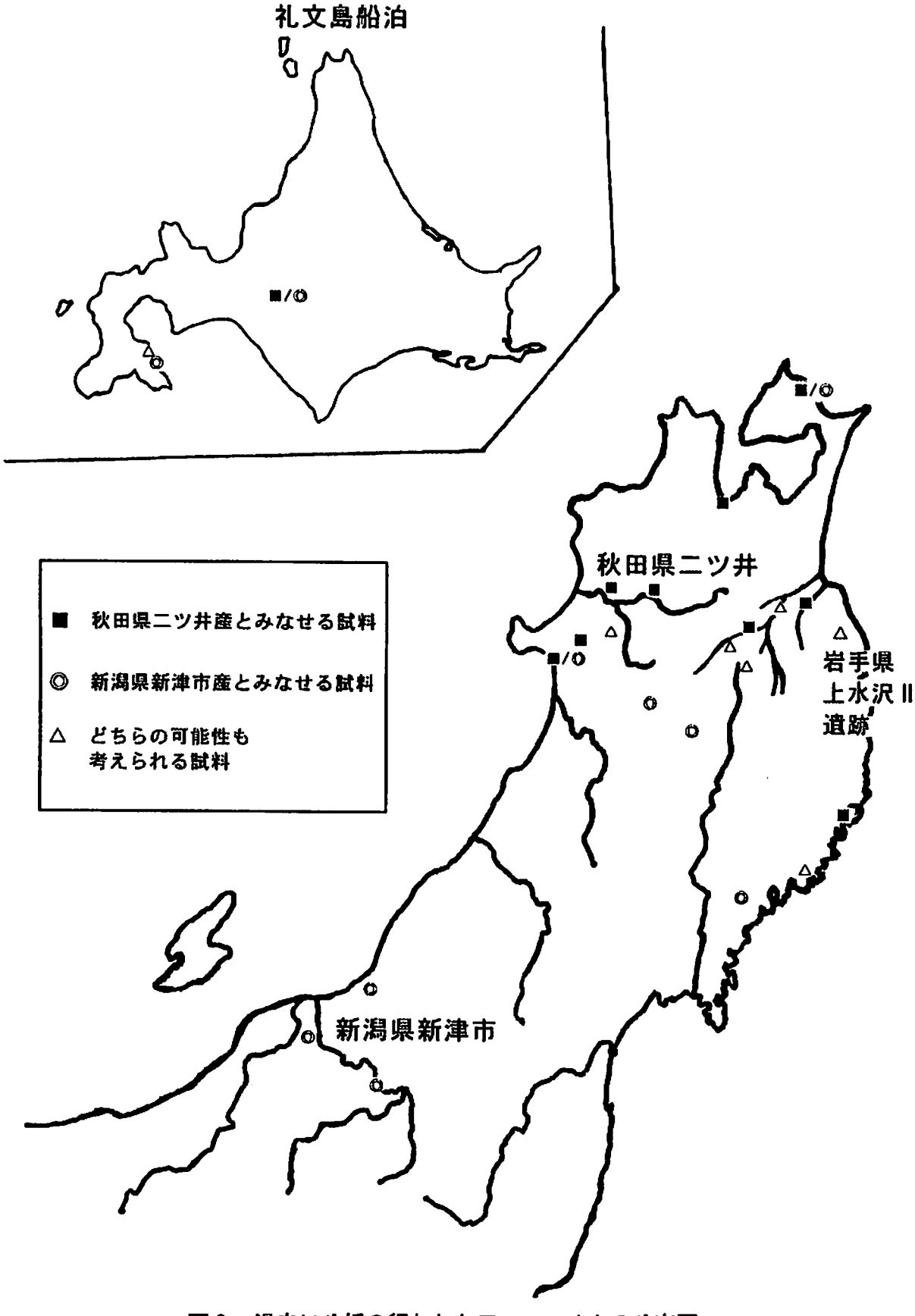


図2　過去に分析の行われたアスファルトの分布図

2．大野村上水沢Ⅱ遺跡出土炭化材の樹種

髙橋利彦（木工舎「ゆい」）

(1) 試　料

試料は縄文時代のものとされる3住居跡（1号・12号・17号）から検出された炭化材である。調査担当者により各遺構から1点（袋）が選び出されていたが、1号住居跡試料には後述のように明らかに別種の材が含まれており、これをa，bとしたため4点が同定対象となった。いずれも用途などの性格は明らかにされていない。

遺跡は高家川の支流の左岸（東側）の小尾根上（標高250m前後）に立地する。遺跡内から検出された土器は縄文時代後期を主体とするとされているが、個々の遺構の所属時期は明らかにされていない。

(2) 方　法

発掘担当者によって選び出されていた材片の中の大き目のもの1片を同定試料とした。1号住居跡試料は2片あったが別種であったためそれぞれを同定対象とした。試料の木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）3断面を作製し、実体顕微鏡と走査型電子顕微鏡（SEM，加速電圧10kV）で観察・同定した。併せて各分類群1点の電子顕微鏡写真図版を作成した（図版1，2）。SEM観察にあたっては㈱ニッテツ・ファイン・プロダクツ釜石試験分析センターのご協力をいただいた。記して感謝いたします。なお、ネガ・フィルムと残った炭化材は木工舎「ゆい」に保管されている。

(3) 結　果

試料は以下の4分類群（ここでは亜属・節・種の異なった階級の分類単位を総称している）に同定された。試料の主な解剖学的特徴や一般的な性質は次のようなものである。なお、科名・学名・和名およびその配列は「日本の野生動物　木本1・Ⅱ」（佐竹ほか　1989）にしたがい、県内での自然分布については「岩手県植物誌」（岩手植物の会　1970）を参照した。また、一般的性質については「木の事典　第2・4・7巻」（平井　1979，1980）も参考にした。

・マツ属複維管束亜属（*Pinus* subgen. *Diploxylon* sp.）マツ科　1号住－a

早材部から晩材部への移行は緩やかで、年輪界は明瞭。樹脂細胞はなく、樹脂道が認められる。放射組織は仮道管と柔細胞、エピセリウム細胞よりなり、仮道管内壁には顕著な鋸歯状の突出が認められる。分野壁孔は窓状。放射組織は単列、1－15細胞高のものと樹脂道をもつ紡錘状のものがある。

複維管束亜属（二葉松類）は県内に2種あるが、クロマツ（*Pinus thunbergii*）が沿岸部の一部に生育するほかは、アカマツ（*P. densiflora*）が広く分布する。アカマツは北海道南部から九州に自生し、また植栽される。材は重硬で、強度は大きく、保存性は中程度であるが耐水性に優れる。建築・土木・建具・器具・家具材など広い用途がある。

・コナラ属コナラ亜属コナラ節（*Quercus* subgen. *Quercus* sect. *Prinus* sp.）ブナ科　1号住－b

環孔材で孔圏部は1－3列、孔圏外で急激に管径を減じたのち漸減しながら火炎状に配列する。大道管は横断面では楕円形、小道管は横断面では多角形、ともに単独で配列する。道管は単穿孔をもち、壁孔は交互

状に配列、放射組織との間では柵状となる。放射組織は同性、単列、1－20細胞高のものと複合組織がある。柔組織は短接線状、周囲状。年輪界は明瞭。

コナラ節はコナラ亜属（落葉ナラ類）の中で果実（ドングリ）が開花の年に熟すグループで、カシワ（*Quercus dentata*）・ミズナラ（*Q. crispula*）・コナラ（*Q. serrata*）・ナラガシワ（*Q. aliena*）といくつかの変・品種がある。このうちコナラは樹高20mになる落葉高木で、古くから薪炭材として利用され、植栽されることも多かった。材は重硬で、加工は困難、器具・機械・樽材などの用途があり、薪炭材としてはクヌギに次ぐ優良材である。

・クリ（*Castanea crenata*）ブナ科　17号住

環孔材で孔圏部は多列、孔圏外で急激に管径を減じたのち漸減しながら火炎状に配列する。大道管は単独、横断面では楕円形、小道管は単独および2－3個が斜（放射）方向に複合、横断面では角張った楕円形～多角形。道管は単穿孔をもち、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1－15細胞高。柔組織は周囲状、短接線状。年輪界は明瞭。

クリは北海道南西部から九州の山野に自生し、また植栽される落葉高木である。材はやや重硬で、強度は大きく、耐朽性が高い。土木・建築・器具・家具・薪炭材・楷木などに用いられる。

・ヤマグワ（*Molus australis*）クワ科　12号住

環孔材で孔圏部は3－5列、晩材部に向かって管径を漸減させ、のち塊状に複合する。大道管は横断面では楕円形～円形、単独または2－3個が複合する。小道管は横断面では多角形で複合管孔をなす。道管は単穿孔をもち、壁孔は密に交互状に配列、小道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性、1－5細胞幅、1－40細胞高。柔組織は周囲状～翼状、散在状。年輪界は明瞭。

ヤマグワは北海道から九州・琉球の山野に自生し、また植栽される落葉高木で、多くの園芸品種があり養蚕に利用されている。材はやや重硬で強靭、加工はやや困難、耐朽性は高い。装飾材や器具・家具材などに用いられる。

以上の同定結果を一覧表で示す（表1）。

表1　上水沢Ⅱ遺跡出土炭化材の樹種

検出遺構	樹　　種
1号住－a	マツ属複維管束亜属
－b	コナラ属コナラ亜属コナラ節
12号住	ヤマグワ
17号住	クリ

(4) 考 察

試料の性格や所属時期は明らかではないが、周辺遺跡で、縄文時代後期前後とされる住居跡から検出された炭化材で、試料と共通の樹種が報告されている例としては以下のようなものがある。

青森県南郷村右エ門次郎窪遺跡の晩期とされる2住居跡の埋土中から検出された5点は、コナラ・クリ・ケヤキ・フサザクラ・ハクウンボク？とされている（嶋倉　1982a)。同村三合山遺跡の晩期とされる1号住居跡から検出された5試料は、オニグルミ？（2）・クリ（2）・ハクウンボク？とされている（嶋倉　1982b)。同じく田ノ上遺跡の中期～後期とされる2住居跡から検出された4試料は、クリ（2）・ケヤキ？・カエデとされている（嶋倉　1981)。また、同県八戸市韮窪遺跡の中期末～後期初とされる9住居跡の床面や覆土からはクリ・コナラ・カエデ類・サクラ類・ヤチダモ（いずれも複数）が報告され（嶋倉　1984)、同市丹後谷地遺跡の晩期とされる6住居跡から検出された16試料はクリ（7）・カバノキ属？（3）・トネリコ属（2）・ハンノキ属？（2）・サクラ属？・不明広葉樹とされている（三野　1986)。

引用文献

平井信二　1979, 1980「木の事典　第2・4・7巻」, かなえ書房.

岩手植物の会　1970「岩手県植物誌」, 703pp.

三野紀雄　1986　丹後谷地遺跡出土の炭化木材について,「八戸市埋蔵文化財調査報告書第15集　八戸新都市区域内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ　－丹後谷地遺跡－」, 八戸市教育委員会, 426-428.

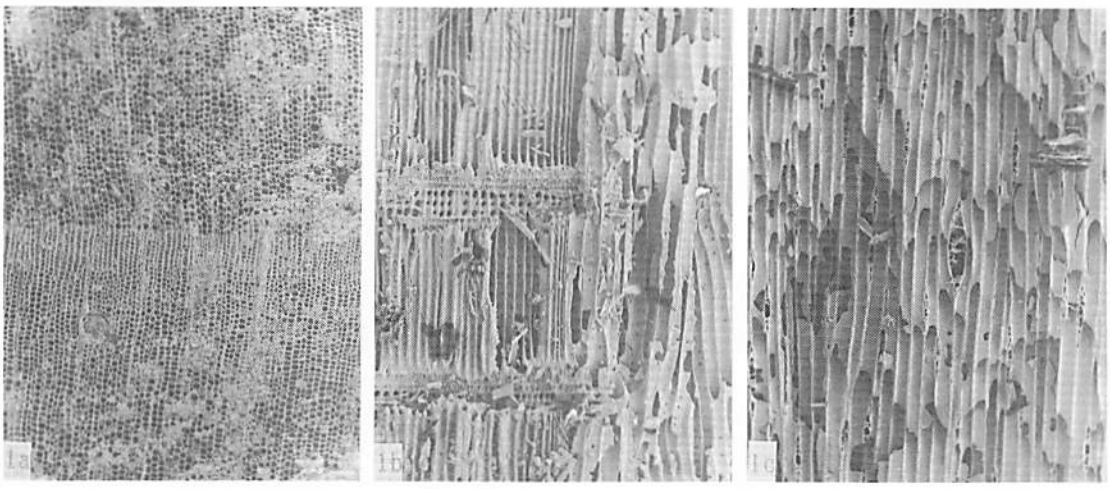
佐竹義輔・原　寛・亘理俊次・富成忠夫（編）　1989「日本の野生植物　木本Ⅰ・Ⅱ」, 平凡社, 321, 305pp

嶋倉巳三郎　1981　炭化材の樹種,「青森県埋蔵文化財調査報告書第65集　国営八戸平原開拓建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ　昭和55年度」, 青森県教育委員会, 116.

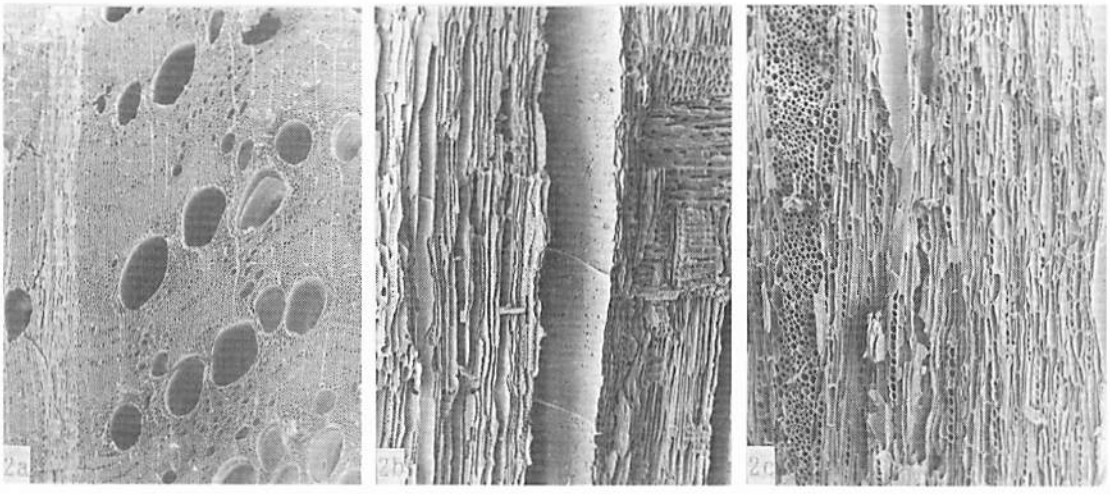
嶋倉巳三郎　1982a　右エ門次郎窪遺跡から出土した炭化材の樹種,「青森県埋蔵文化財調査報告書第69集　右エ門次郎窪遺跡・三合山遺跡・石ノ窪遺跡発掘調査報告書　－東北縦貫自動車道八戸線関係埋蔵文化財調査報告書Ⅰ－　昭和56年度」, 青森県教育委員会, 213.

嶋倉巳三郎　1982b　三合山遺跡から出土した炭化材の樹種,「青森県埋蔵文化財調査報告書第69集　右エ門次郎窪遺跡・三合山遺跡・石ノ窪遺跡発掘調査報告書　－東北縦貫自動車道八戸線関係埋蔵文化財調査報告書Ⅰ－　昭和56年度」, 青森県教育委員会, 318.

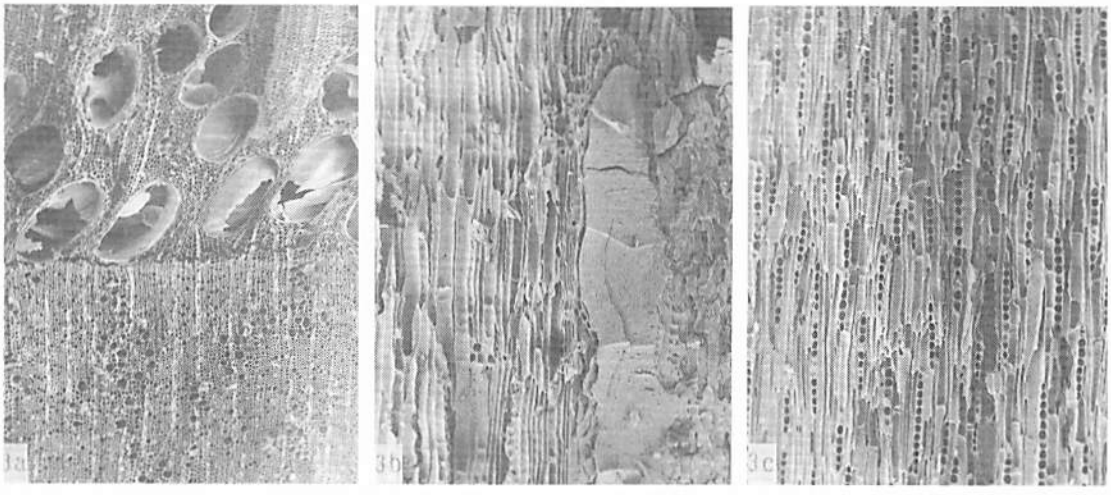
嶋倉巳三郎　1984　韮窪遺跡出土炭化材の樹種調査報告,「青森県埋蔵文化財調査報告書第84集　韮窪遺跡　－東北縦貫自動車道八戸線関係埋蔵文化財調査報告書Ⅶ－　昭和58年度」, 青森県教育委員会, 392-393.



マツ属複維管束亜属　1号住－a

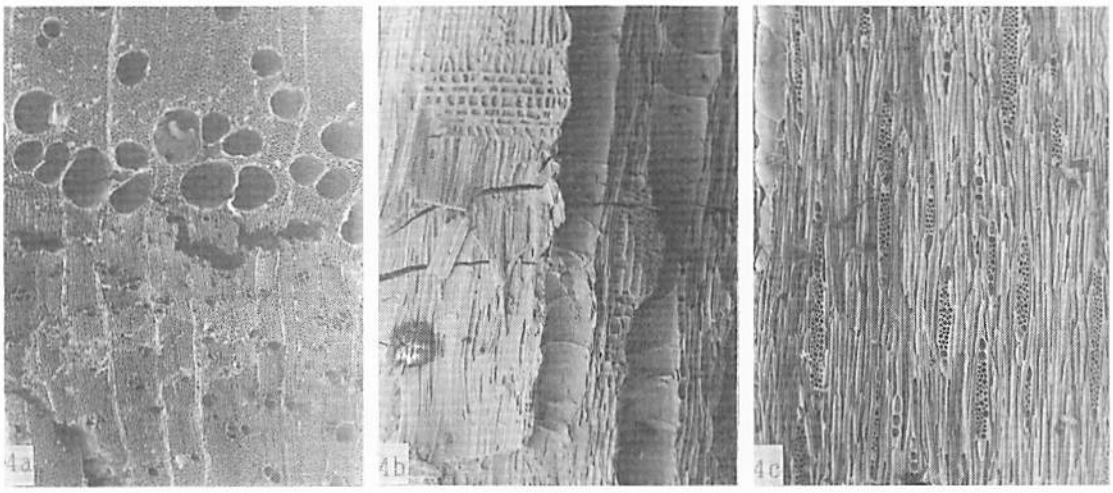


コナラ属コナラ亜属コナラ節　1号住－b



クリ　17号住

図版1



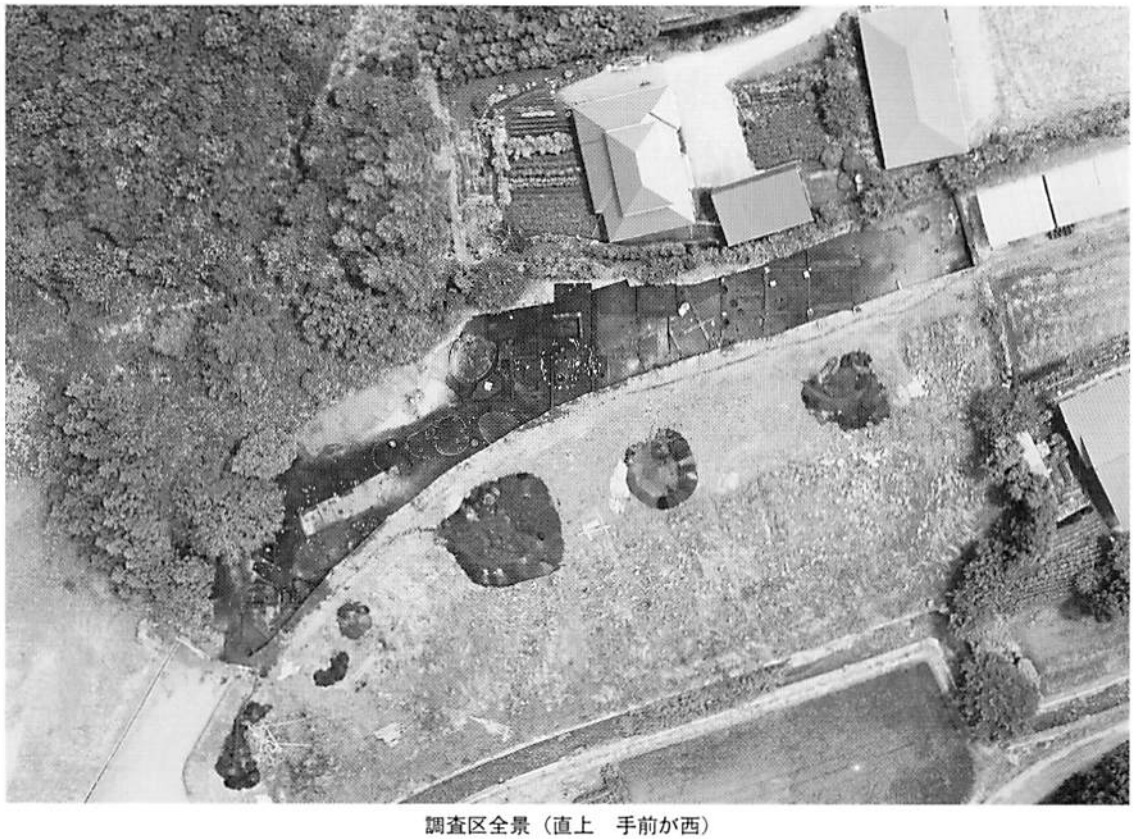
ヤマグワ　12号住

a:木口　×40　　b:柾目　×100　　c:板目　×100
樹木の肥大生長方向は木口では画面下から上へ、柾目では左から右。

図版 2

写　真　図　版

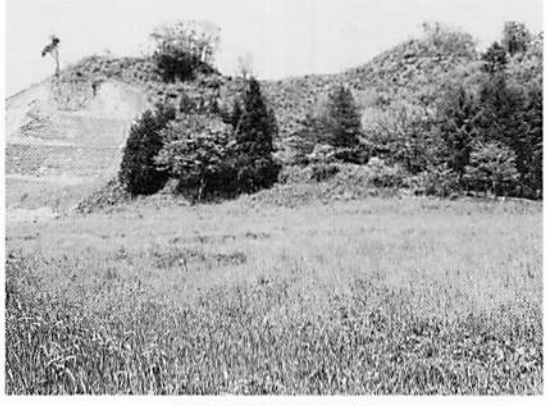
遺跡遠景（南から）



調査区全景（直上　手前が西）

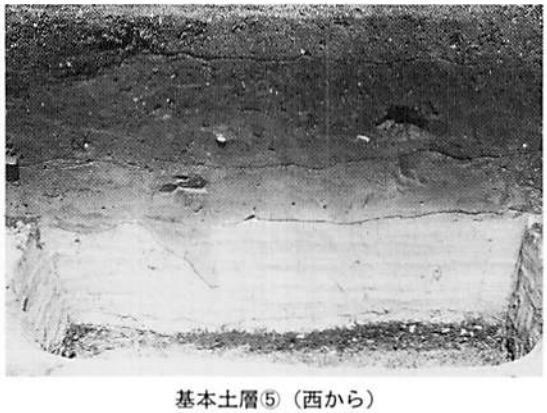
写真図版１　空撮

調査区現況（南から）



調査区現況（西から）

刈払い後（北から）



基本土層⑤（西から）

基本土層②（西から）

写真図版２　調査区現況・土層断面①

基本土層③（南から）

遺物包含層（5D・5E）断面（南から）

遺物包含層（21L・21M）断面（北から）

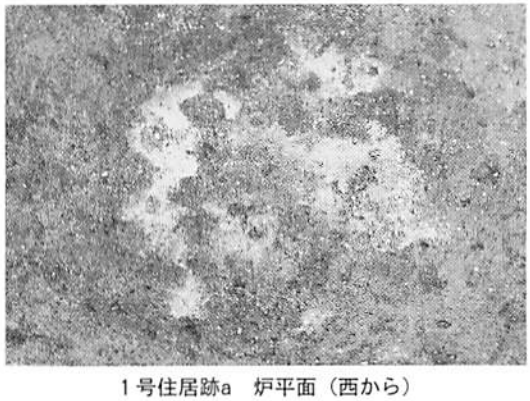
基本土層⑤（西から）

基本土層⑥（南から）

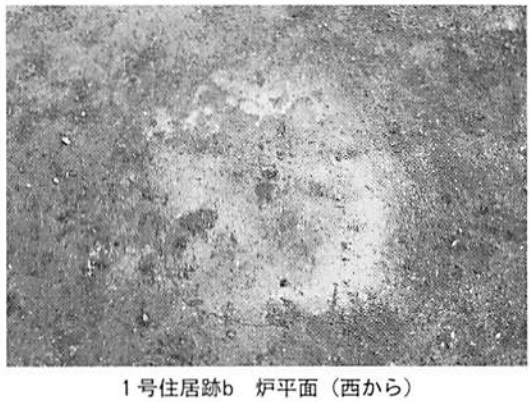
写真図版３　土層断面②

1号住居跡a・b平面（南から）

覆土断面（西から）

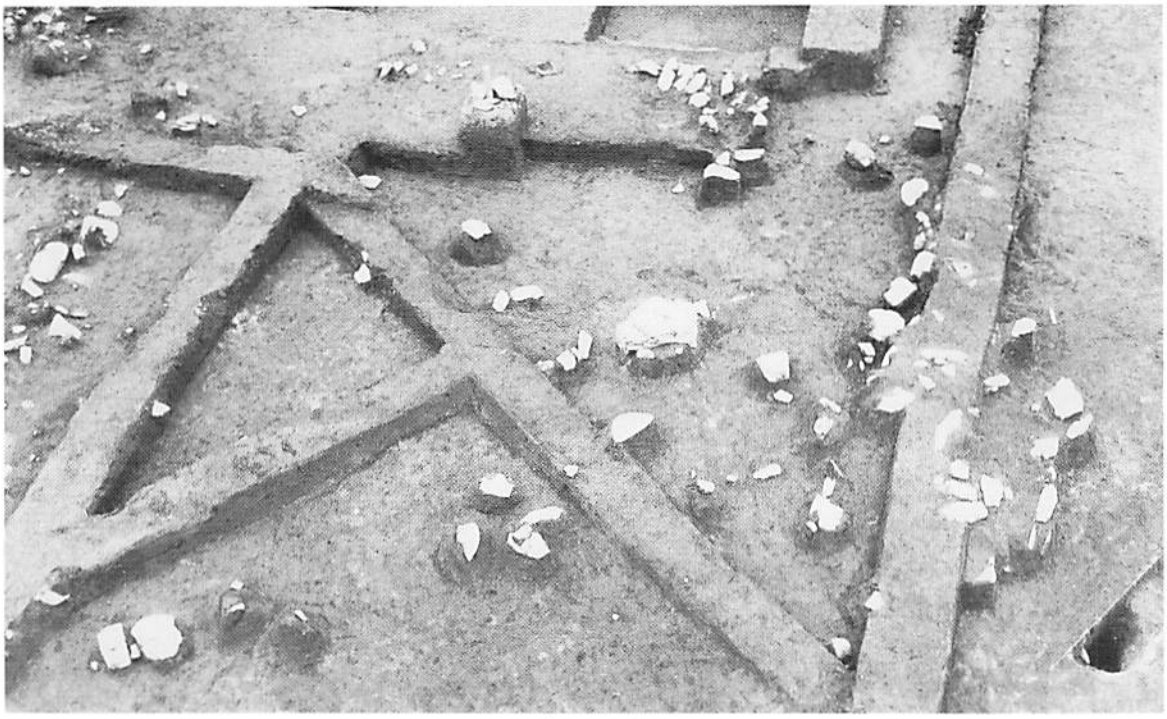


1号住居跡a　炉平面（西から）



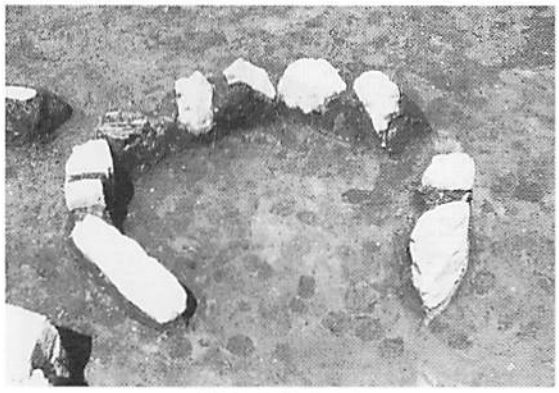
1号住居跡b　炉平面（西から）

写真図版4　1号住居跡a・b



2号住居跡平面（南西から）

覆土断面（北西から）



炉平面（南から）

遺物出土状況（西から）

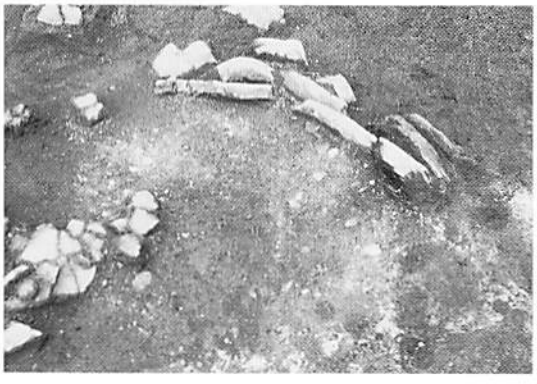
写真図版5　2号住居跡

3号住居跡平面（南西から）

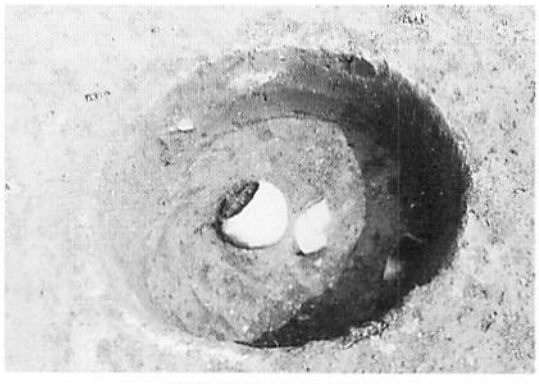
遺物出土状況（南西から）

写真図版6　3号住居跡①

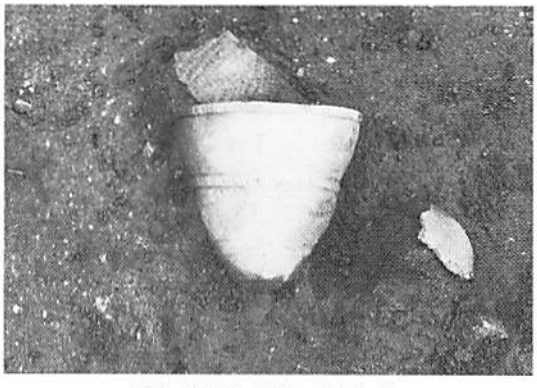
覆土断面（南から）



炉平面（西から）



PP38平面（南西から）



遺物(49)出土状況（南から）

遺物(53)出土状況（南から）

遺物(123)出土状況（北から）

遺物出土状況（西から）

写真図版７　３号住居跡②

5号住居跡平面（南西から）

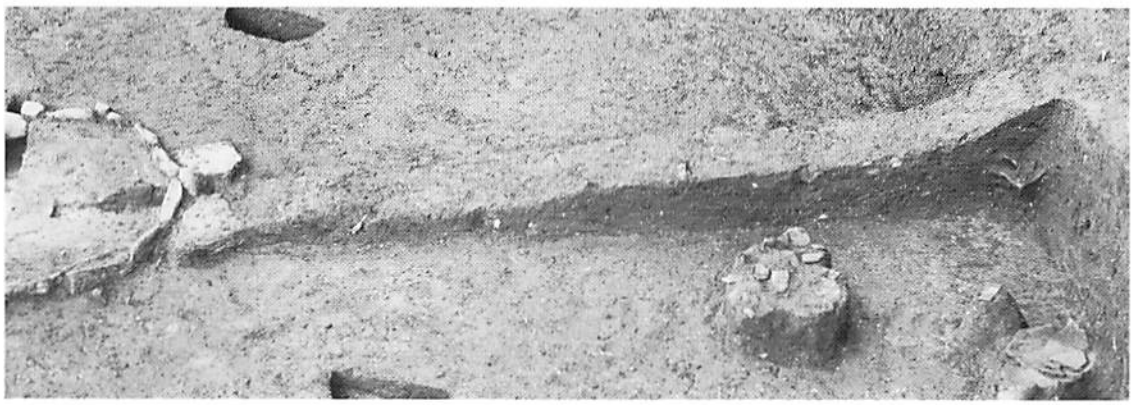
覆土断面（西から）

炉平面（北から）

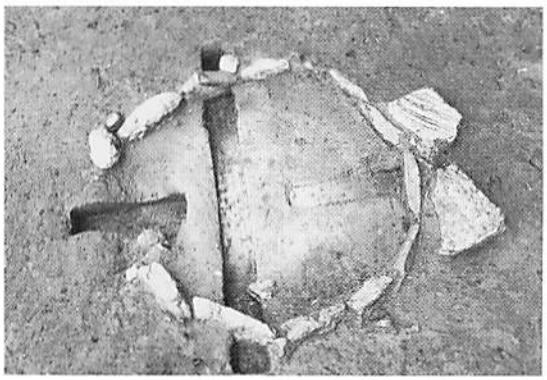
遺物出土状況（西から）

写真図版8　5号住居跡

9号住居跡平面（西から）



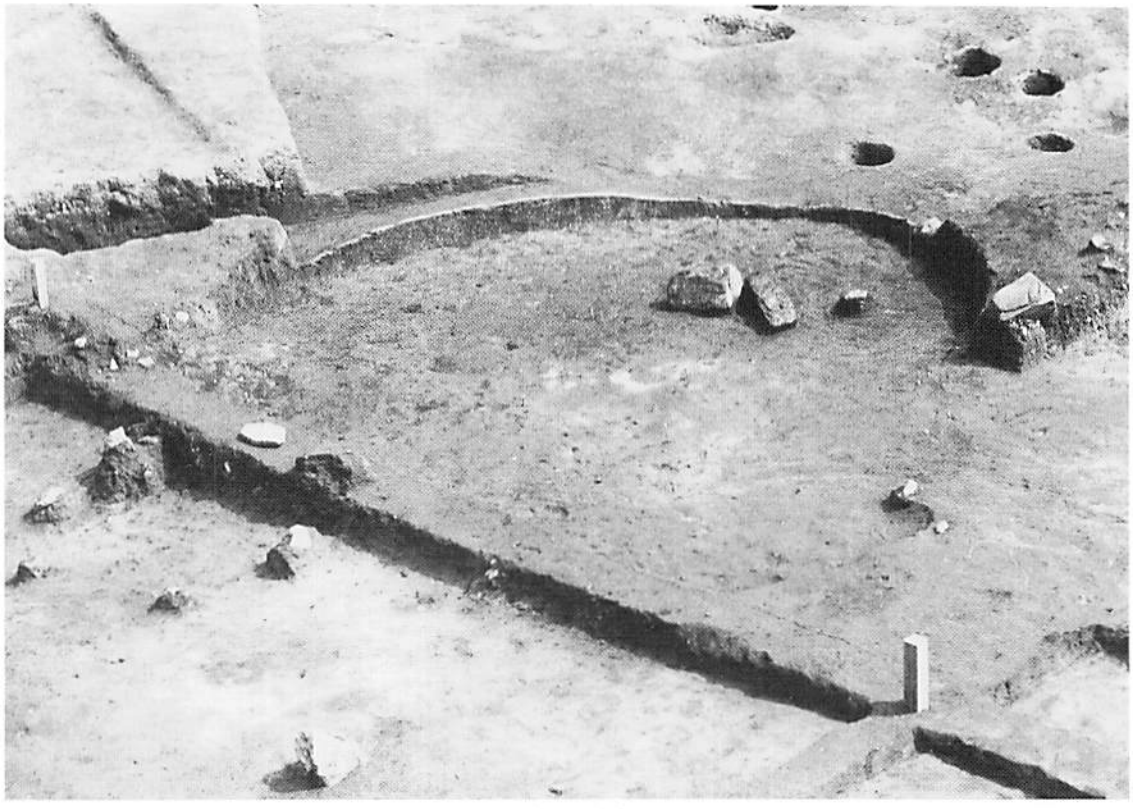
覆土断面（南から）



炉平面（南から）

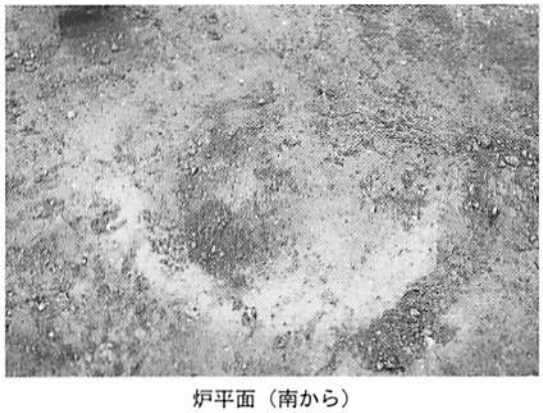
遺物(144)出土状況（南から）

写真図版9　9号住居跡

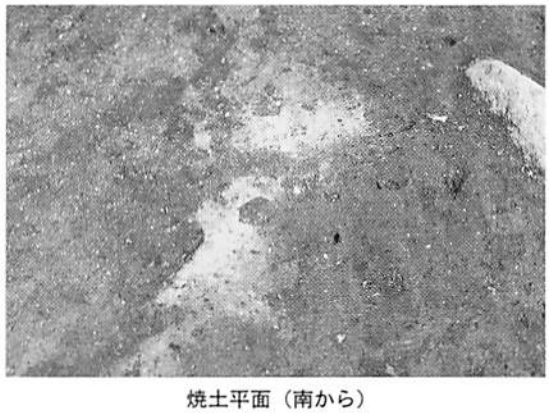


12号住居跡平面（南西から）

覆土断面（西から）

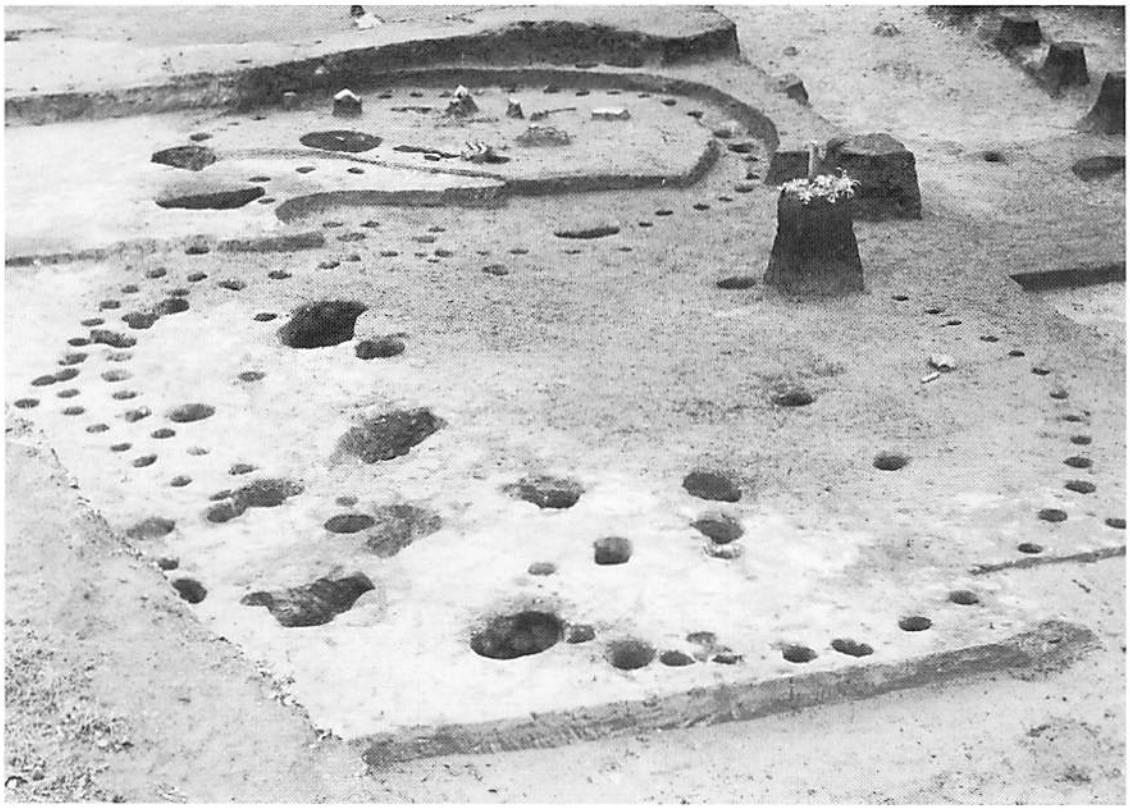


炉平面（南から）



焼土平面（南から）

写真図版10　12号住居跡



13号住居跡a・b・c平面（南西から）

17号住居跡平面（南西から）

写真図版11　13号住居跡a・b・c・17号住居跡①

壁柱穴検出状況（北東から）

覆土断面（南東から）

炉平面（西から）

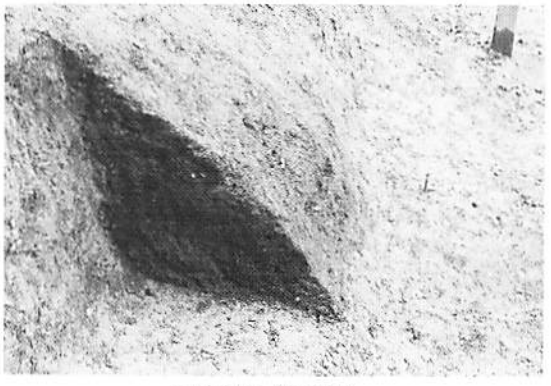
砂塊平面（南から）

写真図版12　17号住居跡②

17号住居跡遺物(159)出土状況（南から）

17号住居跡遺物(160)出土状況（東から）

18号住居跡平面（南から）



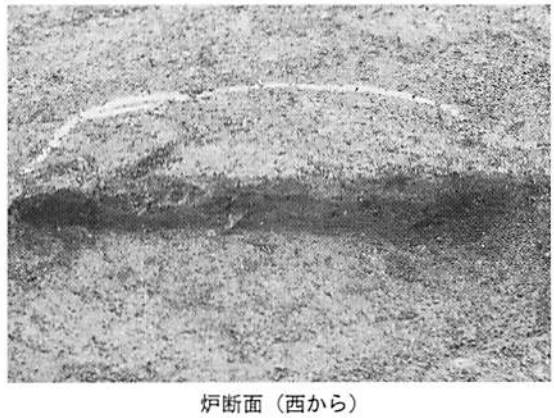
覆土断面（北から）

炉平面（南から）

写真図版13　17号住居跡③・18号住居跡

19号住居跡平面（西から）

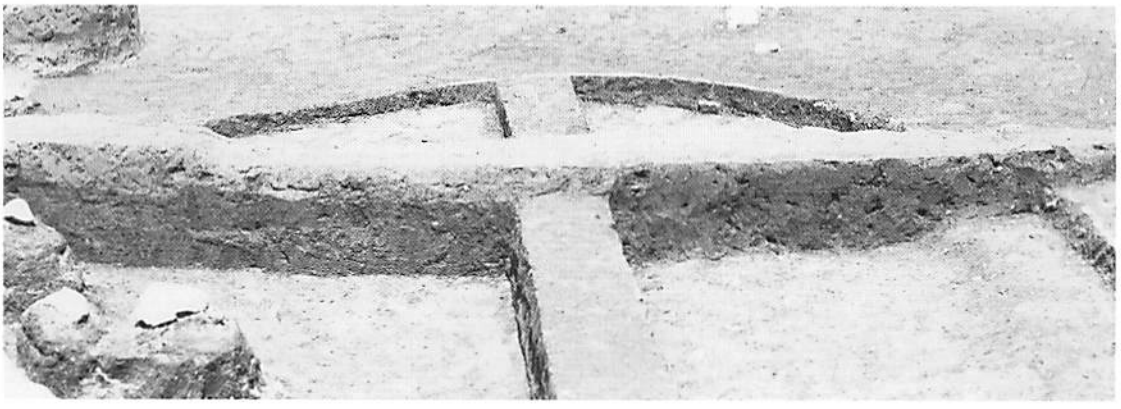
炉平面（西から）



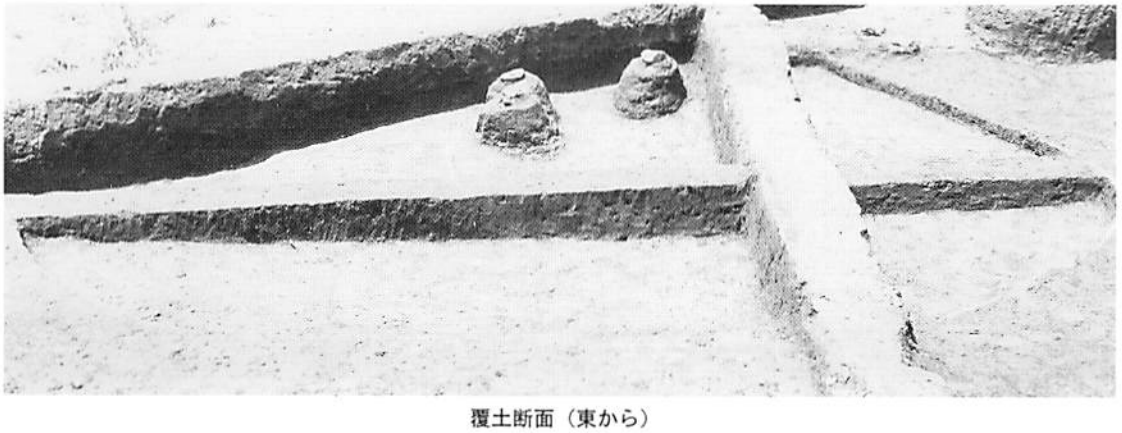
炉断面（西から）

写真図版14　19号住居跡

4号住居状遺構平面（南西から）



覆土断面（南から）

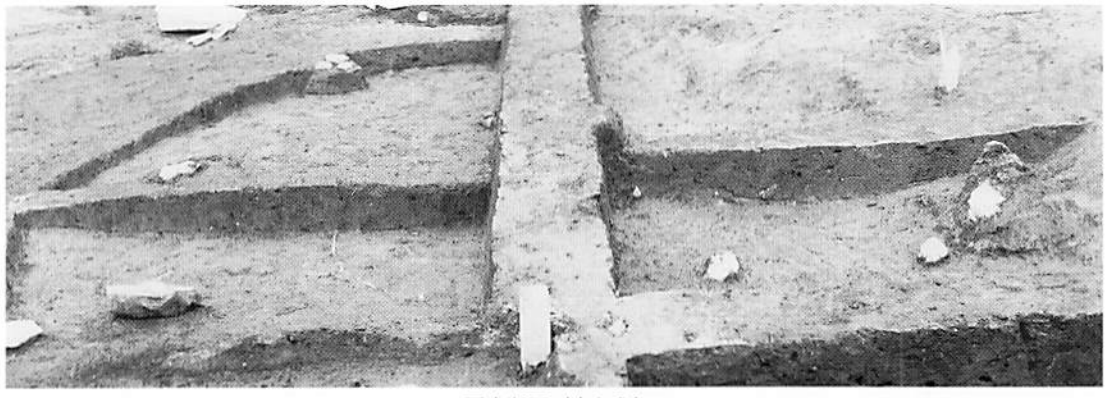


覆土断面（東から）

写真図版15　4号住居状遺構

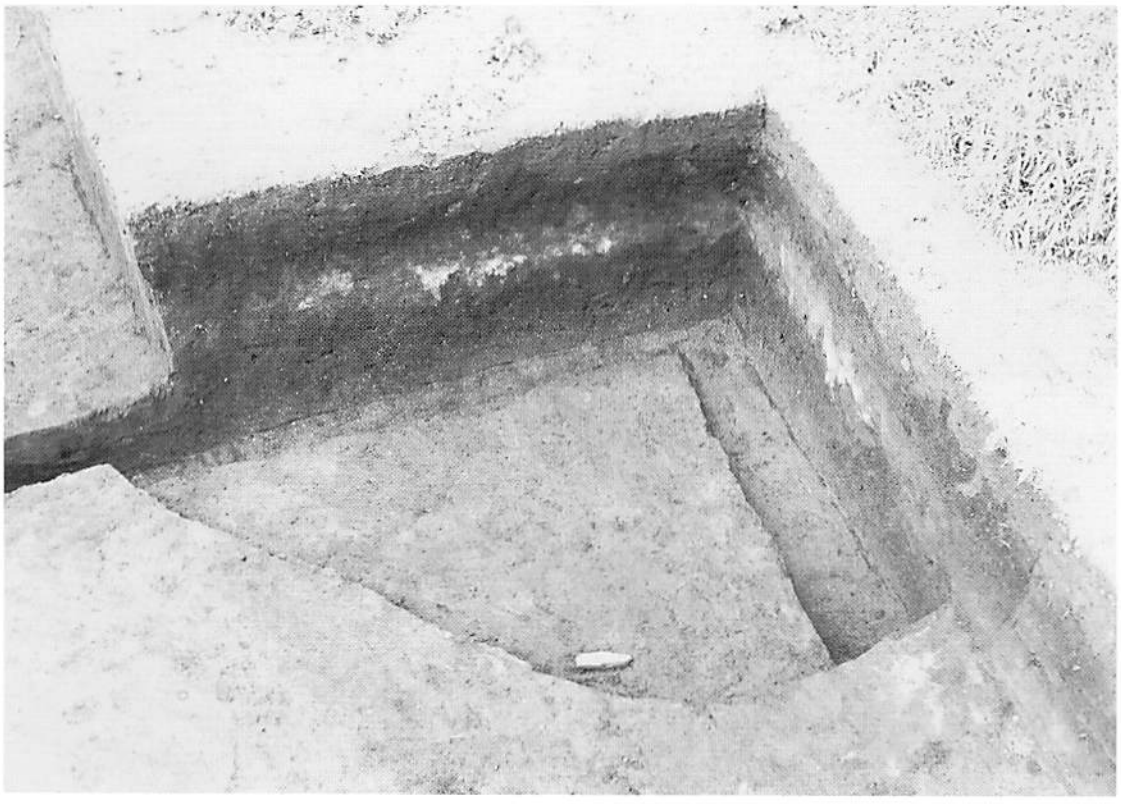
6号住居状遺構平面（南西から）

覆土断面（西から）

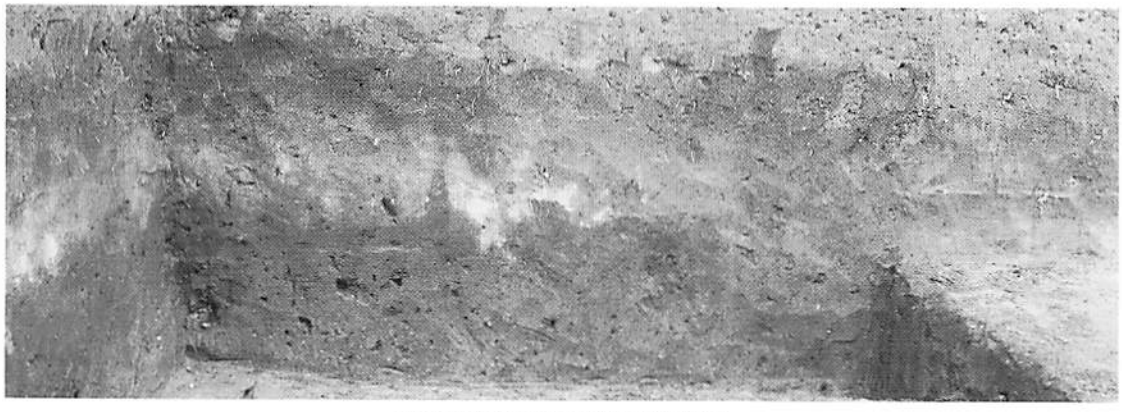


覆土断面（南から）

写真図版16　6号住居状遺構

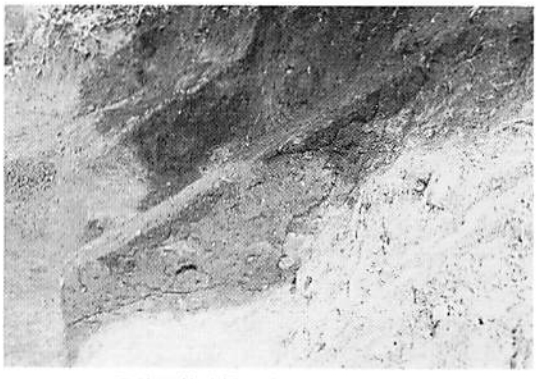


14号住居状遺構平面（南西から）



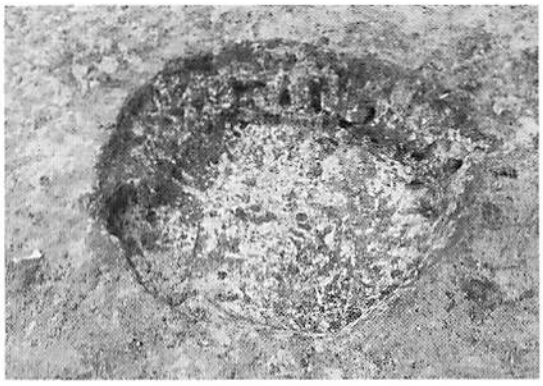
14号住居状遺構覆土断面（西から）

16号住居状遺構平面（西から）

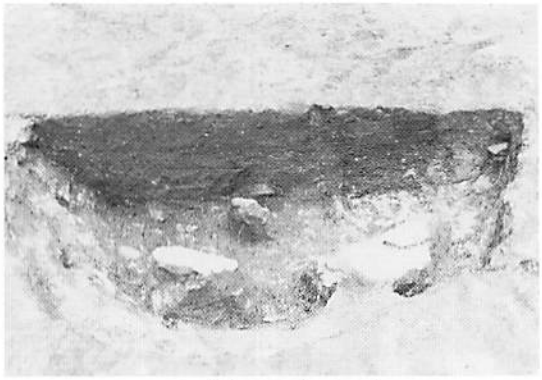


16号住居状遺構覆土断面（南東から）

写真図版17　14号住居状遺構・16号住居状遺構



1号土坑平面（南から）

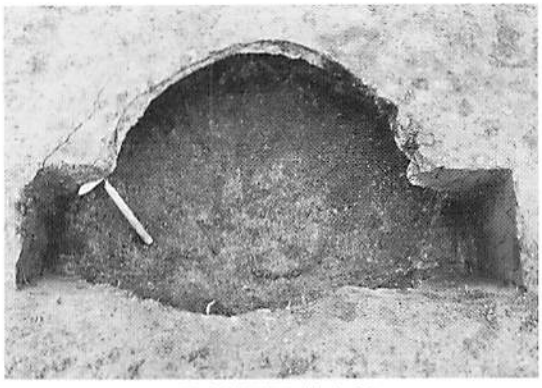


1号土坑断面（西から）

3号土坑平面（南から）

4号土坑平面（南西から）

4号土坑断面（西から）

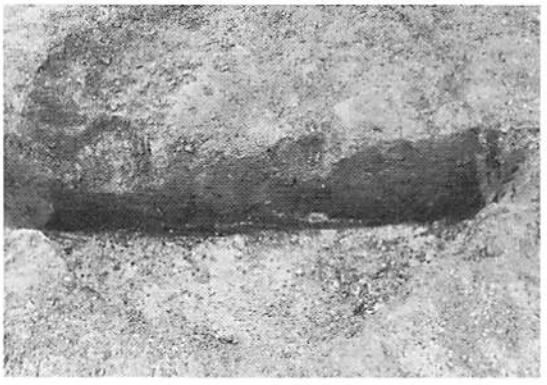


5号土坑平面（南から）

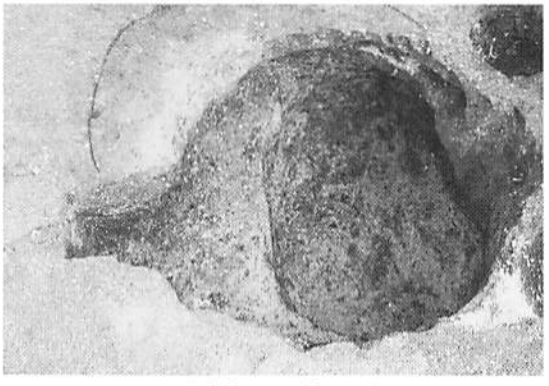
5号土坑断面（南から）

写真図版18　1号土坑・3号土坑～5号土坑

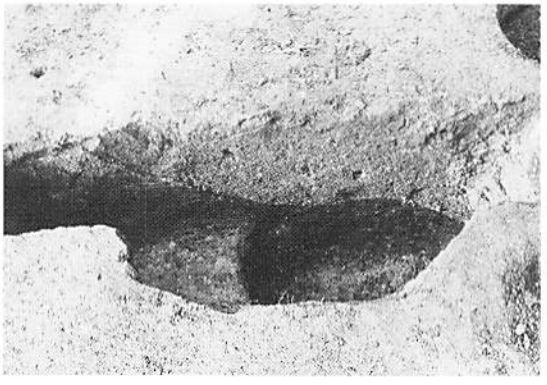
6号土坑平面（東から）



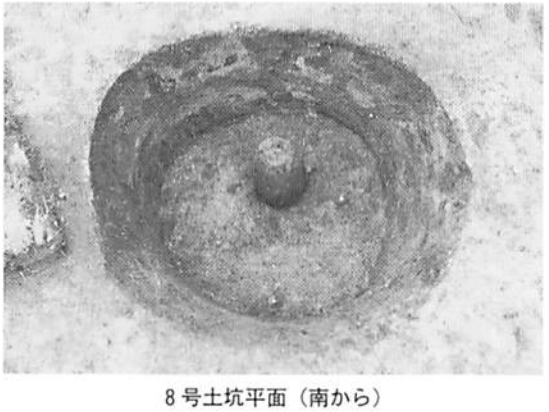
6号土坑断面（南から）



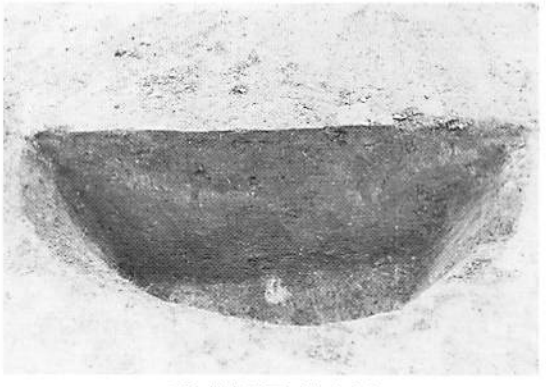
7号土坑平面（南から）



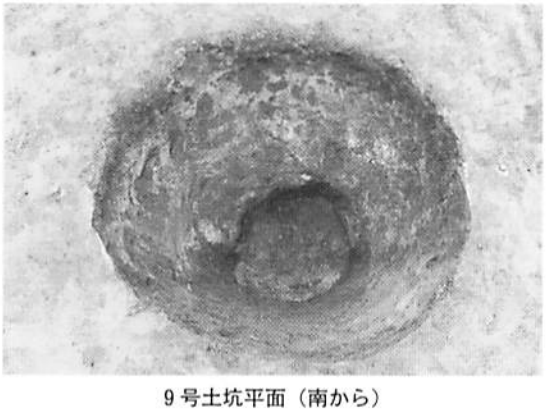
7号土坑断面（南から）



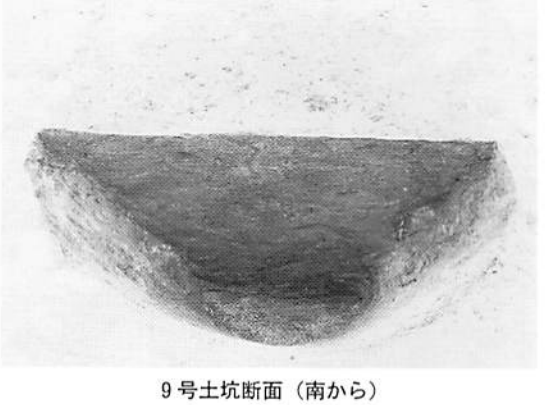
8号土坑平面（南から）



8号土坑断面（南から）

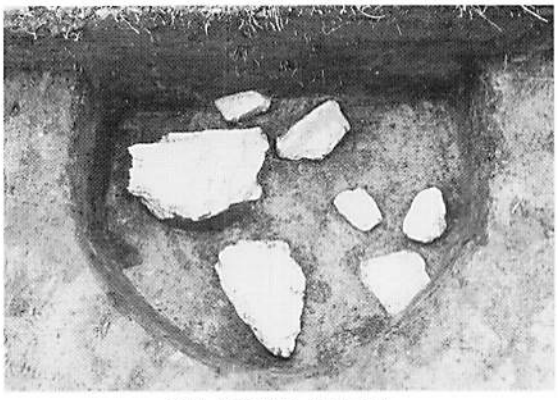


9号土坑平面（南から）

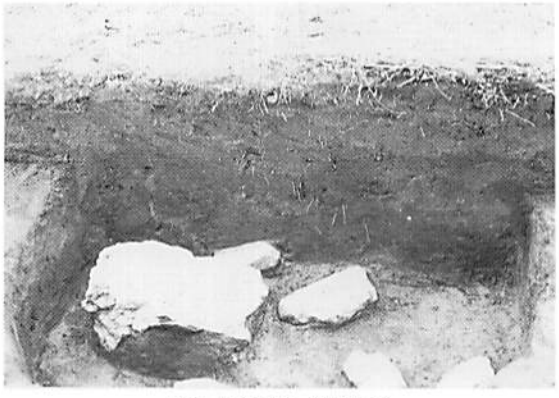


9号土坑断面（南から）

写真図版19　6号土坑～9号土坑

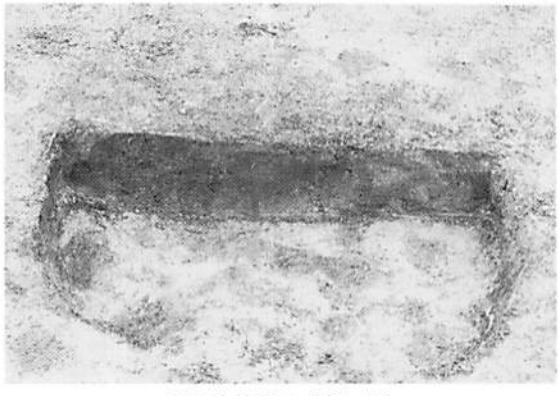


10号土坑平面（東から）

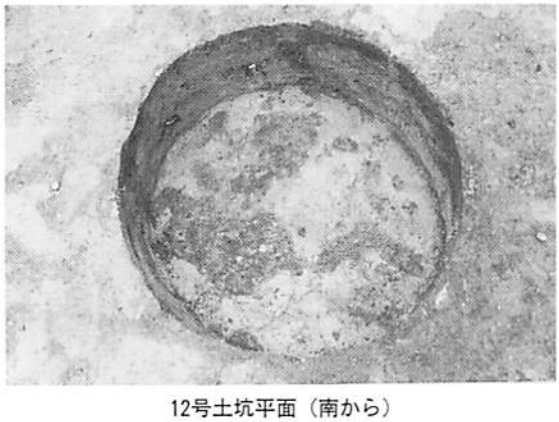


10号土坑断面（東から）

11号土坑平面（南から）

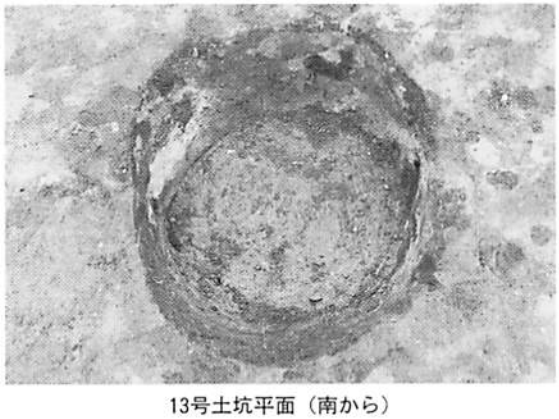


11号土坑断面（南から）



12号土坑平面（南から）

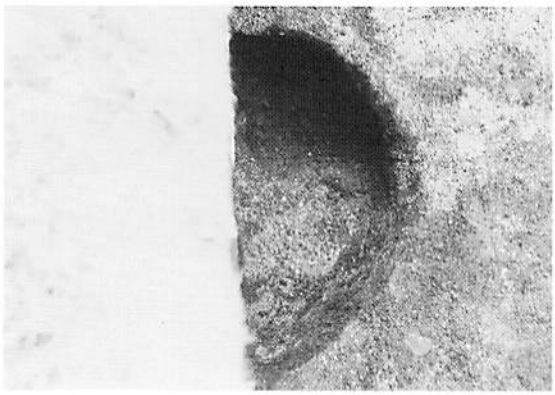
12号土坑断面（南から）



13号土坑平面（南から）

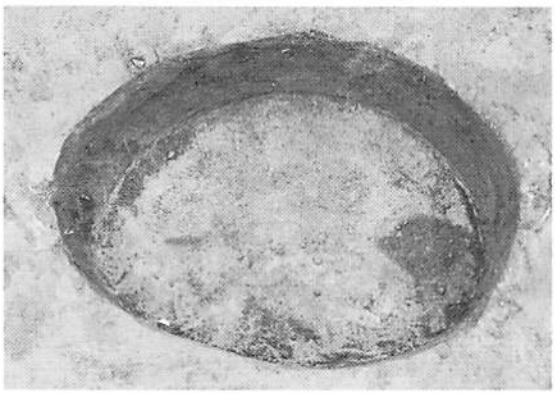
13号土坑断面（南から）

写真図版20　10号土坑～13号土坑

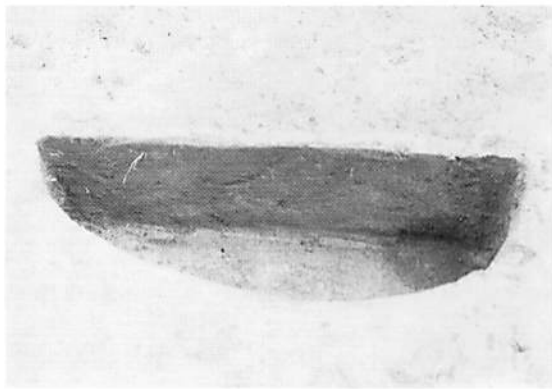


14号土坑平面（北から）

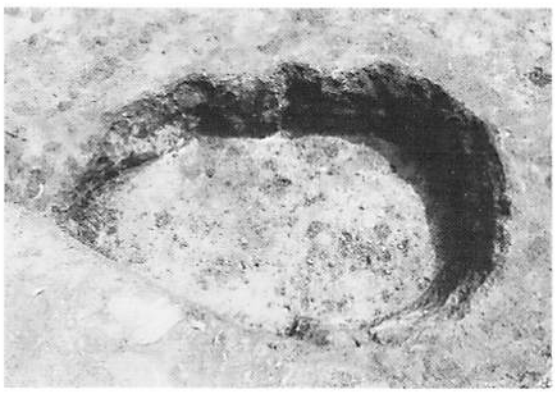
14号土坑断面（西から）



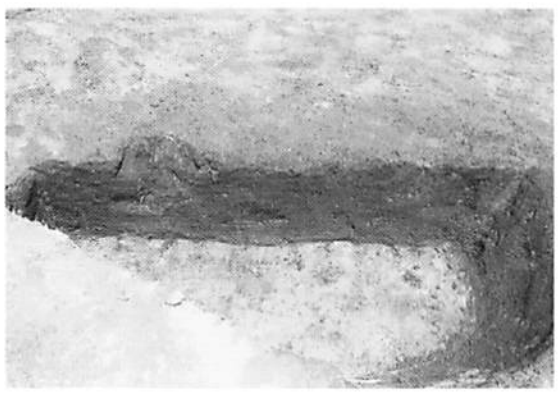
15号土坑平面（西から）



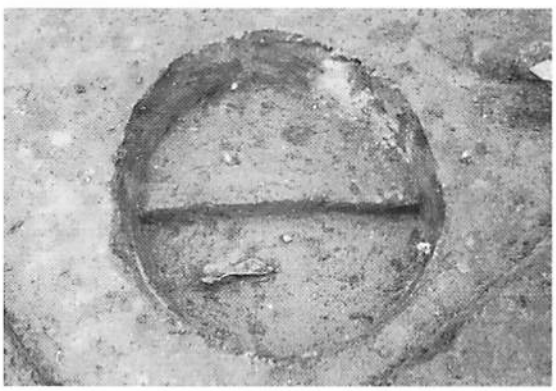
15号土坑断面（南から）



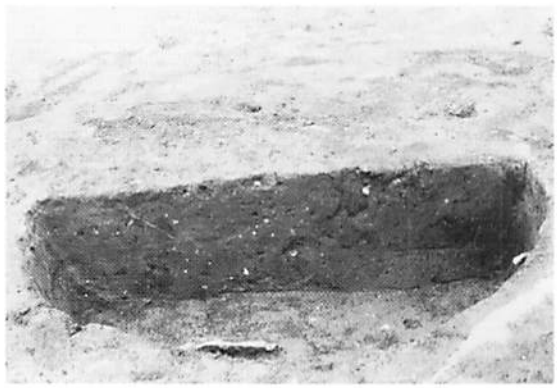
16号土坑平面（西から）



16号土坑断面（南西から）

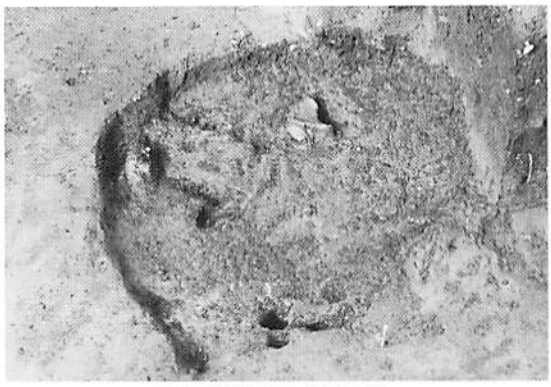


17号土坑平面（南から）

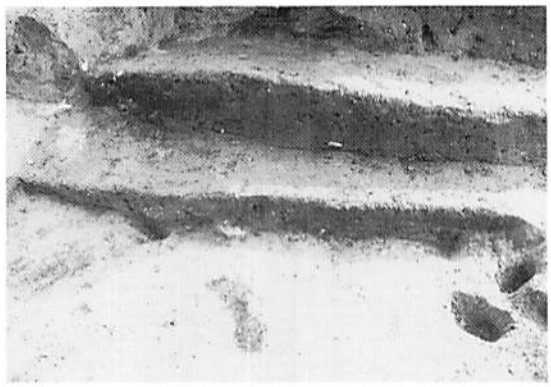


17号土坑断面（南から）

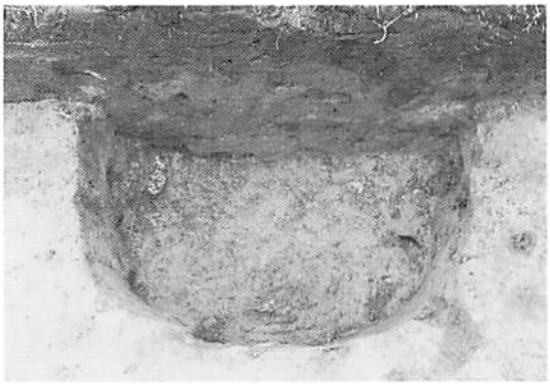
写真図版21　14号土坑～17号土坑



18号土坑平面（南から）



18号土坑断面（西から）



19号土坑平面（東から）

19号土坑断面（東から）

20号土坑平面（南から）

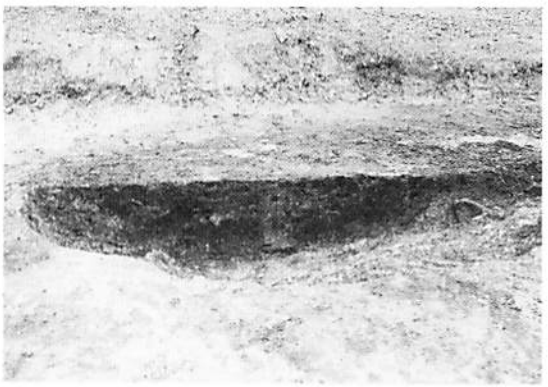
20号土坑断面（南から）

22号土坑平面（東から）

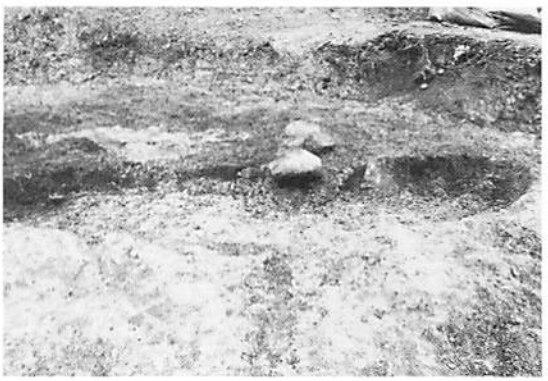
22号土坑断面（西から）

写真図版22　18号土坑～20号土坑・22号土坑

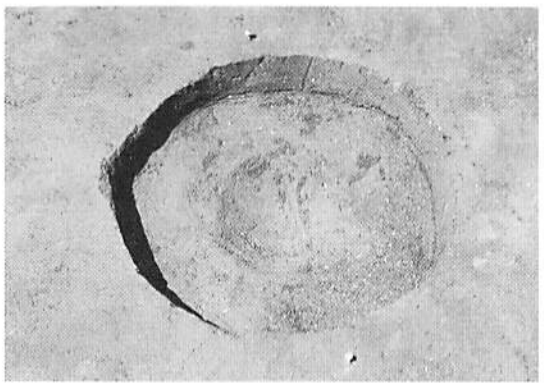
21号土坑平面（北西から）



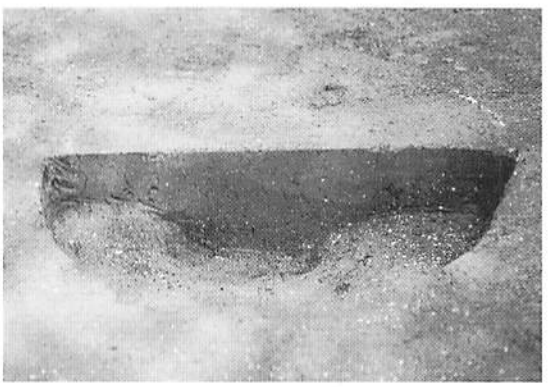
21号土坑北側断面（南西から）



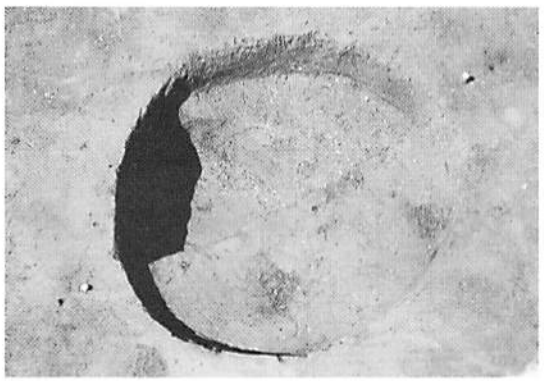
21号土坑南側断面（南西から）



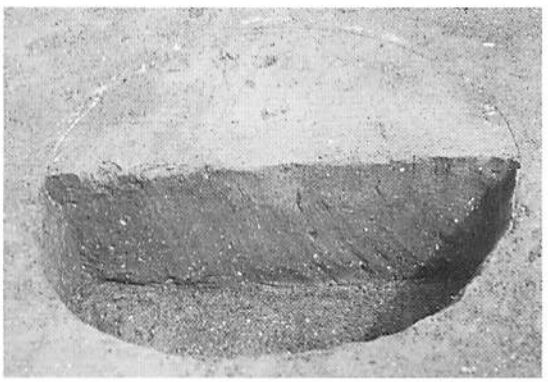
23号土坑平面（南から）



23号土坑断面（南から）

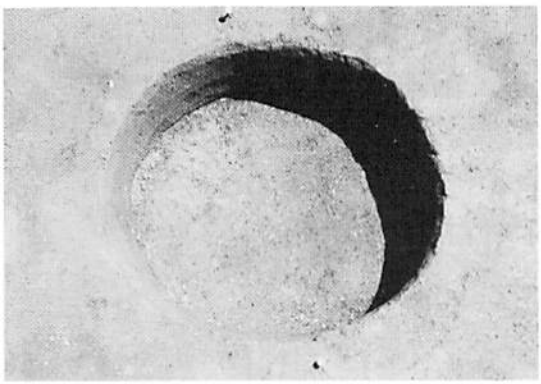


24号土坑平面（南から）

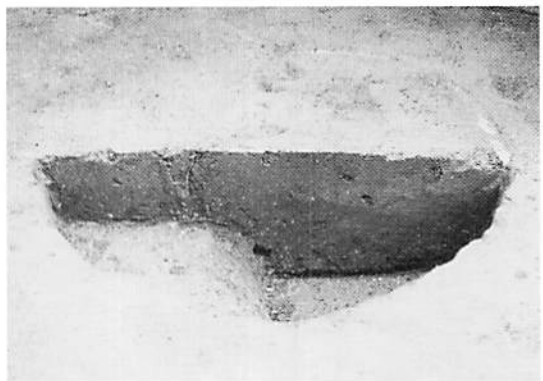


24号土坑断面（南から）

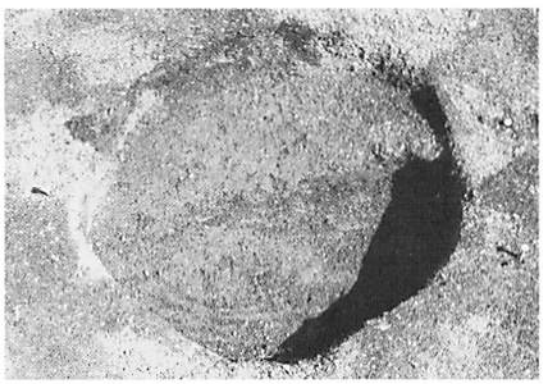
写真図版23　21号土坑・23号土坑・24号土坑



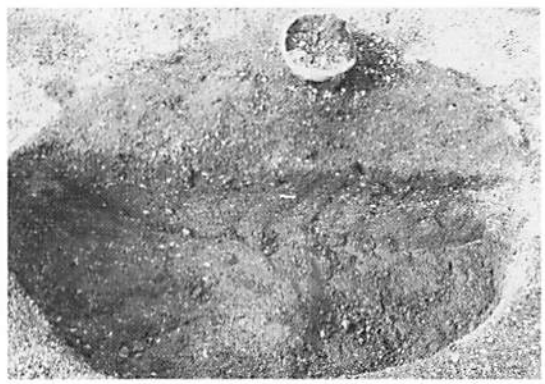
25号土坑平面（西から）



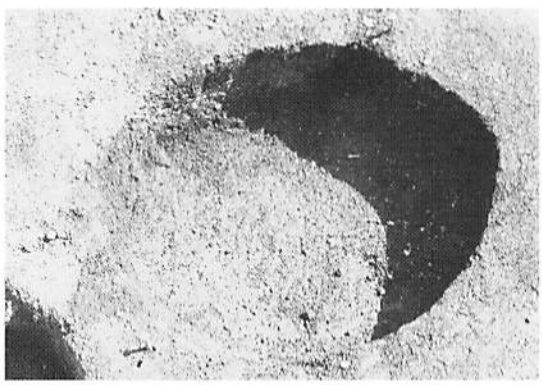
25号土坑断面（西から）



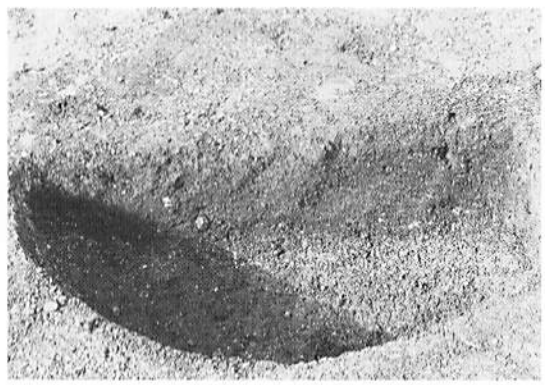
26号土坑平面（南から）



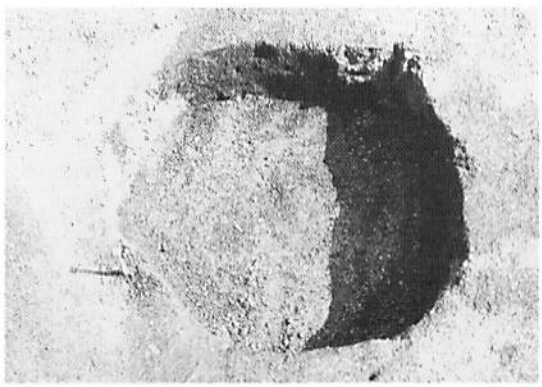
26号土坑断面（南から）



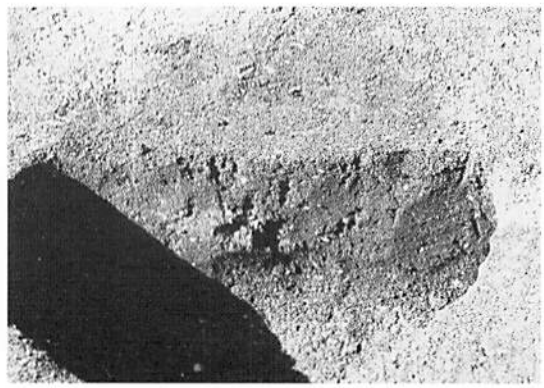
27号土坑平面（南から）



27号土坑断面（南から）

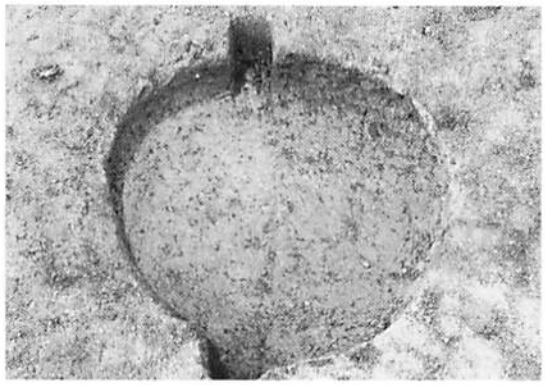


28号土坑平面（南から）

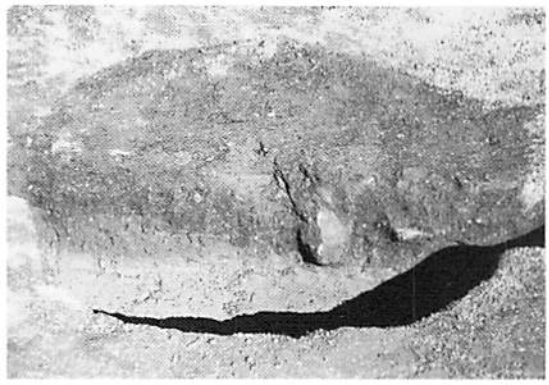


28号土坑断面（南から）

写真図版24　25号土坑～28号土坑

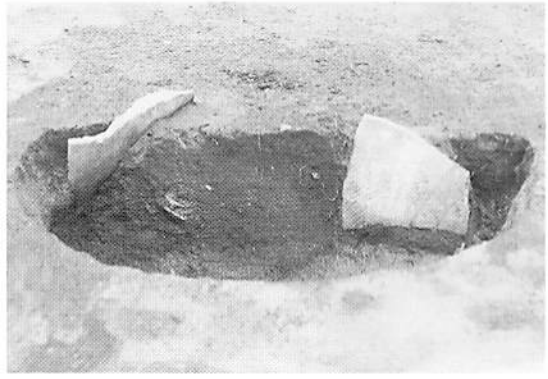


29号土坑平面（南から）



29号土坑断面（西から）

30号土坑平面（南から）

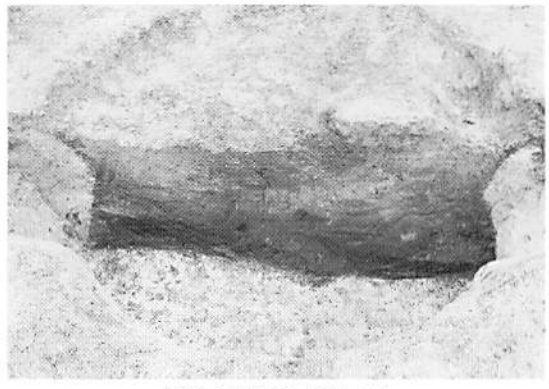


30号土坑断面（南から）

31号土坑平面（南から）

31号土坑断面（南から）

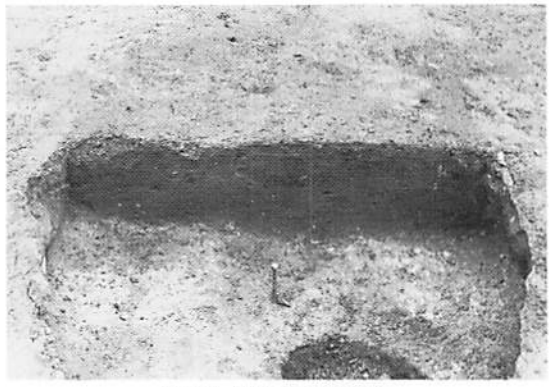
32号土坑平面（東から）



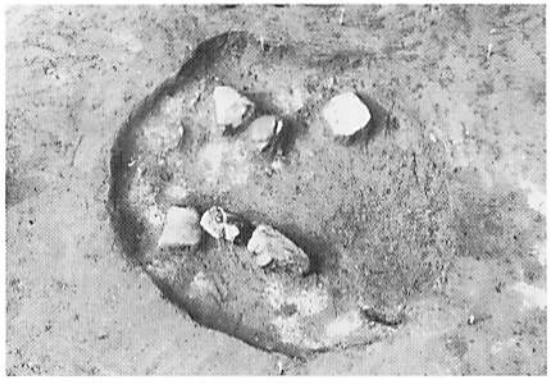
32号土坑断面（南から）

写真図版25　29号土坑～32号土坑

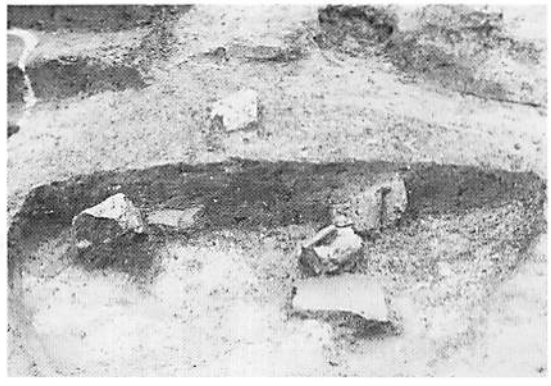
33号土坑平面（南から）



33号土坑断面（南から）

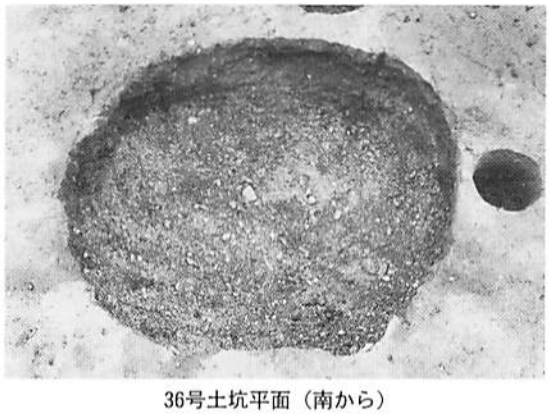


34号土坑平面（南から）

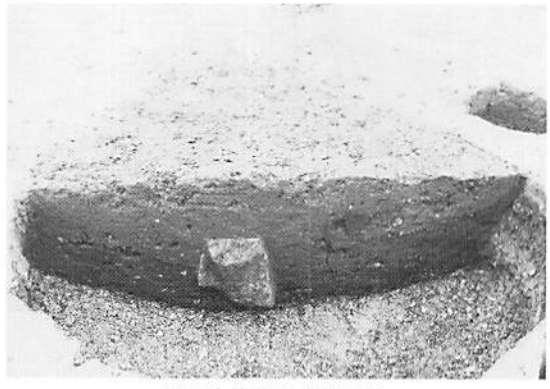


34号土坑断面（西から）

35号土坑断面（南から）



36号土坑平面（南から）



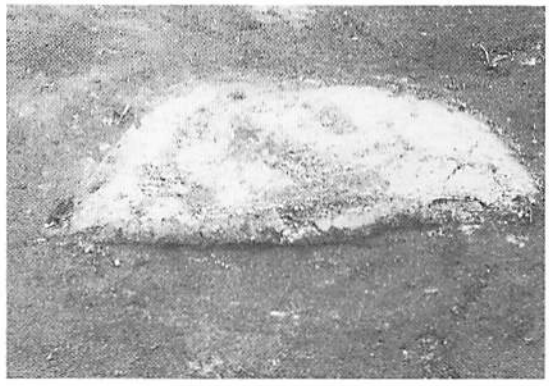
36号土坑断面（南から）

写真図版26　33号土坑～36号土坑

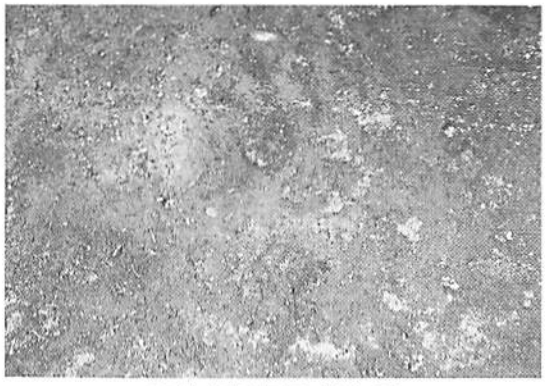
1号焼土遺構平面（南から）

1号焼土遺構断面（南から）

2号焼土遺構平面（南から）



2号焼土遺構断面（南から）



3号焼土遺構平面（南から）

3号焼土遺構断面（西から）

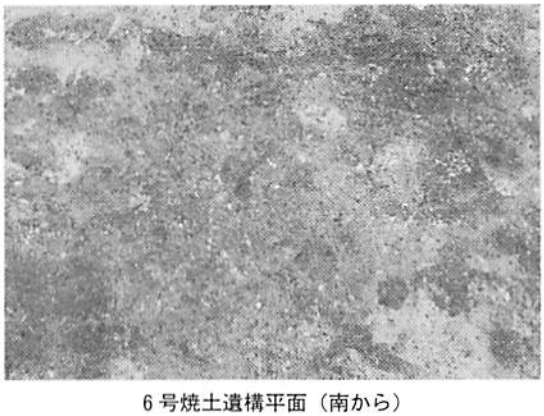
4号焼土遺構平面（西から）

4号焼土遺構断面（南から）

写真図版27　1号焼土遺構～4号焼土遺構

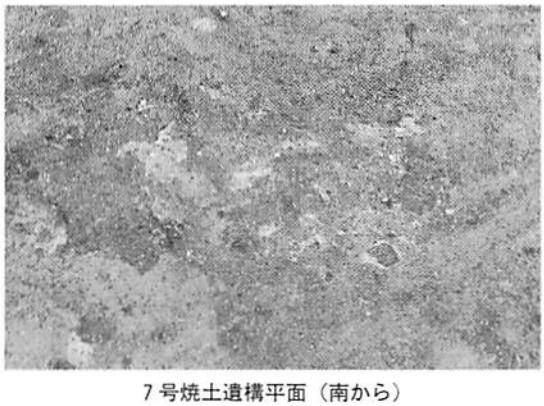
5号焼土遺構平面（西から）

5号焼土遺構断面（南東から）



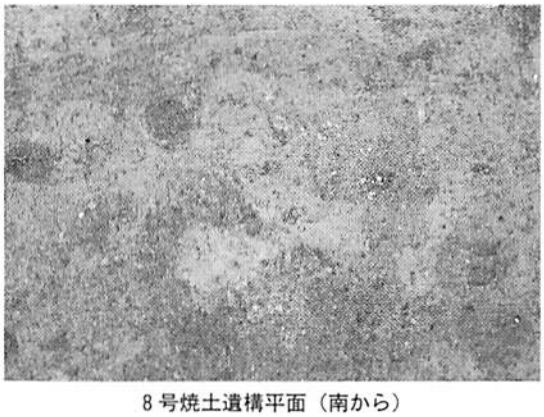
6号焼土遺構平面（南から）

6号焼土遺構断面（南東から）

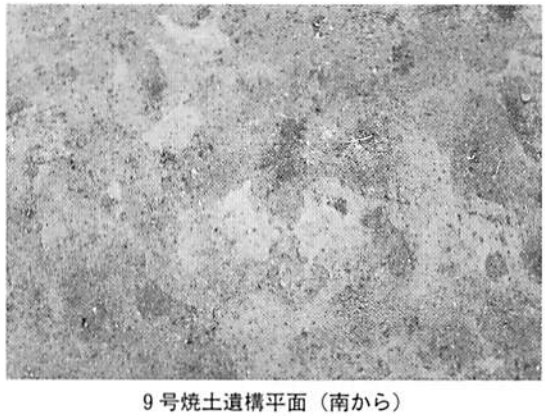


7号焼土遺構平面（南から）

7号焼土遺構断面（南から）



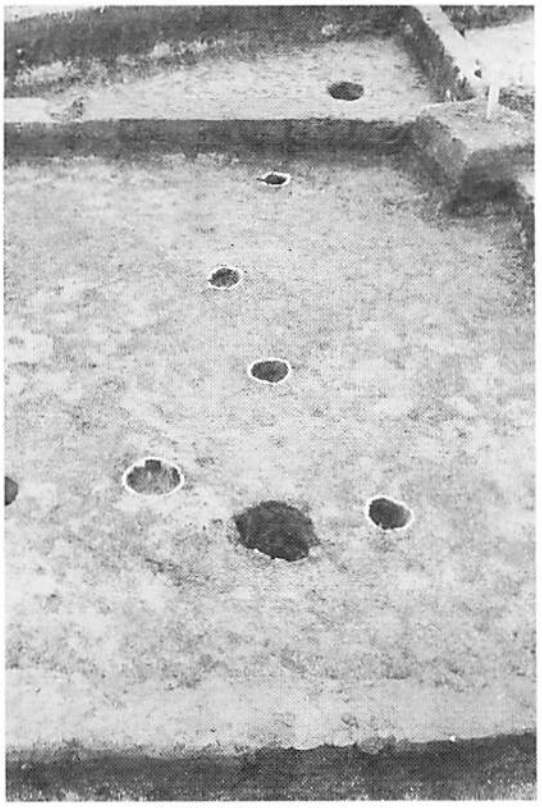
8号焼土遺構平面（南から）



9号焼土遺構平面（南から）

写真図版28　5号焼土遺構～9号焼土遺構

9 H柱穴群平面（北から）

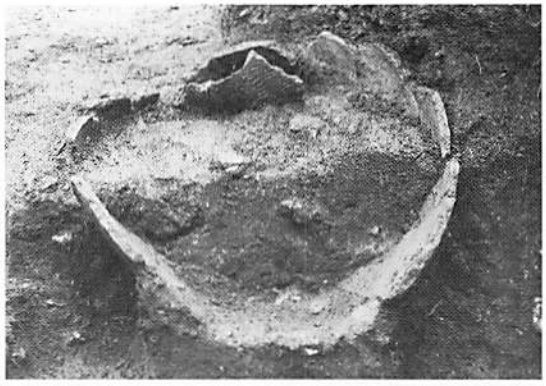


17L柱穴群平面（西から）

21L・21Mグリッド完掘（西から）

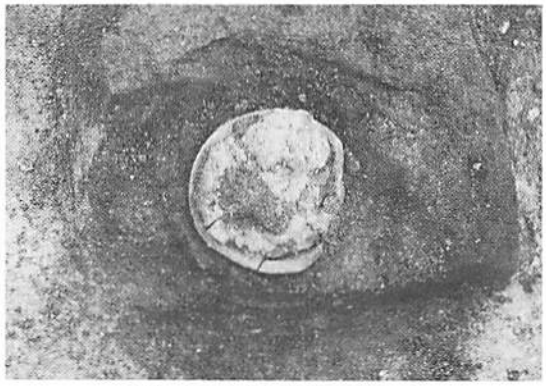
写真図版29　9 H柱穴群・17L柱穴群・遺物包含層

1号埋設土器遺構平面（西から）



1号埋設土器遺構断面（西から）

遺物（407）出土状況（東から）



遺物（150）出土状況（南から）

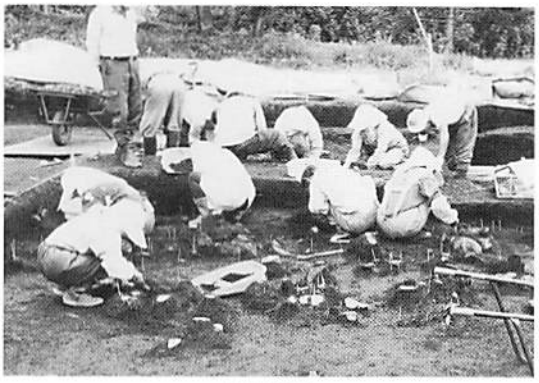
19MⅥ層遺物出土状況（南から）

5E・5Fグリッド遺物出土状況（東から）

6F・7F・7Gグリッド遺物出土状況（西から）

21L・21Mグリッド遺物出土状況（北から）

写真図版30　1号埋設土器遺構・遺物出土状況



調査風景

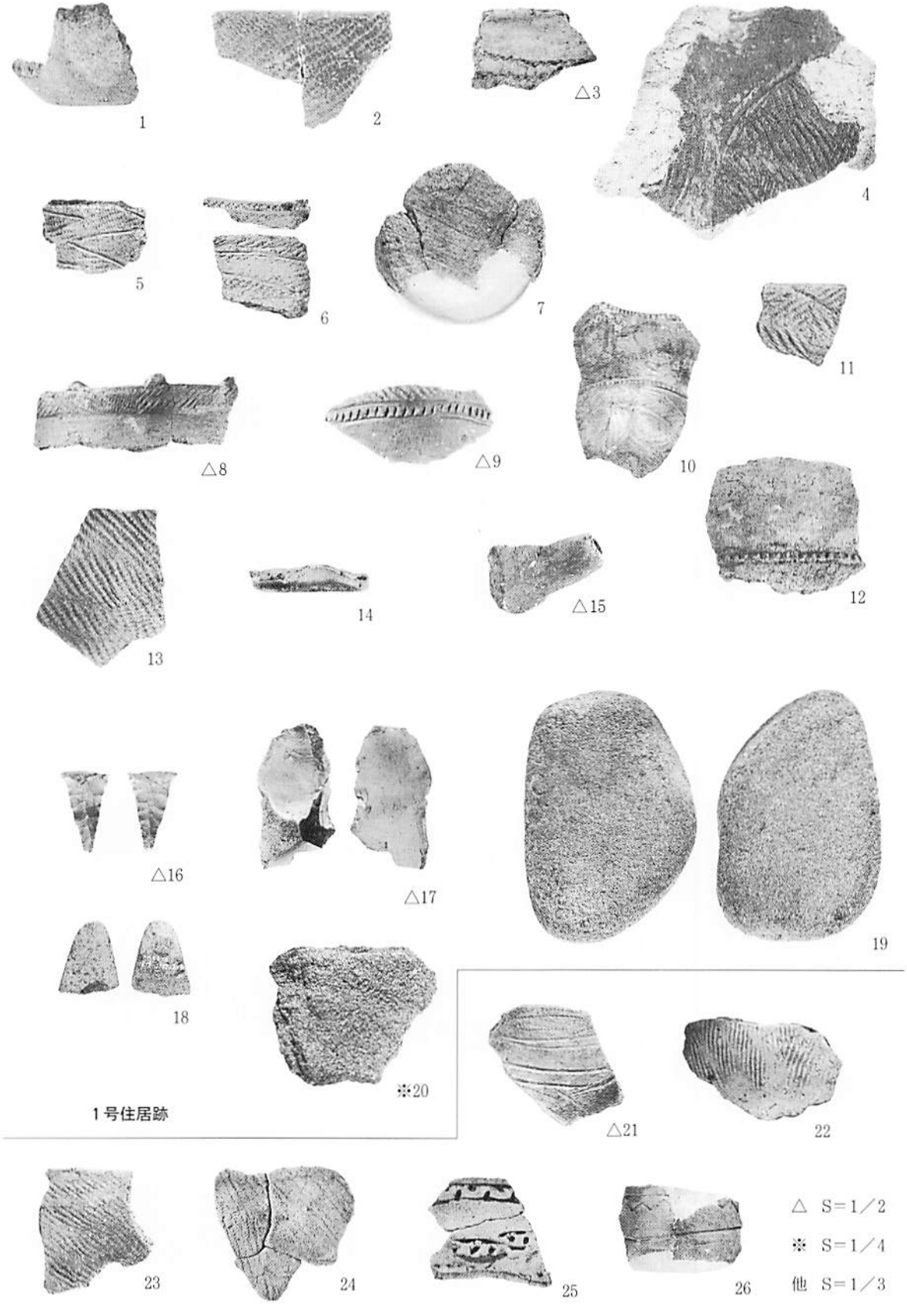
調査風景

調査風景

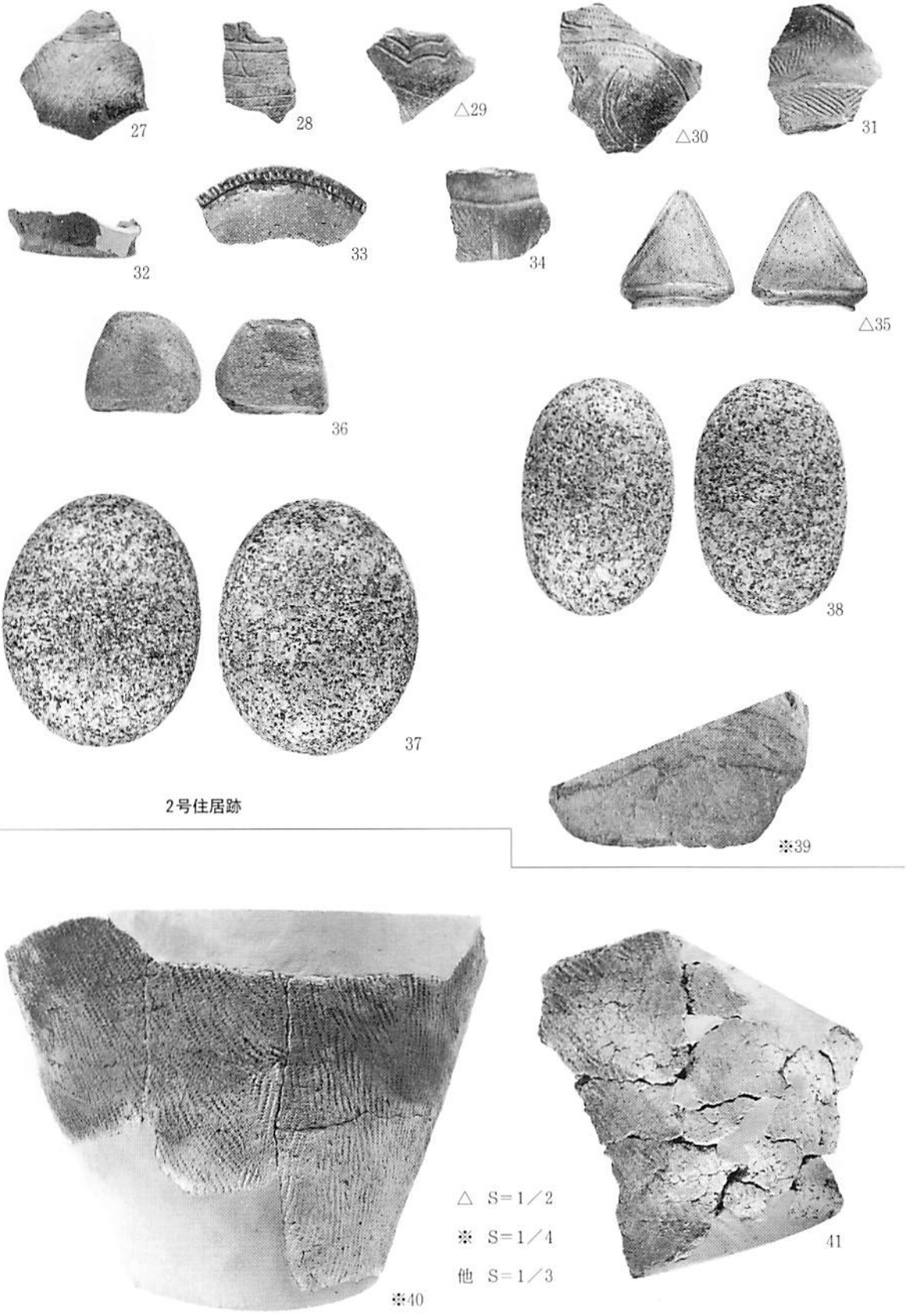
現地説明会

現地説明会

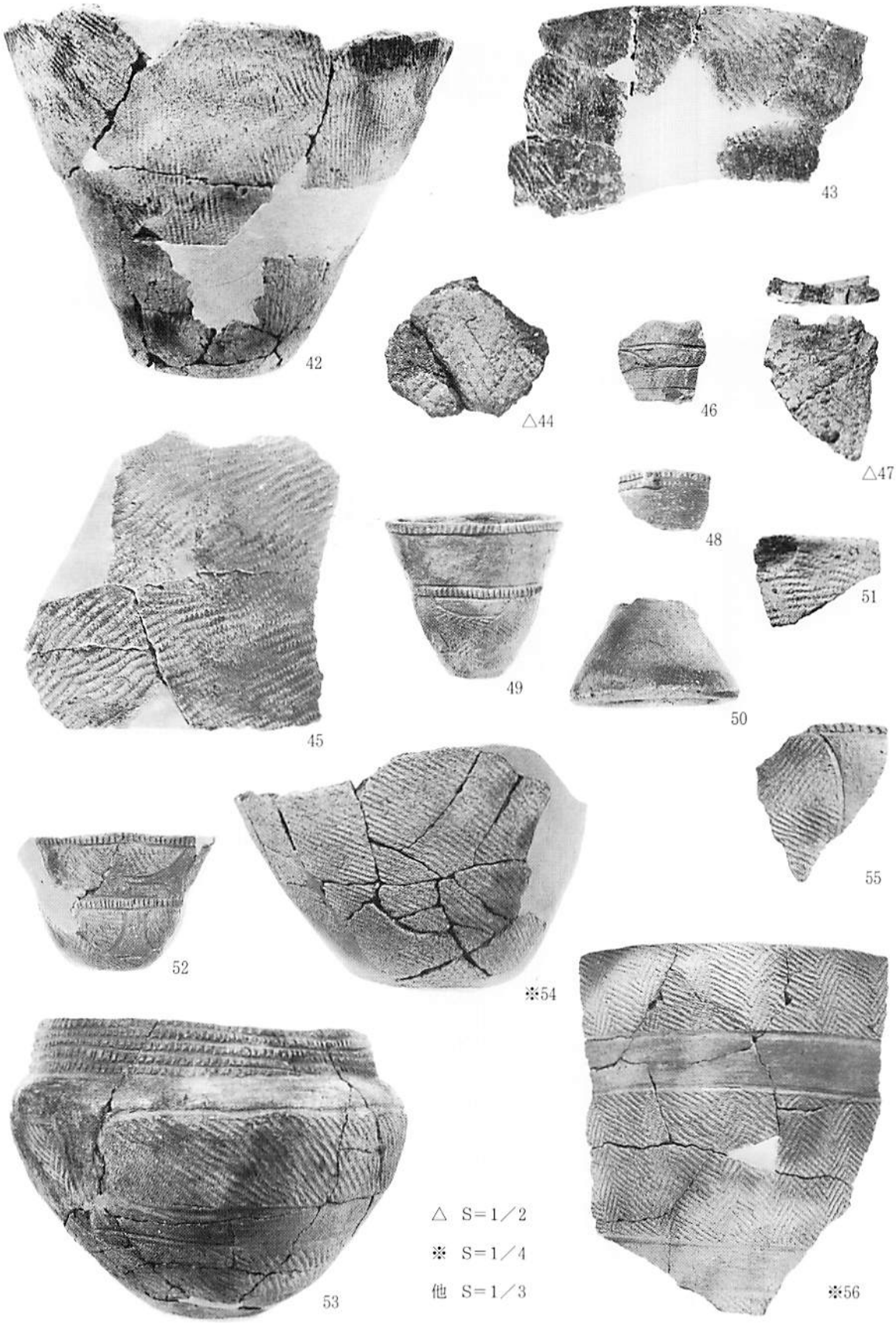
写真図版31　調査風景・現地説明会



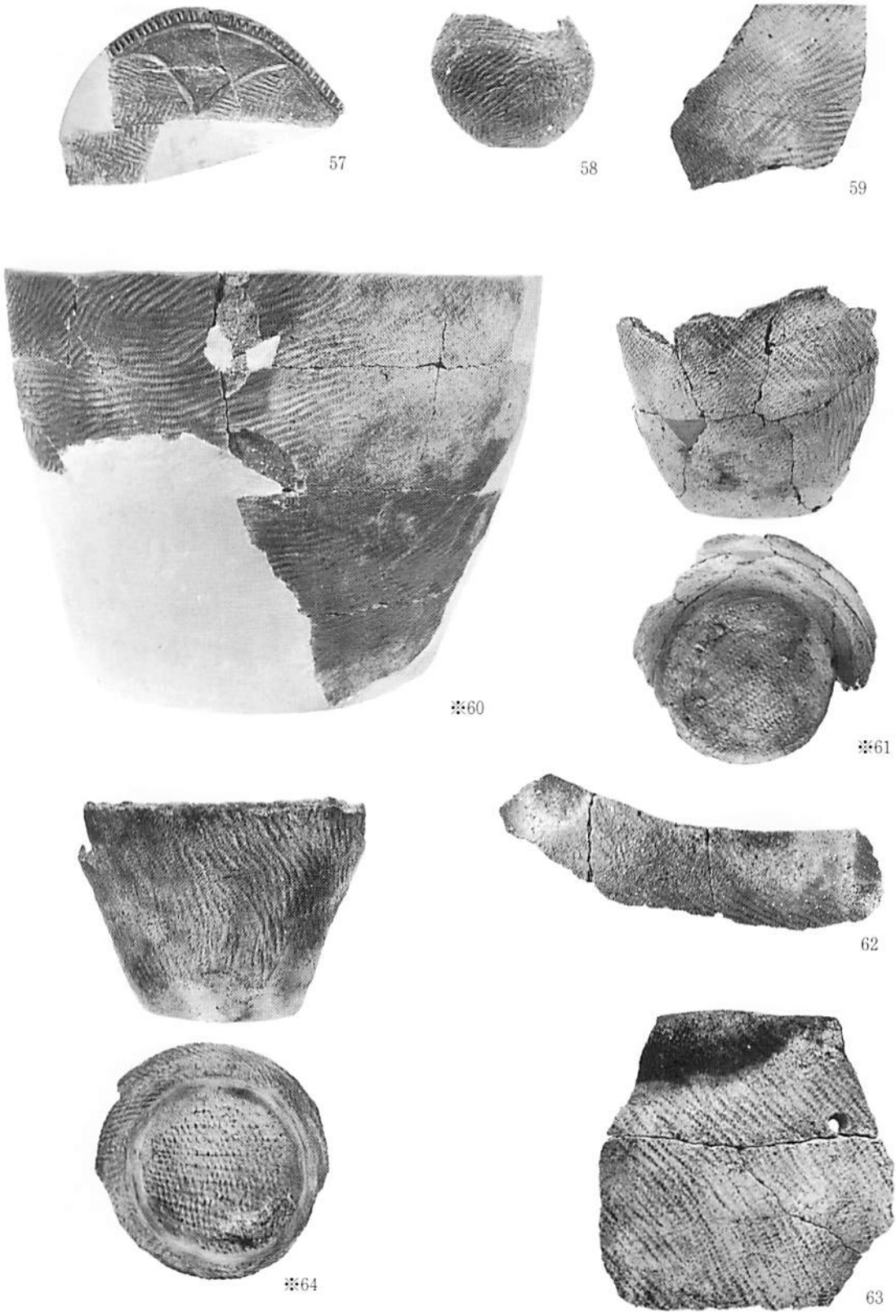
写真図版32　遺構内出土遺物１（住居跡①）



写真図版33　遺構内出土遺物 2（住居跡②）



写真図版34　遺構内出土遺物 3（住居跡③）



※ S＝1／4　　他 S＝1／3

写真図版35　遺構内出土遺物４（住居跡④）

65

66

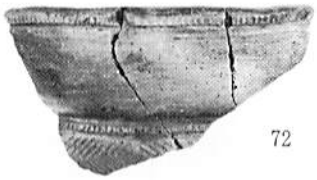
△67

△68

△69

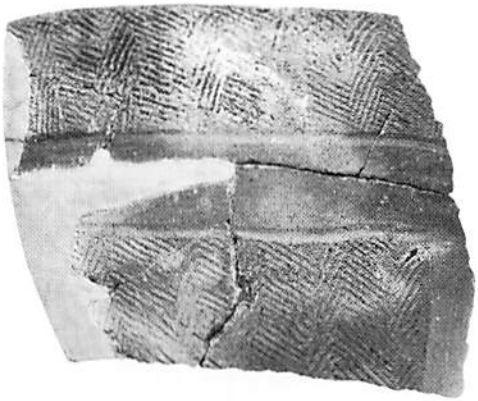
70

71


72

73

74

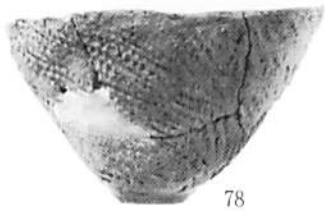

75

76

△ S＝1／2　他 S＝1／3

写真図版36　遺構内出土遺物５（住居跡⑤）

※77


78

79

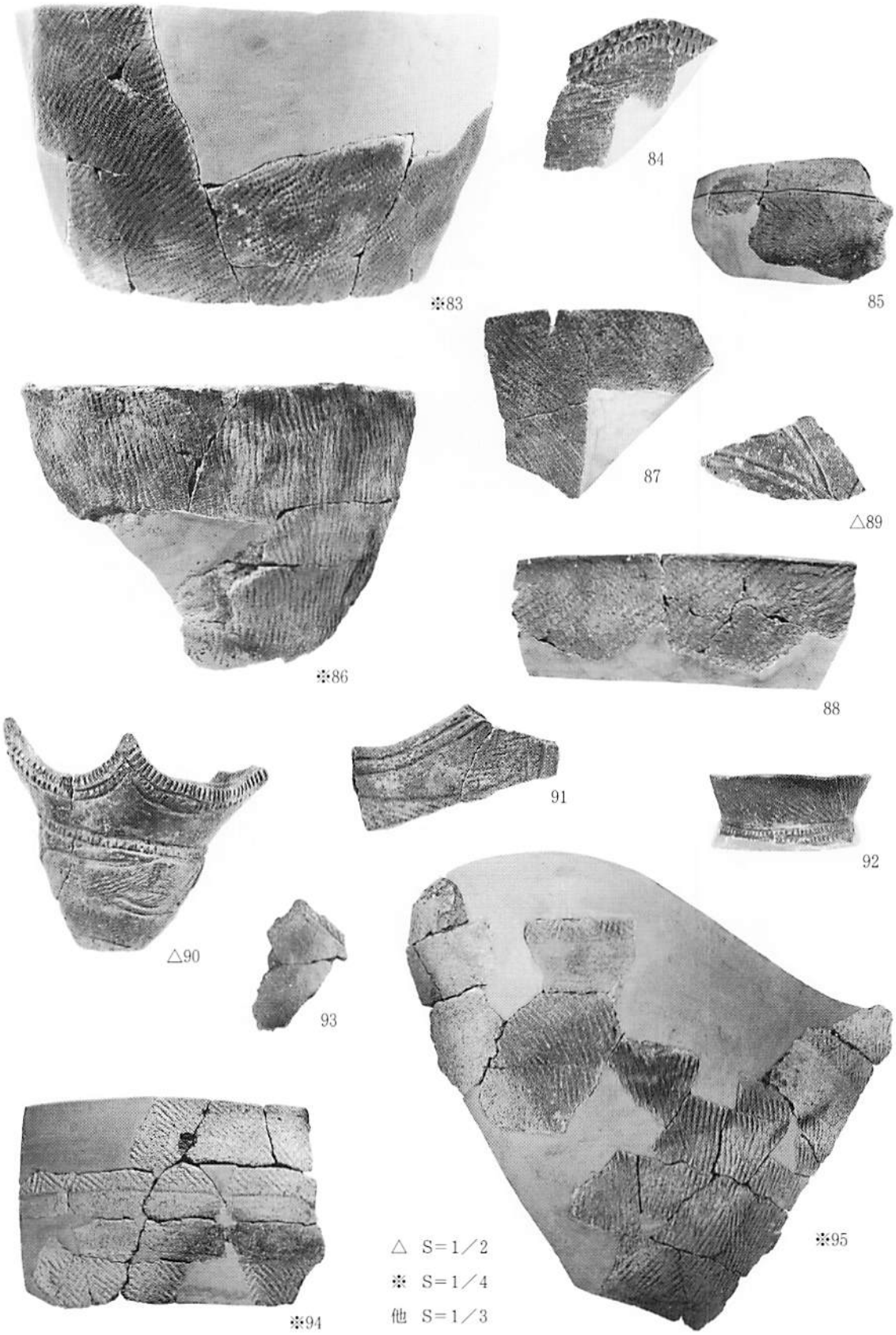
82

※80

81

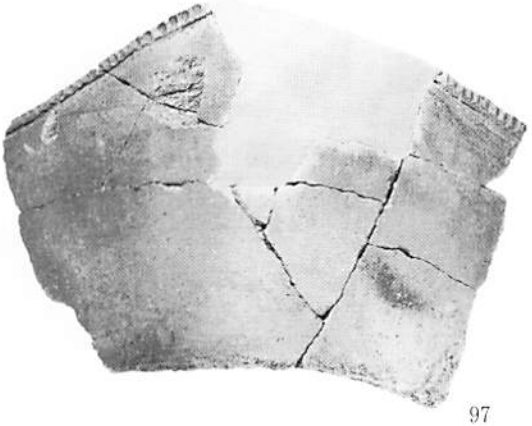
※ S＝1／4　他 S＝1／3

写真図版37　遺構内出土遺物 6（住居跡⑥）



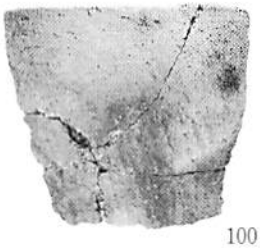
写真図版38　遺構内出土遺物７（住居跡⑦）

96

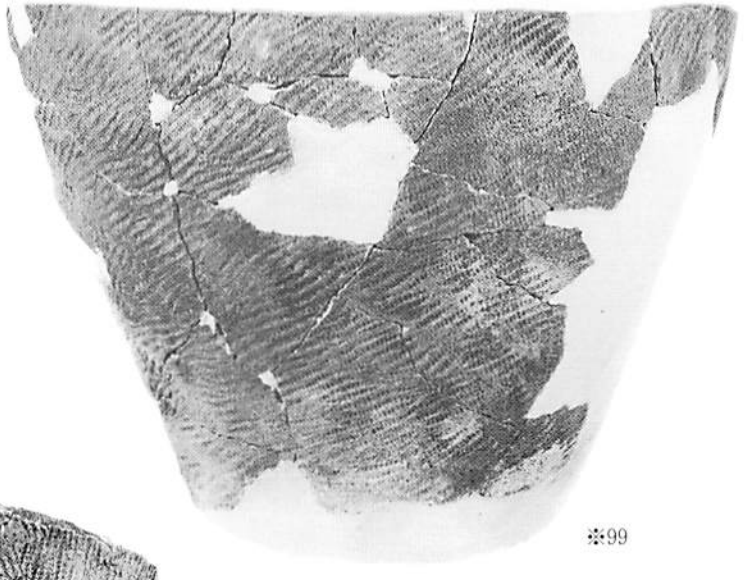


97

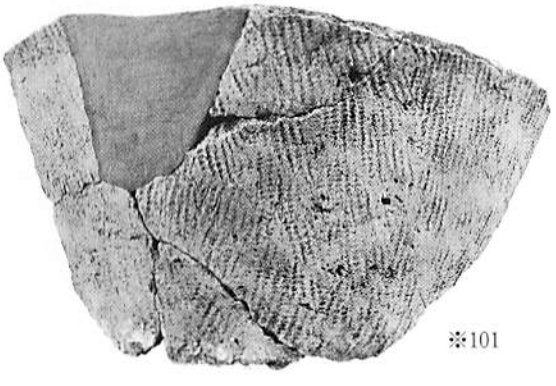
※98



100



※99

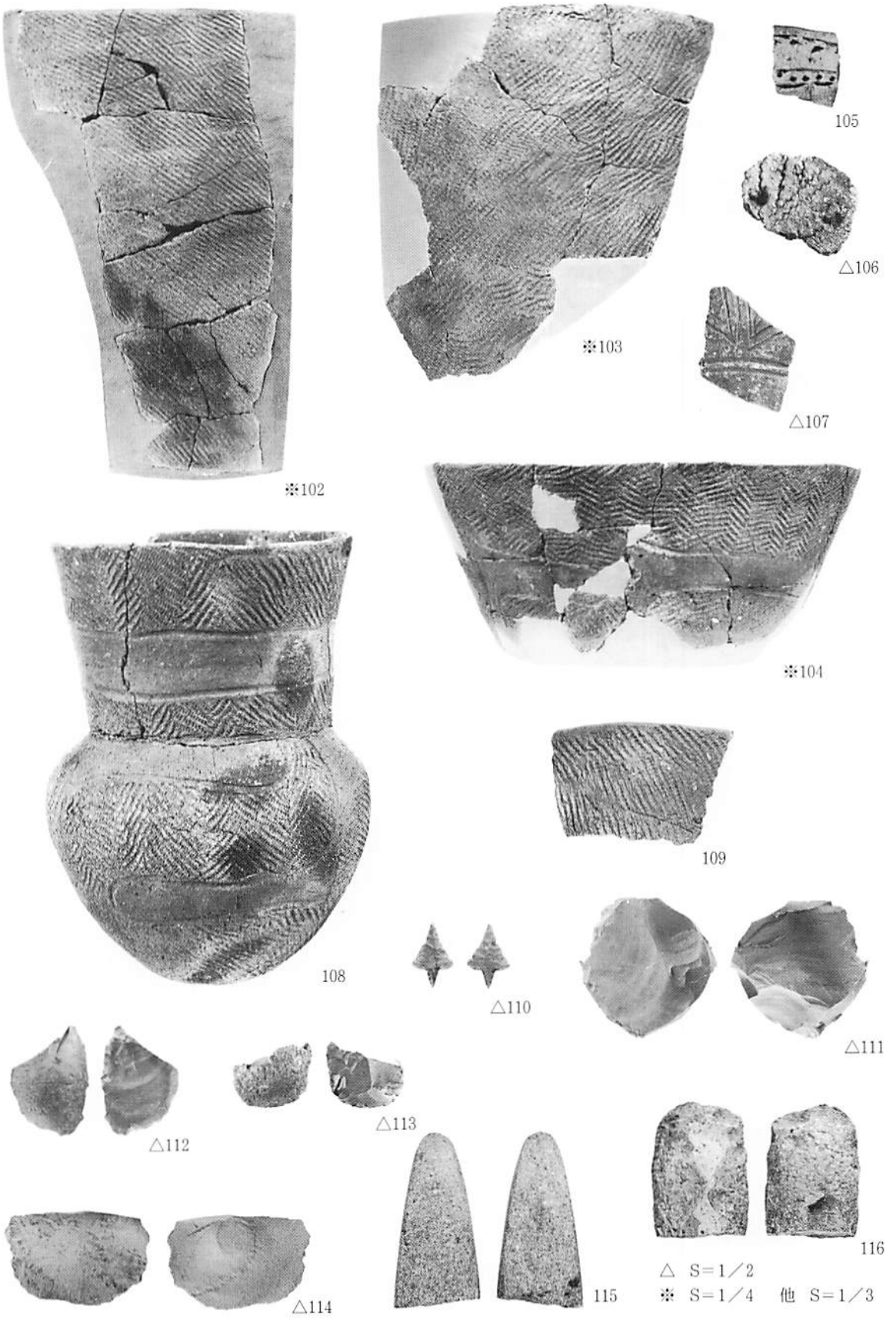


※101

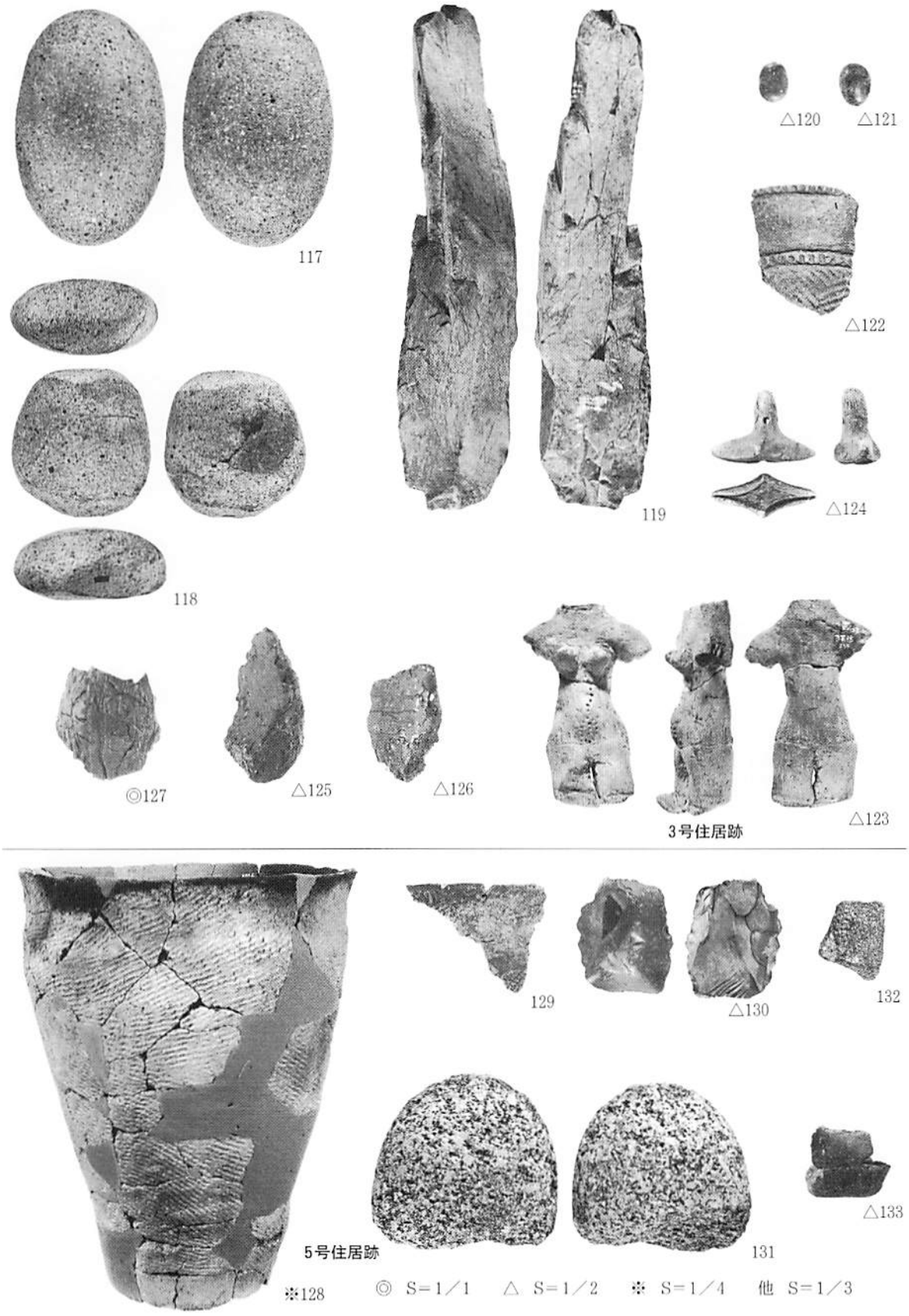
※ S＝1／4

他 S＝1／3

写真図版39　遺構内出土遺物 8（住居跡⑧）

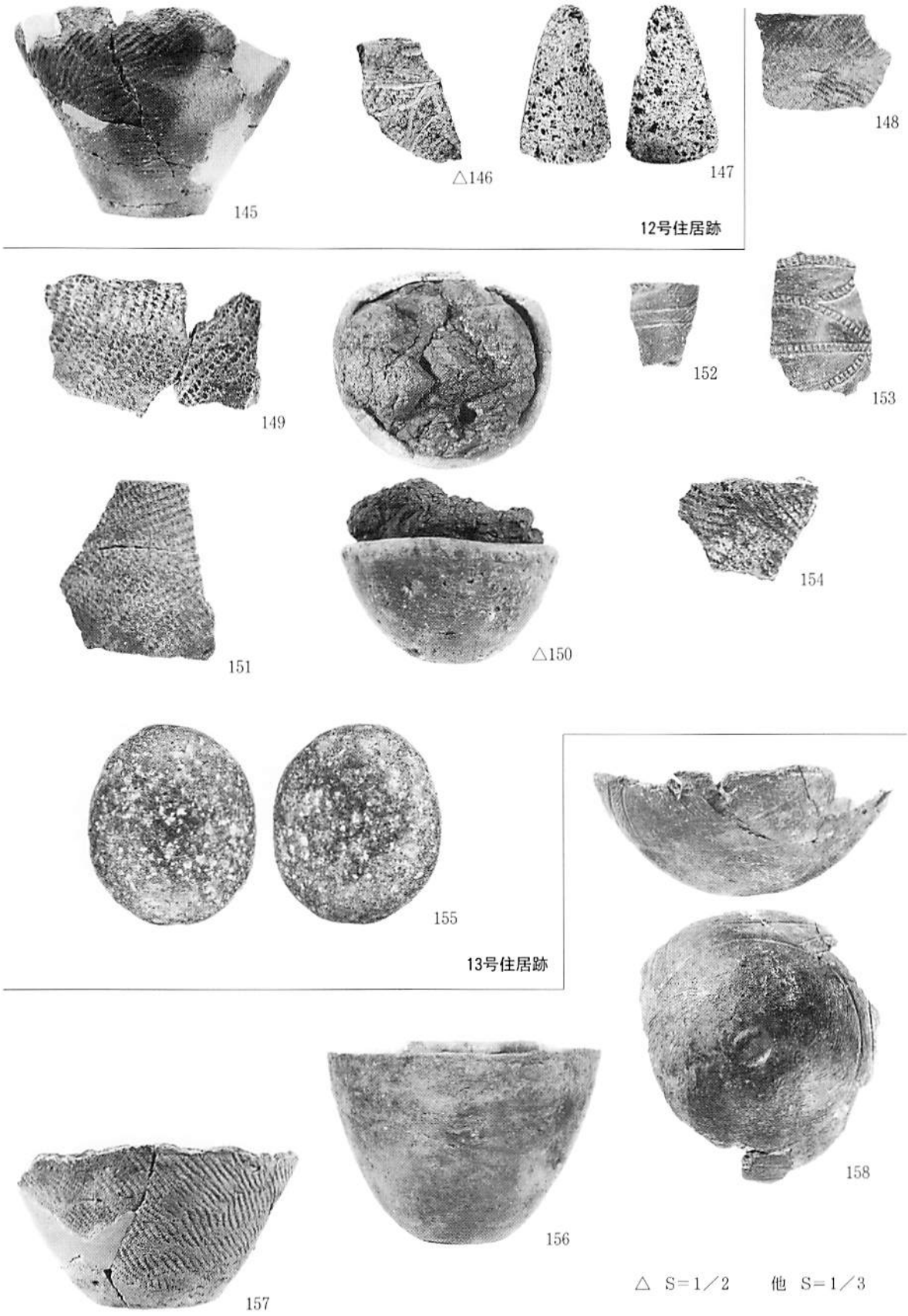


写真図版40　遺構内出土遺物 9（住居跡⑨）

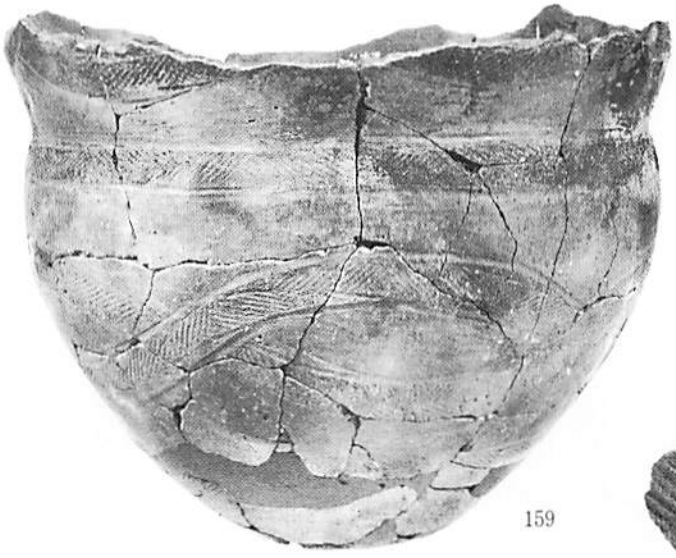


写真図版41　遺構内出土遺物10（住居跡⑩）

写真図版42　遺構内出土遺物11（住居跡⑪）

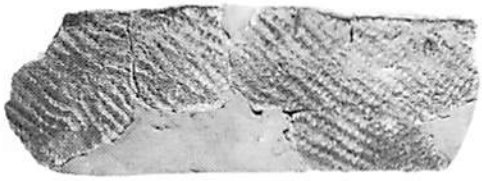


写真図版43　遺構内出土遺物12（住居跡⑫）



159

△161



163

160

162

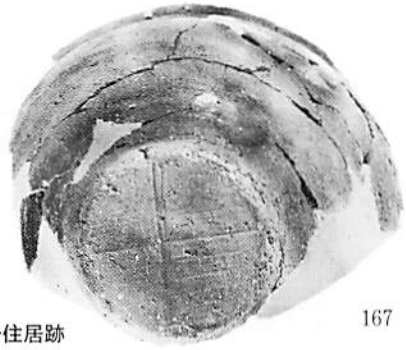
164

165

166

17号住居跡

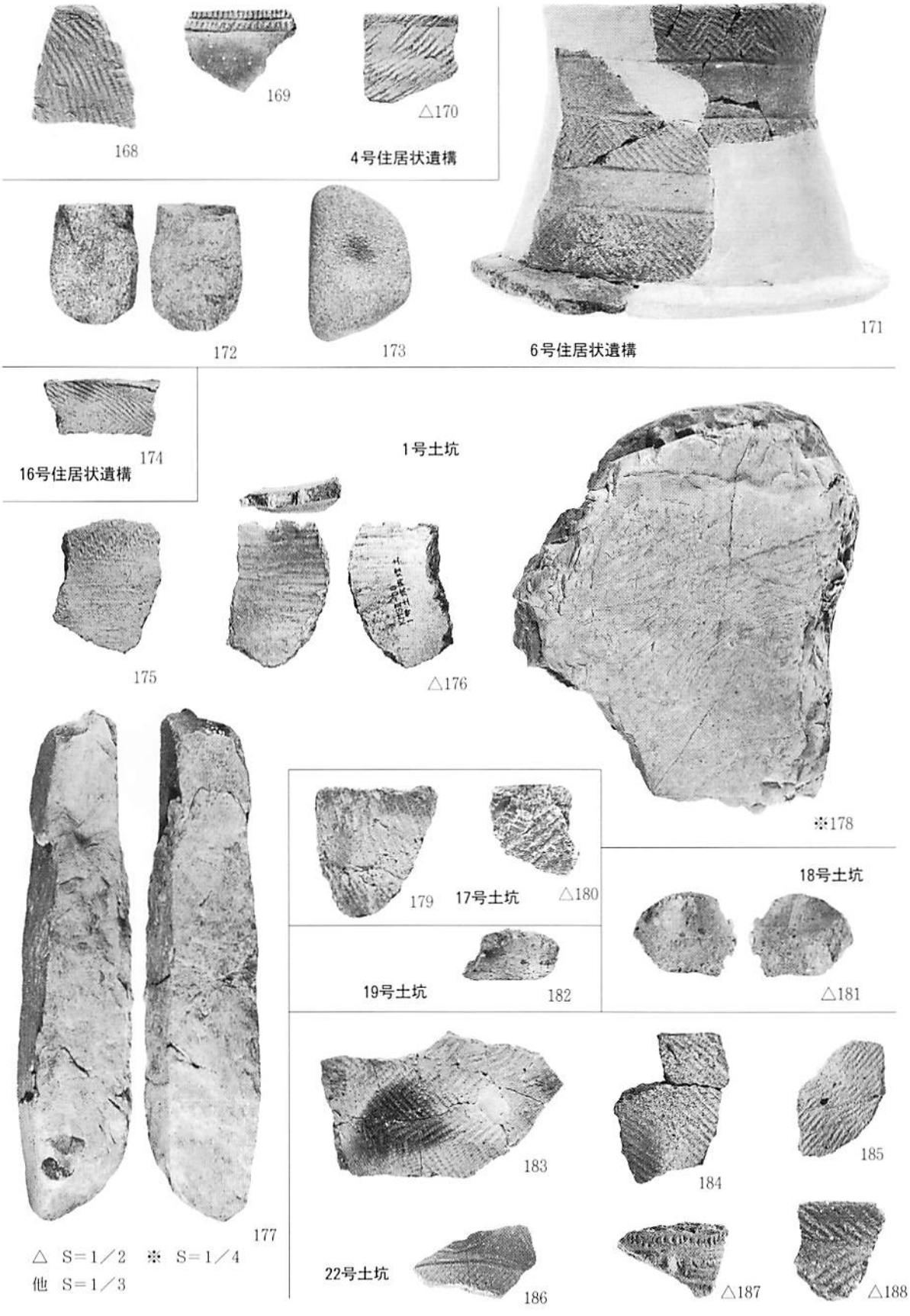
△　S＝1／2
他　S＝1／3



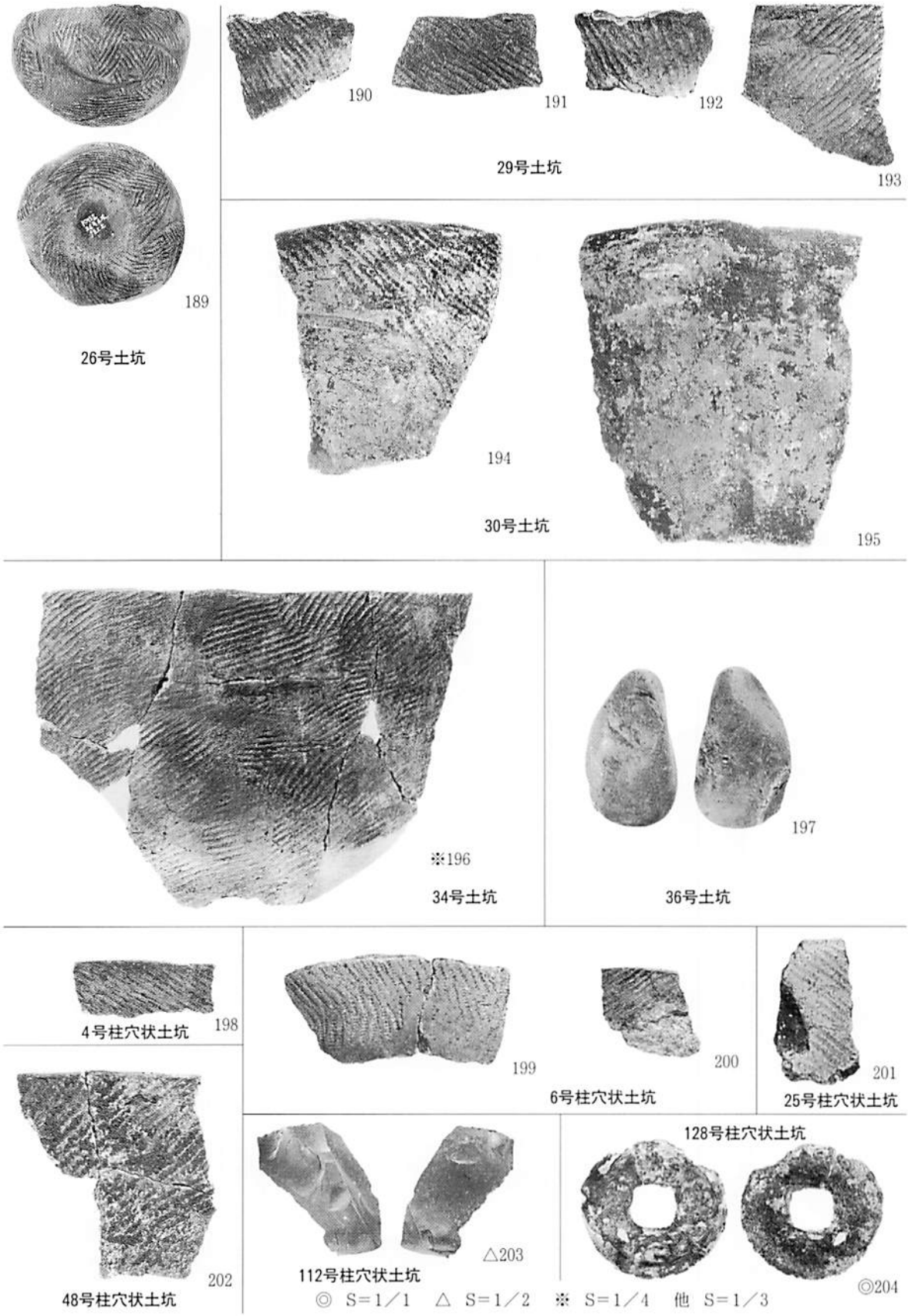
18号住居跡

167

写真図版44　遺構内出土遺物13（住居跡⑬）



写真図版45　遺構内出土遺物14（住居状遺構・土坑①）

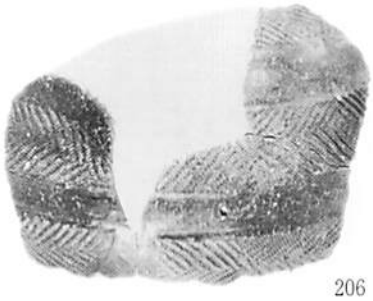


写真図版46　遺構内出土遺物15（土坑②・柱穴状土坑）

205　　S＝1／3

1号埋設土器遺構

写真図版47　遺構内出土遺物16（埋設土器遺構）


206

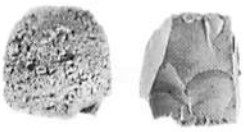
207

208

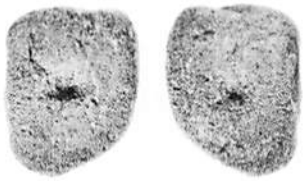
※209

210

△211


△212

△213


214

遺物包含層（5E・5F）

215

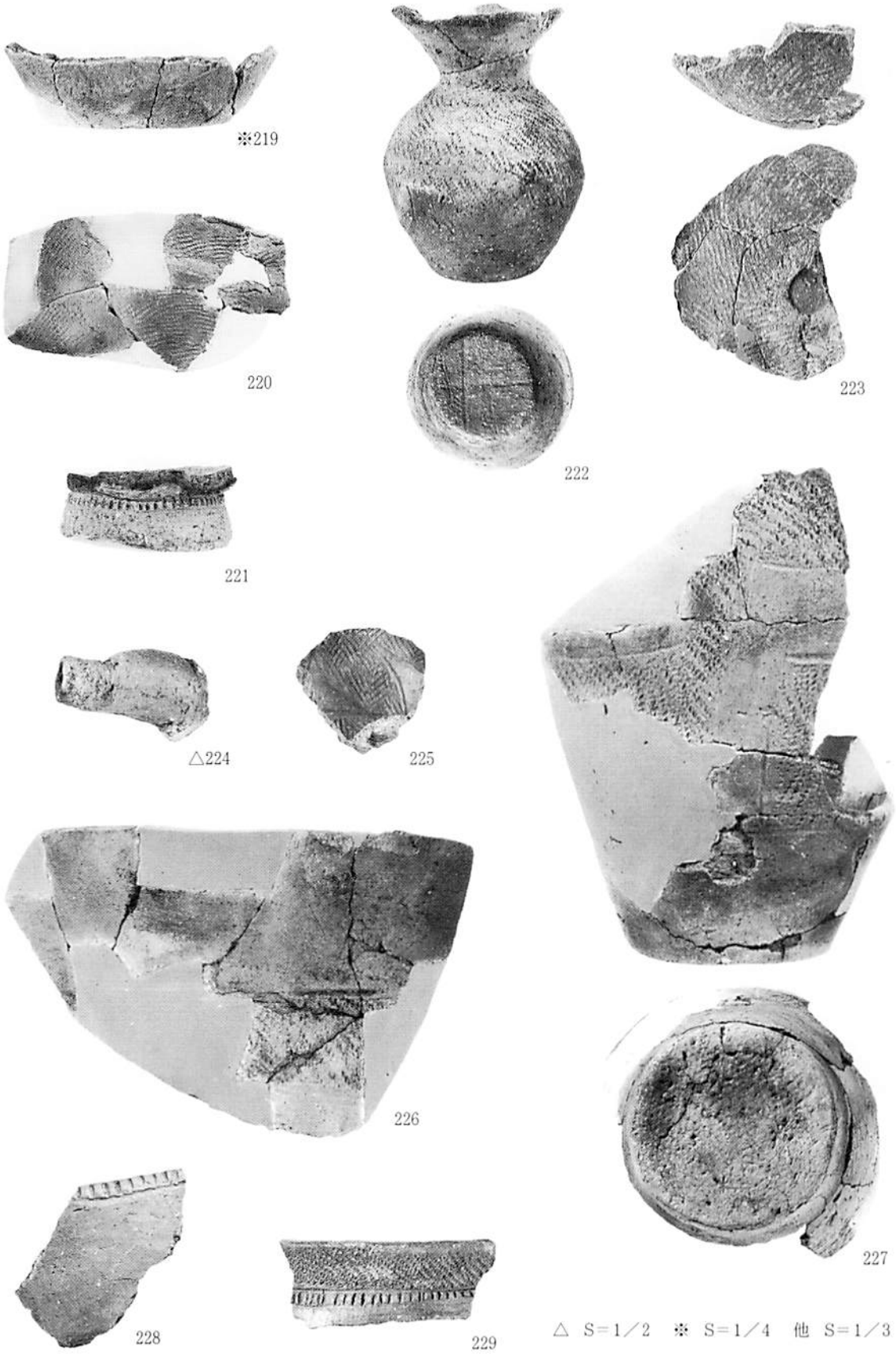
216

217

△218

△ S=1／2
※ S=1／4　他 S=1／3

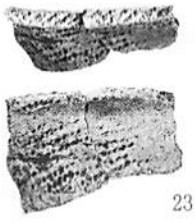
写真図版48　遺物包含層出土遺物 1



△ S=1／2　※ S=1／4　他 S=1／3

写真図版49　遺物包含層出土遺物 2

230



231

232

※233

235

234

236

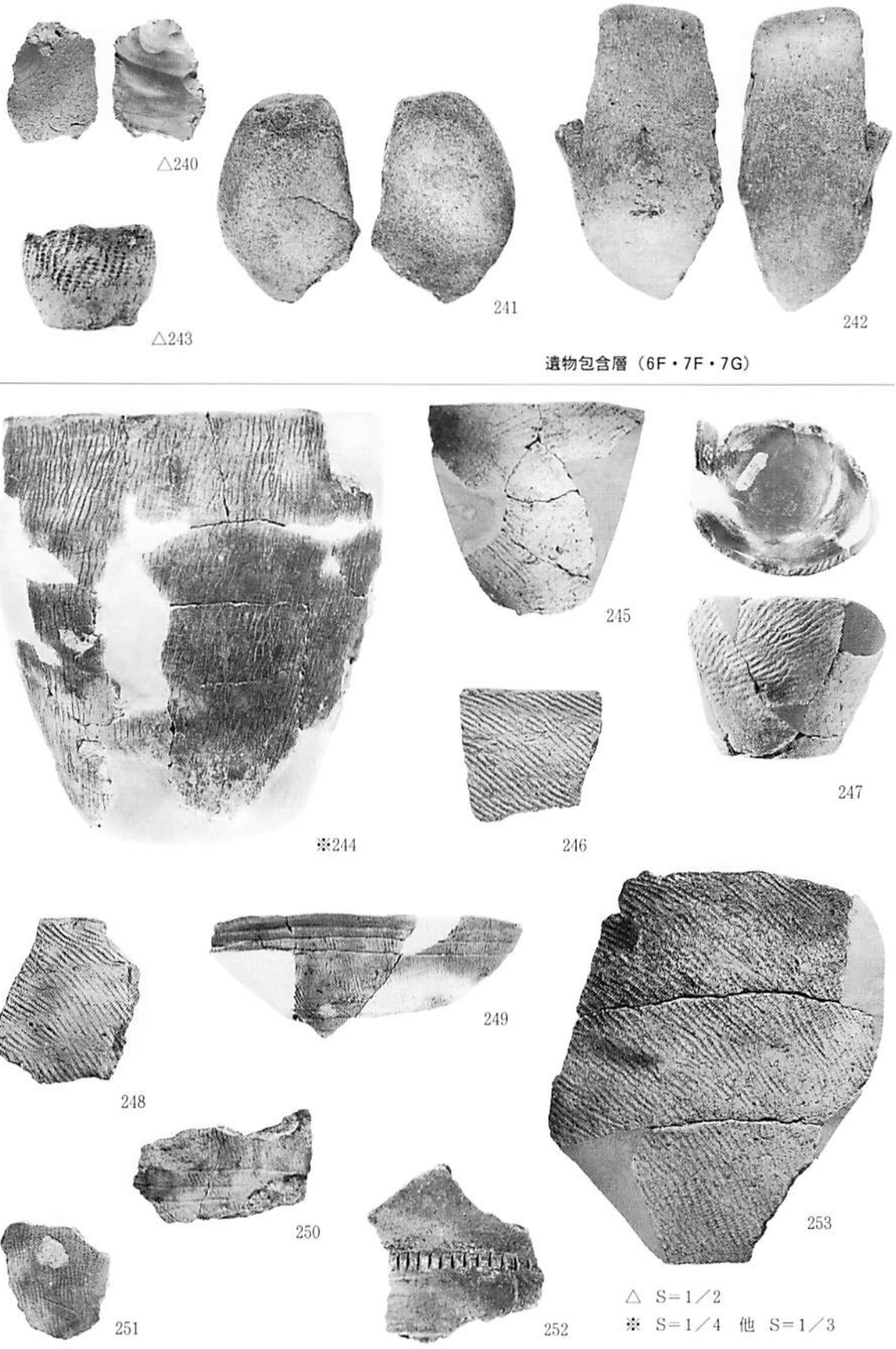
237

239

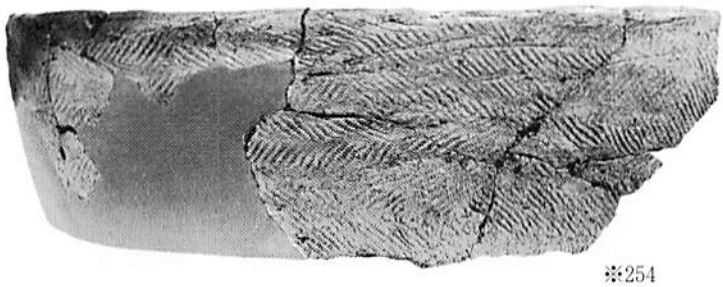
238

※ S＝1／4　他 S＝1／3

写真図版50　遺物包含層出土遺物 3



写真図版51　遺物包含層出土遺物 4

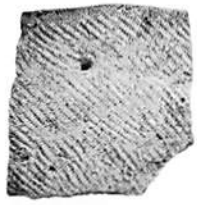


※254

255

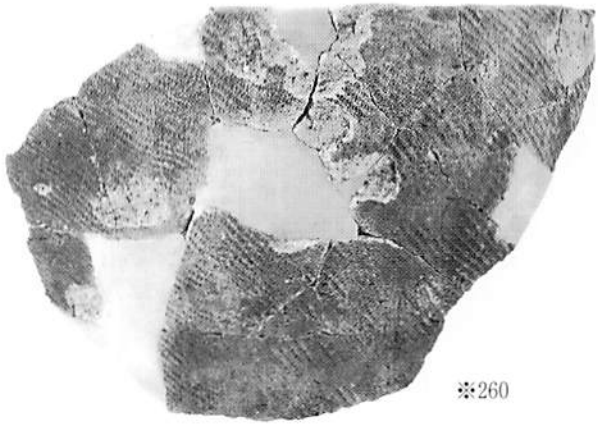
256

257



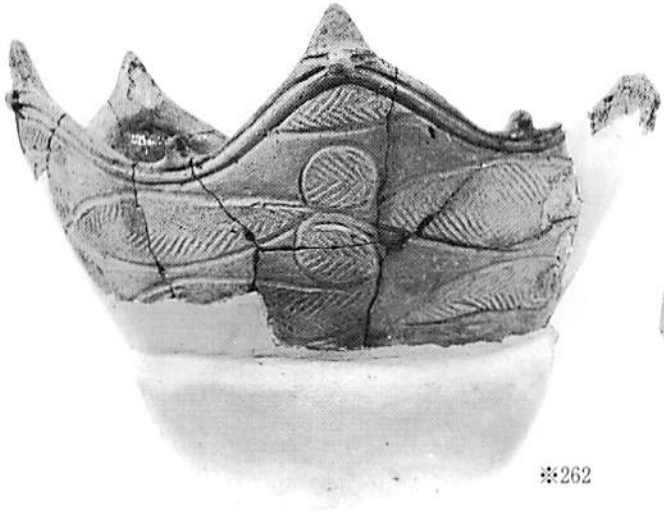
258

259

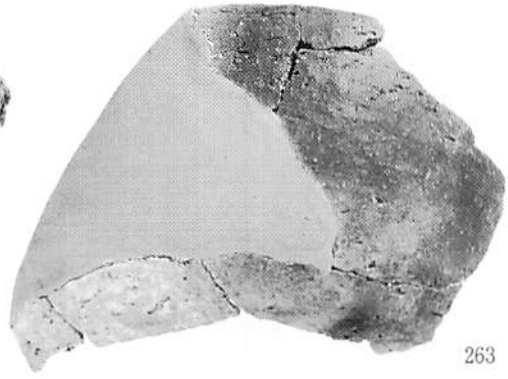


※260

261



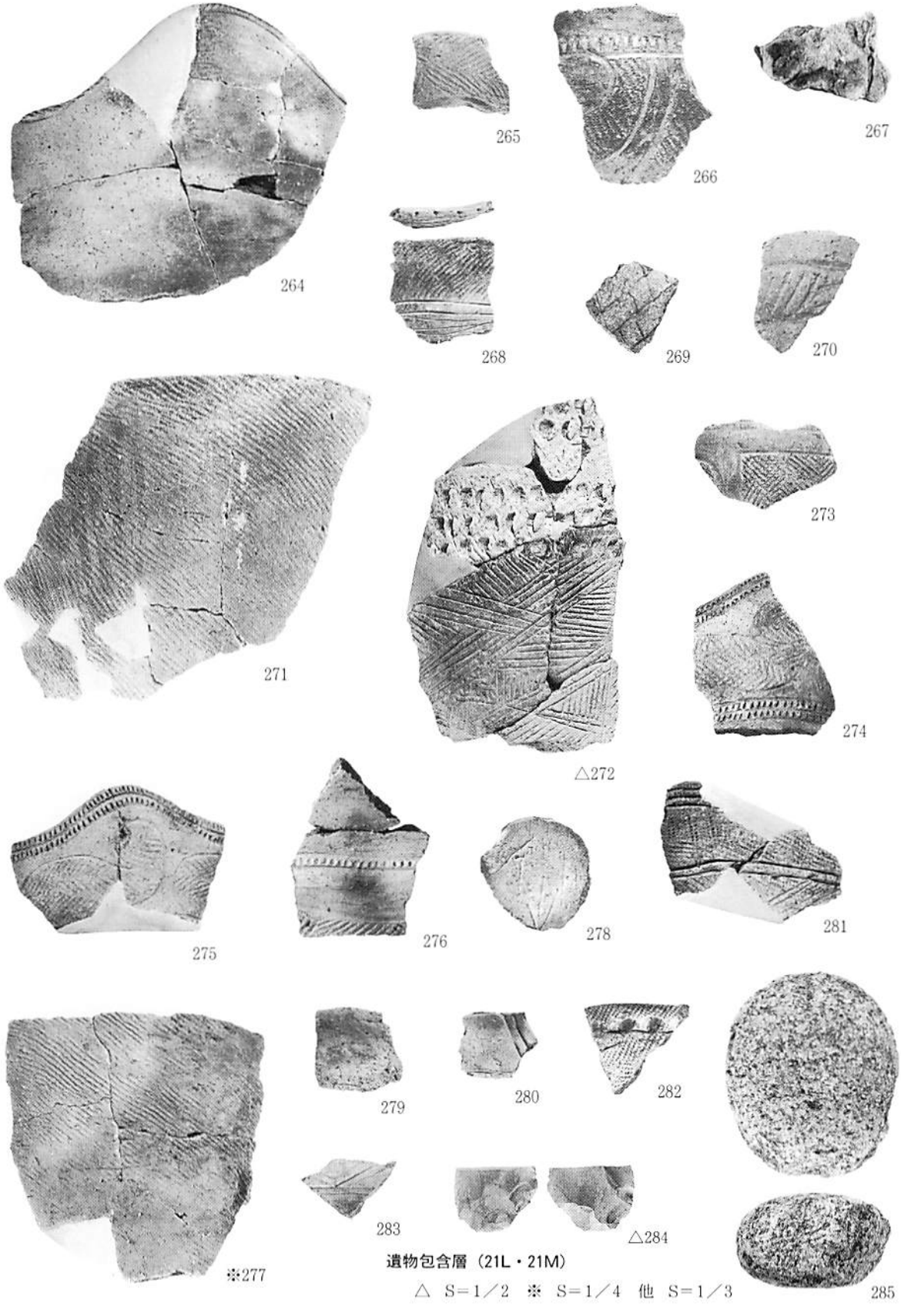
※262



263

※ S＝1／4　他 S＝1／3

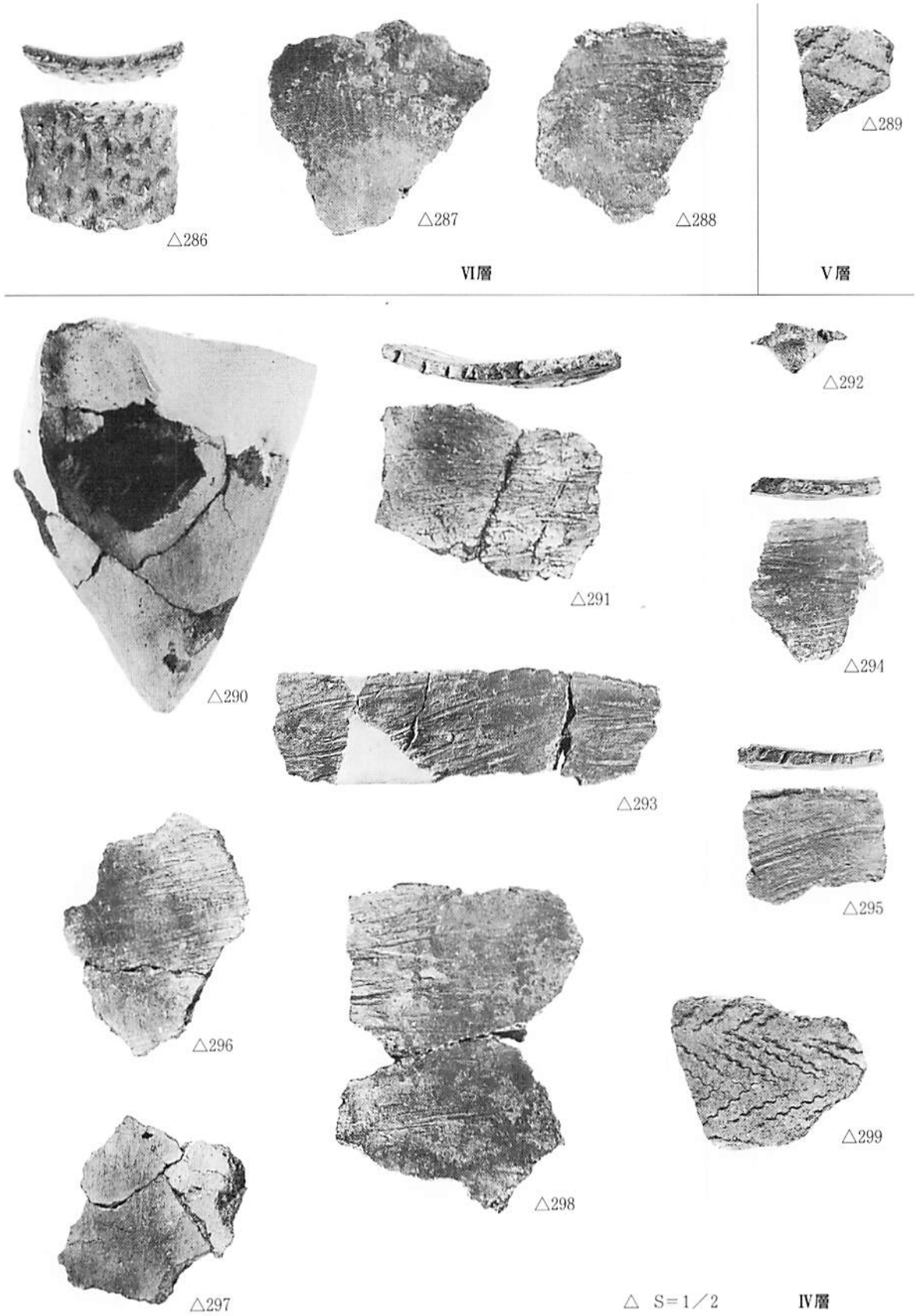
写真図版52　遺物包含層出土遺物 5



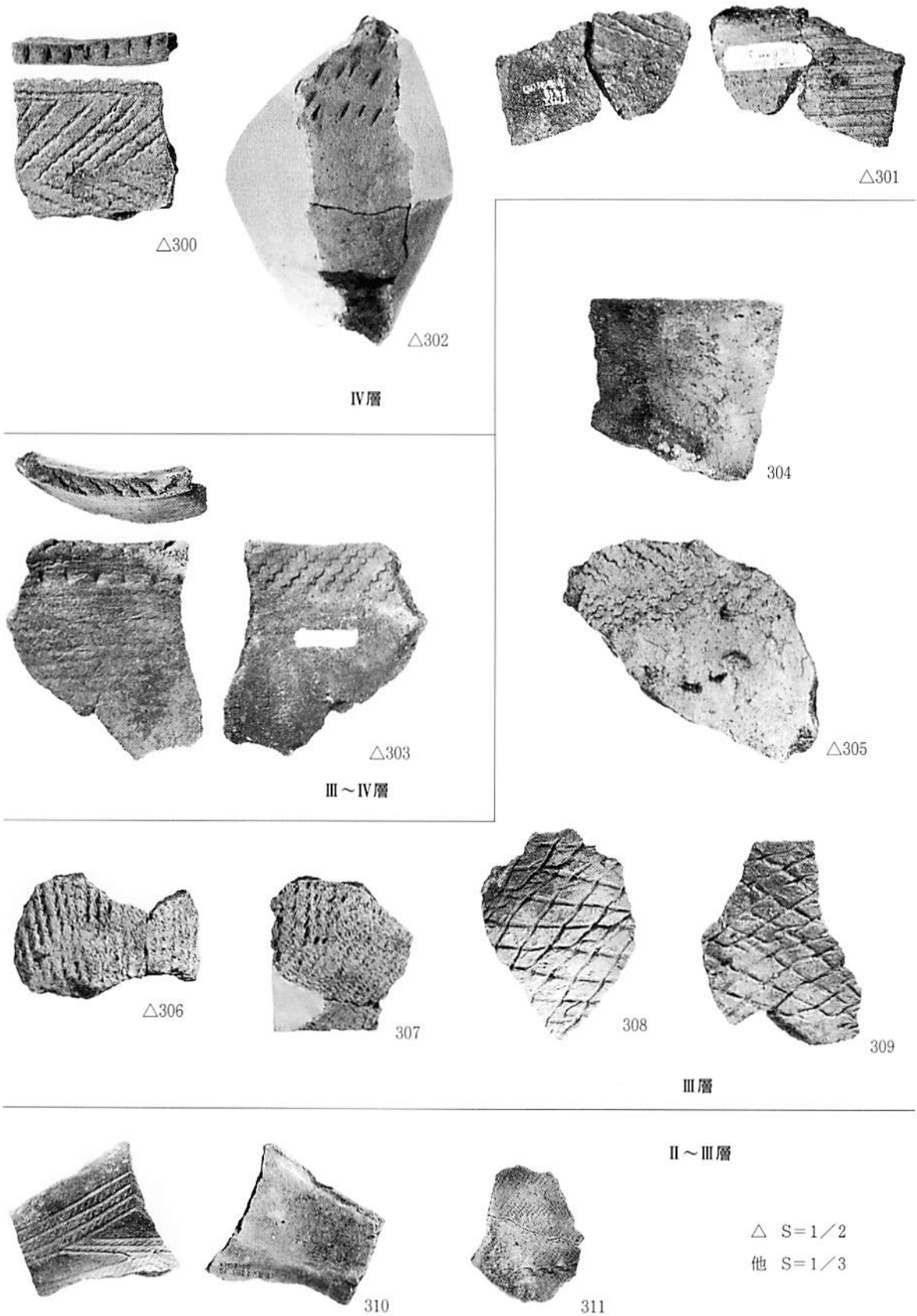
遺物包含層（21L・21M）

△ S＝1／2 ※ S＝1／4 他 S＝1／3

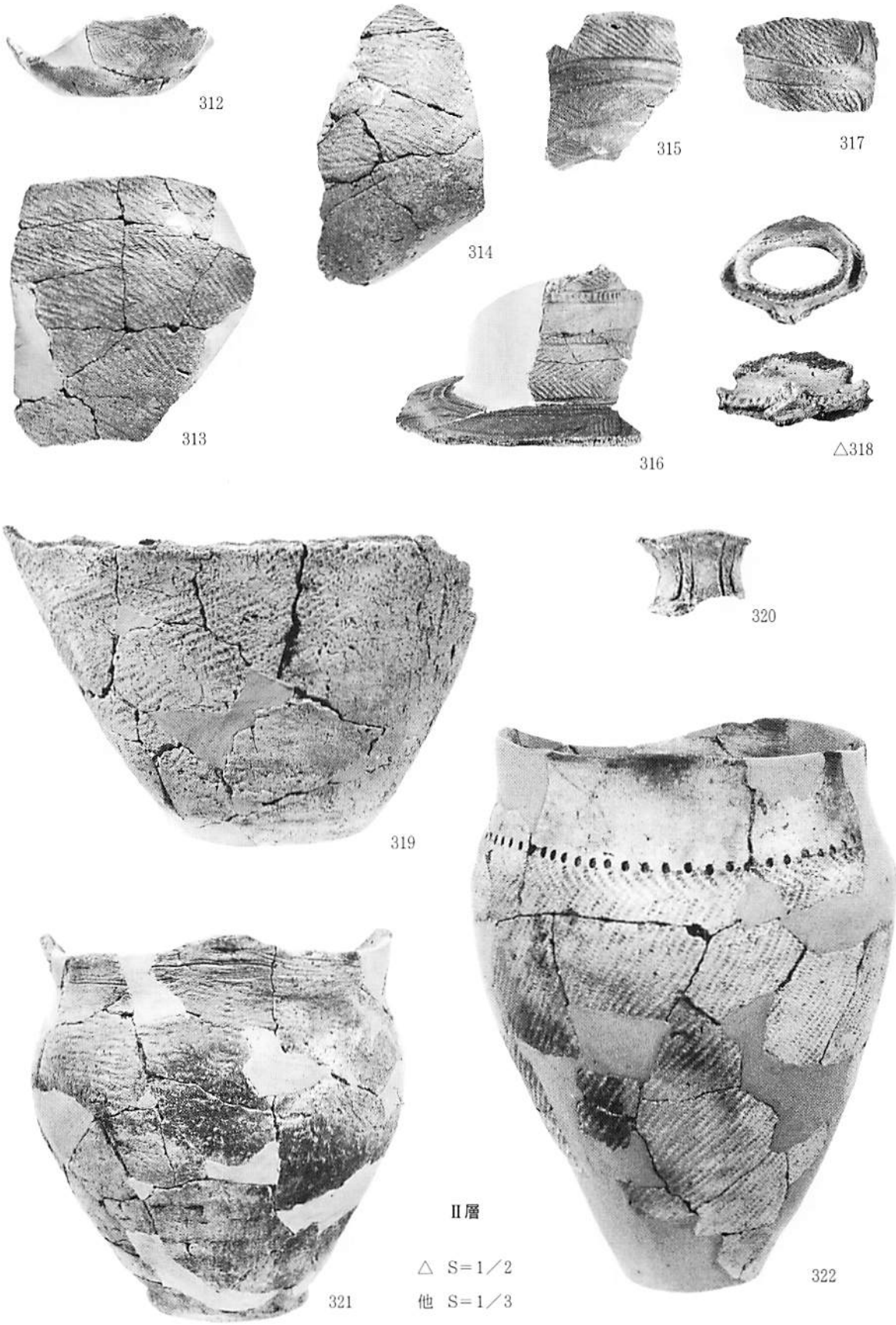
写真図版53　遺物包含層出土遺物 6



写真図版54　遺構外出土遺物１（土器①）



写真図版55　遺構外出土遺物２（土器②）



写真図版56　遺構外出土遺物 3（土器③）

323

324

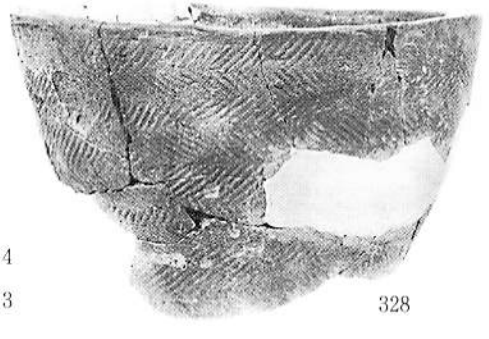
※325

Ⅱ層

※326

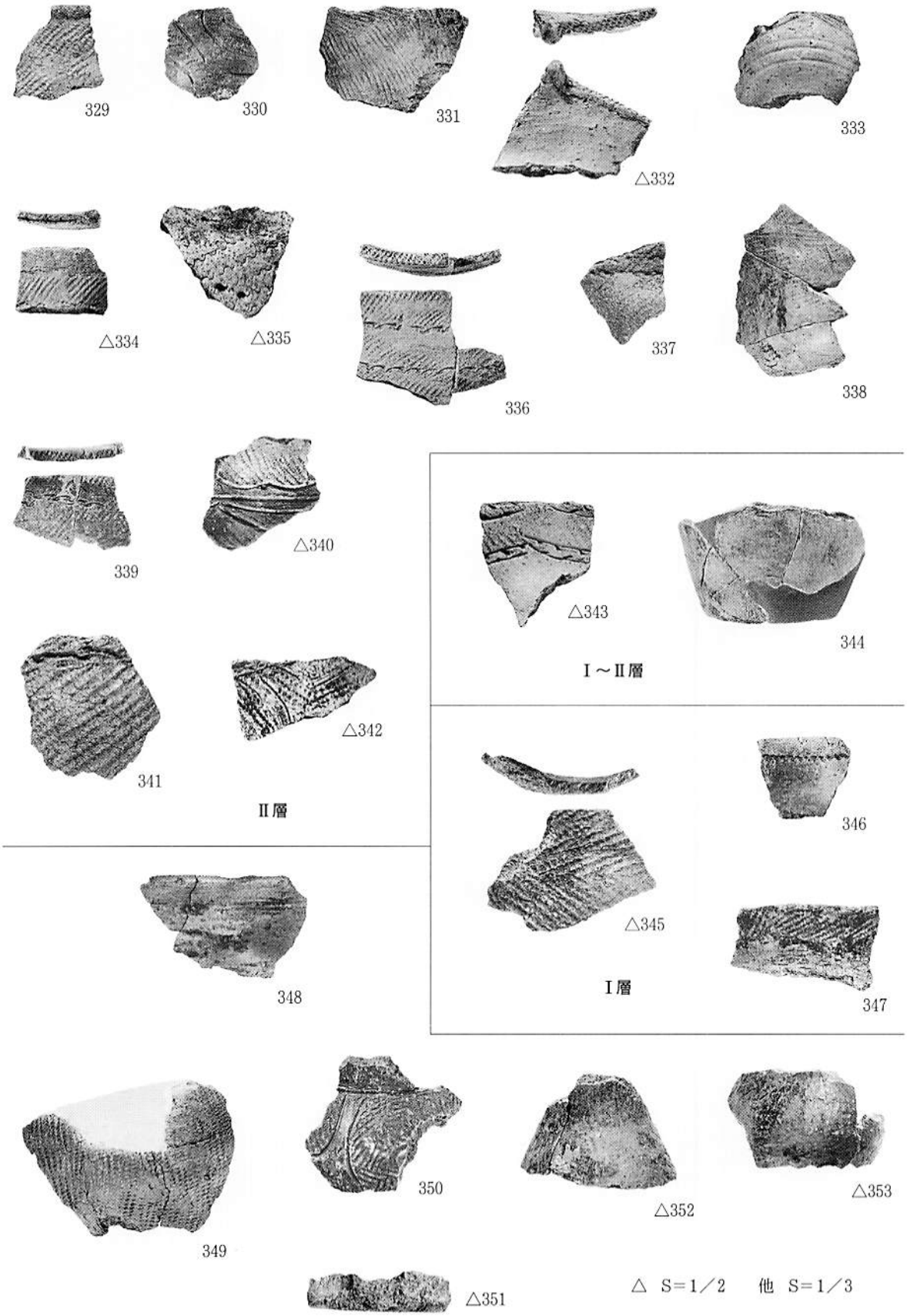
※327

※ S＝1／4
他 S＝1／3

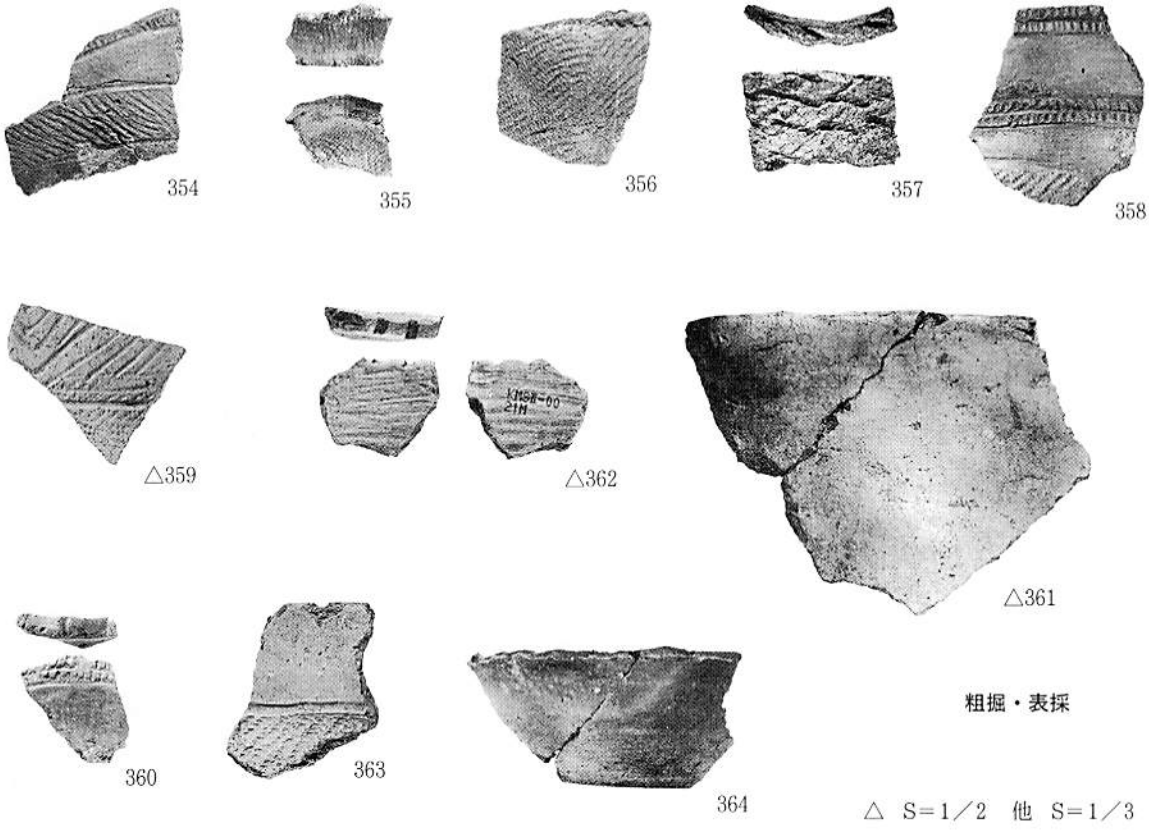


328

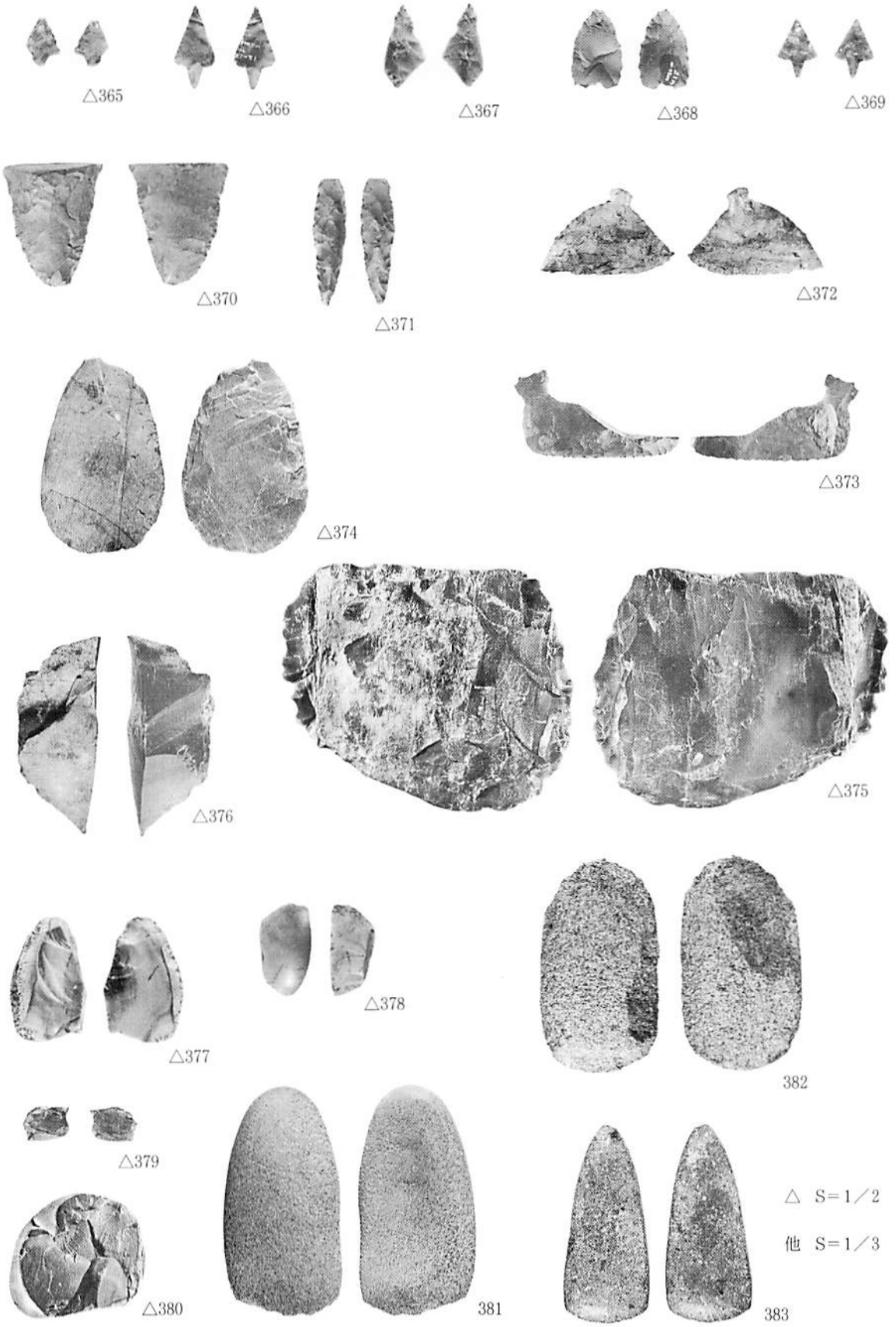
写真図版57　遺構外出土遺物４（土器④）



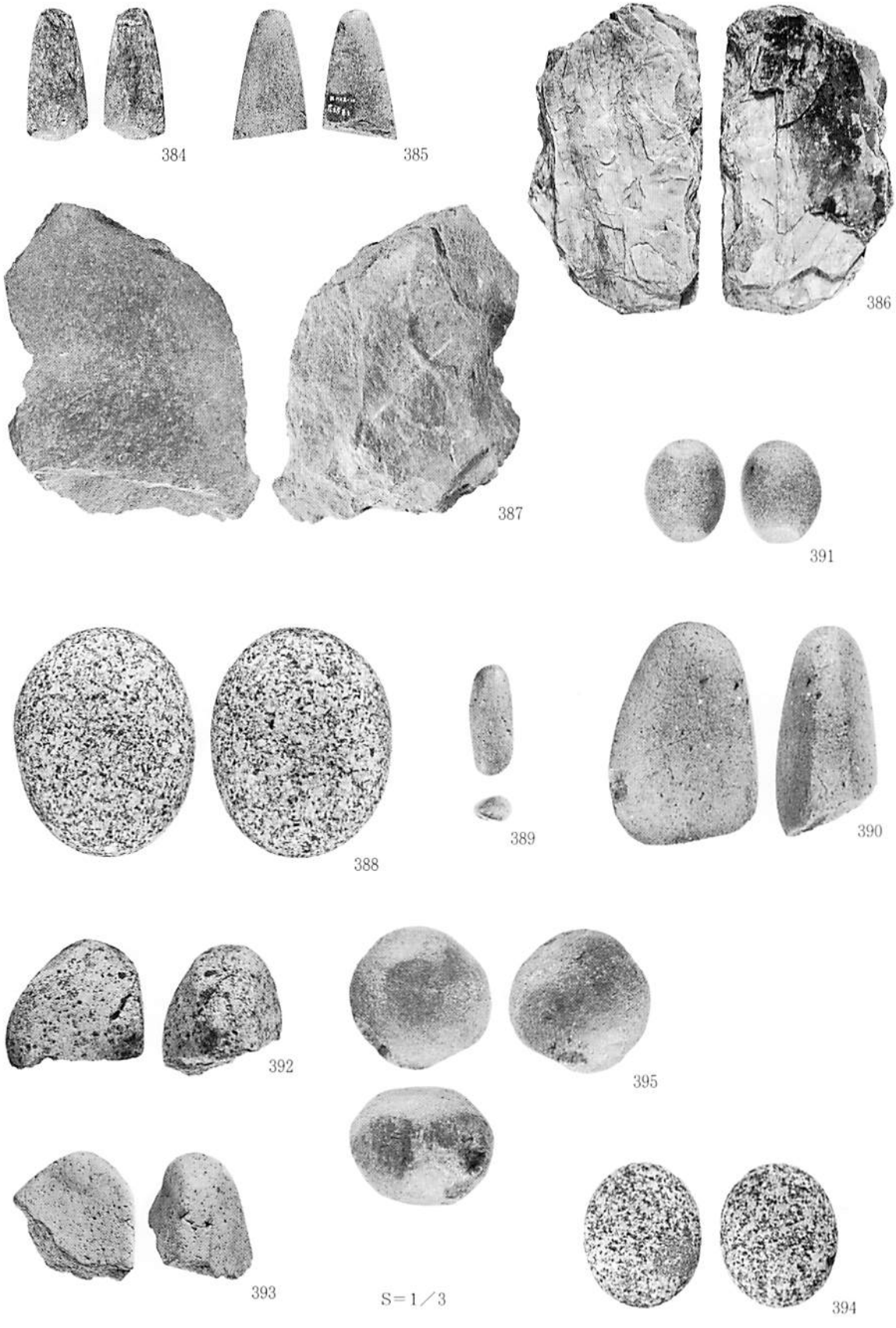
写真図版58　遺構外出土遺物５（土器⑤）



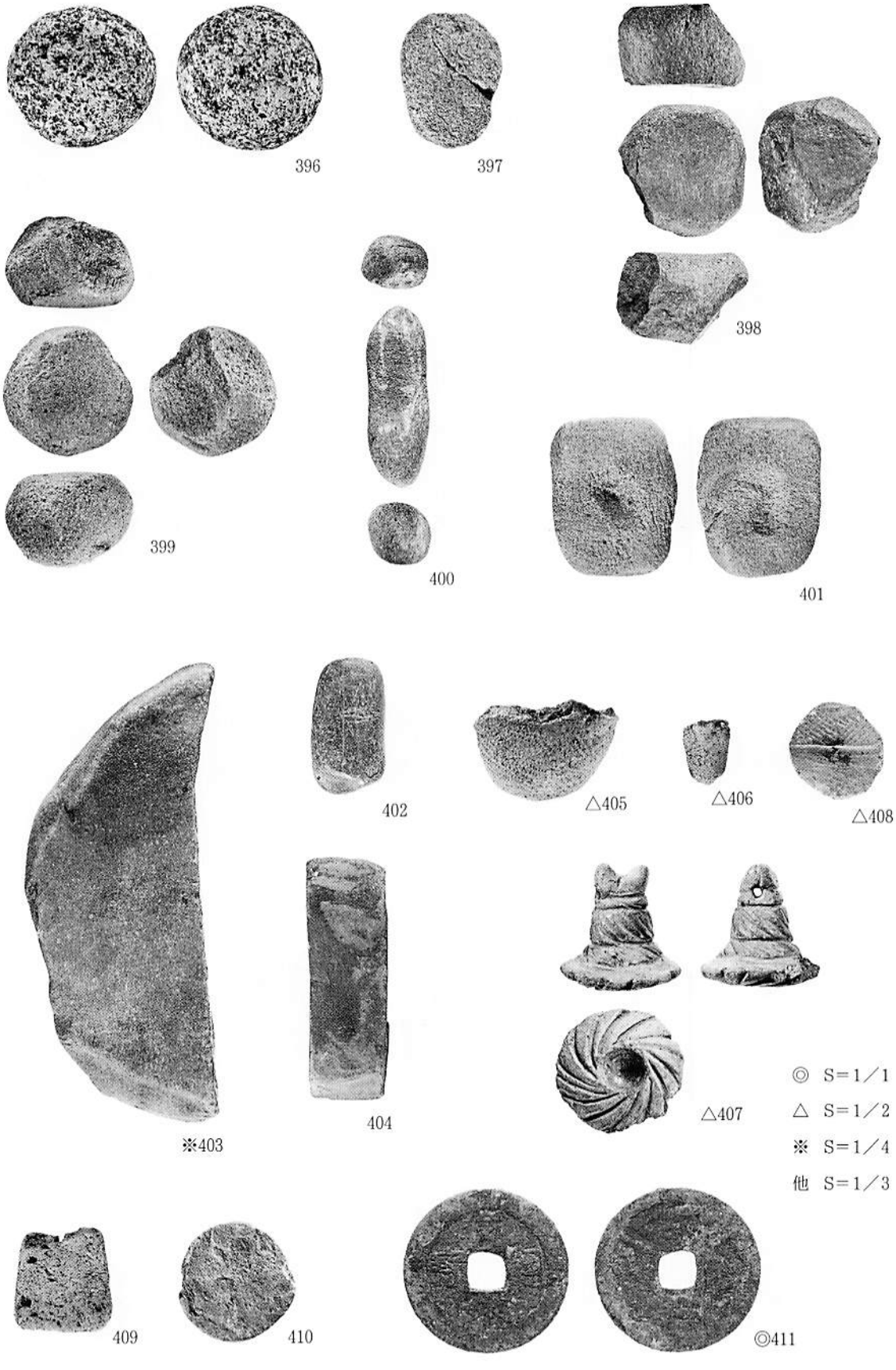
写真図版59　遺構外出土遺物 6（土器⑥）



写真図版60　遺構外出土遺物７（石器①）



写真図版61　遺構外出土遺物 8（石器②）



写真図版62　遺構外出土遺物 9（石器③・土製品・石製品・銭貨）

報告書抄録

ふりがな	かみみずさわにいせきはっくつちょうさほうこくしょ
書名	上水沢Ⅱ遺跡発掘調査報告書
副書名	ふるさと農道緊急整備事業関連調査
巻次	
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第391集
編著者名	北村　忠昭　小野寺正之
編集機関	財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化センター
所在地	〒020－0853　岩手県盛岡市下飯岡第11地割185番地　　TEL 019－638－9001
発行年月日	西暦2002年3月15日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積	調査原因
上水沢Ⅱ遺跡	岩手県九戸郡大野村 大字水沢第7地割字 日当12番地2ほか	03505	JF07-2188	40度 14分 9秒	141度 42分 14秒	2000.5.25 ～ 2000.9.25	1,364㎡	「ふるさと農道緊急整備事業水沢地区」に伴う緊急発掘調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
上水沢Ⅱ遺跡	集落跡	縄文時代 弥生時代	竪穴住居跡　13棟 住居状遺構　4棟 土坑　36基 柱穴状土坑　158基 焼土遺構　9基 埋設土器遺構　1カ所	縄文土器 （早期、前期、中期、後期） 弥生土器 石器 土製品 鉄製品 銭貨（寛永通寶） アスファルト塊 陶磁器（近・現代）	遺物包含層　2カ所 （調査区北・南側）

平成13年度　(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター職員名簿

【職　員】

所長	伊藤民也	副所長	高橋正儀

［管理課］

課長	韮沢正吾	嘱託	高橋照雄
課長補佐	山崎善光	〃	佐々木光重
〃	山岸直美	〃	加藤美代子
主査	立花多加志	〃	湯沢邦子

［調査第一課］

課長	佐々木勝
課長補佐	佐々木清文
〃	高橋義介
文化財専門員	小山内透
文化財調査員	中田迪
〃	飯森秀文
〃	赤石登
〃	吉田充
〃	亀大二郎
〃	小原眞一
〃	佐々木信一
〃	小笠原健一郎
〃	金野進
〃	小松則也
〃	岩渕計
〃	鳥居逸人
〃	金子昭彦
〃	羽柴直人
〃	千葉正彦
〃	長村克稔
〃	星幸文
〃	佐藤あき子
〃	菊池貴広
〃	村上拓
〃	本多準一郎
〃	村木敬
〃	北村忠昭
〃	高瀬克範
〃	丸山浩治
〃	島原弘征
〃	中村絵美
期限付調査員	小林弘卓
〃	江藤敦
〃	菊池賢
〃	井上信介
〃	川又晋
〃	吉田真由美
〃	坂部恵造
〃	木村ひかり

［調査第二課］

課長	高橋與右衛門
課長補佐	中川重紀
文化財専門員	金子佐知子
文化財調査員	阿部眞澄
〃	飯坂一重
〃	阿部徹
〃	濱田宏
〃	安藤由紀夫
〃	高木晃
〃	佐藤淳一
〃	星雅之
〃	菅原靖男
〃	半澤武彦
〃	杉沢昭太郎
〃	溜浩二郎
〃	中村直美
〃	西澤正晴
〃	八木勝枝
〃	（阿部勝則）
期限付調査員	吉川徹
〃	北田勲
〃	吉田里和
〃	原美津子
〃	齋藤麻紀子
〃	駒木野智寛

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第391集

上水沢Ⅱ遺跡発掘調査報告書

ふるさと農道緊急整備事業水沢地区関連遺跡発掘調査

印刷　平成14年3月11日
発行　平成14年3月15日

発行　(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
〒020—0853　岩手県盛岡市下飯岡11－185
電話(019) 638－9001・9002
FAX(019) 638－8563

印刷　(株)興版社
〒020—0816　盛岡市中野1－4－14
電話(019) 624－3456

©(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化センター 2002